
ひるまのよぞら

三浦平原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひるまのよぞら

【Nコード】

N3019V

【作者名】

三浦平原

【あらすじ】

地球で忘れられたものが空からふってくる世界。ソフトビニール人形がお人好しで、リカちゃん人形が服を探して彷徨い、電気ケトルが神様だったりする世界。そこに落とされた少年が、恋人との時間を何度も『繰り返す』お話。

終の廻転／懸想する在りし日の殺害機構（前書き）

地球で忘れられたものが空からふってくる世界のお話。

ソフトビニール人形がお人好しだったり、リカちゃん人形が服を
探して彷徨ったり、電気ケトルが神様だったりする世界のお話。
そこに落とされた少年少女の恋のお話。

終の廻転／懸想する在りし日の殺害機構

「最初からやり直そう」

時間が失速していくなか、俺は彼女に告げた。

「はじまりの日に、俺たちはまた出会っんだ」

彼女はなにも言わない。おそらくもう、なにも見えていない。聞こえていない。

それでも俺は言葉を続けた。

「大丈夫。たとえキミが俺を忘れても、たとえ世界が俺たちを拒んでも——」

そう、この世の全てを騙してでも——

はじまりの扉から光が逆流する。

俺は『今回』の彼女に笑って見せた。

「俺は何度だって繰り返して、永遠にキミを愛し続けるから」

そうして俺は、世界のネジを巻き直した。

キミが好きだと彼は言った。

出会いの日から五年、わたしたちはこの世界の真実に辿り着いた。

世界の秘密は残酷だった。

不思議の仕組みはどこまでも機能的で、優しさの入り込む余地を認めなかった。

彼とわたしはこの世界で出会った。

この世界だから出会えた。

この世界だから愛し合えた。
しかし手にした真実は、全てをなかったことにしてしまう。
彼がわたしを愛したことも。
わたしが彼を愛したことも。
わたしと彼が共に生きたことも。
わたしと彼が出会ったことも。
全部、全部——なかったことになってしまう。
わたしたちは話し合った。
毎晩毎晩、話し合った。
答えのないクイズに悩み続けた。
離れたくないとわたしは泣いた。
俺に任せると彼は言った。
俺がなんとかするからと、そう言って泣いた。
そんな手段が無いことは互いに知っていた。

執着は劣化する。
心は磨耗する。
変容しない気持ちなどない。

いつしかわたしは彼を諦めた。
この世の誰より愛する彼を、手放すことを決断した。
その日はわたしの誕生日。妊娠発覚からちょうど二ヶ月目のこと
だった。

これ以上はいけない、と思った。子どもが生まれたら取り返しが
つかなくなってしまうと。
わたしは言った。
「あなたを愛してる」
知っている、と彼は言った。
「あなたを誰より愛してる」
知っている」

「だけでもう、これ以上は誤魔化せない。いつまでもこの世界には居られない。優しいだけの楽園なんてどこにもなかったのよ」

「それも、知っている」

壊れた笑顔で彼は言った。

愛した人はわたしと違い、真実を知っても微塵も変わらなかった。もとより、彼は人の意見を聞く人ではなかった。一人で何でもできるから、人に頼ることを必要としなかった。そんな人だから、わたしは彼を欲し、そして受け入れた。誰も、何も必要としない彼だから——そんな人に必要とされたらどんなに素敵だろうか。そんな邪悪な想いを抱いて。

気持ちが通じ合ってから毎日は金平糖のような日々だった。願えば彼は何でもくれると知っていたから、わたしは何も願わなかった。「キミは欲がない」。そういつて寂しそうに笑う彼が好きだった。「もつと我が俣を言ってくれてもいいのに」。そういつてわたしの髪を撫でるガサガサの手が好きだった。

初めての恋だった。

わたしにとつても、彼にとつても。

最初で最後の恋になるはずだった。

——それをいま。

——わたしは手放した。

「もう、元の世界に帰りましょう。これ以上、自分に嘘をつき続けたも悲しいだけだわ」

わたしは笑って彼の手をとった。

ちゃんと笑えていたと思う。嘘をつくのは得意だ。うまく笑顔を作れていたと思う。彼も笑ってくれた。

彼の笑顔はやっぱり寂しそうだったけれど、それでもわたしの手を握り返してくれた。思えば彼はこれまで一度もわたしを拒絶しなかった。間違っている時でさえ否定をしなかった。わたしの意見も、わたしの行動も、わたしの在り方も、全てを肯定してくれた。キミよいつまでもキミであれ。それだけが俺の願いだ。いつだって、そ

う言ってわたしを認めてくれた。十歳でこの世界に迷い込み、そうして彼と出会ってから、これまでずっと。そう、この不器用な男の幸せは、わたしというカタチであったのだ。

準備はいい、とわたしは聞いた。

いつでもいい、と彼はこたえた。

不思議の秘密は知れている。世界の仕組みは解けている。わたしたちはこれまでだって、いつでもこの世界から脱出することが出来たのだ。

わたしは彼の手をぎゅっと握る。彼もそれに応える。二人の体がぼんやりと光り出す。

わたしは元の世界を思った。そこにいない彼のことを。彼を覚えていない自分のことを。彼は穏やかな声で「大丈夫」と言った。

「俺がぜったい——なんにもかも、なんとかするから」

その言葉の意味はわからなかったけれど、わたしは「うん」と頷いて笑った。

光は強さを増していく。いよいよ目を開けているのがつらくなる。わたしは最後の瞬間まで彼を見ていようと、涙を堪えてまばたきを我慢した。彼の顔がゆっくりと近づいてくる。わたしたちは二人、目を開けたままの不恰好なキスをした。そうして唇がゆっくりと離れていき、微笑みあつたその瞬間——

「すまない、あそこ」

——彼がわたしの手を離れた。

「最初からやり直そう。《はじまりの日》に、俺たちはまた出会うんだ」

時間が止まって感じられた。

「大丈夫。たとえキミが俺を忘れても、たとえ世界が俺たちを拒んでも——俺は何度だって繰り返して、永遠にキミを愛し続けるから」
凍った時の中で、彼だけが動いていた。この世の全てを置き去り

にして、彼の時計だけが時を刻んでゆく。

呆然と手を伸ばすわたしをよそに。宝石のような笑みを浮かべて。彼はこの世界に対し——最初で最後の我が俤を口にした。

「我は願う。終の廻転を我は願う。

輝ける日々よ永遠なれ。世界の永続を我は願う」

うるさいほどの光が、目に見える景色の全てを覆ってゆく。

わたしも、彼も、二人で暮らした小さな家も。

何もかもが光に飲まれていく。

その間際、わたしは確かにその声を聞いた。

寂しそうな声。

悲しそうな声。

それは紛れもなく、わたしの愛した優しい人の声だった。

「キミを忘れるくらいなら、正しさなんて要らない。

この世の全てを騙し抜いて——俺が真実になってやる」

世界が光りに包まれる。

わたしはまもなく意識を手放した。

小鳥の歌声で目を覚ました。

森の中に寝転んでいた。

樹々の合間から溢れる光があたたかい。土は僅かに湿り気をおび、

体を動かすと落ち葉が音を立てた。うんと力を入れて体を起こす。何年も寝ていたように骨や筋肉がギシギシ鳴いた。栗鼠に似た小さな生き物が何かの実を抱えて枝の上を走っていく。風が髪をそつと撫でる。全てが気持ちいい。世界はまさに、優しさで溢れていた。

ああ。

帰ってきたんだ。

耳を澄ませば寝息が聞こえる。どこにいるのかは知れている。俺はやる気持ちをおさえて彼女の元へと向かった。

この森で一番の長老、樹齢何百年という大樹の足元。そこに彼女はいた。

まだ十歳の少女——生まれて十年と九日の少女が静かに眠っていた。

——俺の愛した、ただ一人の女。

俺は少女の隣に腰をおろした。大樹に背をあずけ、そつと少女の髪を撫でる。彼女は小さく「んっ」と唸って顔を顰めた。六年後にも変わらない、この嫌そうな顔。幼くても、彼女は彼女だった。俺は空を見上げた。穏やかな気分だ。彼女が起きるのは7分と19秒後。それまで愛しい人の寝顔を見つめていられることが幸せでならなかった。

時は過ぎ、やがて彼女は目を覚ました。彼女ははつと体を起こして自分の体をあちこち触り、そして周囲を見回し、隣に座る俺を見つけた。彼女は地に尻をつけたまま後退りし、警戒心を剥き出しに言った。

「あなた、だれ？わたし、どうして、こんなところにいるの？……おじいちゃんはどこ？」

——嗚呼……あさこ。また会えたんだよ。

——俺たちはまた会えたんだ。

俺は涙が溢れそうになるのをぐつと堪えた。

そうして解りきった質問を。

もう何度も繰り返した、台本通りの出会いの台詞を口にした。

「おい、ちびすけ。俺を呼んだのはおまえか？」

世界は繰り返す。

何度でも、何度でも、俺が諦めない限り永遠に。

可能性は無限にあるという。

ならばその全てを網羅してやろう。

俺と彼女が愛し合う六年という時間の、全ての可能性を。

終わりなど、俺たちには要らない。

この日。

俺たちは179万回目のファーストコンタクトを果たした。

はじまり1／ひるまとよぞらとふしぎのせかい

■■■■■

ひるまです。

空に引っ張られたような感がありました。ダイソンの何万倍も強力な掃除機が、人工衛星の周回する高さから、わたし一人を吸い込もうとしている。そんなカンカクです。

そして実際、わたしの髪は空をさしてまっすぐに逆立っていました。

弟が目を大きくひらき、口をパクパクしています。可笑しな顔です。

頭の中の常識的なわたしが分析します。「興味深い。立ちくらみが酷くなるとこんな幻覚を見るのか」

普段は滅多に顔を出さないアナーキストのわたしが笑います。「凄いな、葉っぱやキノコなんか目じゃない。このまま空まで飛んで行こう。少女時代の夢を叶えるんだ」

幼い頃の夢は「うちゅうひこうし」でした。わたしは今も少女です。

空の掃除機はそのパワーを弱から中に上げたらしく、わたしの体はどんどん軽くなっていきます。これが強になったとき、いよいよわたしは空へと飛び立つのでしょうか。ワクワクは止まるところを知りません。

ねえさん！と叫んで弟がわたしに駆け寄ってきます。走り幅跳びの選手のような走り方です。トトロに飛びつくメイさえ軽く超える勢いに、戦慄が走りました。弟はどんどんスピードにのってゆき、わたしの悪寒も加速します。弟は平均的な男子中学生より二回りは大きく、体には立派な筋肉が付いています。それに引き換えわたし

の背は小学五年で止まったまま。体も痩せっぽちで、学級でのあだ名はもちろんチビ子です。

嫌な予感は的中しました。地球で見た最後の光景は、こちらに向かつて飛び込んで来る弟の必死な顔でした。

弟は助走を殺さずわたしに飛びつきました。

わたしはクフツと息を吐いて気を失いました。

□ ■ ■ ■ ■

よぞらだ。

ソフトラニールの怪獣に揺すられて目を覚ました。体長20センチほどの小柄な彼は「絶対にここを動かないでくれよ」とだけ言っていて、木々の合間に消えた。俺は切り株に座って彼の帰りを待っている。ここはどうやら森の深くであるらしい。それも普通でない森のだ。携帯電話は圏外であった。近くに姉がいないことは「匂い」でわかるが、それ以外は何から何まで不明である。

複雑怪奇な気持ちであった。

姉に言わせれば俺の頭の中は年中複雑怪奇だそうであるが、今現在、怪奇な趣味は俺以外の全てにこそあった。俺は姉に教えてやりたかった。俺の頭の外にもわけのわからぬものはあるのだぞ、と。

その姉も今はいない。俺はひとりだ。

なぜ俺はこんな所で寝ていたのか。ここはどこなのか。なぜ玩具の怪獣が喋ったのか。怪獣氏は何をしにどこへ行ったのか。疑問は尽きない。

そして、目を背けてはいけない疑問。姉はどこにいったのか？これが最も重大な問題だ。

気を失う直前、俺は姉を抱いていた。性的な意味で含むところはない。話してもおおよそ誰も信じないであろうが、買物物の帰りに姉

が突然空に向かって浮かび始めたのである。俺はその様子を見て咄嗟に姉に抱きつき、地面に引き止めようとし、そしてなぜか気を失ったのだ。気付けば俺はこの森の中にいた。あとは冒頭のとおりである。

姉はいつたどこに消えたのであろうか。あれは軽い喘息持ちであるし、チビである。あまけに非力であり運動音痴でもある。数え役満である。大自然に一人で立つにはあまりにも脆弱な存在である。「ここ」がどんな場所であれ、姉よせめて人の大勢いる所にいってくれ、と俺は切に願った。我が姉の真価は人間社会でこそ強く発揮されるからだ。

怪獣氏は五分ほどで戻って来た。彼は体よりも大きな2Lのペットボトルを抱え、膝を曲げない軍人歩きで俺のところまでやって来る（怪獣氏の膝・肘には関節の機構がない）。そうして俺にそれを差し出した。未開封であつたが、ラベルが剥がされていた。キャップには「伊藤園」の四つ葉のマーク。緑茶だつた。「飲みな」と彼は言った。俺はキャップを開けた。

「それ飲んで、深呼吸するんだ。ぐいっとやれ。もう一度。そう、そうして大きく息を吸って。心を落ち着けて。よろしい。——それじゃあ、自分が誰だか言ってみる。名前を思い出せるか？年齢は？出身地は？」

彼の顔は動かないが、口調はこちらを労るようなものだつた。俺には彼が心優しい人に思えた。俺は何かにつけ、簡単に人を信じてはいけなさと姉や母たちに叱られる愚か者だが、彼ならば信じてもいいような気がした。根拠は勿論ない。しかし彼はビニールの怪獣だ。人ではない。信用しても問題はないだろう。俺は切り株からおりて地面に正座し、彼に頭を下げた。

「礼を言います。助けてくださつてありがとうございました。自分は夏野よぞらと申します。14歳です。新潟県の山奥に姉と父と母たちと暮らしています……いました」

「これはご丁寧に。おいらは大怪獣ギモギモと申します。見てのと

おり、おもちゃのビニール人形だ。対象年齢は3歳以上。アマネ屋ソフビ『百体限定！復刻・大怪獣！』シリーズの第一弾。シリアルナンバーは019でございます。ジュークって呼んでくんな」

「ジュークに聞きたいことがあります」

「わかつてる。おいらも教えたいことが山ほどあるんだ。はじめはおいらに話させてくれ。疑問に思ったことはその都度聞いてくれる。——まず、おまえさん、この世界の人間じゃないだろう？」

木々がざわめいたような気がした。日の光が目刺さった。俺は頷いた。

「たぶんそうだと思います」

「やつぱりな。おいらもそうさ、あつちで忘れられてこの世界にやってきたんだ。あつちじゃソフビ人形は喋らない。そうだな？」

俺は頷いた。『あつち』というのは俺の元いた世界のことである。忘れられて云々というのはわからないが。

「この世界がどういう場所なのか、それは、残念だがおいらにもわからねえ。現状わかっているのは、どうやらこの世界はあつちの世界と深く関係しているらしいってことだ。おいらはここに来てもう21年になるが、その間、いろんな物が空から降ってくるのを見た。それは本だったり、家具だったり、おいらみたいなおもちゃだった。共通しているのは、みんなあつちの世界に居場所がなくなっただ物だってことだ。どうしてか、おいら達にはそれがわかるんだ。他の連中もわかつてる。ああ、こいつもあつちの世界で自分の役目を終えたんだな、って。おいらは自分がおもちゃとしての価値を失ったことを、空から落ちながら理解した。あつちの世界での持ち主のことは覚えてねえ。他の連中、机や車椅子や電気ケトル達もそうだったんだろう。そのことが互いにわかるんだ。言葉では説明しづらいんだが、圧倒的な共感がある。向き合つと、こつ、心で強い悲しみみたいなものが感じられるんだ。理解し、理解されたこともその時わかる」

ジュークは一時間ほど使って（体感だがそれなりの精度だと自負

している）俺にこの『不思議な世界』のことについてのあれこれを教えてくれた。俺は時には相槌を打ち、時には聞かれたことに答えながら彼の話を聞いた。突拍子も無い内容であったが、彼の言葉は俺の中に抵抗なく染み込んだ。

俺はジュークに姉を見ていないか聞いてみた。彼は、今日この森で見た人間は俺だけだと答えた。この森を北に抜けるとジソという大きな街があるから、そこでなら何かわかるのではないか、とのことだった。今いるここは『ギモギモの森』と呼ばれる森の西側あたりであるらしい。

「ところで、なぜ俺がこの世界の人間でないとわかったのですか」俺が彼と同じように『忘れられたもの』だからだろうか。しかし俺の心に悲しみは無い。共感も無い。あるのは姉の不在からくる、恐怖と焦燥だけだ。

「服だよ。そんな上等な服を着た人間が森でぶっ倒れてるわけがない」

俺の服装は黒のジーンズに姉とおそろいで買った紺のコート、それと鞆だ。別段上等な衣装では無い。この世界ではこんなものでも上等と分類されるのだろうか。

「それに態度だな。この森でおいらを見て、驚き以外の反応を見せない。そんな奴はこの国にはいないさ」

「普通はどういった態度を？」

「そもそも普通の奴はこの森に入らない。おいらたちはそこそ有名人でね。人間はこの森を避けて通るのさ。それでも会った時は……そんな時はみんな、耳を塞いで走って逃げていくよ」

おいら『たち』？まだ会っていない電気ケトルや机のことだろうか。

「ジューク意外の『忘れられたもの達』も、あなたのように喋るのですか？」

「おいらたちが恐れられてる理由は訊かなくていいのかい？」

「興味がありません。誰かを信じることは噂に左右されて決める問

題ではないと考えます」

ジュークは少し黙った。何か言おうとしたようにも見えたが、表情は変わらない。気のせいかも知れなかった。

「……椅子や机は喋らないし、動かない。動いて喋るのは『かつて人間の友達だった』物だけだ。会ったことのある奴だと、テディベアや、着せ替え人形、それにおいらみたいなソフビ人形なんかいたな。大抵は森の外に行っちまったが」

「その彼らと連絡をとることはできますか」

「世界各国にざっと98人つてところかね」

「自分はこれからジソの街に向かいます。自分が気を失う直前まで一緒にいたので、おそらく姉もこの世界にいると思うのです。しかし一人の力では限界がある」

「仲間に連絡をとって、お姉さん探しに協力してほしいと？」

「はい」

「一つ、条件がある」

「はい」

「おいらにはやらなきゃならないことがある。正直に言えば、今おいらがおまえさんにおせっかいを焼いているのだから、その目的のためだ」

ジュークは真面目な声で言った。

「おいらは、化け物に捕まったおいらの仲間を救い出したい。取り引きだ。それをおまえさんが手伝ってくれるなら、おいらはおまえさんの『本当の味方』になってやる」

ジュークがソフビニールの手を差し出す。

「どうする？」

俺は迷わず彼の手を握り返した。

「そこに、自分を案内してください」

二本の指で触れた彼の手は、硬くて冷たかった。

はじまり／ひるまゝとぞらとぶしちのせかい（後書き）

はじまり2／ひるまとよそらとでかいとら



ひるまです。

音というものについておはなししようと思います。

心理学的に音と言えば人間の耳に聞こえる音だけを指しますが、ここでわたしがするのは物理学的な意味での音のお話です。

小さな頃——生まれて間もない幼い頃から、わたしは「音が得意」な子どもでした。

特に動物の発する音が「得意」で、幼稚園に入園する頃には鳥の鳴き声を正確に再現し、庭にスズメやカラスや鷹を呼び寄せては、首を傾げる鳥たちを縁側から眺めて喜んだものです。父の声を真似て「おまえたちとはもうやってられん！俺はこの家を出て行くぞ！」と叫び、11人いる母たちに大目玉を食らったこともありました。あの時の母たちの顔は今でも忘れません。小さな悪戯心が人を絶望させることもあるのだと学びました。地動説を認めることを決断したクリスチャンでももつと明るい顔をしていたに違いありませんでした。

小学校に上がる頃には、猫や犬などの身近な動物であれば、それぞれが鳴き声によって伝達するメッセージの内容をかなり正確に読み取る（聞き取る）ことができるまでになっていました。夜中に猫の喧嘩を仲裁した回数は両手の指では足りません。カラスにゴミ漁りをやめるようお願いした回数はその倍です（彼らにとっては死活問題ですので、ワンプロック離れたゴミ置き場を教えることで了承をいただきました）。その頃になってようやくわたしは「超音波」や「低周波音」という言葉を知りました。わたしが普通に聞いたり出したりしていた音は、母たち普通の人間にの耳には聞こえていなかったのです。音圧についても、たった三百メートル先の会話さえ「

普通』の彼らは聞き取れないのでした。弟のよぞらは聞き取ることもできましたが、あれは普通ではないので横に置いておきます。それに弟は応用・分析というものがとことん苦手ですから、同じ音や同じ声を出すことはできても、動物たちと意思疎通することはできませんでしたし、できるようになると努力することもありませんでした。「おれのねえさんはすごいのだ」と一人で納得してウムム頷くだけでした。わたしに言わせれば弟のほうがよく「凄い」のですが、それもまた今は横に置いておきます。

中学校に入学してまもなく、一番若い母のコネで、ある大学のえらい先生のお話を聴講する機会を得ました。その内容は、大脳聴覚野における音情報の処理機構についてわかりやすく説くもので（要するに、聴覚の構造は犬も猫もヒトも同じなのにどうしてヒトは子音や母音などの微妙な音の違いを聞き分けて言葉として認識できるの？というお話です）、かつて拝読した同氏の論文では解り辛かった部分に関しても説明がなされ、わたしにとってはたいへん満足のいく30分でありました。

事件が起きたのは先生のお話が脇道に逸れ、質問の時間と言いながらも、本筋とはあまり関係の無い、ちよつとした雑談に入った時のことでした。

「——だからまあ、犬や猫や牛なんかは、人間がするような言葉による細かな意思疎通というものを、同じ生き物同士でもしない、いや、できないのである、ということになるわけですね」

「えっ!？」

先生の何気ない一言に、弟が大袈裟なまでに反応したのです。そこから散々でした。

「どうしたのかな？ 気になることがあったら、遠慮無く聞いていいんだよ？」 偉い先生が優しく促しました。

「動物が、言葉を解さないというのは、本当なのですか？」

弟がわたしのほうをチラチラと見ながら丁寧な調子で先生にたずねました。

「キミが言っているのは、『お手』や『お座り』のことかな？あれらは学習を経たうえでの行動であって、厳密には言葉ではないんだ。イルカの曲芸なんかも学習の成果だね。わたしがいった言葉というのは、『今日はいいい天気ですね』とか『そろそろ寒くなるけど冬服はもう出したのかい？』とか、そういう意思疎通のことさ。もつとも、『お手』や『お座り』にしても、まったく躑をしていない野生の狼に、初対面のキミが声によってそれらの行動をさせることができたなら、それは狼にも言葉があり、その言葉をキミが正しく理解しているということになるけどね。……もしかして、そういう意味で聞いたのかな？」

「はい。自分は、動物にも人間と同じようにそれぞれの動物の言葉があると考えます。ただ、人間にはその言葉がわからないのです。動物の言葉を理解できる頭と再現できる器官さえあれば、彼らとの会話は成り立つものと考えます」

「キミ、気持ちいいくらいハキハキ喋るね。自分の考えをしつかり持つて、それを順序立てて人に話すこともできている。まだ高校生だろう？うちの学生たちにも見習ってほしいもんだ」

「いえ、自分は小学4年生です」

「ええっ！？」

ここまでで終わってくれば良かったのです。先生が弟を褒めて、弟の大きな体と態度に大学生の皆さんが驚く。それでいいではありませんか。そう願っていたのですが、そうはなりませんでした。先生が冗談めかして弟にこんなことを言ったのです。

「キミはもしかして、動物と会話ができるのかい？」

わたしは必死で目をパチパチやって、弟を止めようと思いました。もちろんそんな合図は通じませんでした。

「自分はできません。しかし姉は優秀なので、およそ鳴き声を発する全ての生き物を意のままに操ることができます。見たことのない動物でも、一時間も観察すれば言葉のパターンを覚えるそうです」

失笑でした。大学生の皆さんが一樣にわたしを見て失笑していま

した。講師の偉い先生も苦笑していらつしやいました。部屋にいる半数の人がわたしを「純朴な弟に嘘を教える性根の捻くれた姉」と思ったに違いありません。もう半分は妹だと思ったでしょう。わたしは真つ赤になって俯きました。消えてしまいたい、穴があったら入りたいとはまさにこのような状況かと思いました。そこで、おもむろに母が立ち上がりました。母は大学生たちの間を縫って窓へと向かいます。

「あなたたち、そんなことできつこないと思ってるでしょう？うちの子は、ちよつと凄いのよ？笑った奴、全員謝ってもらうから」
ぽかんと口を開ける皆さんを置き去りにして、母はわたしを呼びました。

「ひるま、見せてやりなさい」

豪快な人でした。そんなところが密かに好きでした。

わたしはキツと顔を上げると、母のもとまで歩いて行き、窓を大きく開けて、外に向かって叫びました。

「カー」

背後からざわめきが聞こえました。わたしの鳴き真似が想像以上に上手だったので驚いたのでしょうか。でも、まだです。わたしはアカアと何度か呼びました。しばらくすると、カラスがこちらに向かって飛んできました。

「おい、まさか」「マジだ」「ホントかよ」「これ、ひよつとして

……」

大学生の皆さんはいよいよ立ち上がって窓に寄って来ます。講師の先生が「なんてことだ」と呟いたのが聞こえました。カラスは速度を落として窓枠にソフトランディングを決めました。わたしはカラスの彼女にお願いします。「怖いことはしません、中に入ってくださいませんか」。カラスが室内に入ってきます。部屋中がシーンと静まり返ります。「その大きな生き物の肩に止まってください」。

カラスが弟の肩に止まります。
「そつちの端まで飛んでください」

「この帽子を持ってみてください」

「焼きそばパン食べますか？」

カラスの彼女にしてみらう内容は、一度日本語で黒板に書いたあとにカラス語でお願いしました。

教室はいまや興奮の嵐のただ中にありました。カラス氏にお土産のパンを持たせ、お礼を言ってさよならしたあとは寮生が飼育しているイグアナのマリリン氏にダンスを披露してもらい、飼い主のお兄さんに彼女からの不満や改善要求を伝えてあげました。

「わたしのこれまでの研究は何だったんだ。すべて間違いだったのか……？」

講師の偉い先生はしばらく呆然としていました。

見せられることがあらかた終わると、わたしたちは当初の主役であつた講師の先生から研究室に呼ばれ、頭を下げられました。

「お願いします！どうか我々の研究に協力してください！」

これは話を聞いた母がバツサリと切り捨てました。

「ゴールラインが同じでも、出発点を違えたアプローチは合一されるべきではないわ。あなた達の目指す場所には、うちの子が既に別方向からたどり着いている」

そのあとも色んなことがありました。学生さんが携帯電話で撮影したわたしの映像をネットに流したり、それを見たテレビ局の人が我が家に訪ねてきたり、そこでキツパリと断つたにもかかわらず心霊番組的一幕で『怪奇！カラスの言葉を解する少女！』と題された映像とその解説がモザイク付きとはいえ三十分にもわたって全国のお茶の間に放送されたり、顔も体もボロボロになったテレビ局の人たちが20人ほどで謝りに来て、その後すぐに「あれはやらせだつた」とテレビで謝罪がなされたり（朝早くの誰も見ていないような時間でなく、ちゃんと夕方七時に放送されたところに父の影響力の大きさを感じました）、東京湾に謎の死体が浮かんだり……本当に色々ありました。

長々と語りましたが、わたしが言いたいことは一つです。おそら

く今まさにわたしと似たような境遇にあるであろう弟が、これまたおそらくわたしの心配をしているであろうことは、杞憂どころか、余計なお世話であると、わたしは声を大にして言いたいのです。わたしは大丈夫だから、よぞらこそ頑張つて、おうちに帰る方法を探なさい。そう伝えたいのです。

勿論、そんな手段は無いのですけれど。

さて、わたしひるまがイエシゲさんの背中に乗って森を抜けると、なんとか歩いて行けるくらいの距離に小さな集落が見えました。近くの畑には人の姿も確認できます。これでなんとかなりそうです。わたしは安心しました。

グゴゴブ、とイエシゲさんが唸ります。イエシゲさんは銀色の牙を四本もはやした大猪です。両頬のキュートな膨らみと、三十秒も歩くと一度止まってお小水をすることから、イエシゲさんと名付けさせていただきました。ちなみに今の唸り声は「毛のない生き物の村が見えた、小さい生き物よ」という意味です。

「ええ。ここまででいいです、イエシゲさん。ありがとうございました。本当に助かりました（グゴゴゴ、ゴヒ、ブヒヒ、ゴゴゴ、イエシゲ）」

わたしは齒と喉と唇を使って「イノシシ語」でお礼を言います。イエシゲさんはゴゴヒヒユツ（また会おう、不思議で小さな生き物）と鼻を鳴らして森の奥に戻って行きました。私は彼の大きなお尻を見送ります。キュートで力持ちで、それでいて気取らない紳士的な雄猪でした。彼はわたしに雌としての価値を見出しませんでした。それでもわたしの頼みを聞き、見返りも無しにここまで運んでくれたのです。おまけにお亡くなりになったお父様の牙までいただいてしまいました。なんて大きな雄なのでしょう。わたしの心をポカポカした液が満たします。心地良い失恋でした。

「キピ、ピツ、ピイツ、ピピツ（歩け、ゆこう、毛の長い大きな生き物。我はまだ見ぬ世界を目にするのだ）」

ヒデタダ君がわたしの頭の上で羽根をパタパタさせます。ヒデタダ君はウグイスに長い尾をくっ付けたような小鳥さんです。手の平ほどの大きさしかありません。彼はもうしばらくわたしと行動を共にしてくれるそうです。

「そうですね。行きましようか、ヒデタダ君（ピピピッ、キピ、ヒデタダ）」

わたしは頭にヒデタダ君を乗せたまま、集落に向かって歩きはじめるのでした。

「おや、これは、魔女さまでいつらっしやいますか」

畑仕事をしていらしたおじいさんに「こんにちは、ご精が出ますね」とご挨拶したところ、帰ってきた言葉がこれでした。魔女です、魔女。いよいよきな臭くなつて参りました。わたしは頭からヒデタダ君を落とさないように気をつけながらお辞儀をしました。

「旅のものです。弟……いえ、兄を探してここまでやってきました。背の高い、わたしと同じく真っ黒い髪をした男です。額に大きな傷があります。それらしい人を見なかったでしょうか？」

「見てはおりませんなあ。わたしはもうボケかかっておりますが、少なくとも、きのう今日に見た記憶はありません。ここにはおらんでしょう。なにぶん小さな村です、他所から人が来ればすぐにどこやれ知れますよって」

「そうですか……」

どうやら弟はここにはいないようです。よぞらつたら、いったいどこに行ってしまったのかしら？知らない人について行ってはいけないと教えたその日の夜に隣の県で警察に保護されるような子です。「牛がこつちを見ていたから」という理由でトラックに乗り込んだと言っのだから頭の出来に救いがありません。それ以降《夏野家のきまり》に「よぞらは動物について行ってはいけない」の一文が加筆されたことは言うまでもありません。わたしは弟が心配でした。現状も心配ですが、将来的な意味でも心配でした。

「魔女さまは、青の森から来なさったんで？」

青の森というのは、わたしが目を覚ましたあの森のことでしょうか？——ところで今、森を越えて、ではなく、森から、と言った？
とりあえず、わたしは「そうです」答えました。

魔女ではないのですけれど、訂正はしないでおきました。よそらがないとわかった以上、長居する場所でもありません。不愉快な気分させるのは不本意です。

「もし止まるあてが無いのでしたら、村長の家に行けば邪険にはされんでしょう。『次の街』まで二日はかかりますよって」

次の街？という意味でしょうか？

すつきりしませんでしたがあまり引き止めても悪いと思い、わたしはおじいさんにお礼を言ってその場を後にしました。おじいさんは「気にすることはありません」と言って農作業に戻ります。そうしながら、彼は最後にポツリと言もらしました。その一言がなぜかわたしの頭から離れませんでした。

「なにせ、わたしら村のもんは舞台装置ですから」

意味はわかりません。でも、背筋がとても寒くなりました。

「キピ、ピー、ピピツ、ピ（震えているぞ。何を恐れる、毛の長い大きな生き物）」

ヒタダ君が心配してくれます。大丈夫ですよ、とわたしは言いました。だから頭皮を突付くのはやめてください。

わたしは父の大きな腕を無性に恋しく思いました。

村に入り、一時間ほどかけて情報収集をしました。もちろん時間は携帯電話で確認しました。わたしの体内時計はあてになりません。電波は圏外でした。

村には名前がありませんでした。住む人達はただ「村」と呼んでいるそうです。

9人の村人さんに聞きましたが、やはり弟はこの村を訪れていないようでした。そしてどうやら、わたしがいるこの場所は夢の中か、

或いは『地球以外のどこか』であるようでした。外の畑にいらした
どう見てもコーカソイドなおじいさんが流暢な日本語を話した時点
で、薄々そうではないかとは思っていたのですが、しかしながら、
わたしの頭の中にいる常識的なわたしが「そんなわけあるか！そん
なわけあるか！」と強く否定するのでいまいち信じ切れずにいたの
です。けれども村に一步入って、すぐにわたしは確信しました。

村に八つある家はみんなモンゴルの遊牧民が使うテント（ゲルと
かパオとか呼ばれるあれです）のような建物でした。ただ、家畜は
殆どいませんでした。村の真ん中にある厩舎に馬が五頭と、あとは
繋がれていない山羊が村の中をうろろしているくらいです。家が
遊牧民のそれに似ているというだけで、別段移動生活をしているわ
けではないのでしょうか。それはいいのです。重要なのは、村にある
全ての家の入り口扉の上に、わたしたち日本人がよく見慣れたある
プレートが取り付けられていたことです。

『保健室』、『理科室』、『音楽室』、『職員室』、『校長室』、
『家庭科室』、『美術室』、『1年3組』

そう、学校の各教室入り口に付いているあのプレートです。男子
がジャンプしてタッチし、壊して先生に怒られるあのプレートです。
汚れてところどころ茶色くなったり黄ばんだりしていましたが、間
違いなくあのプレートです。あれが家々の入り口に付いているので
す。

ちなみに村長さんの家は『1年3組』でした。畑でお話を聞いた
おじいさんの家は『校長室』です。

いよいよわたしは参りました。

どうやらわたし、夏野ひるまは不思議の世界に迷い込んでしまっ
たようでした。

わたしに優しい姉はいません。優しくない姉もいませんが。

しかしそれではいいたい、わたしはいつどこで、誰の隣で目をさ
ませばよいのでしょうか？



よぞらだ。目的地に着いた。

ジュークを左手に持ち、彼の道案内で森の奥のそのまた奥に俺は進んだ。雑談しながら20分ほど歩いた頃に目的地は見えた。いま俺の目の前には、大型トラックが余裕をもって通れるサイズの洞窟が口を開けている。ジュークによると、この中に化け物と、そいつに攫われた彼の仲間がいるそうだ。俺には化け物とやらのおおよその位置は、音と匂いによってここに着く五分も前にはわかっていた。しかし、なるほど。呼吸音が妙にこもっていたのは穴の中にいたからか。姉であれば鳥を先行偵察に出して情報を集めるくらいのことをするのであろうが、残念なことに俺には動物の言葉を解する頭がない。細心の注意を払ったつもりでも、結局は『行き当たりばったり』『為せば成る』が俺の行動指針の常となっていた。

俺は手のひら大の石を拾い、洞窟の中に軽く投げた。石は洞窟の壁に当たって粉々に砕けた。乾いた大きな音が洞窟に響いた。

一秒の時間差で左手のジュークがビクリと震えた。

「おまえ……おまえさん、いま何をした？」

「石を投げました。洞窟の地面は硬いので、ここまでおびき出します」

「な、投げた……？すごい音がしたぞ。動きもまるで見えなかったし。手に握られてるおいらが揺れを感じなかったなんて……。それに、地面が硬いってというのはどういう意味——むぐっ」

「来ました」

俺はジュークをコートの胸ポケットに押し込んだ。

洞窟の壁で反響した唸り声がひびき、岩穴の中から化け物が現れる。

それは虎だった。

銀色に輝く二本の牙を長く伸ばした、頭のとっぺんの高さが俺の背の倍以上ある巨大な虎だ。

虎は俺を見てグルグルと唸った。ここから虎までは10メートルもない。あの大虎のサイズと筋肉であれば、ぴよんと跳んだらもう爪が届くだろう。

「なんで隠れないんだ！これじゃいい獲物だぞ！」

「隠れたらジュークの仲間を助けられません」

「虎の王様が外に出ている隙に忍び込めばいいだろうが！」

それではまだ危険がある、と俺は首を横に振った。

化け物は虎の王様というらしい。確かに王様と呼ぶに相応しい大きさだ。俺が四歳の時にネパールの山で倒した虎が乳飲み児に見えるサイズである。

「……これだけ大きかったら、洞窟の中でもよかったかもしれないな」

「え？なんだって？」

「いえ、独り言です」

俺は肩の力を抜いた。

「ところでジューク。あの虎に言葉は通じますか？」

ジュークはすこし黙ったあと、罰がわるそうに「わからねえ」と言った。「そもそもおいらは、あいつにここまで近付いたのは初めてで」

「そうですか」

「……すまねえ。攫われたのはおいらの仲間なのに、おいら、あいつが怖くて」

「問題ありません。本人に聞きます」

「……………え？」

俺と会話する間、緊張した様子で一瞬も虎から目を離さないようにしていたジュークが、間の抜けた声を上げてこちらを向いた。

「おい……………何を……………」

俺は虎に向かって叫んだ。

「虎っ！俺の言っていることがわかるか！」

虎がスツと目を細める。ジュークが手をバタバタさせ、慌てた声で「おい馬鹿やめろ！やめろつたら！」と言った。この怪物は仲間を助けたのか助けたくないのか、どっちなのだ。俺はかまわず話しかけ続けた。

「おまえが攫った怪物人形を返してもらいたい！おまえの足の爪ぐらいの、小さなソフトビニール人形だ！要求を飲んでもくれるなら、俺は今後一切おまえに干渉しないことを約束する！こちらは平和的解決を望んでいる！」

要求を伝え終えた俺は大きく息を吐いた。よし、これでいいだろう。

どこの家庭にもルールというものがあると思われるが、俺の家にも法律がある。姉と母たちが作った我が家の法《夏野家のきまり》だ。そこには俺のためだけに考えられた約束事がいくつも記載されている。その一つが《暴力に関するきまり》の三つ目、『殴っているのは、言ってもわからない奴だけ』というきまりだ。かつて俺がやむなく人を殴ってしまった時に作られた法である。その時は法の制定と同時に三食抜ききの罰が家族全員に下され、俺を大いに動揺させた。もちろん俺は父に噛み付いた。

「痛い！本当に噛む奴があるか！」

悪いのは俺ではないか、どうして姉や母たちまで巻き込むのだ。

俺は父に詰め寄った。父は笑って答えた。

「それじゃあ罰にならないからだ。おまえが恐れるのは身内の痛みだろう」

よぞらは俺に生き写しだからな、と父は歯型のついた腕をさすりながら続けた。

「相手の大学生、歯六本も折れてたそうじゃないか。今回は飯抜き

程度で済んだが、おまえが成人していて、尚且つ相手が訴えをおこしていたなら、こんなものじゃ済まなかったぞ。おまえは逮捕されて、おまえの姉さんや母さんたちは犯罪者の家族になっていただろう。人間社会で生きるなら、自分の行動にはいつでも他者を巻き込む結果が付いて回ると知れ」

俺は父に西瓜の皮を投げて書斎をあとにした。ドアの向こうから「痛い！青臭い！」という声が聞こえた。

当時七歳の俺はこうして少しだけ賢くなり、暴力を振るうことを恐れるようになった。

しかして俺は姉と母達に泣きながら謝った。家族は苦笑して「次から気をつければいい」と言ってくれた。「俺も飯抜きなんだがな」と言った父は無視した。父の書斎の棚にカステラや栗饅頭が隠されていることを俺は知っていた。

虎がのそりと一歩こちらに踏み出す。仕方が無いので俺も踏み出した。

俺は胸ポケットからジュークを取り出し、彼を高く掲げて最後通牒した。

「これだ！こういう人形だ！そいつを渡してくれたら何もしない！」

「ギャー！ギャー！やめて、食べられる！」

「本当に何もしない！俺はおまえを傷つけたくないんだ！」

「ギャー！ギャー！イヤー！死にたくないーい！」

虎がまた一歩、こちらに踏み出す。

「虎、人形を返してくれ！俺は本当になにも——」

突然、目の前の虎がふくらんだ。

そう思えるほどの速さだった。

「グルアアッ！」

一瞬で俺の目の前に迫った虎は、勢いのままに右の前足を俺に振り下ろした。

俺は、ため息をついた。

——とんつ。

小さな音がした。

虎の前足と俺の靴が触れた音だった。

虎の放った一撃は俺の右足で止められている。虎は大きく目を見開いて動きを止めていた。

起こったことが理解できない。そんな顔をしていた。

二秒たった。コン、と音がした。木の実が地面に落ちた音だった。その音で我に返ったように、虎がもう一度吠えて、今度は左の前足を横から振るった。

「傷つけたくないと、言っているのに……」

俺はそれを右手で止めた。今度は音もしなかった。虎がガタガタと震えだした。

虎の両前足は俺の右手右足で防がれたまま。動けば殺されるとでも言うように、虎は目を見開いたまま俺の顔を見ていた。

「本当にこれで最後だ」

俺は左手に持ったジュークを虎の鼻先に突きつけた。

「こういう人形を知っているだろう？返してくれ」

虎が震えたままジュークを見て、俺を見て、そして牙を剥いた。

「グルアアアアアアッ!!」

狙いはジュークだった。

両前足を抑えられた虎は、手足が使えないのはこちらも同じと考えたか、大きく口を開けて俺の左腕ごとジュークを噛み殺そうとした。「ひいっ」とジュークが言った。

俺は左足で跳び、虎の鼻っ面に、上から下に向けて頭突きをぶちかました。

パン、と——限界まで膨らませた風船を二ダースほどまとめて割ったような音がした。

カキン、と涼しい音が鳴り、虎の銀色の牙が二本、宙を舞った。

俺は音を立てずに着地した。同時に二本の牙がザクリと地面に突き刺さり、太陽の光を浴びてきらめいた。一本は折れ、一本は根元から抜けていた。ジュークが思い出したように両腕を前後にバタバタさせた。

「……なんて……なんて出鱈目な。……虎の王様を、倒しちまった」俺とジュークの目の前には、牙を失い、白目を剥いて気絶した巨大な虎が、頭の半分を地面にめり込ませて横たわっていた。俺はやるせない気持ちでため息をついた。

この程度の大きさと速さに俺が脅威を感じることはない。姉が音で動物と繋がるように、俺は力で動物を押さえつける。全盛期の父を超える化け物でも現れない限り、武装もしていない一個の生物が俺をくだせるとはどうしても思えなかった。

先月に父に勝って以来、運動能力・戦闘能力という点で地球の陸生動物最強は俺になった。俺はもう肉弾戦では誰にも負けることができないし、相手がいる戦いで本気を出すこともできない。ゴリラと腕相撲をしても勝ったし、象を持ち上げたこともあるし、逃げるチーターを捕まえたこともある。水中で一時間息を止めた時だって、退屈でさえなければもつといけた。——大袈裟でなく、人類は俺で完結している。ちよつとでかいだけの虎に負けるはずがないのだ。

俺は虎の頭を撫で、耳を澄ました。心臓の音が聞こえる。呼吸の音も。よかった、生きてる。食べもしないのに生き物を殺すのはよくないことだ。俺は安堵の息を吐いた。

「それじゃあ、ジューク。ジュークの仲間を助けに行きましょう」

はじまり3／ひるまとよぞらとそれぞれのみち



ひるまでです。悪い女です。

イエシゲさんのお父様の牙一本を、村長さんの馬＋銀貨二枚と交換してしまいました。

お水や干し豆やナイフ、それに毛布など、よぞらさがしに必要なものをいくつか買い揃えましたので、残金は銀貨一枚と銅貨二枚です。……それと、牙の残りが三本。

何度でも言います。夏野ひるまは悪い女です。

現在、わたしはヨシムネ君（お馬さんです。頭を振るときの鳴き声が俳優の松平健さんの咳に似ています）の背に跨って西へ西へと進んでおります。気分は三蔵法師です。西にはバビという街があるそうで、我々《ひるまと愉快な仲間たち》一行はそこへ向かっているとあります。

北の方には大きな森が広がっていました。わたしは弟を思いました。どうか北にはいないでちょうだいね。お姉ちゃんは西よ。西ですからね。

森は世界の果てまでも繋がっているように見えました。

「村の西から道なりに真っ直ぐ行きんしゃい、子どもの足でも、二日もありゃあバビに着く。馬なら半日もかからん。学校もある大きな街だから、お兄さんの情報も見つかるかもわからん」

泊めてくれるというお申し出を辞して村の外へ向かうわたしに、村長さんはご自宅（1年3組）から地図を持ってきて見せてくださいました。

「間違つても北にだけは行かないことだ」

「北に街は無いのですか？」

「ある。ジソって街だ。バビに劣らず大きな街で、そこにも学校がある。だがジソに行くには、ギモギモの森を越えなきゃならん。ここからも、ホレ、見えるだろう。あの森さ。地図だここだ。道らしい道はないし、体が痒くなる木は生えとるし、虎の王様もある。悪いこた言わん、いくら魔女さまでも、あの森はやめといたほうがええ」

虎の王様には興味が惹かれましたが、体が痒くなるのは御免です。わたしの中で北行きは却下されました。

「ギモギモというのは地名ですか？」

「森に住んどるんだかよくわからん魔物だ。わしも直接見たことはないが」

「魔物……。それは危険な生き物なのですか？」

「子どもの膝くらいの小さな生き物さ。毒にやられたという話も聞かんし、ギモギモそのものに危険は無いだろう。気をつけなきゃならんのは、奴らの声に耳を傾けてはいけない、ということだ」

「それはなぜでしょう？」

「奴らは言葉を話し、言葉巧みに人を騙すんだ。そうして虎の王様のもとへと連れていき、餌にしちまうのさ」

弟の天敵のような生き物ではありませんか。わたしはなんだか嫌な予感がしました。相手が虎であれ恐竜であれ、弟が非武装の単体に倒される姿を思い浮かべることはわたしにはどう頑張ってもできませんが、言われるままに身ぐるみ剥がされる様子は、楽に想像できてしまうのでした。

どうか弟が北になどいけませんように。ギモギモとやらの騙されてなどいけませんように。わたしは夕暮れの空に祈るのでした。

村を出てから、二度の休憩を挟み、かれこれ五時間ほど道なりにパカパカ進んでいます。街は一向に見えてきません。時刻はもう夕方五時です。そろそろあたりも薄暗くなってきました。真っ暗

になる前に寝場所（もちろん野宿です。慣れています）を決めなくてはならないのですが、どうしたものでしょう。もうちょっと進んでしまいいいでしょうか。それとも無理をせず、このあたりをキャンプ地に定めるべきでしょうか。

「どう思いますか、ヨシムネ君（ブルル、ブルブフ、ヨシムネ）」
「ブルルン、ブフ、ブフ（ぼくまだ疲れてないよ。行けるよ。まだ歩けるよ）」

「それじゃあ、もう30分だけ、お願いしますね（ブル、ブルルフ、フン）」

「ブルブルン、ブルフ、ブルフ（がんばるよ。つらくてもがんばる。ぼくがんばるよ）」

「つらかったら言ってくれていいですよ！言ってくださいよ！」

「ブルウン、ブルル（なんて言ったの。わかる言葉で話してよ）」
同行者のいる旅路は心強く、楽しいものです。誰かと話すことがこんなに心の救いになるなんて。まさに旅は道連れというものです。昔の人はいいことを言います。この調子で、よぞら探しも世は情けという具合にいけばいいのですが。弟を見ませんでしたか？見てないけれどあたしも探すわ。僕も探すよ。俺も手伝うぜ。そんな具合にいかないでしょうか。いかないでしょうね。

のんびりとヨシムネ君に揺られていると、遠く上空から聞きなれた羽ばたきの音が近づいていることに気付きました。黒い点がこちらに向かって飛んできます。空中偵察の任務から戻ったヒデタダ君でした。

「キピピピ！キピッピ！（戻ったぞ、大きな生き物！そして馬！）」

「ブルブルツ、ブルルフ（人間、こいつなんて言ったの？）」

「お疲れ様です、ヒデタダ君（キピキピピ、ピッ、ヒデタダ）。――ただいまー、って言ったんですよ、ヨシムネ君（ブルフフ、バルブフ、ヨシムネ）」

「ブルルルフ、バフフ、バフ（おかえり、小さい鳥。頭に乗ってい

いよ)」

「是非とも頭に乗ってほしいそうですよ（ピピッ、ピ、ピピピッ）」

「キピッ、ピーッ（ウム、褒めてつかわずぞ、馬）」

「ありがとうだそうです、ヨシムネ君（バルフッ、ブフン、ヨシムネ）」

同時通訳はちよつぴりあたまが疲れます。伝えたい事を伝えるだけの動物さんたちでさえこれですから、外交交渉の場で活躍していらつしやる先生方にはとても頭が上がりません。人間の複雑な心理を取捨選択して相手に伝えるなんて、わたしには逆立ちしたってできそうにありません。

わたしはヒデタダ君に干し豆を与え、偵察の報告を受けました。彼が偵知した内容は次のようなものでした。

- 1 ・道は正しい。このまま道なりに進めばよい。
- 2 ・ゴールは近い。今の速度で進めば三時間で街に到着する。
- 3 ・道中に危険は無い。途中に林があるが、大きな動物はいない。
- 4 ・何か来る。大きい生き物の群れがこちらに向かっている。あと一時間ほどで接触する。

道が合っていること、三時間で街に着くこと、危険が無いことはよしとしましょう。三時間で着くのでしたら、野宿はしなくてもいいかもしれません。嬉しい報告です。

しかし、四つ目はどうなのでしょう。なにかの群れて何でしょうか？

わたしはヒデタダ君に四つ目の報告についてもっと詳しく聞きました。どうやらそれは人間の商隊か、兵隊さんのようでした。

馬に乗ったキラキラした生き物が十匹くらいと、二頭の馬が引く大きな四角い塊。

キラキラというのはわかりませんが、四角い塊の方は十中八九、馬車でしょう。

わたしは悩みました。このまま進むべきでしょうか？それとも、ここは隠れてやり過ごしたほうがよいのでしょうか？商人さんか兵隊さん、どちらかはわかりませんが、彼らとわたしが接触することで問題は起こらないでしょうか？わたしは17の女です。見た目なぞ、良くて発育の悪い中学生です。元いた世界でさえ、若い女性の一人旅は決して安全なものではありませんでした。ましてやここは右も左も知れぬ異世界です。事が起きた時にどう対処していいものか、そのあたりのことがわたしにはまるでわかりません。

わたしも父の子ですから、奥の手の一つや二つは、持っています。相手が聴力をもった人間であるならば、わたしの体に傷がつくことは万に一つも無いでしょう。遠くから銃で撃たれでもすれば話も変わってきますが。

「でも、できればあの方法は、使いたくないなあ……」

——最後の手段。あれは少し、残酷すぎるから。

わたしは考えましたが、結局このまま進むことにしました。他人よりも、家族の方が大事です。優先すべきはよぞらです。わたしは弟の手がかりを探すため、一刻も早くバビの街に到着しなくてはならないのです。心苦しいですが、邪魔をする人たちには、苦しんでもらうことに決めました。

『殴っていいのは、言ってもわからない奴だけ』

我が家の法律、《夏野家のきまり》にしたがって、相手が言ってもわからない人ならば、こちらは力でもってわからせてさしあげることにいたしました。

1キロメートルくらい先でしょうか？前方にポツポツと小さな点が見え始めました。もちろん『音』はもつと前から聞こえていました。彼らの会話から、向こうもこちらに気付いたことがわかりました。距離が半分に縮まる頃には耳を澄ますまでもなく、彼らの会話の内容も、それぞれの心臓のリズムも、歩き方の癖も、わたしには余さず聞こえていました。彼らは森に出る魔物を退治しに来た兵隊

さんたちのようでした。別段わたしに対して思うところは無いようです。わたしはほっとむねを撫で下ろしました。一応、顔は隠しておきましょう。わたしはコートのフードをかぶりました。……キラキラした生き物って、鎧を着た兵隊さんのことだったのですね。

「ヒヒーン、バヒヒヒーン！（なにか来る。いっぱい来る。なにかこれこわい。こわい！）」

「ピピッ、ピロロロッ！（大きな生き物だ！大きな生き物の群れだ！それと四角い塊！）」

臆病なヨシムネ君が怯え、好奇心旺盛なヒデタダ君が羽をバタバタやって体で喜びを表現します。わたしは彼らに、兵隊さんたちが危険な存在でないこと、我々《ひるまと愉快な仲間たち》が兵隊さんたちに深く関与しないことを伝えました。ヨシムネ君は落ち着きを取り戻し、ヒデタダ君はあからさまに意気消沈しました。

ついに兵隊さんたちが目の前までやって来ました。ヒデタダ君の報告どおり、部隊は槍を持った騎兵さん十名と二頭引きの馬車という編成でした。わたしは作戦通り、お辞儀をしてすれ違うことにしました。絶対にうまくいくと思っていました。結果は失敗でした。先頭をゆく三十歳くらいの兵隊さん（おそらく隊長さんでしょう）がわたしに声をかけてきたのです。

「少年。ちよつと聞きたいのだが」

わたしは脱力しました。少年って、あんまりじゃないでしょうか。何でございましょうか」

わたしは意識して丁寧な、目下の者の口調で言いました。隊長さん（仮）はわたしの声を聞いて慌てました。

「むっ、女であつたか。すまん。そんな格好をしているものだから」村では変わり者と呼ばれておりました」

テキトウなことを言うものです。ところでこの格好、変だったのですね。村長さん、言っておさつてもよかったのに。

「して、わたくしに聞きたいことと仰いますのは？」

「ああ。——この先の、青の森に棲む魔物・ボラボについて聞きた

いのだ。森の近くに村があるのはわかるな？」

「はい。わたくしもその村を経由して参りました」

「では、被害はどうだった？子どもや年寄りが襲われたり、畑が荒らされたりはしていなかったか？」

わたしはあの村で一時間程度の聞き取りしかしていませんが、魔物が出るなどという話はありませんでした。村長さんも、安全だけが取り柄の村だと言っていました。

「失礼ながら……なにかの勘違いではございませんか？魔物による被害が出たなどという話は聞いたことがあります。少なくとも、わたくしが見たところは長閑で平和な村でございました」

「隊長。やっぱりデマだったんですよ……」

若い兵隊さんが隊長さん（本当に隊長さんでした）に耳打ちします。隊長さんはガツクリと肩を落としました。

「むう……。そうか。無駄足であつたか」

正義感の強い人なのでしょうか。なんとなく、罪悪感のようなものが胸の中であぐらをかきました。

「そもそも、ボラボというのはどんな魔物なのでございましょうか？」

「巨大な猪だ」

「えっ」

「四本ある牙にはボラビーという特殊な金属が混じっていて、そいつを混ぜて作った服は剣も槍も通さないそうだ。市場には滅多に出回らん。俺もかれこれ三年は狙っているのだがなあ」

わたしの背中を汗がつつーと落ちてゆきました。口の中がカラカラになりました。

「……ち、ちなみに、その牙というのはお幾らほどになるのでしょうか？馬を一頭買って銀貨二枚のお釣りがくるくらいでしょうか？」

「まさか」隊長さんは、馬鹿を言うかと笑いました。「ケンケラ馬の引っ張り競走に勝つような白馬を三頭買っても金貨で釣りが戻るほどさ」

「馬三頭に、金貨……」

ケンケラというのが何かはわかりませんが、村長さんが牙の適正価格を知らなかったことはわかりました。

「と、ともあれ、わたくしは青の森にも入りましたが、そのような『危険な魔物』は見ませんでした。やはり何かの間違いでございましょう」

イエシゲさんは森から出たことはないと言っていました。自分は森の主だ、とも言っていました。わたしたち人間には理解しづらいかもしれませんが、言葉によって嘘をつくというのはかなり高度な言語行動です。殆どの動物にはこれができません。痛くないのに痛いふりをする、疲れていないのに疲れたふりをする。これくらいであれば群れで生きる動物の多くがします。けれども、同じことを『言葉』で伝えることは難しいのです。これは多くの動物が生活するうえで、言葉によって相手を騙す必要がないからだとなわたしは考えます。イエシゲさんは村を襲ったことなどありません。おそらく彼はあの森にひっそりと棲む最後のボラボナなのでしょう。

「時間を取らせてすまなかつたな。行つていいぞ」

「はい。それでは失礼致します」

わたしはヨシムネ君に乗ったままお辞儀して彼らの横を通り過ぎました。

馬車の窓から中学生くらいの少年がこちらをじつと見つめていましたが、わたしは努めて気付かないふりをしました。兵隊さんたちはわたしのことを勉強の旅に出された商人の娘だと思っているようでした。あんな小さな女の子の旅に出すような親だ。きっと碌でも無い、業突く張りのデブオヤジだろう。今は真っ直ぐ育っているようだが、女の子だ、これから酷い目にあうことだってあるだろう。体を売って金を稼がせることも目的のうちかもしれない。とんでもない親もいたもんだ。——百メートルほど離れた頃、兵隊さんたちのそんな会話が聞こえてきました。父の株価、本人のあずかり知らぬところで大暴落です。

「じゃ、行きましようか。目指すはバビですよ」

「ヒーン」

「ピロロロロ」

わたしはバッグを肩にかけ直し、弟の行方を求めてバビの街へと向かうのでした。



よぞらだ。

救えなかった。

ジュークの仲間は洞窟の奥にいた。彼は手足を失い、黒く汚れて元の姿がわからなくなっていた。

「わかつてはいたんだ。15年前、こいつが連れ去られたあの日から、生きてるわけがねえつてよ」

それでも諦めきれなかった、亡骸を奪い返したかったんだ、と彼は言った。俺たちは枯れ木で火を熾し、遺体を荼毘に付した。黒く縮んで小さくなった彼の欠片は俺が目覚ましたあたりに穴を掘って埋め、虎の王様の折れたほうの牙を突き刺して墓とした。もう一本も捧げようとしたが、ジュークが「売れば金になるから持つておけ」と言ったのでバッグに突っ込んだ。そのほうがきつとファイブも喜ぶ、と彼は続けた。ジュークの顔が動くことはないが、俺には彼が泣いているように思えてならなかった。

「奴はシリアルナンバー005番だな。虎の王様が現れるまで、おいらたちのリーダーだったんだ。この洞窟だって、もとはおいらたち『ギモギモ族』の家だったんだ……」

ジュークは遠い思い出を俺に聞かせてくれた。

アマネ屋ソフビ『百体限定！復刻・大怪獣！』シリーズの第一弾『大怪獣ギモギモ』、シリアルナンバー005——ファイブ氏はジ

ユークの親友だった。地球から百体一緒にこの森へと落ちてきて恐慌に陥る彼ら『大怪獣ギモギモ』を一つにまとめたのがファイブ氏だった。氏はリーダーとして、この世界で生きていくための道を他のギモギモ達に示したのだ。そのころこの森はまだ、『虎王の森』と呼ばれていた。

「オレたちは自由だ。この世界のルールに従って、自由に生きていこうじゃねえか。かつて我らが盟友、人間たちがそうだったようにオレたちはもう、ただの人形じゃねえ。動けるし、喋れるんだ！この世界について学び、ルールを守って楽しく生きよう。オレたちは別々の生き物だ。それぞれが心を持っている。だが、どこにいたってオレたちの心は繋がっている。そのことだけは忘れないでほしい。俺たちギモギモは、それぞれが別々だが、それでいて一つだ。今日からオレたちはギモギモ族と名乗ろう！」

この世界に来て心を獲得したばかりの大怪獣ギモギモの中にあつて、ファイブ氏だけが合理的精神・理性というものを初めから持ち合わせていた。彼の指導のもとで大怪獣ギモギモ——否、ギモギモ族の啓蒙思想は成ったのである。

百人いたギモギモ族は一人また一人と森の外の世界へと巣立って行った。彼はその門出を見送り続けた。三年後、森に残っていたのはファイブ氏とジュークだけだった。

「ジューク、おまえも旅に出たっていいんだぜ？」

「おいらがいなくなったらファイブ、おまえさんはどうする気だ？」

「オレは残るさ。巣立って行った同胞たちが歩き疲れた時、足を休める場所はきつと始まりのこの森だから」

「なら、おいらも残るよ。頑張り屋のおせっかい焼きが疲れちまつた時、隣で支える役は誰にも譲れねえから」

それから三年間、彼らは洞窟で仲睦まじく暮らした。性別など無く、元々は生物でさえなかった彼らの関係は、夫婦のようであり、友人のようであり、親子兄弟のようでもあったという。ギモギモ族は心で繋がっている。森を出た仲間から『ギモギモ通信』で連絡が

届くことも多かった。ギモギモ通信はギモギモ族全員に同時に繋がる電話のようなものらしい。二人は仲間たちの現状を聞いてはアドバースし、時に励まし、遠い仲間と一緒に一喜一憂した。幸福な時間だった。

しかし幸せは長く続かなかった。

ある夜、彼らの洞窟を虎の王様が発見した。巨大な虎にとって自分の体がすっぽり入る洞窟は理想の住居であった。

「ジューク、振り返るな！走るんだ！」

二人は迷わず洞窟を捨てた。仲間たちとの思い出の詰まった家であったが、彼らにとって災害にも等しい巨大な肉食動物に逆らう気など起きるはずもなかった。六年という期間が熟成させた未練を振りきって二人は未来を見つめた。彼らはもう二度と虎に出会わぬよう、生活範囲を変えることを決めた。

——だが、虎は違った。

虎はネコ科の動物だ。小さな生き物がチヨコチヨコ動く様子はさぞかし狩猟本能を刺激したことであろう。気付けばファイブ氏が虎の前足に抑えつけられていた。

「ファイブっ！」

もちろんジュークは助けようとした。だが、そこで虎の王様と目が合った。動けば殺す。そう言われた気がした。彼は動けなくなつた。そこにファイブ氏が呼び掛けた。その声は底抜けに明るいものだったという。

「おい、ジューク！ちょっとこいつと遊んでいくからよ、先に行つてくれ！すぐに追いつくから、おまえは森を出るんだ！オレは大丈夫だ、じゃれてるだけだから！」

そんなはずがなかった。

大丈夫なはずがなかった。

ずっと一緒にこの森で暮らそう。そう約束した相手が森を出ると叫ぶ。いつまでもこの森で仲間たちを待つ。そう言ったりーダーがすぐに追いつくと嘯く。それはなにより残酷で、世界で一番やさし

い嘘だった。

虎はファイブ氏を啜えて洞窟の奥へと消える。ジュークはそれを追うことができなかった。自分たちの家だった洞窟に、バリバリと何かの碎ける音が響いた。

ジュークは森を出た。

全てが終わった気がした。何をしてもいいかもわからなかった。彼は自分が依存していたことに気付いた。支えているつもりで、支えられていたのは自分のほうだったのだ。彼は考えることをやめてしまおうと思った。

そこに煌びやかな馬車が通った。

「お父様、なにか落ちております。これは何でありますか？」

それは王城帰りの貴族の父子であつた。彼らはジュークをたいそう珍しがった。

ジュークは神の救いを見た気がした。彼は貴族に頭を下げた。

「この先の洞窟で、おいらの仲間が大きな虎に攫われちまったんだ！ 貴族様。どうか、どうか、仲間を助けてください！」

「なんとということだ！ 弱きを助くは我ら貴族のつとめ。任せたまえ、小さき友よ。この私がきたからにはもう安心だ。虎など我が剣の錆にしてくれようぞ！」

貴族は息子の前で張り切り、護衛の騎士を連れて意気揚々、森の奥へと向かつて行った。

そうして、ボロボロになって戻ってきた。

「虎は！ 虎はどうなったのですか、お父様！」

目を輝かせて尋ねる息子に、貴族の男は忌々しげに言ったのだという。

「我々は謀られたのだ！」

間もなく、国内にある噂が流れるようになった。

『ジソの南の森には小さな魔物が出る。魔物は言葉巧みに人を騙し、虎の王のもとへと旅人を誘い込む』

時が経ち、いつしか森の名前も、虎王の森からギモギモの森にな

っていた。

その頃には仲間たちからギモギモ通信でジュークとファイブ氏を心配する旨が何度も伝えられていた。彼らの中には、特徴が似ていることや『ギモギモ族』を名乗っていることから差別を受ける者もあったが、ジュークとファイブ氏を疑う者、また責める者は一人もいなかった。

ジュークは仲間たちにファイブ氏の最期を伝えた。

「仲間たちから聞いて、事の真相を知ったよ。あの時の貴族が噂を流していたんだ。恥を掻かされた仕返しに、ってね」

「……馬鹿な。貴族は虎に戦いを挑んで、それで敗北したのでしょ？ それだけのことではないですか。勝負をしたのは虎と貴族だ。魔物だの騙すだの、他の要素は介在していない！」

「人間みんながおまえさんみたいに気持ちのいい奴だったらよかつたんだがね。面子や恥つてもんは、おいらたち『物』が思ってる以上に、人間にとっては重要なもんらしい」

おまえさんには本当に感謝してるよ。彼は小さな声でそう言った。涙声だった。

俺はなにも言えなかった。

何を言っても嘘になる気がした。

「本当に、いいのですか？」

「おうともさ。もう未練はなにも無い。ほんとと言うと、そろそろおいらも世界ってやつを見てみたいと思ってたんだ。言っただろう？」
本当の味方になってやる』ってよ」

ジュークは彼の仲間たちに連絡をとるだけでなく、俺の姉探しの旅に同行してくれることになった。これは嬉しい誤算だった。各地の情報をジュークから仕入れるために、定期的にこの森に戻るようになるものと思っていたのだ。想定より探索の効率が大幅に上がる

ものと考えてよいであろう。

「あらためて、『俺』はよぞら。しがな異世界人です。これから宜しく願います」

「おいらはジューク。しがなソフビ人形で、おまえさんの相棒だ。宜しく頼むぜ」

夕日に染まる森を背に、俺たちは固く握手を交わした。

こうして、俺の姉探しの旅、ジュークの世界を見る旅は始まったのであった。

「ところで相棒。もう日も暮れるが、野営の準備はどうするんだ？」
「野営？ ジソの街までは馬でも半日あれば着くのでしょうか？」

「おまえさん、もしかしてジソまで走って行くつもりじゃないだろうな？」

「全力で走るのはいつ以来かな。いや、荷物もあることだし、気を遣って走る必要があるか」

俺は膝の屈伸運動をして、ジュークを胸ポケットに入れた。

「念の為に聞いておきたいんだが……おまえさん、どれくらい『出せる』んだ？」

ジュークが恐る恐るという声音で聞いた。俺はバッグを肩にかけ直し、胸ポケットに向けて笑ってみせた。

「少なくとも、十歳の時点でランディ・ジョンソンの投げる球よりは速く走れましたよ。——さあ、もう行きましようジューク。日没前には街に着きたい」

「ちよつと、ちよつと待て！ おいらまだ、心の準備が、ひあああああ——」

夕焼けの土道を俺は駆ける。

ドップラー効果を奮発したジュークの叫びが直線上に大地に響き渡った。

風が最高に気持ちよかった。



ある女子中学生の日記

11/1 (晴れ)

今日は初めてのデートになるはずだった。

7歳の時にヤク中の大学生から助けてもらって以来、ずっと好きだった人とのデートだ。

死ぬほど楽しみにしてた。昨日なんかほとんど寝れなかった。

けど、デートは一方的に中止になった。

Yが見事にすっぱかした。

寒空の下、3時間も待った。ちよつと泣いた。

こういう時、携帯持っていないのは致命的だと思った。みんな持ってるのに。お父さん地獄に堕ちる。

帰ってすぐYの携帯にかけたけど出なかった。というか電源入ってないっぽかった。

何回かけても繋がらないから家の方にかけてみたら、Yのお母さんαが出た（Yにはお母さんがいっぱいいる。授業参観の時とかヤバイ）。

お母さんα曰く、Yは旅行に行ってしばらく帰って来ないらしい。なんだそれ。

学校どうするんですか、とか色々聞いたけど全部はぐらかされた。ぜったい何かある。

だいたい、あのYが約束やぶるっていうのがまずありえない。

そう思ってHさんにかけてみた。わたしとHさんはけっこう仲いいからいろいろ教えてくれると思った。

なんとこつちも繋がらなかった。

家の電話がおかしいのかも思っってお兄ちゃんの携帯でかけてみたけど、やっぱり繋がらなかった。

絶対おかしい。

もしかしてHさんもYと一緒に旅行？

でも、ただの旅行だったらあの仲良し家族はみんなと一緒に行くと思う。

何を隠してるんだろう？

なんかイラッときたから「お兄ちゃんHさんに着拒されてるんじゃない？」ってからかった。

お兄ちゃんのマジ泣きを見たのは幼稚園以来だった。

「どうしよう！どうしよう！」って、知らんがな。付き合ってもないくせに。

とにかく、明日からYの行き先を探そうと思う。

手始めにYの家を探る。

熊とか出そうな山奥でちょっと怖いけど、手がかりがあるとしたらやっぱり家だ。

本当に旅行なら、準備の形跡ぐらいあるだろうし、もしかしたら行き先のパンフレットとかあるかも。

ちようど明日は日曜だし、お父さんに送ってもらおう。

まち1 / よぞらとだつぜいとおんなのこ

■■■■■

よぞらだ。脱税した。

地球では世界中およどこであっても、交通の要所には『税関』というものがあつた。要は関所のことであるが、それはこの世界にもあつた。これを通過するには通常、通行税と、場合によっては物品税を支払わなくてはならない。盲点であつた。俺もジュークもこの世界の金を持っていなかった。

林道を抜けて街の入口に辿り着いた頃には、あたりはもう薄暗くなつていた。

「旦那、若旦那。よかったねえ、もう閉めるところだったよ」

速度をおとして大門に駆け寄る俺の姿を認めるなり、馬に乗った鎧の男は人のいい笑みを浮かべてそう言った。この世界に来て初めて目にした『まとも』な人間だった。彼の他にも、彼と同じ恰好をした男が門の左右で馬に跨り槍を握っていた。ジュークによると、大門の守衛警固であるそうだった。

男は俺の前まで来て馬から降りた。

「旅の者です」

俺は道中ジュークと打ち合わせた台詞を口にした。

「このような大きな街に来るのは初めてなのですが、なにか気を付けることはあるでしょうか」

「いやあ、特にありませんよ。問題を起こさないでくれればそれでいい。道で糞をたれたり、盗みをやったりなんて、旦那はせんでしよう?」

「もちろんです」

「なら問題はありません」

「ありがとうございます」

俺はお辞儀して門に向かった。

しかしすぐに馬で通せんぼされてしまった。

「ちよつと、ちよつと！通行料、払ってもらわないと」

「えっ？」

俺は驚愕した。

門にほど近い二人がこちらをチラチラ見ていた。

「え、じゃありませんよ。しっかりしてくださいよ旦那」

「……か、金はありません」

「馬鹿言わんでください。そんなナリして銅5枚ぼつち、持ってないわけないでしょう。髪だつてそんな——あ、いえ……」

男は最後まで言い切らず、なぜか口をつぐんだ。

「本当にありません。つまり、……そう、財布だ！財布を落としてしまつて！」

男は怪しむような目で俺を見た。

「ここまで、急いできたので。あとで必ず払います、倍払ってもいい。……駄目でしょうか？」

「ちつ……もういいぞ、門を閉めろ！」

「へーい！」

男は馬に乗って門に入って行った。大門がゆっくりと閉じてゆき、完全に閉まると門を止めるガチャンという音が聞こえた。門が閉じる間際に見えた守衛の彼の目には、間違いなく嫌悪の色があった。閉じた門の向こう側から声が聞こえた。

「貴族さまだか魔法使いさまだか知らねえが、金で何でも解決できると思ったら大間違いですぜ」

周りに人がいなくなると、コートの胸ポケットで無生物のふりをしていたジュークが口を開いた（比喩だ。彼の口は開閉しない）。

「すまねえ。税なんてもんがあるとは……」

「いえ、俺も迂闊でした。姉さんなら、金がなくてももつと上手くやっただと思います」

「しかし、こうなると明日までは街に入れねえなあ。夜が明けたらおいらの仲間に連絡して、金を持ってきてもらおうとしよう。借りた金は、まあ、虎野郎の牙を売って返せばいいだろう」

「いえ、塀を飛び越えましょう。一刻も早く姉を探したい」

「飛び越えるつたって、あれ4メートルはあるぞ？たぶん街ぜんぶを囲んで……いや、おまえさんなら余裕か」

「よく、体育館の天井に引っかけたバレーボールをこっそり取っていました。証拠写真と一緒に持って行くと、近所のおじいさんが買ってくれるんです」

「とんでもねえな」

「たしかに変わったおじいさんでした」

「おまえさんのことだよ」

ジュークは苦笑した。

「けどよ、飛び越えて中に入るのはいいとして、パスポートとかビザみたいなもんは無いのかね？そういうもんがあるなら、おいらはともかく、おまえさんは持ってなきゃうまくないと思うぜ？」

俺はジュークの言いたいことがわかった。

「俺の髪ですね」

気づいていたか。子の成長を喜ぶ親のような声でジュークがそう言った。

「さっきの連中はみんな金髪だった。茶色っぽいのが混じってる奴もいたが、少なくともおまえさんみたいな真っ黒い髪をした奴はいなかった。街の中もそうだとすりゃ、おまえさん、ぱっと見てすぐにわかる外国人だぜ」

どうしたものか。俺は腕を組んで考えた。

「まあ、待ちな。いま仲間に連絡をとってみるからよ」

そう言うとジュークはバンザイしたままダランと脱力し、黙り込んだ。そうして2分ほど黙ってから「よしわかった」と両手をバタ

バタさせた。

「エイトとサーティと吉田に聞いたところ――」

「ちよつとまってください。……吉田氏は、何番ですか？」

「うん？ 吉田はじめは076だが、それがどうかしたか？」

「……いえ。続けてください」

下の名前ははじめというらしい。東北だけで十人いるであろう名だ。ギモギモ族には、シリアルナンバーに因んだ名をつけるといった風習は特段無いようであった。

ジュークは話を続けた。

結論から言うと、ビザのようなものはあった。正確には滞在許可証である。その発行が必要であった。これは在留、労働、入学の権利を保証するものであった。そんなものが身元確認も無しに金で買えるというのだから驚き呆れた。しかし好都合ではあった。金さえあればこの街で姉を探すことは容易というわけだ。見つかるかどうかはまた別の問題だが、スタートラインに立つことはできるのである。俺は大いに喜んだ。

この街ジソにはジュークの仲間《ギモギモ族》が三人ほど滞在しているそうだ。内二人、吉田氏とサーティ氏は俺の姉探しに協力してくれるそうである。

「エイトは偉い貴族さまの家庭教師をやってるみたいだな。その人間にはたいそう世話になったそうで、情報漏えい対策でギモ通も一部閉ざしてるくらいなんだ。努力はしてみるけど、たぶん協力はできないと思う、だだよ。悪く思わないでやってくれ」

もちろん悪く思うはずがなかった。協力してくれる一人、吉田氏などは娼館を経営しているというではないか。情報にも人脈にも期待できるであろう。早速彼は虎の牙を買い取ってくれる、信頼できる店を教えてくれたそうだ。俺にはジュークが神に見えた。

それから、黒い髪はやはり珍しいそうである。十年以上この街にいたエイト氏、サーティ氏、吉田氏が一度も見ることがないというのだから相当であった。守衛の彼が俺の髪について言い淀んだのも

そういう理由であろう。だがこれはよい報せである。姉の髪は黒いのだ。目立つものは探しやすい。姉も俺を探しよいはずだ。幸先は明るいように思われた。

「それじゃあ、サクつと虎野郎の牙を売っちまって、情報収集をはじめるとするか」

「そうしましょう。それじゃあ、跳びますよ」

「えっ、それはちょっと待っ——」

宵の口、薄ぼんやりと輝く月を俺たちの影が横切った。

□ ■ ■ ■ ■

ジュークだ。まだ頭がフラフラしやがるぜ。

おいらと相棒は今、吉田に紹介された店に向かっている。相棒はフードを被って顔を——というか髪を隠してる。絵物語の騎士様みたいな顔が拝めないってんだから、女どもが可哀想ってもんだぜ。

おいらたちの（おいらの、というべきだろうが日本生まれとして謙遜しとくぜ）考えた作戦は単純だ。

？ 虎公の牙を売っぱらう。

？ 紙を買い、サーティの食堂で飯を食いながら（おいらじゃない、相棒がだ）お姉ちゃんの特徴とお姉ちゃんへのメッセージ、おいらたちの居場所を書いたチラシを作る。

？ 相棒の荷物を店に置き、夜明け前に塀を飛び越えて北の大門で滞在許可証を買う。

？ 正面から堂々と街に入り、チラシを配ってまわりながらお姉ちゃんの手掛かりを探す。

惚れ惚れするほど完璧な作戦だろう？ なんだって現状じゃこれ以上やりようがないからな。この程度が精一杯だ。まあ、街に入ってたかったことだが、相棒の髪は目立つから、もしもお姉ちゃんがこ

の街にいるってんなら、案外あっちの方が先に相棒を見つけるかもわからん。相棒いわく、お姉ちゃんは随分と頭が回るらしい。なんでも、動物の言葉がわかるとか。そんなとんでもねえお姉ちゃんなら、もしかしたらおいらたちが思い付きもしないような方法で、実はもう相棒の居場所を掴んでる、なんてこともあるかもしれん。

ふと思う。お姉ちゃんが見つかるまで、いやさ見つかつて、相棒はどうやって生活していくつもりなんだろうか？

人間が生きるには金がいる。眠るには屋根がいるし、歩けば腹が減る。毎日毎日金がかかる。今はまだいい。相棒が頭突き一発で倒しちまったクソツタレの虎野郎は、あれで虎の王様とまで言われる魔物だ。そいつの牙ともなれば大金とっていい額になるだろう。だけどそれはいつまでもつ？一年か？五年か？それとも数ヶ月か？

——どこにいるとも知らないお姉ちゃんを探そうっていうんだ。普通に暮らすより金のかかる生き方だろう。そのうえ相棒は、人間とは思えないほど純粹だ。それは素晴らしいことだが、人間として生きる分には短所ではない。この世界に來たばかりでおいら以上に世間知らずなこともあるし、ちょっと口の巧い人間が現れたらコロツと騙されちまうだろう。こんなザマで生きていけるのか？

「ジューク、そろそろじゃありませんか？」

思考は遮られる。ギモ通で聞いた店はもうすぐ先だった。

「すまねえ、すまねえ。そこを右だ、ああ、あの店だな」

店は、一般客の入れる範囲はボロいが、地下は厳重警備の宝の山。店主は丸禿で喧嘩っ早いマツチヨ爺で、吉田の店から二人ほど女を身請けしてる。ギモ通で吉田と記憶を共有した際に触れた意識にはそうあった。

店の前に着く。ここですね、と相棒が言う。おいらはおう、と頷く。

「ジュークがいてくれてよかった。ジュークには本当に感謝しています」

自然な調子で相棒が言う。真っ直ぐ前を向く目に嘘は一つもなか

った。

「感謝してるのは……おいらも一緒さ」

——本当に単純で、不器用で、正直な生き物。人間であることが疑わしいくらいのこと……。

——ああ、そっか。そんなところがファイブ……おまえさんに似てるんだ。

おいらは覚悟を決めた。もう相棒の心配はしていなかった。

「入りますよ、ジューク」

「おうさ。信用できる店だ、安心して売っぱらっちゃおう」
相棒がドアを開ける。おいらたちは店に入ってしまった。

——大丈夫。おいらがいるから、大丈夫。

——世間知らずな相棒が騙されたりしないよう、おいらがすぐ側で支えてやればいい。

——今度こそ本当に、大事な相棒を支えて、守ってやるんだ。

「おう、らっしゃい。どんな御用で？」

店の親父のハゲ頭が、おいらと相棒の未来を照らしているように思えた。



「金貨16枚って、価値としてはどれくらいなんでしょう。ジューク、わかりますか？」

「ちよい待ち、聞いてみる。——おおっ、すごいぜ相棒！4年は暮らせるそうだし！」

「4年っ！？」

「そうだし、4年だ！質素に暮らせれば5年はいけるらしい！」

「4年だ！」

「4年だ！」

「4年だあああつ！」

4年だ。よぞらだ。金が入った。

無一文から小金持ちに出世した俺たちは、足取りも軽く小道具屋を後にした。

石畳の街をわざと足音を立てて歩く。街は月のある夜、山と大差ない暗さで（俺の家は山にある）、ときおり鎧を着た衛卒がランプを持って巡回していた。俺は姉から反響定位（エコーロケーション）の反響で周囲の状況を知る技法）を習っているし、そもそもこの程度なら昼間と同様に見えるが、平均的な能力しか持たない人間にはつらい暗さであろう。まだ十時前であるのに家々の明かりはみな落とされ、灯がともされているのは宿と飲み屋、それからいかがいしげな匂いと雰囲気撒く大人向けの店ぐらいのものであった。

予定では、このあとは『紙』を売っている店に向かう手筈であったが、このぶんなら『印刷屋』に行けるぞとジュークが言ったので、今は小躍りしながら向かっているところであった。印刷屋は客の頼んだ文章を十枚でも百枚でも活版刷りしてくれる店であるという。話し合いの結果、金貨一枚で刷れるだけ刷ってもらう、というのが俺とジュークの最大公約数となった。切り良く五枚ほど使ってしまうべきだと主張した俺が大幅に譲歩した形になる。結論から言う一枚で十分であった。

「おい、大口のお客様だ！機械二台とも回せ！」

戸を叩くつもりで向かったが、嬉しいことに店は開いていた。学校関係者が夜訪れることが多いためだそうである。とんとん拍子に事が運び、少々不安になる。

金貨一枚で印刷できるチラシは4800枚であった。二千枚をあ

すの朝、残りを夕方に受け取ることと約束し、前金で半分だけ支払った。お釣りは銀貨15枚であった。銀貨30枚で金貨一枚に上がるようだ。

店主と一緒に俺たちの対応をした男は銀色の首輪をしていた。首輪は肉にぎつちりと食い込んでいて、如何にもサイズがあつていない風だった。そのことを指摘したら、男は笑って「わたくしは奴隷でございますから」と言った。背筋が寒くなった。よく見れば首輪には鍵穴があいていた。

よい意味で驚いたのが文字であった。日本語だったのである。

この世界で日本語が使われていることは森で既にわかっていたことだ。ジュークは日本語しか話せない。彼はかつてこの国の貴族と日本語で話したのだから、少なくともこの国の人間が日本語を話すことは知れていた。大門の守衛警固も日本語を話していた。だが文字まで日本語とは思わなかった。

ただ、完全に日本と同じ、というわけではやはりなかった。

「どうして漢字が無いんでしょうか」

そう、使われているのは平仮名と片仮名、それにアラビア数字だけなのである。漢字が無いのだ。

「ギモギモ族みんなが不思議に思ってることさ。その謎は未だに解けてない。基本的に片仮名は固有名詞につかうらしいな。おいらは字を書かねえが、隣の国で学校の先生やってる野口まさるが言ってたよ」

またありきたりな名が出てくる。何を隠そう彼こそがシリアルナンバー001なのだそうな。

「野口氏は、それじゃあ片仮名でノグチ氏なんですか？」

「吉田も片仮名でヨシダだ。おいらたちはみんな森で名前を決めたんだが、仲間はみんな外に出て驚いたって言ってたよ」

「……ん？隣の国？隣の国でも日本語が使われているんですか？」

「そつらしい。おいらの知る限り近隣三ヶ国はみんな日本語で喋る。確証はないが、この世界ぜんぶがそうだと考えていいだろうな」

不思議な話であつた。これを不思議で済ませるあたりが俺が馬鹿だと言われる所以であらう。しかし気にすることは無い、とジュークは言った。「さっぱりしていいじゃねえか。おいらは相棒のそういうところが好きだぜ」と。なんでもはつきり言ってくれるジュークがありがたかつた。人間との裏表を気にする会話よりよほど楽しかった。俺が小説や漫画、映画やテレビドラマを楽しめない理由はこれなのだろうな、と思った。「俺はジュークを騙しませんから、ジュークも俺を騙さないでくださいな」と俺は言った。当たり前だ、とジュークは答えた。

「何があつたつておいらはおまえさんを裏切らねえよ。ちゃんと相棒を支えて、悪い嘘から守ってやる」

「俺もぜつたい、ジュークを危険から守ります」

暗闇の中、俺たちは小さく笑い合つた。

「助けて、助けてください！」

もうすぐサーティ氏の店に着く、というところで道の向こうから女が駆けてきた。少し離れて男が三人走ってくる。十分ぐらい前から、遠くで誰かが追いかけてるのをはわかつていたが、遊びではなかつたようだ。

女は俺の前まで来て膝をつくと、息も絶え絶えいま死にます、という様子で俺の足に縋りついた。

「追われているんです！魔法使い様、どうかお助け下さい！」

ただごとではない風情であつた。俺は女の肩を持ってしゃんと立たせた。姉からきつく言われているのだ。女は男が思っているよりずっと卑怯だから、よぞらなんかすぐに騙されちゃうわよと。筋肉のつき方を見れば非力とは知れるが、それでも女に足を抱かれるのは怖かつた。身長は160センチほど、長い金髪、胸の大きい二十歳ぐらいの女であつた。

俺は女の目を見て言った。

「まず、自分は魔法使いではありません。それが何の隠語かも知りません。次にあなたが追われている理由を知りません。追ってくる男たちとあなたのどちらに非があるのか知りません。最後に、自分は故なき暴力を嫌います。しかし力以外のものを持っていません。」

——以上の理由から、あなたと追跡者双方から話を聞き、あなたに非がないとジュークが判断した場合のみ、自分が暴力で解決します」

「おいらが判断すんのかっ!？」

「俺じゃあ嘘は見破れません」

女はジュークの声の所在を探してキョロキョロしたが、やがて不安そうな顔で、「しつこい嫌がらせを受けているんです」と言った。

「あいつらの主人が、あたしを気に入ったとかで……」

男たちが俺の五歩前方まで来て止まった。女が俺の背に隠れる。

「貴族の犬だ」とジュークが言った。男たちの着ている鎧のニワトリマークが恰好いいな、と俺は思った。鎧そのものはちょっと殴ったら穴があきそうであるが。

「兄ちゃん、そいつをこっちに渡しな」男の一人が言った。「怪我はしたくないだろう?」

「彼女を捕まえる理由を教えてください」と俺は言った。「それと、怪我の心配は無用です」

男が剣を抜く。後ろの二人もそれに倣った。やっぱりニワトリマークが恰好いいな、と思った。こちらもすぐに砕けそうだが。

「兄ちゃん、遊びじゃねえんだ。痛い目に合いたくなかったらそいつを渡してくれ」

駄目だな、と思った。この男には話が通じない。俺は相手を変えることにした。

「後ろの二人に聞きます。彼女を捕まえる理由は何ですか?」

二人は答えなかった。一人は舌打ちし、一人は唾を吐いた。俺はため息をついた。

「ジューク、話が通じません」

「どう見たって嬢ちゃんに非はねえよ」

俺と同じ意見だった。俺は女に少し離れるように言った。

「あなたを助けることにします」

「おい、いいからさっさと女を渡せ！」

「一応、警告しておきます。——それ以上進んだら腕を潰す」

「あん？なにいつ——」

男が一步踏み出したので、左右から軽めに殴って両の二の腕を折った。

ついでに剣も奪って放り捨てた。

カラン、と涼しい音が鳴った。一秒遅れて絶叫が響き渡った。

「ああああっ！腕！ひいつ、俺の腕！ああああああっ！」

男が蹲って叫ぶ。痛そうだな、と思った。俺は残る二人の後ろに進んだ。そうして剣を奪った。

「警告します——」

「ひっ」

「こいつ、いま、消えっ」

「——これ以上やるなら死者が出る」

俺は二人の男の首に剣を突きつけた。

「……そいつを連れて消えろ」

女は名前をキスイと言った。なんと17歳であった。驚いた。姉と同じ年とは色々と思えなかった。俺が14歳だと言ったら彼女も驚いていた。

男たちが去った後、俺とジュークはキスイさんを家まで送った。

道すがら、彼女は俺たちに事情を話した。

「十日前、道で突然声をかけられたんです。その人は貴族さまで、あたしを気に入ったから妻に迎えたいと仰いました。あたし、お断

りしたんです。それなのに、毎日毎日家にやって来て……」

家に着くと、キスイさんは俺のことを両親に紹介した。俺たちは彼女の両親に何度も頭を下げられた。たいへん感謝され、泊まっていってくれとまで言われたが、俺は早くサーティ氏の店に行つて飯を食いたかったので、頭を下げ返して辞退した。恐縮されてしまった。男たちから奪つた剣は、道に捨てるには物騒であるし、持つて歩くには邪魔であつたからキスイさんの家で処分してもらうことになった。重要でないが、出されたクツキーの味が、母の一人が作る無添加のクツキーに似ていた。美味かつたので七枚食べた。

「ヨゾラさん、また来てくださいね！あたし、本当に待ってますからね！ぜつたい来てくださいね！」

「暇ができたなら、またクツキーをいただきに上がります」

「じゃあな嬢ちゃん」

こうして俺たちは別れた。キスイさんや彼女の両親がジュークを嫌つたり恐れたりしなかつたことが嬉しかった。ご尊父がバビという街で、同じくギモギモ族のナイニー氏と会つたことがあるそうであつた。

今はそのことをサーティに話しながら、営業時間外の夜食をご馳走になっているところであつた。

「しかしキミ、ギモ通で見て知つてはいたが、恐ろしく強いんだな」「ギモギモ通信は動画を視聴することもできるんですか？」

「録画した映像を見るというよりは、記憶を丸ごと共有する感覚だね。そのとき同胞が見たもの、聞いたこと、感じた想いに心で直接触れるんだ」

「いいですね。隠し事をしなくて済むのがいい。嘘は嫌いです」

「普通はそこを嫌がるんだがね。本当にキミは、人間にしておくのが惜しいくらい真っ直ぐだ」

「いいだろう、おいらの相棒だぜ」

サーティはジュークとまったく同じスケールとデザインの『大怪獣ギモギモ』だが、白い服を着て、コックさんの『あの帽子』をかぶっていた。

俺とサーティはすぐに仲良くなった。彼は俺が虎を倒したことを、ファイブの仇をとってくれた、と大いに喜んだ。殺してはいないと否定したが、倒したことに意味があるのだと彼は言った。

サーティは『サーティのしよくどう』という名の大きな食堂のオーナーだ。彼と店長のゴルさんがメニューを考え、ゴルさん以下四名のコックが調理し、見習いの二名が配膳するというスタイルであるらしい。サーティは地球の料理や、ギモギモ通信で知った世界各国の料理を多数レシピにしており、そうした珍しい料理を目当てに毎日大勢の客が店を訪れるそうだった。昼には学校を抜けだして食べに来る学生が何人もいるというのだから侮ってはならぬ人気店である。

食事を終えた俺は、二階のベッドを借りて仮眠をとった。一日や二日眠らなかつたくらいで疲れはしないと言ったのだが、心はいかない、と二人に強制されたためである。そうして3時ちょうどに起きたとき、俺の気分は妙にすっきりとしていた。思えば二人はわけもわからず地球からこの世界に飛ばされた先輩なのであった。俺は店のポンプから顔を洗わせてもらい、さっぱりとした気持ちでまた明日会おう、とサーティと約束し店を出た。しかして俺たちは街壁を今度は北に超えた。きのうの衛兵に会ってはうまくないから南門はよそう、とジュークが言ったためであった。

北門のまわりには既に多くの人が開門を待つて並んでいた。俺たちは見つからぬように林の中へ跳んだ。そうして何食わぬ顔をして（何食わぬ顔をするんだぞ、とジュークが言った）列の最後尾に並んだ。

四時半過ぎに門横の小さな扉が開き、そこからきのうの守衛警固と同じ恰好をした別の衛兵が現れた。彼が「いいぞ」と叫び大門は開かれた。

俺たちは今度こそ堂々とジソの街に入っただのであった。

「これが滞在許可証か」

「そいつがあればおいらたちもこの街で生活することができると
わけだ。失くすんじゃないぜ、相棒」

滞在許可証はクリーム色のあまり綺麗でない紙だった。保証され
る権利、それに義務と禁止事項が平仮名と片仮名で記されていて、
てっぺんには俺の名前とジュークの名前があった。ただ、ジューク
の名前の横に書かれた『つかいま』の文字が気になった。

どうということかと聞いたら、「人間以外の心もつ者は使い魔や所
有物という形でしか街に入れない」という答えが返ってきた。ただ、
入った後ならば好きに生きて構わないとのことであった。使い魔や
所有物が悪事を働けば所有者が罪に問われるそうである。

「しかし、市民権を買うことはできますよ。市民権があれば家を建
てることもできますし、店を持つこともできます。まあ、人間の倍
の金が必要になりますが」

俺は迷わずジュークの市民権を買おうとし、ジューク本人に止め
られた。

「熱くなるなよ相棒。おいらたちの目的は何だ？おねえちゃんを探
すことだろうが。この街にお姉ちゃんがいなかったら、市民権なん
ぞただの紙切れだぜ？」

赤毛の若い守衛（俺よりは年上であろうが）が、俺を諭すジュー
クを馬鹿にするように笑っていたが、石を拾って握り潰したら目を
逸らしてガタガタ震えだした。

街に入るとすぐに印刷屋△ロリーのいんさうやに向かった。店主は留守だった。きのう
の首輪の店員（奴隷？）が現れたので、彼に銀貨五枚を払った。や
はり首が痛そうだった。残り十枚は夜に払うこととし、俺はできた
分のチラシを受け取った。

「それではこちら、ひとまず二千枚となります」

チラシの紙はコピー用紙より厚く、色も紙本来の色があり真っ白

ではなかった。

「ありがとうございます。また夜に來ます」

二百枚ずつ縛られたチラシを俺が全部まとめて持ち上げるのを見て、首輪の店員は目を丸くしていた。

「じゃあ、行きましようかジューク」

「おう、配って配って配りまろうぜ」

店を後にし、街を隈無く探しまわるべく歩き出す。

こうして俺たちは、この街での姉探し第一歩目を踏み出したのであった。

まち2 / よぞらとどれいときぞくさま



ジュークだ。相棒のパワフルさ加減には舌を巻くぜ。

おいらたちは今、「黒髪の女の子を見たらよろしく」を繰り返しながら街のあちこちを歩いている。

相棒は屋根の上をぴょんぴょん飛び回りながら人通りの多い道を見つけてはチラシを配ってる。朝早く受け取ったチラシは、もう残り三百枚もない。吉田のコネで学校に八百枚置けたのはデカかった。全校生徒に配ってもらえるらしいから、大いに時間が短縮できたってもんだ。これで学校関係者にお姉ちゃんを見たって奴がいたら解決したも同然なんだが、まあ、そう上手くは行かないだろうな。何事も根気よく、だ。

しかし学校っていうのは、よくよく考えてみるととんでもない所だよな。同年代の子どもをひとつの場所に何年も閉じ込め、全員に同じことを教え込む。そんなことをされて狂わないっていうんだから、人間ってやつはやっぱりどうかしてるぜ。

「あれ？」

そろそろチラシの残りが五十枚を切るというところで、相棒がピタリと動きを止めた。夜空みたいに黒い頭をした相棒を道行く人間たちがチラチラと見ては通りすぎていく。

「どうした、相棒？」

「いま、キスイさんのお父さんが向こうを走っていたんです」

なんだ、そんなことかよ。

「そんなもん、便所かなにかだろう？人間は食ったり出したりするからな」

「それにしては、ずいぶん慌てていたように見えましたけど」

相棒は腑に落ちないという顔で遠くを見ていた。

「漏らしそうだったのさ。そうに違いない」

「そうでしょうか」

「何時間もチラシ配りなんかやって、頭が疲れちゃったのさ。そろそろ昼時だ。サーティの店に行こう。飯を食ってちよいと休憩すれば、何でもなかったと思うようになる。今はまだ無いが、なにか連絡が上がって来るかも知れないぜ？」

尚も首を傾げる相棒を促して、おいらたちはサーティの食堂に向かった。

食堂は大繁盛だった。おいらたちは正面から入って店の目立つ場所にチラシを全部置き、一旦店を出て配膳口からもう一度入った。

「ようサーティ、笑えるほどの込みようだな。大人気じゃないか。刃物と炎で人を笑顔にしちまうってんだから、コックってやつはすごいよな」

「すごいだろうジューク。僕が一代で創り上げたんだぜ。ゴルも、リケルも、ツーツも、モモ姉妹も、みんな優秀な料理人だ。見習いのノブとヴェンケラも、今に立派なコックになる。僕はこの店でお客様に喜びを与え続けるんだ。すごいだろうジューク、僕の店はすごいだろう」

サーティは嬉しそうにすごいすごいと繰り返した。

「ああ、すごいよサーティ。おまえの店は街一番の食堂だ」

喜びの心がギモ通で伝わってくる。店を褒められるのが嬉しくてたまらないのだ。森を出て生きがいを見つけた同胞をおいらは誇らしく思った。

「それはそうとオーナー・サーティ、そのすごい飯をおいらの相棒にも食わせてやってくれよ。できれば奢ってくれるとありがたい」

「9時間ぶりですサーティ。こんにちは」

「やあ、よぞら！我が友よ！いいとも、いいとも、何でも頼んでどんどん食べてくれ！ジソの街で梅おにぎりがあるのはこの店だけさ

「さあ、二階へ行こう！」

「そういえば、奴隷について聞きたいんですが」

飯を食い終えた相棒は、思い出したようにそんなことを言い出した。

「奴隷？なんで奴隷のことなんか。よぞらは奴隷を買うのかい？」

サーティが実に嫌そうな口調で聞く。おいらはそんなわけあるか！とギモ通で叫んでやった。相棒はいいえ、と首を横にふった（おいらたちにはできない芸当だ）。

「買うも買わないも、きのうまではそんなものがあることさえ知りませんでした。この世界には奴隷制があるんですか？」

相棒は印刷屋でのことを話した。おいらはギモ通に潜り、サーティの記憶に触れて一足先に奴隷について知った。それは穴だらけの制度だった。

・この国《スズカゼ王国》には奴隷制がある。

・奴隷におとされるのは逮捕された犯罪者である。

・被害者は、犯人に賠償能力がない場合に限り、これを奴隷にできる。

・奴隷には首輪を付ける。これが奴隷の証となる。

・奴隷につける首輪は王家と一部の貴族だけが作る。

・所有者となる者はそこから奴隷の首輪を買う。

・所有者は奴隷を殺してはならない。

・奴隷が罪を犯した場合は所有者が賠償する。

・奴隷は一定額の金を払うことで所有者から人権を買い戻すことができる。

サーティは忌々しげに、しかし丁寧に、相棒に奴隷制度を説明した。スズカゼ王国の名前が出た時、相棒は「うん？」と首をかしげた。まあ、スズカゼって、いかにも日本っぽい響きだもんな。

やがて話が終わると、相棒は納得のいった顔で頷いた。

「滞在許可証にあった『所有物』というのは、奴隷のことだったんですね」

「ジュークの肩書きは『使い魔』だったね？使い魔は金貨二枚で三級市民の市民権を買うことができる。市民権を持っていれば、僕らのような心持つ『物』であつても、この街では人間として認められる。——ちなみに僕はゴルの使い魔というかたちで街に入り、最初の年に三級の市民権を買った。今では二級市民だ」

「二級市民の市民権はいくらなんですか？」

「人間が買つぶんには金貨十枚、使い魔なら二十枚」

「ああ、だから先に三級を買つて『人間になつた』んですね」

「そういうことだね」

サーティは愉快そうにフフフと笑った。

「奴隷が人権を買い戻す際の『一定の金額』というのは、いくらなんですか？」

「金貨二十枚だ」

「……それは、銀貨一枚の罪でも？」

そんなばかな、という顔で相棒が聞く。サーティが心の中でニヤリと笑う様子がギモ通で伝わってきた。

「銀貨一枚ぶんの食い逃げをやつても、金貨百枚の壺を割つても、人権の買い戻しは等しく金貨二十枚だ」

おかしな話だろう？とサーティは言った。そして奴はちなみに、と続けた。

「奴隷につける首輪は金貨一枚する。人間の4人家族が三ヶ月は暮らせる額だ」

「待つてください。それだと矛盾が出る。例えば犯人に賠償能力がなくて、被害者が金貨一枚を持っていない、というケースはどうなります？そういうことはいままで一度も無かつたんですか？生活費三ヶ月分の貯金なんて、持っていない人は大勢いるんじゃないか？」

「あつたさ。そういうケースは過去に何度もあつた」

「そういう場合は、どうなるんですか？」

相棒が緊張した様子で聞く。サーティは子どもに社会の矛盾を教える親の声で答えた。

「泣き寝入りだよ」

店を出たおいらたちは嫌な気分で印刷屋へ向かった。

「まあ、気にしたってしょうがねえよ、相棒。おいらたちにどうこうできることじゃない」

「……そうですね。今は姉さんを探さないと」

正しくないことを簡単に認めることのできる奴じゃないが、それでも相棒はどうかこうにか気持ちを切り替えたようだった。

印刷屋に着くと、ちょうど中から二人の客が出てくるところだった。一人は人間の中ではちびっこい部類に入る真っ赤な髪と目をした女の子で、もう一人はキスイの嬢ちゃんよりは大人の、背の高い茶髪女だ。ふたりとも綺麗な格好をしているが、デカイ方の服はあんまりゴテゴテしていなかった。態度を見ても、デカイ方がちっこい方に仕えている様子だった。

たぶんジソの学校に通う貴族さまとその御付きだろうな。そう思っ
ておいらが見ていると、ちっこい方が相棒の頭を見て目を丸くした。

「黒い髪……こやつが……」

ピリッ、とおいらの頭に刺激が走った。ギモギモ通信をつなぐ時のあの刺激だ。だがそれはすぐに消えてしまった。たぶんサーティがおいらに、「よぞらに謝っておいてほしい」とかそんなふうなことを言おうとしてやめたんだろう。

相棒はチビ女をチラリと見て「なんですか？」と言った。チビ女はニヤリと笑った。

「いいえ、人違いでございました。——クジラ、行きましょう」

「おじよ——コホン。はい、イルカお嬢様」

おいらが言えたことじゃないが、クジラとイルカって、とんでもないネーミングセンスだな。

二人はすぐに去っていった。だがどうしたことが、相棒は二人の背を見つめていた。

「どうした相棒？どっちか気に入って、発情したか？」

「いえ。……あの大きい方、ちょっとだけ強いな、と思って」

「戦ってもないのにわかるもんなのか？」

「足運びと体の線を見ればおおよそは。——でも、そういうんじゃない、さっきあの人、袖の中でナイフが何かを動かして俺の反応を見ていたんです。もちろん気付かないふりをしましたけど。たぶん、自分より強いかどうか確認したんだと思います。……こっこの世界にもいるんだ、ああいうタイプ」

「もしかして、そりゃああれか？相棒より強いかもしれねえってことか？」

「ジューク」

相棒は楽しそうに笑った。そいつはまるで他意の無い、ただおかしなことを聞いたから、というだけの純粋な笑顔だった。

「俺より強い人間なんて、この世にいませんよ」

印刷屋からチラシの残り2800枚を受け取り、そいつを配りながら街を歩いていると、ふと相棒が立ち止まった。まだ二百枚も配っていない頃だった。

「聞こえる……」相棒が言った。「泣いてる」

肩に担いだいかにも重そうな荷物と黒い頭を、周りの人間がチラ見して行く。

「うん？なんだ相棒、今度は何がいた？」

「……泣いてる？いや、泣かされて……」

「うん？」

「……向こうで。お父さんもいる。……大勢」

相棒の返答は要領を得なかった。相棒は東の方を睨みつけていた。そっちには家しかなかった。

「きのうの奴だ……あいつら……」

「なあおい相棒よ、おいらにもわかるように説明を——ひいいいいい」

相棒はチラシの束を捨てて突然走りだすと、落ちないようにおいら（IN胸ポケット）を手で押さえ、睨んでいた家の屋根を飛び越えた。

「キスイさんが泣いてる！お父さんと、きのうの奴らと、その他にも大勢います！あいつら、懲りてなかったんだ！」

相棒はいくつもの屋根を飛び越え、あつというまに『その現場』が見える位置に辿り着いた。

そこは公園だった。池のある丸い広場だ。

そこには大勢の人間がいた。無関係の野次馬も大勢いたし、剣を持った『関係者』も大勢いた。

その中心に、醜く太った若い貴族の男と、キスイの嬢ちゃんがいる。

彼女の首には『奴隷の首輪』がはめられていた。

貴族が笑っていた。

関係者の騎士たちも笑っていた。

嬢ちゃんの親父さんが羽交い絞めにされて叫んでいた。

キスイの嬢ちゃんが地べたに座って泣いていた。

相棒が、——ブチ切れた。



ツキノネ……いや、クジラだ。今、対象とすれ違った。

黒髪の男は報告通り、印刷屋に現れた。背の高い、締まった体をした男だった。顔もまあ悪くない。

「して、どうじゃった。あやつが言うほどの腕前か？」

お嬢が期待の眼差しで聞いてくる。オレは首を横に振った。

「弱くはねえな。鍛えてもいる。戦えば一撃貰うこともあるかも知れねえ。だが、それだけだ。そもそも、魔をまるで感じなかった。

《虎の王》を頭突き一発で倒すとなると、強化魔術のスペシャリストで、尚且つオレの十倍の魔力量を持ってもまだ難しいだろうさ」

情報では出鱈目に強いとのことだったが、袖に隠したナイフにも気付かないような奴が、オレでさえ逃げ出すしかなかった虎の王を倒せるとは思えなかった。

「つまり？」

「デマカセだった、ってことだろうな。だいたいなあ、お嬢。アレを一人の人間が倒した、ってところからしてオレは疑わしく思ってたんだ。虎の王なんて言われちゃあいるが、あいつは虎の魔獣が異常成長したものだ。ただのデカイ虎じゃない。魔を喰った動物は皮膚も体毛も、粘膜までもが硬くなる。剣や槍なんか弾くほどにな。走る速さだって尋常じゃない。来る！と思ったらもう目の前にいるんだ。傭兵時代に一頭狩ったが……オレと同じレベルの一流どころが五人で協力して、囲い込んでからどれくらい費やしたと思う？」

「二時間？三時間……いや、五時間か？」

「一日だよ」

「い、一日！？……馬鹿を言えっ」

お嬢は信じられないというように目を剥いた。

「事実だ。傷が入らねえんだ、生半可な攻撃じゃ。目や口の中を狙ったって弾かれる。素早い動きを四人で封じたところに、火と風を

まとわせた全力の突きをオレがぶちかます。その繰り返しで一日だ。そんな化け物を、しかも魔を喰いまくって普通の倍以上まで膨らんだやつを倒すとなれば、王城にある『鉄を切り裂く魔剣』が必要になるぜ」

「し、しかし……そうだ！ならば牙は？あれはどうなる？あのハゲ店主が間違ったものを買うとは思えん」

「牙は本物、入手の経緯は嘘、ってとこだらうな。おおかた、凄腕の剣士を雇って、大人数で罠にかけたうえで牙だけ切ったんだらう。それだつて十分すごい。そいつを持ち逃げしてこの街で売った、というのが真相だらうな」

「……つまらん」

お嬢はめいいっぱい顔をしかめ、忌々しげにため息をついた。高貴な御人がそんなことしていいのか？誰の影響だ。

——オレじゃねえよな？

「もう帰る。無駄な時間を過ごした。まったく、妾には時間が無いというに」

こうしてお嬢とオレは屋敷に戻ることにしたのだった。

池に銭を投げたい。

帰りの道、お嬢様がそんなことを言い出した。こんな気まぐれは滅多にないことだ。オレは監視に合図をし、東の公園へ向かう旨を伝えた。すると『危険・許可できない』という返事の暗号がかえってきた。——危険？オレが近くにいて危険なんざあるかよ。オレは再度暗号を送った。

『理由問う』

『アカブ・馬鹿息子・首輪・使用・不正』

『不正・理由問う』

『女』

『理解した』
『感謝』

オレは溜息をつきたい気持ちをぐつとこらえた。アカブ伯爵家の次男、あの豚がまた馬鹿をやらかしたらしい。今度は女がらみだそうだ。あの白豚はオレにも声をかけてきやがったことがある。殺気をおさえるのに苦労したぜ。おそらく、気に入った娘を手取り早く手に入れるために、適当な罪をでっち上げて奴隷にするつもりなのだろう。その蛮が今まさに東の公園で行われているというわけだ。首輪の不正使用は確かに重罪だが、バレにくい。こんなのはよくあることだ。まったくもってままならない。

つつい、と服を引っ張るものがあつた。

オレは嫌な予感がした。横を見れば、お嬢がニヤリといたずらつ子の笑みを浮かべていた。

「ふふふ。酷い話もあつたものじゃ。罪も無き娘が……のう、ツキノネよ？」

——ああ、また。

——暗号が解読されている。

「何のことかは存じませんが……お嬢様、今はクジラとお呼びください」

「池のある公園へ向かう！なんとしても公園へ向かうぞ、ついて参れ！」

叫び、お嬢が走りだす。なんだなんだ、と注目が集まる。

「……クソツタレ」

オレはガツクリと肩を落とした。

誤魔化しは効かない。

もう、ついて行くほかなかった。

お嬢にきっかり十歩遅れて現場に着くと、予想とは異なる展開が

待っていた。

野次馬が大勢いるのはいい。近付きやすくもいいことだ。

騎士たちに囲まれた可愛らしい娘の首に奴隷の証がはめられているのもまだいい。いや、よくはないが、手遅れというほどではない。アカブ伯爵の持つ鍵で外すこともできる。伯爵の領地までは三日もあれば着く。最悪、六日だけ我慢すれば、少女は自由の身になる。だから、これはまあ、いいとする。

大きく予想を超えていたのは、娘を守るようにして、あの黒髪の男が立っていることだ。

「ツキノネ、ギリギリまで手を出すでないぞ」

お嬢の瞳がキラキラと輝く。期待しているのだ。

「言つたろ、お嬢。あいつは、弱くはないが強くもない。あんな人数が相手じゃ殺されるぞ？」

「問題があるか？」

真っ赤な瞳が輝く。

ああ、オレは……。

わたしは――

「あやつは黒髪の男を『異世界人』だと申したではないか」

――この赤が、欲しい。

「この街の、この国の、この世界の人間でないものが死んで、――
なにか問題があるのか？」

オレは黙して頭を垂れた。

「それでよい。……なあに。いよいよとなつたら妾が監視どもを動かせばよい。暗号はわかっておるのだし、のう？」

オレは溜息を飲み込んで黒髪の男に目をやった。

奴と少女を取り囲む騎士は3人。全員がアカブ伯爵家の『獅子の頭』が刻まれた鎧をまとい、同じ『ブランド』の剣を持っている。オレにはニワトリにしか見えないが、武芸を『趣味』として嗜む貴族たちが好んで持ちたがるブランドだそうだ。

黒髪の男——名前はたしか、ヨゾラだったか——ヨゾラはまったくの無表情でアカブ次男（名前は忘れた）に話しかけていた。無理やりに怒りを抑えているのか。或いは、英雄気取りの馬鹿か。動かない表情と額の大きな傷痕が奇妙な、不気味な雰囲気を出していた。

「——それじゃあ、キスイさんの首輪を、外す気は、無いのですね？」

「くだいな。彼女はわたしの家来の両腕を折ったんだよ？それなのに治療費を払えないという。だったら奴隷になつてもらうしかないだろう。ぼくはなにかおかしなことを言っているかい？」

豚が大仰に両手を広げて叫ぶ。その様は野次馬に問いかけているようにさえあった。正しいのは自分だ、おまえたちもそう思うだろう？まさに甘やかされて育った馬鹿貴族の鏡だった。オレは吐き気がした。こういう連中がいるせいでこの国は旧態依然として生まれ変われずにいる。隣でお嬢が顔をしかめたのがわかった。

ヨゾラは微塵も揺るがなかった。

「それをやったのは自分だと言いました。治療費を払うとも言いました。それなのにあなたは彼女を奴隷にするという。何の罪もない彼女をだ。おかしなことを言っているじゃありませんか」

野次馬から失笑が漏れる。何を隠そう笑ったのはお嬢だった。

「おい、次は無いぞ？」

豚がお嬢を睨みつける。

オレは一步前に出た。

「よい」

お嬢が背を叩いてわたしを——オレを制した。

「次は無いそうだ。こっちは次は問答無用でいくぜ？」

「好きにせい」

アカブ次男は、今度は少女に目を向けた。そして絞められるのを嫌がる豚のような笑みを浮かべた。

「キスイ、キミの家には我が家で作られた剣が三本あったね？」

少女がビクリと震えた。

「あれをどこで買ったんだい？キミの家に、アカブブランドの剣を、それも三本も買うような金があるとは、僕にはどうしても思えないんだがね？」

「あ……あれは、その、拾って……」

「あれは自分がキスイさんの家に——」

「おまえには聞いていない！誰が喋っていいと言った！その薄汚い口を閉じろ、ブツ殺すぞ！」

豚が唾を飛ばして叫ぶ。その唾が少女にかかって——

「——えっ？」

今、あの男、娘の顔に唾がかかる直前で、はじいた？
凄まじい速さで……。

「どうしたのじゃ？」

「い、いや……なんでもない。見間違いだろう」

目の錯覚か？偶然手があたった？それとも——

「おいキスイ！」

オレの思考を遮るように豚が叫ぶ。

「おまえ、剣を拾ったって言ったな？確かに言ったよな？拾ったものを家に持ち帰るなんてことが許されると思うか？これは立派な泥棒だぞ！そして被害者は僕だ！おまえは僕の家を盗んだんだ！金貨三十枚ぶんの価値がある剣だぞ！払えるか？払えないだろう！だったら奴隷になるしかない！そうだろう？——そら、論破してやったぞデカブツ！なんとか言ってみろ！」

まるでガキだった。これで十九だというのだから笑えない。こんな奴が権力者だというのだから殺意が沸く。オレはヨゾラがどう言い返すか期待した。あの剣は、高いと言ってもゴロツキ上がりの騎士にくれてやったものだ。一本金貨十枚などするはずがない。それくらいはヨゾラにもわかつているはずだ。

しかし予想に反して、ヨゾラは、今度は言い返さなかった。

豚は高笑いして彼の横を素通りし、地面に座り込む少女に手を伸ばした。

ヨゾラの、目が変わった。

オレは全身から汗が噴き出すのを感じた。
やばい。

あれは、やばい。動く前から体が理解した。

——あいつ、隠してやがった……！

「ここまでか」

お嬢が動く。今度はオレがそれを止めた。

「なんじゃツキノネ、このままでは——」

「いけません姫様。ここから動かないでください」

「なっ、バカもの、こんなところで——」

「動かないでください！」

「う……むうつ……わかった。なんだと言っんじゃ……」

ヨゾラが豚の腕を掴んでいた。いつ掴んだかわからなかった。見えなかった。

少女が目を丸くしていた。

「おい、はなせよ。どっちが正しいかはもうわかっただろ」

「ごめん」

「あ？」

「ごめん、姉さん。俺には無理だったよ」

青年が小さく呟いたのが口の動きでわかった。

お嬢が息を飲んだ。

——豚が、空を飛んだ。

「なっ！？」

「くそつ、やっぱりだ……っ！」

時間が止まったかのようだった。野次馬のざわめきが止まった。その一瞬が永遠に思えた。ぽたり、と石畳に汗が落ちた。

オレは、間違っていた。

十メートルほどまで高く高く上がって、『それ』は池に落ちた。

バシャン、と大きな音がして、水しぶきが上がった。

骨がたくさん折れただろう。内蔵もいくつか潰れただろう。悪ければ死ぬだろう。——ヨゾラは、ゴミを見る目でそれを眺めていた。

「殴っていいのは、言ってもわからない奴だけ」

小さく口が動く。清々しいほどシンプルな考えだった。

「そう決められていたのに……俺は、口で負けて力を振るっている。

——ごめんなさい、姉さん、母さんたち。俺には、こんなやり方しかできません。だけど俺はどうしても、こんなのは許せない」

それは謝罪だった。誰かに向けた謝罪。あの男は、あんな豚にも、筋を通そうとしていたのだ。

そんなことのために、今まで我慢してたっていうのか？

貴族が怖かったんじゃない、ただ、筋を通すために？

「——どこまで、善良な……」

ヨゾラが少女の首輪に触れた。

「いま、助けますから」

お嬢が今度こそ動こうとする。オレはそれを抑えつけて叫んだ。

「馬鹿野郎、待て！その首輪は無理やり外そうとすると、毒針が――

――

ヨゾラがこちらを向いた。一瞬、視線がぶつかり合う。彼はすぐにオレへの興味を失い、首輪に目を戻した。

ヨゾラの手が消えた。そう見えた。

ピシリ——と音がした。

それだけだった。

それだけで、一瞬前まで首輪だった『粉』がサラサラと風に舞って消えた。

少女の首に、もう首輪はなかった。

「そんな……馬鹿な……あいつ、いま……」

オレには、奴のしたことが、少しだけ——ほんの少しだけ見えてしまった。

「なんじゃ？なにがどうなったのじゃ！？答えよツキノネ、今はなんじゃ！なぜ首輪が消えた！」

オレには答えられなかった。

——あまりにも常識はずれなその光景を、頭が認めようとしなかったのだ。

「刺さってない……あれ？刺さって、ない？今、なにを……」

少女が不思議そうに自分の首に触れる。ヨゾラは事もなげに答えた。

「針が出るより速く、毒針ごと首輪を壊しました。欠片も残らないように、37回殴ってやった」

少女がぽかんと口を開けた。

「怖かったでしょう。もう、大丈夫です」

その目にじわじわと涙が溜まっていく。やがて彼女はヨゾラに抱きつき、声を上げて泣き出した。

「安心していい。もう誰も、なにもあなたを傷付けはしない」

——瞬間、広場を歓声が包んだ。

女たちの黄色い叫びと、男たちの歓喜の咆吼だった。

羽交い絞めにされた、少女の父親らしき男も涙を流して叫んでいた。

ここで、今の今まで茫然としていた騎士たちが、ようやく反応した。

「おい、黙れ！黙らねえとぶっ飛ばすぞ！」

「今……何が……」

「坊ちゃんが、空を飛んで……」

「首輪が、消えて……」

お嬢が口をパクパクさせ、オレの方、ヨゾラの方、と交互に何度も顔を動かした。

無理もない。これはありえない出来事だ。

そして、あつてはならない事件だ。

観衆の目の前で、奴隷の首輪を、正規の方法以外で外してみせるなんて。

奴隷制度が根本から揺れてしまう。

フツ、とヨゾラが揺れたように見えた。

ヨゾラと少女の姿が霞んで消えた。歓声の真ん中から忽然と姿を消した。

トン、と真横から音がした。少女を抱いたヨゾラがすぐ隣に立っていた。

ビクツとお嬢がふるえる。オレは咄嗟に袖からナイフを出そうとし、ヨゾラに腕を掴まれた。

動きが、まったく見えなかった。

腕がぴくりとも動かない。実力差は悲しいくらいに歴然だった。

視線が再び交錯する。その目は語る。守れと。この男は、一瞬で、野次馬の中で一番強い者を見抜いたのだ。オレはごくりと唾を飲み、頷いた。ヨゾラはパツとオレの手を放すと、満足したように、子どもみたいな顔で笑った。そうして奴は少女に向き直る。

「キスイさん、コートとジュークを預かってもらえますか？」

ヨゾラはコートを脱いで少女に渡す。コクコク、と頬を赤く染めた娘が何度も頷く。目はキラキラと輝き、絵物語の騎士に憧れる少女の顔になっていた。

ヨゾラがオレを見る。「頼みます」

オレは力強く頷いた。「任せろ」

「あのっ！……ヨゾラさん！」

少女が不安そうに言う。

「気を付けて、くださいね？」

ヨゾラは笑って手をあげた。

「これまでのことも、今後のことも、全部終わらせてきます」

——もう二度と、あいつらがあなたを狙わないように。

そう呟くと、ヨゾラの姿がまた消えた。

一瞬ののち、バシヤン、と水の音が響く。池に客が増えていた。

豚の他にもう一人、騎士が水に浮かんでいる。騎士は腕が妙な向きに曲がっていた。その横に、少女の父を支えるヨゾラの姿があった。「す、すまない。ありがとうヨゾラ君」

少女の父がそういった瞬間、歓声がまた響き渡った。

消えたと思われた『英雄』の再びの登場に、野次馬は沸きに沸いた。

到着した衛兵が観衆に押し出されて広場に入れないほどだ。

「いけー！ やつつけろー！」

「容赦なんかいらねえ！ やっちまえー！」

「街のゴミを掃除してくれー！」

——それからはあつという間だった。

騎士が次々と空を舞い、そのたびに水しぶきが上がった。

池に浮かぶ騎士は、狙ったようにみな両腕が折れていた。

広場から逃げようとしてもすぐにヨゾラが神速で追ってきて投げられることを勉強した騎士たちは、むしろ率先して池の近くに向かい、僅かでも飛距離を落とそうと画策した。しかしヨゾラは平等だった。池からの距離が近い者は、遠い者に較べて高く飛ばされるのだ。

全ての騎士が片付いた時、池はぴったり満員になっていた。

結局、強化魔法もつかわず、運動能力だけで全員を倒してしまっただ。性能が違いすぎた。

池には騎士33人と豚一匹が仲良く仰向けに浮かんでいた。そう、『仰向け』に。

誰一人として、水面に顔をつけている者はいなかった。

誰一人として、死者はいなかった。

真っ黒な髪を掻き上げた青年は、池に向かって呟いた。

「二度と彼女に近づくな」

大歓声がこだました。

ヨゾラが少女の父親を連れてこちらに向かってくる。少女が走りだす。観衆はここぞとばかりにはやし立てた。それはまるで演劇の一幕のような光景だった。

「ツキノネ」

お嬢が言う。

「なんだよ、お嬢」

オレは溜息をついて聞く。

お嬢が何を言おうとしているのか、オレにはわかっていた。

赤い髪を揺らして、我が主は満面の笑みを浮かべた。

「妾は、あの男が気に入ったぞ」

気に入った。

だから欲しい。

欲しいものは手に入れる。手にはいる。

そのことを彼女は微塵も疑っていなかった。

お嬢はオレに向けて手を差し出した。

「……はあ」

溜息をひとつ。

自分より遥かに強い部下なんて、どうやって教育すればいいんだ。そもそもあいつ、人に従ったりなんてするのか？この先の苦勞を思うと本気で転職を考えたくなる。

だがまあ。

いいさ。彼女の目的にそれが必要だと言うのなら、仕方ない。全身全霊をもって、オレはこの小さな恩人の願いを叶えよう。

オレはお嬢——姫様の手をとってキスをした。

「全てわたくしにお任せ下さい——王女殿下」

まち3ノよぞらとおうじょとくろのきし



「おいおい、落ち着けよ相棒。壊れるぜ?」

「大丈夫ですよ。こういうものは見た目より頑丈にできているんです」

「まったく、ここに来てから欠けたどんぐりで作るやじろペーみに落ち付きが無くなったな」

「……あつ」

「おい、今なんかヘンな音したぞ?おい相棒……まさか」

「いえ、気のせいです。……気のせいというか、俺のせいです」

「相棒おおおおおつ!」

よぞらだ。

俺たちは今、豪華な屋敷の一室にいた。

貴族をぼろ雑巾にして屋根の上を逃げているところで声をかけられたのである。声をかけてきたのは広場でキスイさんを守ってくれた女の人であった。彼女は俺の作ったチラシをピラピラ振って言った。お姉さんを探しているそうじゃないか、と。

「条件付きで協力してやってもいい。我が主はこの国有数の権力者だ。きつと役に立つ。アカブ伯爵の次男をぶっ飛ばした件も帳消しにできるぞ」

「知らない人について行つてはいけなさと教わっています」

「オレにおまえのことを教えたのは、エイトという怪獣人形だ」

こうして俺たちは彼女についてこの屋敷まで来たのであった。

屋敷はこの街にある大きな学校の敷地の中にあった。その一室に案内され「ここで待て」と言われたきり三十分が経過していた。現

在は、姉の手掛かりを早く知りたい気持ちとジュークの同胞に早く会いたい気持ちで落ち着きをなくした俺が、興奮のあまり部屋に飾られている調度のコップ（たぶんコップだ）の取っ手を壊してしまつたところである。

「どうすんだ相棒、弁償なんかできるのか」

「今、すぐドキドキしてます。こんなにドキドキしたのは、姉さんの留守中に部屋を掃除してあげようと思ってプリンターのトナーに掃除機をかけたとき以来です」

「それは、どうなったんだ？」

「排気口からインクのガスが出て布団が虹色になりました」

「お姉ちゃんは何て？」

「言いたくありません。……でも、俺は生きています」

「よっぽどつらいことがあつたんだな」

「生きるっていうのは素敵なことなんです。大根はあんな使い方をしちやいけないんです。大根？……ああ、大根が来る……ドクターペッパーが醤油と喧嘩して大根が——窓に！窓に！」

「落ち着け相棒！大根はもういない！」

震えだした俺の腕をジュークがさすってくれる。俺はコクコクと二度頷いた。

「その茶を飲め。それ飲んで、深呼吸するんだ。ぐいっとやれ。もう一度。そう、そうして大きく息を吸って。心を落ち着けて。よろしい。——それじゃあ、自分が誰だか言ってみる。名前を思い出せるか？年齢は？出身地は？」

「礼を言います。助けてくださってありがとうございます。自分は夏野よぞらと申します。14歳です。新潟県の山奥に姉と父と母たちと暮らしています……いました」

俺たちがひとしきりはしゃぎ終えた頃、部屋のドアはようやくノックされた。実際のところ、屋敷にいる人間の位置は音と匂いで全て把握しているので、扉が叩かれるより前に、ここに人が向かつて

いることは知っていた。もちろんこの部屋の天井裏で二人の人間が俺たちを監視していることも知っていた（挨拶は大事だと教わっているの、部屋に通されてすぐ天井に向かってちゃんと挨拶した）。
「入るぞ」

俺たちをここに案内した人の声だった。

俺は「はい」とだけ答えた。自分の部屋でもないのにどうぞと言うのは偉そうに思えたからだ。

扉が開いた。入ってきたのは、真っ赤な髪と目をした女の子と、スレンダーな茶髪の女性だった。足音と心音でわかっていたが、やはり昼間の二人であった。最初こそクジラ、イルカ、と呼び合っていたが、広場ではツキノネとお嬢になつていたあの二人だ。

お嬢（仮）は、腕に怪獣人形を抱いていた。怪獣人形は片手を上げて言った。

「やあ、ジューク。私のことは忘れていないだろうね？」

「エイト！馬鹿野郎、今の今まで呼んでたつてのに！」

言葉とは裏腹に、ジュークの声には再会を喜ぶ色があった。エイト氏も同じであるのがわかった。

エイト氏はギモギモ族だ。素体のデザインはサーティやジュークと同じである。だが彼はメガネをかけていた。

「言つたろう？私の生徒は高貴な身分にある子でね。たとえ同胞であつても情報を与えることはできなかったんだ。だが、私の方からはちよくちよくおまえの心に触れていたよ。印刷屋で合図を送つたろう？」

「あのと時のアレはおまえさんだったのか！てつきりサーティかと」

「そのようだね。ま、積もる話はまたあとで、だ」

エイト氏はお嬢（仮）に抱かれたまま右腕を大きく上げ（おそろく指さしているつもりなのだろう）紹介しよう、と言つた。

そうして彼は俺に、『二つ』の驚きを投げて渡した。

「彼女はこのスズカゼ王国の第一王女、ロカニ・アクト・スズカゼ

殿下だ」

「王女様って……王女様のことか!？」

ジュークがそのまんまのことを聞く。混乱はもつともである。俺も驚いた。

「如何にも。紹介に預かった、ロカニじゃ。この国の姫である。よろしく頼むぞ、ヨゾラ」

につこりと笑う可愛らしい少女に、俺はただただ頷くことしかできなかった。

予期せぬところからこの世界のヒントを与えられてしまった。

——王女様に招かれたっていうのも驚いたけど、それ以上に彼女の名前……。

ロカニ・アキト・スズカゼ。

鈴風秋斗。

それは。

俺や姉が生まれるずっと前に死んだという。

父方の祖父の名前だった。

ロカニ王女が王都でもないこの街にいるのは、身分を隠して学校に通うためであるらしい。彼女には弟がいて、弟王子の方はここから馬で一日行ったところにあるバビという街の学校に入学するそう
だ。

「馬鹿は要らぬ。世の中を見てこい」

危険である、城に人を呼ぶのが決まりであると意見した臣に父王はそう言っ
て突っぱねたそう
だ。

ロカニ王女はこの国の王位を狙っている。それは順当に行けば彼女が弟王子に明け渡されるそうであるが、そのことを快く思わない者も少なくないという。王女がこの街にいることを知っているのは

父王と極一部の寵臣だけだが、いずれ気付くものも現れるだろう、と王女は言った。

「妾は弟と真つ向から斬り合つて王位を勝ち取りたいのじゃ。邪魔が入るのは何としても避けたい」

王女はその野望を俺に語った。

ジソとバビにある学校、王立第一碩学院と第二碩学院（通称アカデミー）には国内外から力持つ家の子供たちが多く集まる、と王女は言った。彼女は在学中にそんな権力者の子供たちと『王女として』繋がりを持つ気でいた。つまり、身分を隠すつもりなどはじめから無いのだ。彼女は自分の境遇を正しく理解していた。正攻法では王になれないことを知っていた。

「妾は女じゃ。それだけで既に弟より出遅れておる」

王都の有力な貴族はみな前例を重んじる。過去、この国に女王は一人もいない。戦う前から勝負の結果は見えているようなものだ。

王女は諦めたくなかった。実力で負けるならばまだしも、戦いの場に立つことさえできないのではやりきれない。なにより彼女は王になりたかった。

そんな彼女の考えた作戦は、目立って目立って目立ちまくる、というものであった。これは単純だが、そのぶん効果的な作戦だ。王都の貴族たちが弟を推挙しても、弟以上に名の売れた姉がいたので父王も考えるし、民も揺れる。もちろん簡単なことではない。弟よりも姉のほうが絶対的に優秀である、と多くの人間に思い込ませなければならぬのだから。王女はやる気だった。

しかし、ここで問題が出てくる。

身分を偽って入学するのには「危険を避ける」というメリットがある。王女だと明かすということは、そのメリットを捨てるということに他ならないのだ。目立つことが目的だが、それで殺されたのでは元も子もない。王女には、絶対の守護者が必要だった。

そんなとき、家庭教師のエイトが言った。

「我が同胞の旅の連れに、虎の王を一撃で倒した猛者がおります。

彼は今この街で姉探しをしております」

運命だと思った、と王女は言った。

見たこともない黒髪の異世界人。

虎の王を頭突き一発で倒し、三十人以上の騎士を無傷で倒す化け物。

そんな人間が目立たないはずがない。

目立つものなら近くに置いておかなくてはならない。

こいつしかない、と王女は思った。こいつを自分のものにした
い、と。

「そういうわけで、ヨゾラ。おぬしは妾のものになるとよいぞ」

俺の肩をバシバシ叩きながら満面の笑みを浮かべてロカ二王女が
言った。

「いつでも妾の後ろをついて歩き、あらゆる敵から妾を守り、妾だ
けの言うことを聞く騎士になるがよい」

俺は黙り込んだ。俺には彼女が傲慢という字の体現者に見えた。

尤も、向けられる感情が好意なので、嫌な気がしなかったというの
も本当のところであつたが。

「おぬしはめっぽう強い。だから妾はおぬしが欲しい。妾のものに
なれヨゾラ。おぬし、サーティとやらの所に厄介になるつもりでい
るそうではないか。妾はおぬしをこの屋敷に住まわせてやるぞ。三
食きちゃんと与えるし、おやつもやろう。給金も妾の小遣いから払う。
おぬしの姉探しにだって協力してやる」

俺は考えた。

考えるまでもなく答えは出ていた。

ジュークを見る。エイト氏を見る。二人は頷いているように見え
た。

最後にロカ二王女を見る。

彼女は屈託なく笑っていた。

どうやら俺は、この子を嫌っていないようだった。

——ああ。だってこの子は、最初から俺を利用する気にいる。そ

のことを隠しもしない。

褒美をやるから利用させろ。そう言っているのだ。

そんな正直な人間を嫌えるわけがなかった。

嫌いじゃないひとを守る仕事なら、頑張れる。

俺はいつの間にか笑っていた。

王女が手を差し出す。

「妾のものになれ、ヨゾラ」

「ひとつだけ、条件を付け足してもよろしいでしょうか」

「言ってみろ」

俺は静かに頭を垂れた。

「コップを壊しちゃったことを、どうか許してください」

覚悟と道は定まった。

姉さんが見つかるその日まで、俺の一番をこの子にしよう。



ある男子高校生の日記

11/2（晴れ）

夏野さんが休学することになった。

理由は知らない。

俺は、もうだめだ。

がっしり／ひるまふべしやんちやん（前書）

せきがくいん
碩学院
りんり
躑躅裏
しよぎ
娼妓

がつこう！／ひるまとおつじとぢぢきょうじや

■■■■■

「先生、虎に会った時の『わたしは敵ではありません』はこれでいいでしょうか？——グワウツ、グワウ！」

「なんだよそれ。ぜんぜん駄目。こうですよ、先生？——グラウ、グワウツ！」

「それじゃあ威嚇してるみたいじゃないか？たぶんこうだよ——グアウ、ガウ。どうですか、先生！」

「先生、お馬さんに乗る時の『よろしくね』はこうですか？——ブルル、ヒヒーン」

「先生、ぼくのも見てください！森で狼に遭ったときの『怖いことはしません』いきます！——ウオン、グルル」

「先生、わたくしも先生のように小鳥さんとお話がしたいですね。

是非おしえてください」

「先生、恋人はいますか？」

「ナツノ君、わしのウシ語の発音もみてくれんか。——ウモフツ、モオオ、モオウ。体調はどうだ、元気か？と言ったつもりなんだが、どうかね？」

「ナツノ君、おとなの大鷲を手懐ける方法を教えてくれ！こどもの内から育てたのでは時間がかかりすぎる！」

——先生！先生！先生！ナツノ君！

——ガンホー！ガンホー！ガンホー！ナツノ君！

ひるまです。

四度目の授業も大成功に終わりました。

今わたしは、バビの街にある大きな学校、《王立第一碩学院》で

教鞭を執って生計を立てています。

碩学院の校舎は石造りのお城のような建物でした。入り組んだポールト天井、無数に配置された尖頭アーチの小窓、馬蹄型アーチの列柱、獅子や鳥のレリーフが施された壁、繊細なトレサリーが美しさをいっそう際立たせるバラ窓……。ゴシックとイスラムを鍋で煮て異世界要素をふんだんにまぶしたかのような見たこともない建築様式は、わたしに宿るあるかなきかの乙女心をこれでもかと刺激します。彼らは言います。「思いだせ、おまえは女だぞ」。如何にもわたしは女でありました。ヨーロッパの古いお城など大好物でありました。家族旅行でチエコに行った際には聖ヴィート大聖堂（プラハ城のアレです）から一步も動かなかった女でありました。路面電車に乗りたくて仕方なかった父と弟に引きずられたのはよい思い出です。

さて、わたしが一昨日から働いている王立第一碩学院（通称第一アカデミー）は、日本の小・中・高等学校にあたる十二年制の教育機関であります。プライマリ（初等部。6歳から入学可）が前期四年・後期四年の八年制、セカンダリ（高等部。基本的にはプライマリ修了者が進学）が前後期二年ずつの四年制です。各部ともに前期段階と後期段階の修了時には修了証書が授与されます。セカンダリの前期生をジュニアとよび、後期生をシニアといいます。プライマリもセカンダリも必修教科は数学と社会学のみで、ほかに商業、芸術、音楽、農業など様々な選択科目の中から、おのおの身につけたものを履修します。とくべつ成績のよい学生は飛び級することもあるそうです。

学校の年度は1月中旬に始まり、12月中旬に終わります。この間、4月と8月はまるまる休みで、6月・9月・11月にも7日ずつの休みがあります。国の祝日や週一日の休日（火の曜日は休息の日です）、テスト休みなども入れると、年間授業日数は200日あるかないかだそうです。ちなみに義務教育ではありません。

わたしの肩書きは『非常勤講師』——言うなればパートタイムの

先生です。授業のある日、授業のある時間にだけアカデミーに来て、授業が終わったら経理部からバイト代を頂いて帰ります。なんと気楽な仕事でしょうか。わたしの求めていたものがここにはありませんでした。

わたしの教える《動物語》は自由聴講制の教科です。これは中途半端な時期に教師採用されたわたしのためにわざわざ学長先生が作ってくださった制度で（まことにまことに恐縮の至りです）、「単位の修得はできないけれども、学校関係者であれば学年・所属を問わず自由に参加できますよ」という当校ただ一つの教科です。学校関係者ということですから、先生の聴講も歓迎しております。今日の授業でも農業学（酪農）のロツフォ先生（白髪のおじいさまですが、筋肉がビルダーです）が学生に混じって熱心にウシ語を学んでいらつしゃいましたし、高等狩猟学のセキエ先生（褐色の肌が素敵な、背の高い女性です）が狩りをたすけてくれる動物についての質問で何度も手を挙げていらつしゃいました。

今日の授業は十時と十四時の二度、外にある剣術練習場の隅で実習をまじえておこないましたが、午前午後あわせて百名以上の参加者がありました。授業を終えて経理部に行くと、待っていた学長先生に声をかけられました。聞けば、他の教科との時間の関係で参加できなかった学生たちから、動物語の日数を増やしてほしいとの嘆願があったそうでした。学長先生は言いました。

「どうだろう？ キミさえよければ、正式な教員としてこのアカデミーに籍をおいてみるというのは。研究室にも空きがあるし、職員寮には格安で住むことができる。我が校は結果主義だが、キミは学生たちの間でも人気が高い。給料も今の三倍はかたいたろう」

本当にありがたいお話でした。しかしわたしの答えは決まっていたました。

「嬉しいお誘いですが、面接の折にも申し上げましたとおり、わたしは行方不明の弟を探しているのです。いつここを去るとも知れぬ身。せめて弟の居場所だけでもわかれば、安心してこの街に骨を

埋められるのですが……」

「それについては、私の部下たちが今、アルイ、モルイ、ユキオトの三つの街で聞いて回っている。全力でだ。額に傷という特徴があって、それも黒い髪とくれば、そんな者はそうそういるものではない。きつとすぐに見つかるだろう。……確認するが、弟くんがこの街にいても、キミはこの街を出て行ったりはしないのだね？」

「勿論会いには行きますが、元気でいるとわかればそれでいいのです。バビは活気あふれる美しい街です。遠く異国の地より流れきたわたくしなどにも人々は優しく接してくださいます。許されるなら市民権を買って小さな家を持ちたい、そう考えておりますわ。あ、本当に、弟さえ見つければ……」

「私もコネをあたっている、きつと見つかるとも。ただ、それがいつになるかは、正直なところ私にもわからない。キミは早まらず、どつしりと構えてこの街で連絡を待つべきだ。もし我々が弟くんを見つけても、そのときにキミがいけないのでは知らせようがない。私と私の部下を信じて、この街で、このアカデミーで待っていてほしい。学生からキミのことを聞いて、是非キミと話してみたいという大貴族や商家の方々が——むろん貴族や商家に限ったはなしではないが——保護者たちの中には、そう言って我がアカデミーを訪ねてきてくださる方も少なくない。無理にとは言わないが、時間ができたら、色々と考えてみてほしい」

「ありがとうございます。少なくともわたくしは、あとひと月はこの街で弟を探すつもりであります。いつまでもここに留まっていたいのですが。その間は、よろしく願います。何卒よくしてくださいませ」

「う、うむ。こちらこそよろしく頼むよ」

学長先生は「一ヶ月……一ヶ月……」と呟きながらお部屋に戻って行きました。

初日に野良犬さん野良猫さんたちにマスゲームを披露していただいて以降、わたしの教える動物語は人気科目でありました。三日目

の今やわたしの名前はアカデミーの外にまで知れ渡り、貴族さまからは非わが子の家庭教師にとお声がかかるまでになりました。たくさんさんの情報がわたしの元に集まって来ます。

——よぞら、早くお姉ちゃんを見つけてね。でないと、わたしの方が先に見つけてしまうわ。そんなの乙女っぽくないじゃない。

わたしの弟探しは順調に進んでいるのでした。

経理部から今日の分の日当をいただいたわたしは、校舎を出て学生寮の方へとテクテク向かいます。途中、セカンドの学生たちが声をかけてくれます。

「ナツノ先生、これからお帰りですか？」

「今日は無理でしたが、明日こそは自分も聴講させていただきます！」

「ナツノ君、今度一緒に山へ行かないか？危険種を間近で見てみたんだ」

「ヒルマちゃん、今度オレと逢引しようぜ。オレいい店知って——ぐふっ」

「恋人の前で他の女性に懸想でございますか？よい御身分でございます。まことにまことによい御身分でございます。ちょっとあちらで教育、いえお話し合いをいたしましょう。うふふふ。——ではナツノ先生、また明日お会いできるのを楽しみにしておりますわ」

みんな仲良しさんでした。わたしは一人一人に挨拶を返して家へと向かいました。学生でない方が一名混じっておられました、これはいつものことでした。

男女にわかれた一般学生寮を越えると七つのお屋敷が見えてきます。それぞれのお屋敷には当然のように広いお庭と厩舎がついています。断っておきますが、ここはまだアカデミーの敷地内です。これらのお屋敷は、国内の大貴族さまのご息様や外国の王族などがアカデミー在学中に滞在する別邸なのでした。わたしはその中でも

二番目に大きなお屋敷に向かいました。何を隠そう、ここがわたしの今のお家なのでした。

わたしは玄関から中に入ります。もちろん途中、厩舎のヨシムネ君（臆病なお馬さんです）に挨拶するのも忘れません。ヨシムネ君はわたしのあげた人参をおいしいおいしい、と言って食べました。中に入ると、メイドのスズメさん（手をつかずにスピニングバードキックができます）がわたしに声をかけてきます。

「おかえり。御主人様は書斎よ。あなたが遅いからご機嫌斜め」

「あら。すぐに向かいますね」

わたしは部屋に荷物を置き、書斎へと向かいました。中にはわたしの正式な雇い主がいらっやいます。わたしはドアをノックしました。

「だれだ」

こどもの声がします。わたしは言いました。

「ひるまです、坊っちゃま。ただいま学校から戻りました」

ドタドタと足音がして、すぐにドアが内側から開けられました。

真っ赤な髪をした十歳の男の子が、同じく真っ赤な瞳をキラキラさせて立っていました。

「遅いぞヒルマ！すぐ帰ると言ったではないか！」

「申し訳ございません坊っちゃま。学長から授業のことでお話がありました」

「むう……それならが仕方がないか、許す。だが、坊っちゃまは減点だ。言葉遣いも丁寧すぎる」

わたしはにへつと笑います。

「ごめんなさい、ツバメ様」

「様もダメだ。わかってやっているであろっ」

「はい、ツバメさん」

男の子——ツバメさんことノギオム王子は「仕方のない奴め」と笑いました。

そう。彼は王子であります。

彼は、わたしが彼の正体に気付いていることを知りません。スズメさん（本名はリロさんです）も、他の使用人のひとたちも、みんなわたしを遠い国から来た魔女だと思っています。警戒はしていませんが、魔女だから動物の言葉がわかるのだと思っています。それはもちろん間違いなのですけれど、わたしはそのことを話していませんでした。

「では、今日も我に『音』のことを教えよ」

小さな御主人様はそう言ってわたしを書斎に引っ張るのですでした。



見知らぬ森で目を覚ましたわたしは、すぐに弟の姿と『音』を探しました。

わたしの最大の剣であり盾でもある聴覚は、集中すれば1キロ以上はなれた人間の会話も聞きとることができます。わたしは目を閉じ、耳を澄まして音の世界に潜り込みました。弟の音は聞こえませんでした。

わたしの持ち物はバッグだけでした。このバッグを持って、弟のよぞらと一緒に（というかよぞらに乗って）山を降り、いちばん近い商店街まで行き、そこでコロッケとおでんを買い食いついた帰りに空へと浮かんでここに来たのです。なんと荒唐無稽なお話でしょうか。

しかしわたしは慌てませんでした。

こんなことが、前にも一度ありました。

——あれは、たしか、小学校にあがるまえの頃のことです。

その夜、目が覚めたわたしは、隣で眠る弟を揺すって起こし、手

をひいて外に向かいました。物音で起きてきた父が玄関前の廊下で待っていて、「どうした、トイレか？」と言いました。わたしは首を横に振って、「虹をくぐって白い海に行くの」とこたえました。「あきとさんが呼んでるの。間に合わなくなっちゃう、すぐに行かなくちゃ」

その頃のわたしに「あきと」などという名前の知り合いはいませんでした。それでも、ぼんやりした頭でそう言いました。そうしなくちゃだめなんだ、という強い気持ちの深いところにありました。

父は驚いた顔をしたあと、わたしをギュツと抱きしめました。そうしてまだ寝ぼけている弟の頬をぺちぺち叩いて起こしました。

「よぞら、お姉ちゃんの手を絶対にはなすな。はなしたら、ひるまはいなくなっちゃう。俺は行けない。俺はもうあそこには入れない。おまえがお姉ちゃんを守るんだ。いいな？」

まだ小さかった弟は、わたしの手をぎゅっと握って「わかった」と頷きました。

「まもる。ぜったい、はなさない」

父はわたしと弟をその大きな腕で抱きしめました。父は泣いていました。

わたしはそのとき、どこか深くて遠いところで、何も感じずにその様子を見ていたような気がします。

父に見送られ、弟の手をひいて山の中へと入りました。わたしの家は深い山奥にあります。家のある山ぜんぶが我が家の私有地です。周囲一キロに家はなく、夜は真っ暗でなにも見えません。わたしはそんな中をずっと歩き続けました。途中、弟が何度もわたしの手を握り直したのを覚えています。あの子の自分は本当に自分だったのだろうか？何年も後になってからそんなことを何度も思いました。答えは出ていました。あれは確かにわたしでした。なぜならわたしは、あの時のことをはっきり覚えているのですから。

何時間も歩いたわたしは、森の中のある場所で止まりました。そ

こには大きな切り株がありました。わたしは切り株に向かってお辞儀をしました。弟も、不思議そうな様子でしたがわたしになりました。

——切り株の上に、小さな虹がかかりました。

夜の闇を齒牙にもかけない、明るい、綺麗な虹でした。

丁度こどもが通れるくらいの小さな虹です。虹の向こうには夜の海が見えました。

弟がわたしの手を強く引っ張りました。

「ねえさん。あれはちがう。よくないものだ。よくないかたちだ」
わたしは笑いました。

「知ってるわ。でも、行かなくちゃ。よぞらはここで待っていて」
弟は悩んだようでしたが、結局わたしの手をはなれませんでした。
わたしたちは手を繋いだまま虹をくぐりました。

そこは砂浜でした。

わたしたちは砂浜を波打ち際に沿って歩きました。歩いていると、
だんだん小さなものが見えてきました。それは子どもでした。真っ
黒い髪を膝まで伸ばし、真っ黒い服を着た子どもでした。当時五歳
か六歳のわたしよりも少しだけ大きい子どもでした。子どもはわた
したちが来るのを——いいえ、わたしが来るのを、待っていました。
そのことが、その時のわたしにはわかっていました。

黒い子どもの前まで着くと、わたしはこんばんは、と挨拶しまし
た。

「いい夜ですね、あきとさん」

わたしは、わたしが会いたかったあきとさんはこの人なのだ、と
理解していました。

あきとさんはちらりと弟に目をやったあと、わたしに、手を出せ、
というようなことを言いました。なんと言ったかは覚えていません
し、どんな声だったかとも思い出せません。もしかしたら、声など出

していなかったのかも知れません。わたしは手を出しました。その手にあきとさんがポンと手をのせました。そして、もう帰りなさい、というようなことを言いました。

わたしは帰りたくありませんでした。

理由は今のわたしにはわかりません。ただただその美しい砂浜とあきとさんから離れたくなかったこと、元の暮らしになど戻りたくなかったことを覚えています。

わたしは泣きました。

「どうしてこっちにいけないの？わたしもここがいい。あつちには五月蠅くて、みんな間違つてて、一つじゃないからイヤ。ずっとここにいたい。やつと会えたのに」

あきとさんはわたしの頬にキスをしました。

わたしは急に眠くなりました。まぶたが重くなつて、綺麗な海も、白い砂も、あきとさんの顔も見えなくなっていました。目を閉じる間際、あきとさんが弟になにか言うのが見えました。わたしは悲しい気持ちと羨ましい気持ちを見つめながら眠りに落ちました。悲しい気持ちはまるいかたちをしていて、中には白い砂が閉じ込められていました。羨ましい気持ちは星のかたちをしていて、中であきとさんが弟に小さなものを渡していました。それは金色の力ギでした。

——わたしがほんものなのに。

——よぞらはちがうのに。

今のわたしにはそれがどういう意味だったのかわかりませんが、そのときのわたしはそんなことを思いました。

眠りに落ちたわたしは夢を見ました。

夜の白い浜辺で、二人の子どもと一緒に砂のお城をつくる夢でした。ひとりにはあきとさんと、ひとりは父でした。父の子供の頃を知らないのに、その灰色の髪をした子どもが父なのだと、わたしには

わかりました。

目が覚めると、わたしは布団の中にいました。

いつも寝ている子供用の布団ではなく、父や母の使う布団でした。部屋もわたしたちの部屋ではなく、玄關のすぐ近く、仏壇のある部屋でした。わたしは夢をみたのかもしれないと思いました。わたしの横には弟が眠っていました。弟はわたしの左手を握ったまま寝ていました。その顔は土で汚れていました。わたしの右手には『おはじき』が三個だけ握られていました。わたしの目から涙がポロポロこぼれました。夢ではありませんでした。悲しくないのに涙が止まりませんでした。弟が起きるまで、わたしはただただ泣き続けました。

それからわたしたちは手をつないだまま居間に行きました。はなしてと言つても弟が手を離してくれなかったからです。居間には父と、複数いる母の中でわたしといちばん顔の作りが似ている咲子母さんがいました。他の母たちはみな出掛けて家にはいないそうでした。父は言いました。

「よぞら、もういいぞ。ありがとうな」

その言葉をきいて、弟はようやくわたしの手を離しました。

咲子母さんが弟の頭を何度も何度も撫でました。

「頑張ったね、よぞら。ありがとうね。——ひるまもよぞらにお礼を言っんですよ。途中で寝てしまったあなたを家までおぶってくれたんですから」

よく見れば弟の手足はすり傷だらけでした。わたしは弟を抱きしめてありがとうと何度も言いました。弟は恥ずかしそうに、「やくそくしたから」とだけ言いました。

「おまえたちが帰って来てくれてよかった」と父が言いました。

「あなたの子だもの」と母は笑いました。目が、泣いたあとのように真っ赤になっていました。

ひとしきり弟とじゃれたわたしは、父にきのうの夜のことを聞き

ました。父はつらそうに、首を横に振りました。

「きつと一生、俺から伝えられることはないだろう。時が来たらわかる。おまえは、あの砂浜を歩いて、『彼女』に会ったんだから」「黒いひとに会ったわ。わたしはあのひとを『あきとさん』だと思った。あのときはたしかにそう思ったの。でも今はもうわからない。あのひとのことも、あの海のこと……。ねえお父さん、あきとさんって誰なの？どこにいるの？どういうひとなの？男の人なの？女の人なの？」

父は答えず、「あのひとからなにか貰ったか？」と聞きました。わたしはおはじきを見せました。大事にしなさい、と父は言いました。母が『安産祈願』と書かれた御守りを引き出しから掘り起こし、中身をゴミ箱に捨てておはじき入れにしてくれました。弟はそのあいだ、ただ無言でわたしを見ていました。

よぞらもなにか貰ったのか？と聞いた父に、よぞらは黙って首を振りました。弟が嘘をついたのが心臓の音でわかりました。なぜ弟が嘘をついたのか、わたしには今もわかりません。ただ、これ以降、弟が妙に、わたしに対して過保護になりました。

その日の夜、わたしはよぞらと目つきがそっくりの神絵母から聞きました。わたしたちの父方の祖父——父のお父さんの名前が、秋斗というのだと。

そのひとはわたしの生まれるずっと前に亡くなっていました。写真も、残っていないそうでした。

神絵母はわたしの頭を撫でて、悼むように笑いました。

「わかるのはあれが神様になろうとした、ということ。結果は誰も知らない」

きつとあのときと似たような状況にあるのだ、とわたしは思いました。

わたしは動物の言葉を使い、森で一番強い生き物の居場所を聞き

ました。存外近かったので、すぐにその生き物の元へと向かいまして。これが四本の牙をもつ、3メートル以上もある大猪（こちらではボラボと呼ばれています）のイエシゲさんとの出会いのエピソードです。わたしはイエシゲさんをお願いして森の外まで送ってもらいました。ただ強い生き物と一緒に歩けるだけでよかったのですが（言葉をかけるよりもはやく野生動物に攻撃されたのでは、わたしなどひとたまりもありません）、彼はお亡くなりになったお父様の牙を「邪魔になるが捨てるには惜しい」という理由でわたしにくださいました。そのうえ彼は鼻と牙で器用にわたしを持ち上げ、背中に乗せて森の外まで運んでくれたのでした。

「ゴヒヒ、ブゴゴツ、ブヒ（歩く。つかまれ、不思議な生き物よ）」
わたしはキュンとしました。

そうして途中ヒデタダ君（黄緑色の小鳥さんです。尻尾が長いです。好奇心旺盛。）を仲間にし、イエシゲさんと別れ、村でお金とヨシムネ君を手に入れ、わたしは弟探しの旅に出たのでした。

わたしたちがひとまずの目的地であった学術都市バビに到着した頃、世界は既に薄闇のドレスと月のブローチでおめかししており、街壁の門は固く閉ざされていました。門の側では、わたしと同じく間に合わなかった人たち（商人さん？旅人さん？）が火を炊いていました。

「あつちが空いていますね。行きましようヨシムネ君」

わたしはヨシムネ君のお尻を撫でながら（意味はありません。ただのセクハラです）林の方へ向かいました。わたしはここを今夜の寝床に決めました。ちなみにヒデタダ君は既にコートのポケットで眠っています。彼の野生はどうしてしまったのでしょうか。いろいろ不安です。

旅人さんたちの中にはときおりこちらをちらちら見る方もいるようでしたが、別段変事も無く我々は眠りについたのです。

「見るよ。あの馬、横になって寝てるぜ」

「よっぽど飼い主を信頼してるんだろっよ」

「おい馬鹿ども、そんなことより作戦をどうするんだ。どうやって王子に近づく」

「なあに、《奪う槍》のリロか騎士の野郎か、どっちかが側を離れた隙にサクツとやつちまえばいいのさ。欲を掻かなきゃ楽な仕事だ」
「だが、監視どもが――」

こうしてわたしの異世界生活一日目は終わりました。

門が開いたのは午前四時を過ぎたころでした。通行料は銅貨五枚ということでしたが、初めて街に入る人間は滞在許可証というものを買わねばならないそうで、これにまた銅貨五枚がかかりました。必要経費とはいえ、これでわたしの持ち金は銅貨22枚となりました。まいりました。落ち込んでいても仕方ありません。ヨシムネ君に物品税が課せられなかったことを喜びましょう。

街に入ったわたしは、道の端によって目を閉じました。

光が消え、世界が音で満たされます。鼓動、足音、衣擦れ、荷車の音、声、声、声……。迷路のような街でしたが、わたしの力の前ではそんなこと、関係ありません。わたしは無数の音がわたしを包んでいるのを感じました。その中から求めるものに認識の手を伸ばします。要らない音を消し、関係のない言葉を弾き、求める単語を吸い寄せます。やがてわたしは目を開けました。

「ヨシムネ君、ヒデタダ君、行きましょう。目的地はあっちです」

「ヒヒーン」

「ピロロロ」

わたしはイエシゲさんのお父様の牙を適正価格で買って頂くべく、この街一番のオークションハウスを目指すのでした。



「つまり、その周波数というやつは物や空気の『揺れ』の数のことなのだな？それが大きすぎたり小さすぎたりする音は、我々人間には聞こえない、と？」

「その認識であっています。周波数の大きい音は高い音、小さい音は低い音として聞こえます。同じ打楽器でも、金属の楽器を叩くと高い音が、太鼓のような膜ばりの楽器を叩くと低い音がしますね？実はこれ、どちらの楽器も、聞こえる音のほかに、人間には聞こえない音も出しているのですよ」

「本当か！？」

「嘘なんてつきません。聞こえる、というのは耳がとらえた音にだけ適用される言葉ですが、感じる、ということでしたら、きっとツバメさんも体験したことがあるはずです。——例えば、太鼓を近くで聞いて、お腹が痛くなったことはありませんか？」

「あるが……ああ、そうか！『揺れ』だな？周波数が小さすぎて聞こえないが、音そのものは大きいから空気は力強く揺れる。その揺れで腹が痛くなるのだ。そうであろう！」

「はい、そのとおりです。よくわかりになりましたね」

「むふふ。我はまた一つ賢くなったぞ。この調子でどんどん智を身につけて、いずれは市井で生きてゆくのだ。むふふ。楽しみで仕方がないな！」

ツバメさんは思い描く理想の将来を語って笑いました。

「明日は実習をまじえて、超音波と低周波音についてお勉強してください。今日はいたしましう。おジャンでございます。お疲れ様でございました」

「うむ！あすも宜しく頼むぞ、ヒルマ！」

知識を得ることに喜びを感じる生徒というのは、先生にとっては可愛くて仕方のないものです。わたしの職場環境は極めて良好でありました。

「お疲れ様。飲む？」

「ありがとうございます。……わっ、良い香り」

水を飲もうと居間に行くと、メイドのリロさん——あぶない、スズメさんでした——スズメさんがいました。彼女は桃色の、柑橘の香りのするお茶をいれてくださいました。

「南のお茶でね、今がいちばん美味しいの。本当は使用人が飲むよ
うなものじゃないけど」

「共犯者というわけですね」わたしは言いました。「隠し事は得意
です」

スズメさんの『音』が少し乱れました。表情は変わりません。何
事もなかったようにカップを口にあてます。流石は王子様を任され
るだけの人物でした。

「弟さんのことだけど、少なくともこの街にはいないみたいだね」
彼女の音はすぐに平時のリズムに戻りました。

「二日でわかるなんて、スズメさんは優秀でいらつしやるのですね」
「黒い髪なんて、いればすぐにわかるさ」

また、音が揺れました。わたしはなにも言いませんでした。彼女
は弟を、探してなどいないのです。

実のところ、弟がこの街にいないことは初日にわかっていました。
わたしは弟の『リズム』を正確に覚えています。街の端から端まで
歩けば、わざわざ人に聞いたりなどせずとも、いるかないかは知
れるのです。

「スズメさんは、わたしが邪魔ですか？」

わたしは正直に聞きました。彼女はカップを口からはなし、わた
しをじっと見つめました。鼓動は警戒のリズムを刻んでいます。わ
たしは彼女から目を逸らしませんでした。やがて彼女は言いました。
「警戒はしてる」

その音に嘘はありませんでした。

「あたしにはあんたの狙いが見えない。弟さんのことだって、本当
なのかどうかわからない。学長殿にも協力させてるようだけど、そ

れがカムフラージュじゃないという保証はない。……悪いね」

あたしの仕事は坊つちやまを守ることだから、とスズメさんは言いました。もう、自分がただのメイドでないことをわたしに隠すつもりはないようでした。わたしはできるだけ自然に見えるように笑いました。

「それでいいと思います。確かにわたしは隠し事をしていますから。……ただ、わたしが弟を探しているのは本当ですし、現状わたしがこの世界の誰にも敵意を抱いていないということも事実です。信じてほしいとは言いませんが、わたしがそう宣言した、ということだけは覚えておいてください」

わたしは笑い、もうすぐここを去ります、と言いました。

「急だね。……助かるといえば、助かるけど」

「去ると言っても、街には留まります。少なくともあとひと月は」

「ひと月後になにかあるの？」

「ひと月たつても見つからないのなら、弟はきっとこの国にはいない。そう思うんです。目立つ子ですから」

「あんたより？」

「片手で象を持ち上げるって言ったら信じます？」

「あんたでもそんな冗談を言うんだね」

スズメさんはニヤリと笑いました。わたしはただスズメさんを見つめました。彼女は笑みを消し、何かを確かめるようにわたしの目を見ました。やがて彼女は眉間にシワを寄せて「本当に？」と言いました。わたしは笑いました。

「この世界にも、象がいるんですね」

彼女は答えませんでした。

アカデミーの掲示板に人事の告知が貼られたのは、わたしがここで働くようになってから五日目のことでした。なんでも明日、姉妹都市のジソから新しい先生がいらっしゃるのだそうです。わたしは

剣術練習場の隅で授業の開始時刻を待ちながら、校舎の中でプライマリ高学年の学生たちが話す様子を聞くともなく聞いていました。

「学科は？面白そうならとうろつかな」

「かなり面白そうだぞ。聞きたいか？」

「なんだよ、言えよ」

「聞いて驚け。新しく来る先生が受け持つのは……『異世界学』だ！」

「なにそれ！面白そう！」

「そうだろう、そうだろう」

「なんでおまえが威張るんだよ」

わたしは慌てて携帯電話を開きました。授業開始はもうまもなくでした（そして電池残量は末期でした）。わたしの胸は張り裂けそうなほど高鳴っていました。異世界学？異世界というのは地球のこゝと？それを教える先生って？すぐにでも聞きたいという思いをわたしはぐつと我慢しました。

授業が終わるとわたしはすぐに学長先生の部屋へと走りました。

学長先生はお留守でした。

「急ぎの御用でしたら戻り次第お伝えしますが」

わたしは秘書さんに大丈夫ですとお断りして学長室を後にしました。

落ち込んでなんていません。明日になれば異世界学の先生はいらっしゃるのですから。いいですよーだ。

トボトボ歩いて女子寮の見えるあたりまで来ると、黄緑色の小鳥がわたしの頭に軟着陸しました。ヒデタダ君でした。わたしは彼を人差し指に止まらせ、干し豆を与えて『偵察』の報告を聞きました。事態は進行しているそうでした。事件は起こりつつあるようです。わたしはふむ、とうなりました。

「では、彼らは気付いていないのですね？（キロロロ、ピロ、キピッ）」

「ピピピッ、キピピ、ピロッ（ウム。屋敷の周囲だけが活動範囲で

あるようだ！」

きつと、彼らは成功するでしょう。――よぞらなら間違いなく行動を起こすでしょうけれど。そんなことをして、わたしになにか得るものがあるのかしら？むしろデメリットの方が多いんじゃない……。綺麗な小鳥さんと話すわたしをプライマリの女子学生たちが瞳を輝かせて見つめていました。

「教えて差し上げるべきでしょうか。でも、そんなことをして疑われるのも。それに、あの人にはまだ利用価値がありますし……」

わたしはヒデタダ君を頭に乗せなおし、ウムウムうなりながらお屋敷へと帰るのでした。

ツバメさんのお勉強の時間が終わると、彼とお夕飯を一緒にします。このお屋敷でのわたしの立場は非常にデリケートです。主人であるツバメさんに家庭教師として雇われているのですが、彼は使用人さんたちに、わたしに対しては客分として扱うように、と言いつけているのです。執事のふりをした騎士さんなどは露骨に態度に出します。「どうしたらいいのだ？」と。そんなのはわたしの台詞ですこんにやろう、と言ってさしあげたいものでした。

夕食が終わり、さてお風呂をいただきましょうか、というところで、ふとわたしはあることに気付きました。

「……お給料、貰い忘れた」

わたしはスズメさんに事情を伝え、経理部へと向かいました。暗いから送る、と申し出てくださった彼女に、わたしは真剣な声で言いました。

「スズメさんと、できれば執事さん……お二人は可能な限り坊っちゃんまの側を離れないでください」

「それは、どういう」

「それでは行ってきますね」

外は真っ暗でした。わたしには音があるので平気ですが、少なくともこの街ではわたしのような年の女が出歩く時間ではありません

でした。

ヒデタダ君とヨシムネ君が仲良く同じ厩舎で眠っている音が聞こえました。ヒデタダ君はヨシムネ君の頭の上で寝ています。ふたりとも、元いた場所を離れ、側において安心できる相手がお互いしかないのかもしれないかもしれませんでした。

監視者もやはりいました。彼らは気配を消す達人です。父や弟と比べれば赤子レベルの未熟さですが、それでもおよそ普通に生きている人間では彼らを見つけることは至難でしょう。彼らは十人おり、うち四人がわたしの動きに目を向けていました。しきりに手を動かして合図を送り合っています。王子様の護衛をしているくらいです。皆さんよほどの凄腕でいらっしやるのでしょうか。わたしには全て筒抜けでしたが。人間の考えた合図や暗号など、動物の鳴き声のパターン解析に比べれば稚拙なものです。

『大丈夫だ。気付いた様子はない』

『気付くわけがあるか』

『しかし魔女だぞ。なにがあるかわからん』

『リロから合図があった。給料の貰い忘れてアカデミー経理部へ向かうらしい。一応、自分が後を追う』

——気付いていますよ、皆さん。

わたしはろうそくランプの頼りない灯りの中、目を閉じて校舎へと向かうのでした。

蝋燭の灯された経理部の執務室ではふたりの男性がなにやら言い争っていました。一方は経理部の職員さんで、もう一方は白い髪をした長身の男性です。彼らのやり取りは、口論というよりは、懇願と拒否の繰り返しでした。部屋の蝋燭はもう短くなっていました。この世界には魔法の火なるものもあるそうなのですが、高価なため学校では滅多に使わない、という話を学長先生から聞いています。魔法です。魔法。なんてファンタジック。一度見てみたいものです。……なんて思いましたが、お屋敷の灯りは全部それでした。わたし

が持たされたのはろうそくランプでしたけれど。

わたしはテクテクと受付に向かいました。

「だから、前借りってかたちでいいんだって。できるだろ、それくらい？金欠なんだよ今。なあ、頼むよマジでさ」

「キンケツ？マジデ？……なにを言っているのかわかりませんが、駄目なものは駄目です。給料日まで待つていただかないと」

「頼む、この通りだ！土下座でもなんでもするから！」

「ドゲ……？さっきから何を言ってるんですか。何を言われても給料の前渡しはできませんよ。規則ですので」

「なんだよお……俺に死ねっていうのかよお……」

とうとう男性は泣き始めました。とても上手な嘔泣きです。お給料の前借りを無心しに来るくらいですから、この人も先生なのでしょう。わたしが言うのもなんですが、それにしても随分とお若いようでした。おそらくまだ二十歳ぐらいでしょう。

わたしは事務員さんに声をかけました。

「すみません、今日の分の日当を頂きに伺いました」

「ナツノ先生！ああ、もう、お待ちしていましたよ！これでようやく帰れる」

えっ。

「もしかして、わたしのために、お待たせてしまったのでしょうか」

だとしたら、夏野ひるま、一生の不覚です。他人様に残業させてしまうなんて。母の一人がよく言っていました。残業もうやだ、作家がどれほど偉いんだと。わたしは母と同じ苦しみを事務員さんに味合わせてしまったのでした。なんということを。

「ああいえ、先生のせいじゃありませんよ。学長がね、言うんですよ。ナツノ先生のご機嫌を損ねるようなことがあったら、おまえはクビだ！奴隷のようにへりくだって接しろ！って。ナツノ先生はそういう人じゃない、って言うてるのに聞きやしない」

「……うひゃあ」

学長先生、必死でした。ちょっと追い詰めすぎたかもしれません。わたしの株価、暴落しないといいのですけれど。

わたしはお金をポケットに入れ、事務員さんに何度も頭を下げて部屋を後にしました。校舎の外に出たところで、わたしは声を上げました。

「何の御用でしょうか？」

背後の彼が驚く『音』が聞こえました。彼は肩をすくめて言います。

「俺もまだまだだな」

わたしは振り向き、笑ってみせました。

「足音の消し方はお上手でしたよ。気配の封じ方もまずまずでした。ただ、衣擦れがすべて台無しにしていました。次は薄着で頑張ってみてください。応援していますよ」

彼はカラカラと笑いました。先ほどの、給料クレクレ白髪の男性でした。

「いやー、かなわねえな。その年でそこまでとは」

「別に気にしていませんが、わたしはこれでも十七です」

「うっそだろマジかよ！え、もしかしてそういう……」

「病気ではありません」

失礼なひとでした。

「それで、御用は何ですか？お金ならお貸しできませんよ。たとえば友達同士でも、お金の貸し借りはしません」

「金を貸してくれ」

「……わたしの話を聞いていましたか？」

「いや、キミは貸すさ。金を貸してくれる。俺にはわかるんだ」

彼は不敵に笑いました。不思議と彼の音に嘘はありませんでした。どういう意味です、とわたしは聞きました。

しかして、彼は舞台役者のように大仰に腰を折って名乗ったのでした。

「俺の名前はシチノミヤ・リンリ。この学校で異世界学を教えることになっている。」

——飛行機が空を飛ぶ世界から来た人間だ」

強い風が吹きました。

どこか遠くで。

歯車の廻る、不愉快な音がしました。

がつこう2／ひるまとおうじとみらいじん



金貨九枚は大金である、ということわたしは声を大にして言いたいのですが、残念ながらそのような相手はいませんでした。怖いので、家族ぐらいいにしか言えないのですけれど。

オークションハウスに隣接する買取屋さん（パチンコ屋さんと換金所のような関係だそうです）で牙二本をお金にした我々《ひるま》と愉快な仲間たち》は、その足でアカデミーへと向かいました。ここで、この国で使われている文字が多少崩れてはいるものの平仮名と片仮名であることを知りました。いまさら驚きはありませんでした。この国の国号が《スズカゼ王国》で、王の姓が『アキト・スズカゼ』であることを知ったときもさほど驚きませんでした。ただなんとなく、ああやっぱり、と納得しました。

半径一キロの声から得た情報によると、わたしたちの今いるこのバビという街は、発明や研究が文化・産業の中心的役割を果たしている街——いわゆる学術都市なのだそうです。街に一つしか学校がなくてなにが学術都市か、などと日本に住んでいれば思うでしょうが、海外では意外とそんなものであったりします。この世界でもそれは変わらないようでした。

情報が集まるのはアカデミー。情報が発信されるのもアカデミー。そのようなわけでわたしはこの街唯一の学校・王立第一碩学院へとやって来たのでした。優れた技能を持っていれば教員や研究員として採用される、という情報は既に『耳にして』いました。予約が必要なのですが、そんなコネも時間ありません。わたしは街の中にいる野良犬の皆さん、野良猫の皆さん、野鳥の皆さんを片っ端から呼びまくって曲芸をしていたきながらアカデミーへと向かいま

した。往く路では見物客の皆さんからたくさんの輪銭、銅貨、時には銀貨をいただきました。是非うちの店の宣伝をしてくれ、金は払うから、というお誘いが何件もありました。アカデミーの正門に到着するころには大行列が出来上がっていました。列の中には学生さんもいました。彼らはみな同じ制服を着ていました。

正門に着いたわたしは、門番さんに言いました。

「わたくし、獣と言葉を交わすことができるのですが、その技能をアカデミーを通じて国中に広めたいと考え、ここにこうして参りました」

門番さんは大慌てで校舎へと駆けておいでになりました。

それからはあつという間でした。学長さんのお部屋へと案内され、二人で校庭に出て、そこに大鷲を呼び、頭を撫でて即採用、という具合でした。その時点では正式な教員になるつもりでしたので、学長先生に校内を案内され、最後に職員寮へと向かいました。そこで運命の声が聞こえました。わたしの耳に、『王子』という単語が飛び込んで来たのです。

「王子としてではなく、男として、一人で生きたいのだ」

「それは難しゅうございます、殿下」

「なぜ難しいのだ」

「一人で生きるにはお金を稼がなくてはいけません。それに、争いごとに巻き込まれてもいいよう、強くなくてはなりません。殿下は剣が苦手です」

学生寮の方でした。ここからは七百メートルほどの場所です。

「すぐに戻ります！」

わたしは駆け出しました。チビで運動音痴と言われるわたしですが、四十秒あれば百メートルを走れる女です（ちなみに弟は二秒を切ります）。わたしはヨシムネ君に乗ってすぐにその場所に着きました。そこはアカデミーの敷地内にある大きなお屋敷の庭でした。

赤髪赤目の少年がメイドさんらしき女性と土いじりをしていました。わたしは二人に近づき、声をかけました。

「すみません」

メイドさんの『音』が警戒をあらわすリズムに変わりました。わたしはかまわず続けます。

「道に迷ってしまったのですが、職員寮はどちらかご存知でしょうか？」

メイドさんが訝しむ目を向けてきます。わたしはここぞとばかりに畳み掛けました。

「ああ、申し遅れました。わたくし、このアカデミーで動物語を教えることになりました、ナツノといいます。いやはや、広い学校で参ります」

「動物語！？なんだそれは」

思った通り、赤髪の少年が食いついてきました。

「はい。動物語というのは、言葉通り、動物の話す言葉のことです。わたしはどんな動物の言葉でも聞き取り、話すことができるのです」少年はいよいよ目を輝かせました。反対にメイドさんは疑いの目をわたしに向けます。

「そんなことができるものですか。出鱈目を言うのはおよしなさい」わたしは大袈裟に手を広げました。

「出鱈目だなんてとんでもない！出鱈目で教師が務まるものですか。言葉で信じられないというなら、その目で見てください」

わたしは小鳥さんたちを十五羽ほど呼び、航空ショーをしていたきました。メイドさんはあんぐりと口を開けて絶句し、少年は大はしゃぎでした。

「すごい、すごい！どうしてそんなことができるのだ！こんなのは初めて見たぞ！」

「先生が良かったのです。こつさえ覚えれば簡単なこと。わたくしは二年で覚えました。わたくしのような非力な女でも、獣たちと言葉を交わすことができれば一人で生きてゆけます。芸を披露すればお金も稼げます。本当に先生にはいくら感謝してもしたりません」壊れた蛇口のようにドボドボ嘘を吐くわたしは酷い女でした。

「二年でそんなことができるようになるのか!？」

「二年というのはわたくしのような出来損ないの話です。兄弟子は半年で鳥たちの言葉を覚え、一年で全ての獣と話せるようになりました。それがふつつうなのだと先生は仰いました」

「その師は今どこにおる!？」

「亡くなりました。山でキノコにあたつて、笑い死にを……」

わたしは悲しげに俯きました。余計なことはいらないほうが良かったかもしれません。メイドさんが疑惑の目でわたしを見ていました。わたしは調子に乗ったことを後悔しました。いつもこうです。わたしは駄目な女です。

少年がトテトテとやって来てわたしの肩を叩きました。

「それは、つらかったであろうな……」

ちよろいもんでした。わたしにかかればこんなものです。幼稚園のころの夢であつた女優さんを再び目指すのも悪くはないかもしれませんが。わたしは某映画賞の助演女優賞を受賞した際のコメントを考えないようにするのに苦労しました。主演でないあたりにわたしという人間の謙虚さがよくあらわれていますが、今はそうではありません。王子様籠絡に集中しなくてはならないのです。

わたしは女優の卵の演技力を大盤振る舞いして言いました。

「兄弟子も川で洗濯中に流されて溺死。今となつては動物語を解する人間はこの世にわたくし一人となつてしまいました。そろそろ弟子をとらねばと思つていたところにこのアカデミーを見つけたのです。——ああ、優しかった兄弟子を思うと……ヨヨヨ」

「ヨヨヨ?」

「ヨヨヨ?」

二人が首をかしげました。わたしは夢から覚めました。わたしの演技力などこんなものなのです。大根役者どころかひよるひよるのカイワレ大根役者なのです。なにがヨヨヨでしょうか。なにが助演女優賞でしょうか。馬鹿じゃないでしょうか。

「ともあれ、これでわたしが獣たちと話せることは信じていただけ

ましたね？」

「ヨヨヨって……………あ、うむ！信じるぞ！」

「では、そろそろ職員寮の場所を教えていただいてもよろしいでしょうか？——空き部屋があればよいのですが」

「むっ？そなた、まだ部屋を借りていないのか？」

「そうなのです。なにしろこの街にやって来たのが今日ですから、宿の場所さえわからず。これで寮を借りられないとなれば野宿をするよりほかありません」

少年が、花が咲いたようにぱあつと笑顔になりました。

「ならば、ここに住めばよい！」

「でん——坊っちゃま！いけません！」

「よい！我が許すぞ、ここに住むがよい！弟子をとりたいと言ったな？ならばその動物語とやら、我に教えてくれ！我を弟子にするがよいぞ！」

こうして狙い通り、わたしは権力者の身内になったのでありました。メイドさんはしきりに反対を唱えましたが、少年は頑として譲りませんでした。

「なに、学長を待たせている？よい。そんなものはこちらで何とでもする。——誰ぞある！誰ぞ、急ぎ学長に伝えよ。ナツノ教諭は今日より我が家に住むとな！」

翌朝わたしは一番に学長室に向かい、事情を説明しました。学長先生は渋い顔をしましたが反対はしませんでした。昨日の夜、わたしにあてがわれた二階の部屋から一階で使用人さんたちがこそそ話す声を聞いて、王子様の置かれている状況は知っていました。なんでも、この国の王様が随分な傑物だそうで、王子様と姉姫に偽名を与えてそれぞれ別のアカデミーに放り込んだのだそうです。二人はバビとジソのアカデミーに、それぞれ来月から編入するそうでした。そんな事情をアカデミーのトップが知らないはずはありません。バビは領主のいない都市です。王の直轄領ですから王が領主とい

えばそのとおりですが、実際的にはアカデミーの学長が、王の代理として領主のような仕事（のような、というところが重要。政治的な理由です。）も兼任しています。つまりアカデミーの学長という職は領主代行とセットなのです。王様が一声「こいつだめだ」と言えば領主代行だけでなく学長の座も追われてしまうのです。そんな彼が王子様のお言葉に反対できようはずがありませんでした。

わたしは学長先生に弟を探している旨を伝えました。彼はなにか聞いたら伝える、と社交辞令をくださいました。あとはわたしが結果を出すだけです。わたしは彼に、剣術練習場の隅をお貸しいただけるようをお願いしました。

「動物語は年齢や経験に関係なく学ぶことのできるものです。一度だけでかまいませんので、どうか『自由聴講』として講義をさせていただきますだけでしょうか」

——そうしてわたしは結果を出しました。

動物と話せる黒髪の魔女の話は学校中を駆けまわり、貴族さまたちから多くのお誘いがわたしのもとへ届きました。中にはアカデミーへの寄付と引き替えに、というお話もありました。

今や学長先生はわたしの手足となって弟を探してくれるようになりました。

わたしの弟探しは極めて順調でした。



「先生、また明日も宜しくお願いします！」

「先生、非常勤じゃなく本当の先生になってください。もっと授業うけたいです」

「先生、あしたと同じ時間ですよ？明日こそは狼について話してくださいませんか？」

「ナツノ君、ウシ語についてなんだが——」
「ナツノ君、おとなの大鷲について——」

授業が終わると、わたしはすぐにお屋敷へと向かいました。そうして荷物を置き、アカデミーの外へと向かいました。ツバメさんには昨日の夜の内に、今日のお勉強を中止する旨を伝えてあります。

「弟の手掛かりが掴めるかもしれないのです」

彼はならば仕方がないな、と言って笑いました。

「我も、たまには勉強を休みたいと思っていたのだ」

嘘の音でした。健気な子でした。

十歳という幼さで、彼は既に嘘の微笑みを完璧に近いカタチで身につけていたのです。

途中、遠くから学長先生に声をかけられましたが、聞こえなかったふりをしました。アカデミーの敷地を出ると、わたしは指定されたお店へと最短距離で（もちろん弟ではないので道を歩きましたが）向かいました。小さなお店でした。店のドアには小さな木札が貼られていました。

『ふるどうぐ／りんり』

わたしはドアを押して中に入りました。

店の中は十畳ほどの、ほぼ何もない空間でした。家具も調度も何もありません。絨毯もなければすのこもありません。そもそも床がありません。床は土です。店全体が字面通りの意味で土間でした。その真ん中に、電気ケトルとアイフォンが置かれていました。

——なぜ、電気ケトル？なぜアイフォン？

「よう。待たせたか？」

背後から声がかかりました。わたしは「いいえ」と答えました。
「いま来たところです」

アカデミーの敷地内からずっと、彼がわたしの後をつけていたこ

とは知っていました。わたしは振り返りました。そこには白髪の青年、七乃宮しちのみや躑躅りんり氏が立っています。彼はわたしの背中と戸の隙間からタイミングよくするりと中に入ったのでした。

きのう、彼にお金を貸したあと、わたしはすぐさまこの世界のことを彼に問い詰めました。そのときに彼の名前の漢字も聞きましたが、それは正直なところどうでもいいことでした。珍しい名前だな、思ったぐらいのものです。

彼はこの世界を遠い昔のどこかだ、と言いました。場所はわからないけれど、過去だと。

「俺はこの世界に、ある人に会うためにやって来た」

元の世界の元の時代にはその人はもう生きていなくて、それでも会う必要ができたので飛んできたのだ、と彼は言いました。

「それは、どうやって？」

「どうって、そんなもん、魔法に決まってるだろ」

聞きたいことはたくさんありましたが、わたしは其中最も重要なことをはじめに聞きました。

「あなたの魔法で、元の世界へ帰ることはできますか？」

「言えない」と彼は答えました。「今は言えない」

食い下がりましたが、彼は首を横に振るだけでした。

「言いたくないわけじゃない。時間を渡り歩くような魔法には色々な手順や縛りがあるんだ。今、この時間、この場所は、それを言うタイミングじゃないんだ」

明日、ある場所なら言える、と彼は言いました。わたしたちは明日の約束をして別れました。

「さあ、もう今日ですよ。指定された場所です。話してください」
わたしは躑躅氏に詰め寄りました。

「わたしは元の世界に、帰れるのですか？帰れないのですか？」
彼は溜め息をつき、その前に、と言って電気ケトルを指さしまし

た。

「こいつに見覚えはあるか？」

「電気ケトルですが……それがどうかしたんですか？」

「その横のは？」

「アイフォン、ですよね？」

「じゃあ——」

彼はそう言う、ポケットから奇妙な物を取り出しました。

「——これは？」

それは奇妙としか言いようのない物でした。

形は立方体で、大きさは一般的なルービックキューブよりちょっと小さいくらい。色は銀色です。ただ、蹶裏氏の手のひらで、それはいやにグニョグニョ揺れているのです。彼はわたしにそれを放りました。わたしは咄嗟に避けてしまいました。それは地面に落ちました。

ごつ、という予想と異なる音がしました。てつきりベチャッと潰れるものと思っていましたが、落ちた音は硬質でした。わたしはそれを拾いました。グニョグニョなどしていませんでした。それは？と蹶裏氏は言いました。聞きたいのわたしの方でした。

「これは、なんですか？」

「いや」

彼はぱつとわたしの手から立方体を取り返し、コートのポケットにしまいました。

「わからないならいい。教えると、いろいろ『バグる』」

「どういう意味ですか？」

「俺とキミは、同じ世界の違う時代から来たってことさ」

わたしはゴクリと唾を飲み込みました。

「それは、わたしにとって未来の道具なのですか？」

「そうだ。そしてどうやら、俺はキミにとって未来の人間らしい」

その後、蹶裏氏はこの世界と元の世界の繋がりについて、彼の知

ることを語りました。

彼の生きていた時代にはある『化け物』がいました。それは人間なのですが、人間とは思えない不思議な力を持っていました。そういう不思議な力を持つ人間がその時代にはいました。もちろん表の世界には出てきませんでしたが、確かにいたのです。化け物はその中でも特に不思議な力を持っていました。

「不思議と言っても、魔法の類じゃない。魔法には魔法のルールがある。条件を満たして、代償を支払わなくちゃ魔法は魔法にならないんだ。だけど奴の――奴らの力には代償が無かった。何も無いところから火を出したり、術も唱えず体を紐状にほごいたりするんだ。その中でも特に不思議な、原理のまったくわからない力を持った連中を、俺たちはカミヤドリって呼んでた」

躰裏氏のいた未来には魔法を研究する人たちの組織がいくつもあったと言います。もちろんそれらは秘密の組織で、表向きはパチンコチェーンだったり、おもちゃ会社だったり、携帯電話会社だったり、アフリカの子どもたちを支援するという名目で設立された財団であつたりしたそうです。いくつもある魔法研究の組織は化け物を恐れました。

「別にそいつがなにか悪事をはたらいたってわけじゃない。基本的には、身内に害がない限り部屋から一步もでないような安全な奴だつたらしい。ただ、そいつは自分の『島』に仲間を集めていたんだ。何万人も、何十万人も。その全員が、小さいとはいえ『不思議な力』を持つてるんだぜ？何もしなくてもおっかないさ」

たくさんさんの組織が化け物の『島』に監視役を送り込みました。化け物はそれを拒みませんでした。ただ化け物はすべての組織に対し、次のように言つたそうです。

「ただし干渉はするな。こちらもおまえたちに干渉しない」

島はいたって平和な小世界でした。政治があり、経済があり、道徳がありました。島民たちが化け物を神として崇めている以外は極めて『まとも』な環境でした。神云々にしても、化け物は宗教的戒

律を定めるわけでもなく、島の人々の前に姿を現すこともありません。島民が勝手に宗教をつくり、信仰の向かう先を化け物に定めただけの話でした。そこに神はいません。キリストやイスラムよりよほど健全な経済活動でした。

あるとき、島にいた、ある組織の監視役が問題行動を起こしました。島民に対するヤクザまがいのみかじめ要求です。自分たちがきちんと報告してやっているからこの島は平和でいられるのだ。それが彼の主張でした。翌日、彼は地球の裏側で発見されました。彼は魔法に関することを何も覚えておらず、もちろん組織や化け物のことも覚えていませんでした。彼はダミー企業の、カムフラージュで用意された役職の仕事内容をスラスラ答えました。脅されている様子はなく、薬物をつかって自分を強要してもそれ以上のことは語りませんでした。「あんたたち、誰だ？ バカンス中なんだ、ほっといてくれよ」。彼はそう語りました。

これに対し彼の組織は抗議しました。彼らは化け物に対し、情報の開示を要求しました。翌日、組織はただの大手自動車保険に戻っていました。組織の誰一人として魔法に関することを覚えていませんでした。「ご新規の契約をご検討ですか？ それとも、コース変更でしょうか？」。そう語るかつてのトップを見て、他の組織はいよいよ恐れをなしました。化け物は時間を操り、人の歴史を変えている、と。

彼らがそのことについて組織間の垣根を取り払った合議を始めたその瞬間、化け物の島は忽然と地球から姿を消しました。

「信じられるか？ 島が一つ消えたつてのに、ニユースにもならなかったんだぜ？ 誰も気付いてないんだ、島が消えたことに。覚えてないんだ、そこに島があったことを。——組織の奴らでさえな！」

化け物や魔法のことを覚えていたのは、組織に属さない一匹狼たちだけでした。蹯裏氏の魔法の先生もそうであったといえます。彼はある日、蹯裏氏を一人残し、妻と一緒に消えました。前日、彼は蹯裏氏にダイヤの指輪を渡していました。「私を奴を追う。奴の向

かう先は知れている。先回りして驚かせてやろうと思う」——彼は楽しそう笑ってそう言いました。「もしもおまえが私を追ってくるなら、その指輪が役に立つだろう」

「師匠と化け物は親友同士だったらいい。師匠の日記を読んで知ったよ」

そうして蹶裏氏は先生の日記やレポートをもとにして魔法を作り出しこの世界へやって来たのでした。

「指輪は座標だったんだ。まったく同じものを師匠の奥さんがしてる。それを探るためのものだったんだ」

ひととおり話し終えると、蹶裏氏は電気ケトルを持ち上げて、その取っ手をわたしに見せました。

『ばらぐみ・ふるやさとる』

そこには可愛いしいシールが貼られていました。

「可愛いじゃありませんか。子どもって、どんなところにもシールやテープを貼ってしまいますよね」

「古谷サトルは最初に潰された組織の研究員の名前だ」

わたしは絶句しました。

次に彼は 아이폰 の電源を入れてわたしに画面を向けました。電池が残っているのも驚きですが、さらに驚いたのは次に彼の放った言葉でした。

「この電話帳、『会社』フォルダにある名前が——全部、潰された組織の名簿と一致するんだ」

彼は眉間に皺を寄せて無理やりに笑いました。

「たぶん、この世界には、化け物が時間を操って人々の歴史を改竄するうえで、不都合だったものが送られてきているんだ。時間を扱う魔法には縛りが多い。化け物のそれが魔法だったかどうかは別にして、俺たちにわからないルールや縛りみたいなものがあつたんだろ。俺がこの世界で見た元の世界の物は、どれも子供の頃から大切に使っていた雰囲気のあるものとか、習慣で肌身離さず持ってい

るようなものだった。もしかしたら、記憶とか、心とか言われる曖昧な要素が関与しているのかも知れない」

話は本題に入ります。私はずっと我慢していたことを聞きました。「あなたは、元の時代とこの時代を自由に行き来できるのでしょう？それを使ってわたしを元の世界に送ることはできませんか？」

「無理だね。俺のは一回こっきり。準備に五年を費やして、寿命を二十年も代償にして、それでようやく可能なパチモンだ。しかも、それだけのことをして到着座標が一年もずれてやがった」

寿命二十年って……それ、ちよつと奮発しすぎじゃないでしょうか。

「それじゃあ、どうやって元の時代へ？」

「別に、俺は戻るつもりなんてねえよ」

脳みそを強くかき混ぜられたような気分になりました。

「それでは、戻る方法は……ないのですか？」

「そうがっかりするなよ。言ったろう？俺の魔法はパチモンなんだ。オリジナルを頼ればいい」

「オリジナルの魔法を扱う人——そうか、あなたの先生がこの世界にいるんですね？」

「いるはずだ。けど、時間がずれちまったから、師匠にはそう簡単には会えないだろう。そうなると、半年後にこの世界を訪れる化け物に頼むしかない」

「半年？ずれたのは一年じゃありませんでしたか？」

「俺はもう半年この世界で暮らしてる」

「それは、なんというか、ご愁傷さまで……」

「……まあ、何にせよ、化け物は師匠と同じか、似たような魔法を使えるはずだ。帰りがかったらそいつに頼むんだな」

「その化け物というのは実際には、どんな人なのか？つまり、名前とか容姿とか」

「黒い——悪夢のように黒い姿をした子どもらしい」

彼は言いました。

「――鈴風秋斗。」

それが、時を操る独裁者の名前だ」

躑躅裏氏と別れ、のろのろとした足取りでお屋敷へ向かいながら、わたしは祖父のことを考えていました。

――おじいちゃん。あなたはいつたい何者なの？

――あなたがわたしを、ここへ呼んだの？

――あなたは、何を願って仲間を集めたの？

考えても答えが出ないことは知っているのに、考えずにはいられませんでした。

《ふるどうぐノリンリ》を出る間際、わたしは躑躅裏氏に聞きました。なぜわたしに声をかけたのかと。彼は戸惑いの音を混せて答えました。

「自分でもよくわからない。たぶん、この半年、俺は寂しかったんだと思う。……そういうことにしとく」

弟に似ているような気がしました。真っ直ぐなところと、臆病なところが。

アカデミーの敷地に入っすぐに、わたしは変事に気付きました。とうとう来たか、とわたしは思いました。

夕焼けの道をわたしはお屋敷に向かって歩きました。

お屋敷の灯りは全て消えていました。

庭にはそれぞればらばらの位置で十人の男性が倒れていました。

お屋敷の周囲とわたしの監視をしていた方々です。

そして、刃物を持った25人の男性が、メイド服姿の女性と赤髪の少年を囲んでいました。

そこから少し離れたところで、一人の男性が腕を組んで笑ってい

ました。

それ以外には誰もいません。ここに来るまでの道でも、わたしは誰ともすれ違いませんでした。

——ああ。危惧した通りの展開になってしまった。

わたしは彼らからかうじて見えるであろう位置に踏み込みました。

「こんにちは」わたしは言いました。「もうすぐ夜ですね」

庭にいる、意識のある全員がこちらを振り向きました。

離れた位置で腕を組んでいた男性が、驚愕に顔を歪めました。

わたしはかまわずお屋敷の庭へと入り、彼に向かって笑いかけました。

「挨拶にはお返事をくださいな——学長先生」

がつこう3ノひるまとおうじとあんさつしゃ

■ ■ ■ ■ □

お屋敷の庭をずんたか歩きながら、わたしはこの場をわたしなりに収めることを決めていました。

正直に言えば、面倒です。

別段メリットもありません。今のところ、このお屋敷よりも学長先生とその権力の方が役に立っています。

それでもわたしは、やる気でした。ここで逃げてしまったら、今後二度と弟を直視できなくなるような気がしたのです。

——あれでよぞらは、救いを与えない強者を嫌うからなあ……。

「ヒルマ、逃げろ！来るな！」

ツバメさん——ノギオム王子が叫びました。

わたしは薄く笑いました。

一番上の子だからでしょうか？幼い頃から、どうにもわたしはアマノジャクなところがありました。

助けると言われると、助ける気が起きません。

助けるなど言われると、意地でも助けたくなくなってしまいます。

「ああ——本当に」

——自分が死にそうなときに、逃げろ、だなんて。

——ちゃんと、男の子してるじゃありませんか。

「可愛いなあ、もう」

——ほんとうに。小さな頃のよぞらみたい。

「ヒルマ！逃げろ、早く逃げろ！そなたは関係ない！」

リロさんに守られながら、絶体絶命のくせにノギオム王子は叫びます。わたしは答えず、軽い足取りで学長先生の前まで歩きました。そしてにこりと彼に笑いかけます。

「学長先生、弟は見つかりましたか？」

学長先生の音に恐怖が混じるのがわかりました。すぐ側には剣を構えた屈強な男が二十人以上もいるというのに、なぜ今、この女はそんなことを聞くのか？そんな顔、そんな音をしていました。目は完全に、異常なものを見るものでした。

「ああ……いや、まだだ。まだ、連絡は無い」

学長先生は一步退きました。わたしはその一步を、すぐに詰めます。

「そうですか。でも、もういいです」

「どういう意味だ。私は——」

「もう。いいのです。今までありがとうございました」

「何を言っている？——ナツノ君。そもそも、どうしてキミがここにいるんだ？結果は……」

——結果？

——ああ。学生寮の側を通る時に聞こえた、あの不愉快な音ですか。

わたしはくすくすとわらいました。

「なにがおかしい」

学長先生が言います。わたしはなおも笑い続けました。

あの程度の音で、わたしの行く手を阻むことができると考えた、彼の愚かしさがおかしくて。

王子とリロさんを囲む男の一人が、ザリと音を立てて一步内側に踏み込みました。リロさんが牽制に槍を振り回し、それを遠ざけます。一進一退とは既に言えません。輪は限界まで小さく縮んでいきます。誰か一人が犠牲になる覚悟を決めれば、剣はすぐにも王子に届くでしょう。わたしは溜息をつきました。

「執事さん——いえ、騎士さんは出掛けていらっしゃるんですね。

リロさん、助けが必要ですか？」

場がざわめきました。

リロさんは敵に集中していて目をこちらに向けません。なぜ自分

の本名を知っているのか。なぜ自分を助けるのか。そんな間がありました。やがて、彼女は小さな声で言いました。

「……頼む。殿下だけでも」

わたしは学長先生に向き直り、笑みを深めました。

「学長先生。そういうわけで、今からわたし、あなたの敵です。やっぱり悪い人の下では働けません」

「キミは——」

学長先生が言い終えるより先に、わたしは口を開きました。

「
××××× ×××××× ××××××」

ガッン——、と。

学長先生が自分の顔を全力で殴って倒れました。

わたしの口から音は出ていません。すくなくとも人間が音と感じる音は、出ていません。

男たち——今やわたしの敵となった彼らの体から、驚きの『音』

が聞こえてきました。それは心臓の音であり、呼吸の音であり、発汗の音であり、瞳孔の開く音でもありました。

「今、何を——」

「何が起こった!？」

ざわめきが広がります。

敵さんたちの内二人が声を発します。それを見逃すり口さんではありませんでした。槍を突き刺し、二名の敵さんを行動不能にしました。見事なものです。一流と言っているでしょう。弟やわたしのような『化け物』が相手でさえなければ、一対一ではまず負けないのではないのでしょうか。

学長先生は気を失っていました。自分で自分を殴って気を失うなんて、おかしい人です。わたしはくすくす笑いました。

「次は——あなたたち、いつてみましょうか」

わたしは敵さんたちの内三人に向かってテクテク歩きます。恐慌

をきたしたように、三人はリ口さんに背を向けてわたしに向かってきました。一人が素早くわたしに斬りかかります。彼の剣がわたしに迫ります。――ああ、でも、少しだけ、速度が足りない……。

「勇敢なひと」

呟いて、わたしは再び大きく口を開きました。

ザクリと音がしました。私の顔に血しぶきがかかります。私を斬ろうとした男性は、自分で自分の胸に剣を突き刺して口をパクパクさせていました。彼は小さく口を動かします。声にならない声を、それでもわたしの聴覚は聞き取りました。

『なにがおこった？』――彼はそういつて絶命なさいました。

残る二人がわたしに迫ります。わたしはみたたび口を開きました。彼らにわたしの叫びは聞こえません。突然ふたりは互いの首に向かつて剣を突き刺しました。頸動脈をすっぱりいかれたお二人は、どちらも三步ほど素敵なステップを踏んでお倒れになりました。

いよいよこの場の全員がわたしに目を向けました。敵視です。彼らの音は語ります。あの小さい女こそが最大の敵だと。わたしは彼らに向けて、ためらうことなく一步二歩と進んでいきます。彼らもまた一步、二歩とさがりました。その隙に、リ口さんは王子の手をひいて彼らの輪から抜け出すことに成功しました。彼らにとっては逃げられたかたちです。だというのに、敵さんたちは誰もリ口さんを――いえ、殺害目標であるノギオム王子を追いません。

一団のリーダーさんらしき男性がようやく口を開きました。

「貴様、何者だ」

わたしも口を開きました。そして彼らには聞こえない叫びを放ちました。

「ゲガッ」

夏の田圃道で車が大きな力エルを踏んでしまったときの、あの声を出して、リーダーさん（仮）は絶命しました。――首には自分の剣が刺さっていました。

「反射運動って、ご存知でしょうか？」

わたしはトコトコ歩きます。敵さんたちがわたしを囲みました。ひいふうみい……全部で19人ですね。わたしはかまわず続けます。離れた位置で、リロさんとノギオム王子が目を大きく開いてわたしを見ていました。

「反射運動というのは、動物が特定の刺激に反応して意識せずに動く、その動きのことを言うのです。——ツバメさんにはお教えしましたよね？」

ノギオム王子は口を開いたり閉じたりしたあと、やがて決心したように言いました。

「膝を叩くと、あしがぴょんと跳ね上がる——あれのことだな」

わたしは「正解です」と言って笑いました。敵さんたちがジリ、とすり足でわたしに近寄ります。

「反射運動には、体性反射と内臓反射があります。難しい話を省いて言うと、骨を動かすための筋肉を収縮させるものと、内蔵を収縮させるものです。——これは、わたしの世界の医学でも全てが解明されているわけではありません」

「ヒルマの、世界？」

王子が呟きました。

「人間や動物に限らず、あらゆる物には固有の振動数というものがあります。これは、単位時間にそのものがふるえる回数だと思ってください。その振動数で揺すられるとその物は強く反応して激しく揺れますが、固有振動数からずれた力を加えてもあまり反応しません。たとえば、自然に振らせたときに2秒で1往復する振り子の場合、2秒に1回の速さで押せば揺れはほとんど大きくなりませんが、1秒に3回の速さで押してもあまり揺れてはくれません。このように、すべてのものには苦手な『揺れ』があるのです。これは人間にも適用される理屈です。たとえばこのように——」

わたしは一人の敵さんに向かって『叫び』を發しました。彼はビクンと痙攣し、『反射運動のような速い動き』で頸動脈を切って自害しました。血が舞いしぶき、敵さんたちが一斉に剣を構えました。

わたしは説明を続けます。

「——その人間の各部の固有振動数を正確に把握し、構造を完全に理解し、反射運動を知り尽くし、それを引き起こすような『揺れ』を加えてやれば、——それだけでほら。こうして手を触れることなく人殺しをすることも可能なのです」

わたしは敵さんたちに近づいてゆきます。彼らは今や耐震を無視して作ったビル模型のように震えていました。わたしは彼らに言いました。

「体を動かしたら殺します。嘘をついたら殺します。正直な発言と呼吸だけを許可します。さあ、わたしの質問に答えなさい」

こうしてわたしは彼らの口から、今回の事件のあらましを聞くことに成功しました。殆どは既に知っていたことでしたが、重要な情報もいくつかりました。途中、耐え切れずに襲いかかってきた一名と虚偽の発言をした二名が自死するというアクシデントはありましたが、それ以外は順調に進みました。

暗殺者の皆さんは、今日の決行は決まっていた、と言いました。

ノギオム王子を暗殺するにあたり、壁となつて立ちはだかる問題は四つありました。

一つ目はリロさんと騎士さんです。彼らはかつて凄腕の殺し屋であつたそうです。これはわたしも知りませんでした。リロさんと騎士さんのどちらか一方ならばともかく、二人が揃つていては、一人が王子を守つてもう一人が自由に動く、ということができません。これが最大の問題でした。どちらかを王子から離す必要がありました。二つ目はアカデミーの人の多さです。これは解決できない問題ではありませんでした。学長の権限で、学生寮の大規模清掃などと偽つて、王子のお屋敷から離れた建物に移動させてしまえばいいのです。アカデミーには使われていない建物や部屋がたくさんあります。一日ぐらいでしたら、学生たちはお泊り気分であらう、と思われました。そして実際そうになりました。その後は結界を張ってしまえば誰も入れません。結界というのは魔法がどうこうと言ってい

ましたが、これはあとで基礎魔法学の先生から聞こうと思います。

三つ目は影から王子を警護する十名のシノビ（あの人たち、シノビというそうです）です。これは、お屋敷の周辺で小さな問題を起こし、出向いたシノビを各個撃破する手筈になっていました。そしてそれは成功しました。

四つ目はわたしでした。今回の王子暗殺の依頼主は学長先生でしたが、彼にも依頼主がいました。その依頼主は王都におり、暗殺を成功させたのち、学長先生は王都に向かうことになっていました。その際、彼は『動物を自在に操る娘』を依頼主への土産にするつもりでした。そのためには、わたしに暗殺の現場を見せるわけにはいきません。本来の予定では、今日、わたしは学長に呼び出されることになっていたそうです。

決行の日、学長先生は王様への手紙を騎士さんに持たせました。

「非常事態だ。何者かが国王陛下のお命を狙っている。すぐに伝えてほしい」

騎士さんはノギオム王子の護衛でしたが、直接に剣を捧げた主人は王様でした。彼は疑うことなく王都に向かいました。

次に学長先生はわたしに声をかけました。ところがわたしは七乃宮躰裏氏と会うために急いでいたので、聞こえないふりをしてアカデミーを出て行ってしまいました。計画は変更されましたが、これは些細な事であるはずでした。すぐに結界を張ってしまえば、戻ってきてても学生寮を越えられないのですから。

そうしておよそ計画通りと言ってよい流れで暗殺までの道程は進みました。シノビの皆さんも街の浮浪者さんなどを使って各個撃破することができました。

しかし、全てがうまくいくように思われたとき、わたしが現れました。

そして、全ては台無しにされたのです。

「ぐ……っ……」

学長先生は三度目のビンタで目を覚まされました。

「具合はいかがですか、学長先生？ いかがであつても口を割つていただきますが」

わたしの横でリロさんがビクツとふるえ、ノギオム王子を背に隠しました。それを見てわたしは苦笑します。怖がられたものでした。「学長先生。あなたの雇い主は誰ですか？ あなたに王子を殺すよう命じたのはどこのどなたですか？」

学長先生はウツ、と唸って体を起こしました。そして、周囲に目をやり、絶句されました。彼の周りには24人分の死体が横たわっていました。わたしはニコリと笑い、手を広げてお見せしました。「暗殺者の方々でしたら、一人を除いて皆さん自死なさいましたよ？——実行犯の証人なんて、一人いれば充分ですものね？」

生きている一人はリロさんが縛つて転がしてあります。

学長先生は「殺さないでくれ、殺さないでくれ」と繰り返しながら何度も頭を下げました。

「殺しませんよ。殺しませんので、全て話してください」

学長先生は、今度は許してくれを繰り返しました。埒が明かない有り様でした。リロさんがスカートの中からナイフを取り出して（はしたない！）わたしに言いました。

「尋問ならあたしの領分だ。あたしがやる」

わたしは手を掴んで彼女を制しました。「わたしが始めたことですから」

学長先生は助かった、という顔をなさいました。わたしならばリロさんのように暴力で解決するようなことはない、と思ったのでしよう。わたしはリロさんに振り返りました。

「リロさん、学長先生の両手を抑えてください」

「かまわないけど」

リロさんは学長先生の後ろに周り、彼の両腕を捻り上げ、地面にうつぶせに倒しました。学長先生はグツ、とひとつ声を上げましたが、我慢したようでした。ノギオム王子がわたしの袖を引っ張りま

それにも気付かない様子で、学長先生は両目を抑えて地面を転がり続けました。

「な、なななな、なにをしたのあんた！こんなの、見たことない！どんなクスリを使ったのっ！」

リ口さんがわたしを掴んで叫びます。ノギオム王子はわたしの腕を抱いてガタガタ震えています。わたしは答えず、学長先生に近づきました。

「眼の奥が痛いですか？死ぬほどに痛いですか？——それが群発頭痛の苦しみです」

群発頭痛。

それは、未だに人類の医学が原因も治療法も説明できていない『痛み』の一つです。目の裏側を通る血管が拡張し炎症を引き起こすため、目の奥に地獄のような激痛が走ります。群発頭痛による痛みは出産のそれよりもなお痛いと言われ、心筋梗塞、尿路結石と並び、人間が生きているうちに味わえる三大の痛みの一つとされています。目玉をギザギザのスプーンでえぐられるような痛みに耐えかねて自ら命を絶つ者が年間何人もいるため、「自殺頭痛」の別名でも呼ばれています。

わたしは——この発生するメカニズムを『音』によるアプローチから既に説明していました。

「痛い、痛い痛い痛い、痛い痛い、痛い助けてくれ助けてやめていたい死にたくない痛い痛い燃える焼ける痛い死ぬ死ぬ死ぬやめて痛いあああああああああああああああああああああああああああああああああああッ！」

学長先生は目を何度も何度もこすりながら叫びます。しまいには胃の中のものを吐瀉し、顔はよだれと涙と鼻水とゲーで酷いことになっていました。

「ま、こんなものでしょうかね」、
わたしは転がり続ける彼に『叫び』をぶつけ、痛みをとめてやりました。

先ほどのまでの暴れようが嘘だったかのように、学長先生はピタリと動きを止めました。一瞬、死んだか？とも思いましたが、すぐにゲホゲホと咳をし、ゼエゼエと荒い呼吸をはじめました。わたしは彼の頭を爪先でツン、とつつきました。

「話す気になりましたか、学長先生？これ以上は気が咎めるのです」

次はもっと酷いぞ、と言外に告げます。もちろんそんなことは不可能です。これ以上の痛みをわたしは知りません。しかして学長先生は言ったのでした。

「……言う。……全部話すから、もうやめて」

こうして、王立第一碩学院学長による、スズカゼ王国第一王子ノギオム・アキト・スズカゼ暗殺未遂事件は幕を閉じたのでありました。



ある騎士の独白

事件はおおむねの解決をみたといってよい。

私は己の未熟を恥じる。あんな・・・などに騙され、王子殿下を危険に晒したのだ。あの・・・が卑劣かつ用意周到であつたことを言い訳にはできない。敵が卑怯だから勝てませんでした、では騎士は務まらない。全ては私の未熟が招いた結果である。汚名をそそぐべく、今後はより一層厳しい鍛錬を己に課すつもりである。それにしてもあの・・・は許せんが。

黒き魔女にはどんなに感謝してもしたりない。たった一人で二十以上の暗殺者をばったばったとなぎ倒し、王子殿下暗殺を阻止したのみならず、元学長リドレイを拷問し、悪の大元までもを暴いた功

績は陛下も高く評価しておられた。いずれ何らかの形で褒美が下るであろう。叙爵されても反対の声が上がらぬことは明白である。

リドレイに王子殿下暗殺をけしかけた人物は陛下の愛妾《青のルフォー》であった。なぜ彼女がそのような行動に出たか、理由は不明である。ルフォーと陛下の間にはお子が無いことであるし、女として思うところがあつたのであろう、とはリロの言である。

ルフォーはリドレイに取り引きを持ちかけた。彼女はリドレイに「王都で新しくアカデミーを作る計画がある。その終身的な学長の座を用意する」などと語つたらしい。リドレイはすぐに飛びついたそうである。リドレイは、自分の立場がいつ奪われるとも知れないことに怯えていた。どうやら奴は財よりも色を好む性質であつたようである。それも娼妓などでなく、男を知らぬ若い娘をだ。王立碩学院の学長という役職にはそれを自由にできるだけの力があつたということであろう。王都で終身学長の座を手に入れば怯えることなく未成熟な娘たちを抱ける、と考えたそうであつた。奴の手つきになつた少女たちのことを思うと胸が痛む。

今回の件のあとすぐに、碩学院入学に際して、王子殿下はその名を偽らぬものとして話がまとまつたそうである。理由は不明であるし、頭の痛い話であるが、私は今度こそ私の職務を果たすつもりである。

気にかかるのは、王位などに興味は無いと仰つておられた殿下が、今やすすんで『王になるための勉強』なるものをしてのことである。リロ曰く、殿下は黒の魔女に誰よりも高い椅子を与えたいのだそうである。そのためならば王にさえなつてみせる、と。少年の時の恋心とはこうも熱いものであるのかと私は大いに驚いた。どうでもよいがわたしはいつ初恋とやらをするのであろうか。

おや？

リロが睨んでいる。なぜであらうか。

どりよく／しんやとみことみじゅくもの



参道の石段をあがって鳥居をくぐると、昨夜の雨でできた水溜りが迎えた。俺はそれを跳び越え、ついでにそのまま石狐も庭も跳び越えて賽銭箱の前に着地した。そうして用意してきた五円玉を放れば今日の俺は文無しである。

「巫女、いるかあ」

ガラガラを引つ張って拝殿に声をかける——見事に縄が切れた。慌てた俺は切れた縄を床下に押しやって隠した。行動は迅速だ。隠蔽を終えて溜息を一つ。背後から頭を殴られた。

「なにしてる、この罰当たりが」

振り返ると、今代の《亜鎌》が竹箒を構えて立っていた。箒の柄には『亜鎌神社』と彫られており、ご丁寧に振り仮名までふられている。

——あかまじんじゃ。

俺は頭を抑えて抗議した。

「せめて柄で殴れ。髪が葉っぱだらけになったぞ、どうしてくれる」

「黙れゆるふわ」

「ゆるふわ……」

「性懲りも無くまた来たか。何度うちの神社を壊したら気が済むの。宮大工がどれだけがめつか、あんた知ってるの？知らないでしゅう。びつくりするような額、賠償させてやるんだから」

「ゆるふわ……いや、奴らは奴らで何年も修行して大工になったんだ。自分の仕事に相応の対価を求めるのはなにも間違っちゃいないだろう。……金は払うが」

「第三者ならあたしだってそう言ったでしょうよ。でも駄目。あた

しは当事者なの。お金を出すのはあたしなの。あたしの財布からお金を持つてく奴はみんながめつく見えるのよ」

実に正直な女だった。

俺は本題を切り出した。

「ところで、今日は頼みがあつて来たんだ」

「イヤよ。帰りなさい。あたしは忙しいの」

「五百でどうだ。明日には用意できる」

「さあ上がつて。汚いところだけど。羊羹があるのよ、栗のやつ。食べるでしょう？」

本当に正直な女だった。

畳に腰をおろし、茶袱台を挟んで向かい合う。ひといきに事情を話し終えた俺は薄い茶をすすって息をついた。羊羹は巫女が一人で全部たべた。――ふむ、と巫女は言った。

「なるほどねえ。最近ひるまちゃんもよぞらの馬鹿も来ないと思つたら、そういうこと。ほんとう、あんたも薄情な男よね」

「あれは決まっていたことだ。どうにもならなかった」

「それでもなんとかするのが親つてものでしょう」

「俺はもう、ずいぶん前にバターナイフを失くしてる」

「あたしは今も箒を持つてるわ。知ってるでしょ？」

「キミを犠牲にしるというのか」

「あたしを犠牲にするべきだったのよ」

亜鎌の巫女はカラリと笑つてそう言った。

「子どもと友人を測りにかける親がどこにいるの。あんた、あの子たちの父親なのよ？」

十五の少女に叱られる。

「そんなことはわかつてる」

俺は出廻らしを飲み干した。

――わかっているが、それでも、目の前のこの娘より、あの二人の方が生き残る確率があるように思えたのだ。

「どっちもほしい、選べない。そんなのは子どもの我が儘よ」

内心を見透かしたように巫女が言う。わかってる、と俺は繰り返した。わかってなどいない。

ただ、そうすることしかできなかったのだ。

ひるまとよぞらがこの街から——この世界から姿を消して、すでに一ヶ月が経過していた。行き先は知れている。かつて俺も行った場所だ。忘れられたもの、選ばれてしまった者が無より招かれる——そんな世界。その場所の名を口に出す者はいない。それは恐れではなく忘却から。その記憶の不在から。

向こう側に触れた者、行って戻ってきた者はその全てを忘れてしまふのだ。

そこがどんな場所であつたのか。誰と出会い、何を見て何を知つたのか。どんなことを思つたのか。——それら全てを忘れてしまふ。残るのは結果だけ。自分はその場所に行き、帰つたのだと。そんな記憶だけが残る。だからその世界のことを——《あちら側》のことを、こちらの人間は誰も知らない。

ひるまとよぞらがあちら側に招かれることは知っていた。

十一年前のあの日、二人は虹を越え、白い海で《彼女》に会つたのだ。そうして選ばれた。正確には、選ばれたのはひるまだけで、よぞらは無理やりついて行った形だが、あれは自分の手で勝ち取つた。あちら側に招かれた者たちの共通点として、事前にあの海で彼女からなにかを貰っている、というものがあつた。

俺は子供の頃にバターナイフを。ひるまは十一年前に『おはじき』を。よぞらも、隠してはいたがその時になにかを貰つたはずだ。あの海で彼女からなにかを貰つた人間は、およそ十年後にあちら側へと呼ばれ、一年ほどして戻つた時には例外なく『不思議な力』を持っていた。この不思議な力を持った人間は、ある大きな組織においては《カミヤドリ》などと呼ばれていた。そうした一連の流れは俺の知る全てのカミヤドリに共通していた。あえて言うなら目の前の

巫女だけが変わり種で、彼女は五年前、『彼女』から竹箒を貰った二日後にあちら側へ呼ばれ、三日で戻った。その際に持っていた力は、現在八人いるカミヤドリの中でも特に強力なものだった。

それじゃあ、と巫女は言った。

「頼みつつというのは、神主のことね？」

俺は頷いた。

「あの神秘主義者の爺さんが、どこにいるのか教えてほしい。キミなら知っているはずだ」

彼の特殊な『目』なら、二人の居場所——その正確な座標がわかるかもしれない。

巫女はウーン、と腕を組んで唸った。

「無駄だと思うわよ？あの人、もう人間として『閉じてる』から、人間の理屈じゃ動かないもの。痛みからも解き放たれて、生きることに執着はないみたいだから、拷問したって気付いちゃくれないわ」

「可能性はゼロじゃない」

「止めやしないけどね」

彼女は日めくりカレンダーを破り、その裏に目当ての老人が住む場所までの地図を描いてくれた。それは存外近場だった。我が家のすぐ側——というか敷地内だ。はて、こんな場所に家などあっただろうか？

「まあ、いいか。これならすぐに行けるな」

「どこがよ。ここから車で二時間はかかるわよ」

「直線で走れば30分だ。今日もここまで25分で来たぞ」

「馬鹿が……。屋根の上をチーターみたいな速さで走ってるとこんなか見つかってみなさい。今度こそカミシロの宗家が動くわよ。ただでさえあんた目立ってるんだから」

走りでチーターごときに遅れはとらないが——ともあれ。

「まあ、気を付けるよ。いまさら俺なんかにちょっかい出してくる奴はいないと思うが」

「あのねえ。これまであんたに顔を潰された奴が何人いた？自分が恨まれてないとも思ってるんじゃないでしょうね？もう引退してるとは言え、連中、理由を手に入れたらそんな事情は無視して行動起こすわよ」

「気を付けるさ」

「どうかしらね」

巫女は少なくなった湯のみに茶をつぎ足した。

「あ。茶柱」

「本当か！？くれっ！」

「子どもか！」

帰り際、巫女が紙袋を手渡してきた。

「これ、持って行きなさい。もしかだ神主があたしを覚えていたら役に立つかもしれない」

中には小さな木箱が入っていた。開くとエーデルワイスが流れた。オルゴールだ。

「いいのか？」

「あっても邪魔なだけだもの。今度はお饅頭の一つも持って来なさいよ」

俺は礼を言つて境内をあとにした。

石段の手前まで歩いたところでふと思いたつ。俺は振り返り、巫女におーいと手を振った。

「妻の一人が、漫画とかアニメとか、大好きなんだが！」

「それが、どうしたのよお！」

巫女も大声で返す。

「キミのような奴を、ツンデレというらしい！」

巫女は一瞬きよんとしたあと、ゲラゲラと笑い出した。

「あんたには、デレないわよ！この、クソジジイ！」

家の山まで来たところで、見慣れたなさけない背中が目に入る。不肖の弟子だった。俺は気配を消して近づき、彼の頭をはたいた。「げぶろっファ！」

彼は失敗した竹とんぼのように不細工な飛びかたで地から足を離れた。空飛ぶ彼の両肩をリフティングの要領で優しく蹴り（彼はボゴゲラ！ムゴフォ！と異国語を叫んだ）、頭から落ちないように調整してやる。結果、俺は彼を尻で着地させることに成功した。

しばらく尻を押さえて悶えた彼は、やがて立ち上がり、叫びながらこちらを振り向いた。

「なにするんですか師匠！死ぬところだった！」

「なんだ、振り返る前に俺だとわかったのか。成長したな。もう卒業でいいんじゃないか？手を出しなさい。これは我が流派に伝わる秘伝の武器で、自由自在に火を出すことができる。キミに授けようさあ、これで免許皆伝だ。どこへなりと行くがいい」

「百円ライターじゃないですか。しかもガス無いし。なんですかこのゴミ、どこで拾ったんですか。それから師匠に流派なんてないでしょう。何を言われても俺は修行をやめませんよ」

「ちっ」

「舌打ちされた！？」

「ジュール」

「舌なめずりまでされた！？」

「ところで、キミはまた懲りずにひるまに会いに来たのか？」

「あ、普通に話を続けるんですね」

「妹君にも何度も言ったが、あれとよぞらは今、旅行に出ているうしばらくは帰らないぞ」

「しばらくって、どれくらいですか」

「しばらくはしばらくだろ。正確なところは俺にもわからん」

「そんなの、ただの家出じゃないですか！」

「そうとも言っな」

「そんな……」

彼はこぶしを強く握って俯いた。実直な少年だった。

咲坂シホウは娘のひるまに懸想している少年だ。未だに軽自動車一台も持ちあげられず、百メートルを走るのにはなんと9秒もかかる貧弱者だが、努力家ではあった。「弟子にしてください」と門を叩かれたときには、また勘違いした馬鹿が死にに来たか、と思ったものだが、娘の反応を見て違うと気付いた。

「あら？咲坂君じゃありませんか。どうしたの、こんな時間に？」

「その、俺、夏野さんのことが、幼稚園のころからずっと大好きで」

「ええ、知ってるわ。でも、ちゃんとお断りしたはずでしょう？」

「わかつてる！だけどキミはこうも言った。『弟に喧嘩で勝てないような人を好きにはなれない』って。だから俺、鍛えてもらうために来たんだ。よぞら君に勝てる人間なんてキミのお父さんぐらいしか知らないから！」

「つまり、わたしをおとすために、わたしの父を頼るということ？」

「俺は、シホウさん、悪い人じゃないと思うから、負けてあげてもいいんだが」

「いいんだ、よぞら君。そんなのは実力じゃない。俺は気付いたんだ。結局のところ、暴力をその場でねじ伏せられるのは暴力だけなんだって。何かあったときにものをいうのは力なんだ。そのことに気付けたんだから、フラれてよかったよ。これでゼロからスタートできるってものだ。——お金は、毎月お小遣いを全部お渡しします。働けるようになったら、残りをちゃんと毎月払っていきます。だからおとうさん！どうか俺を鍛えてくだブフォアッ！」

「誰がおとうさんだ」

それが二年前のことである。シホウは、凡人にしてはよく頑張ったほうだと思う。息子のよぞら以外で俺の修行から逃げなかったのは彼だけだ。気絶して干からびても水をかけるとすぐに起きるのが面白くて何度も追い詰めたものである。

俺はポン、とシホウの肩を叩いた。

「いずれ戻ってはくるんだ、そう落ち込むな。じゃあな。トレーニ

ングもほどほどにしろよ」

え、とシホウが顔を上げた。

「師匠、どこか行かれるんですか？」

「ちよつと用事があつてな。道場は好きに使つていいぞ。俺に虐められたいなら夜に來い」

「わかりました。夜に伺います。必ず、伺います」

本当に、頑張り屋な少年であつた。

□ ■ ■ ■ ■

師匠の背を見送る。どうやら向かう先は、よぞら君の『おともだち』の小屋のようだ。たぶん抗議に行くのだろう。人の敷地に勝手に小屋を建てて住んでいるのだから、怒られても仕方ない。むしろ今まで放置され、尚且つよぞら君が気軽に遊びに行つていた状況こそどうかしていたのだ。

「でも、あのお爺さんが、よぞら君以外と口をきくかな……」

まあ、師匠が相手なら、わからないけれど。

全力疾走で家に向かう。たった五キロの道のり。それでも着いた時には汗だくになっていた。

まだ足りない。まだまだ全然無駄だらけ。師匠ならフルマラソンのあとでも汗ひとつかかない。比して、なぜ俺は犬のように息荒く、鯨のように濡れている？ 体の動きに無駄があるからだ。呼吸のリズムにむらがあるからだ。身体への作りの違いだけを理由にはできない。―― 努力が足りない。根性がまるで足りていない。

鍵を開け、汗をボタボタたらしながら風呂場に向かう。冷たいシャワーを頭から浴びる。髪も体も、液体石鹸で一心に洗う。香料など不要。余計な要素はまったく不要。清潔に、ただ清潔に。彼女は

不潔を嫌うから。

タオルで体を拭き、下だけ穿いて脱衣所を出る。ピクリ、と耳が反応した。十メートル先、気配。殺気はない。この家に向かってくる。心臓のリズム、これは、母さんか？

玄関のドアが開く。ただいまー、と母さんが入ってきた。ビンゴ。やはり半径十メートル以内なら完璧だ。

「あら、あんただったの？リホは？」

「おかえり。リホはまだ帰ってないよ」

「あんた、相変わらず凄い体してるわね。ちよっとお腹パンチしてみてもいい？ちよっとだけ」

「だめ」

「いいじゃない。お母さんソフトマッチョ大好きなのよ」

「やめなつて。怪我するよ」

「そんな体してよく言うわよ。イジワル。あんたのハンバーグ、ソース無しだからね」

「違うつてば」

俺は階段を逆立ちでのぼりながら言った。

「母さんの手を心配してるんだ」

傘を持って中学校に向かう。空はまだ曇り。雨は降るだろうか？降らなければそれに越したことはないのだが。

中学生がいつぱいいた。校門に着いても雨は降らなかった。俺が来る意味は無かったようだ。目を閉じて精神を集中する。音が聞こえる。無数の音。それに声も。しばらく集中し、やがて駄目だ、と目をひらく。やっぱり今の自分では、まだ人の多い場所じゃ音を聞き分けられない。少ない人数なら、五十メートル離れた場所のナイシヨ話だって聞き取れるんだけど。

リホが現れた時にも、やはり空は涙を我慢したままだった。

「お兄ちゃん」

リホが駆け寄ってくる。俺は手を振って傘を見せた。目の前まで来てブレーキをしたリホは、そんなことはどうでもいいんだよ、という声で言った。

「それより、よっくんどうだった！いた？」

真剣な顔だった。今にも泣きそうなのを我慢しているように見えた。俺は茶化さず、首を横に振った。

「いなかったよ。夏野さんもない。いつ帰るかもわからないってさ」

リホは壊れる瞬間のガラスみたいな声で「あつ」と言っただがすぐにガバツと顔を上げ、笑みを浮かべて言った。

「まあ、あの二人、そういうところあったしね！フラッとどこか行っちゃったりとかさ！そういうの、別にあの二人なら不思議じゃないっていうかさ！あの……なんていうか、ほらっ！ねっ、わかるっしょ？」

「いいよ」

俺はリホの頭をポン、と叩いた。

「無理しなくていい」

「……………うん」

リホは俺のコートをギュツと掴んだ。リホの同級生や後輩たちが見ていたが、気にならなかった。リホもきつと気にしていないだろう。

一途な心は美しい。

男でも女でも、一人のためだけに輝く心は美しい。

曇り空のように涙を我慢する妹を見て、俺は本心からそう思った。

「お兄ちゃん、出かけるの？」

「なにあんた、こんな時間にどこか行くの？きょう雪降るって言ってたわよ？」

「うん。ちょっと筋トレっていうか……そんな感じ」

「それ以上鍛えてどうすんのよ。いや、もちろんお母さんマツチヨ大好物だけど、あんまり筋肉つけると身長とまるわよ?」

「止まったら無理やり伸ばすよ」

「お兄ちゃん、『ガタカ』大好きだよね」

「努力が報われる話に憧れない男はクズだろ」

「言うねえ」

「じゃ、行ってくるから」

「帰りにアイス買って来てよ。お母さん小豆バーね!」

「あたしピノ」

「お父さんセブンに売ってるゴディバの白いやつ」

「雪降るんじゃないのかよ。……あと父さん高いよ。ガリガリ君でいいだろ」

道場に着くと咲子さんから頭を下げられた。なんでも、師匠から、今日は戻らないと連絡があつたそうだ。

「本当にごめんなさいね、わたしの夫が。わたしの。このわたしの夫が本当に。妻のわたしが至らないばかりに」

執拗に所有権の主張を繰り返す咲子さんに、師匠の他の奥さん達が後ろで目を細めていたが、彼女は一切気にする様子もなく声高に「わたしの!わたしの!」と連呼した。

師匠がいないなら仕方ない。俺はお辞儀をして夏野家をあとにした。そしてさあ走って帰るか、というところで背後からの凄まじい殺気に粟立つた。俺はすぐに振り返り、腰を低く落とした。いつでも投げられるように土を掴むのも忘れない。全て咄嗟の判断だった。いいね」

初冬の山の冷たい空気に涼しげな声が響く。玄関の戸の前で、長いブロンドを後ろでまとめた美女がビニール袋を揺らして笑っていた。

「悪くない。体のつくりは『全然ダメ』だけど、気構えと対応の速さがいい」

初めて見る人だが、よぞら君からの情報で、なんとなくわかった。師匠の奥さんの一人、フィンランド人のアルマさんだろう。ストイックな女性で、嫌いな人間には挨拶も返さないと聞いている。嫌われたくないな、と思った。もちろん彼女の身内には誰一人として。俺はぐつとこぶしを握って答えた。

「未熟は承知しています。現状で俺の武器は心しかありません」

「褒めているんだよ。キミの体は確かに、ヨゾラやシンヤに比べたら『全然ダメ』だけど、動きはとてもいい。何度も何度も同じ練習を繰り返さなければ今みたいな動きはできない。才能のある怠け者よりよっぽどクールだとわたしは思うね。勤勉と愚直を両方持った男は美しい」

アルマさんは持つて行きなさい、と言ってビニール袋を投げてよこした。俺はそれを両手でキャッチした。中身は、口が縛られていてはつきりとはわからないが、お菓子かなにかのようだった。彼女はスツ、とちょうど俺の心臓のあたりを指さした。

「もしキミが、どんな手段を用いても今より強くなりたいと願うなら、『ガレキヒメ』に会いなさい。彼女に会って『フェイベリオスを知っている』と言うんだ。そうすればキミは、痛みと引き換えに、ヨゾラやシンヤが持つていない力を手に入れることができるだろう」

ドクン、ドクン、と心臓が強く脈打つのを感じた。

——強くなれる？

——師匠やよぞら君にもない力を、俺が？

「シンヤは過保護だ。キミが死なないように手を抜いて鍛えている。だけど、それじゃダメなんだ。ダメだってことをわたしは知っている。何故なら、わたしもかつてキミと同じだったからだ。シンヤは否定するだろうけれど、わたしやキミのような凡人は、『死んでもかまわない』というつもりで鍛えられなければ天才たちの領域には届かないんだ」

俺にはアルマさんの言っていることがよくわかった。アルマさん

が凡人だというのが本当なのか俺への励ましなのかはわからないが、俺が師匠との稽古に不満を感じていたのは事実なのだ。

もっと虐め抜いて欲しかった。心肺停止さえ超えたその向こうに、なにかの可能性がある気がしていた。

弱いくせに、ではない。

弱いからこそ、物足りなく感じていたのだ。

ふふ、とアルマさんが笑った。

「いい目だ。じゃあね、少年。わたしはキミを応援しているよ」

そう言って彼女は玄関の向こうに消えた。

ゴクリ、と唾を飲み込む。アルマさんの言っていた《ガレキヒメ》というのは、駅裏の喫茶店《瓦礫姫》のことだろう。だが会え、というのはどういう意味だ？

ともあれ目的地は決まった。明日の放課後、早速、喫茶《瓦礫姫》に行ってみるつもりだ。

ふと思ひ、俺はアルマさんから受け取ったビニール袋の口を開けてみた。——中身はアイスだった。

小豆バーと、ピノと……ああ、高いのに、ゴディバの白いやつまで。

俺はカッチリと足を揃え、灯りのこぼれる玄関に頭を下げたのだ。った。



「シホウの奴、なにか言ってたか？」

「彼、とんでもない努力家ね。ただ次への進み方がわからなくて行き詰まってる。あの年でもう『成長を終えている』なんて並じゃないわ。わたしが拷問しても耐え抜いてみせるんじゃないかしら」

「心臓の音が嘘をついてる」

「嘘じゃないわ。やましいことがあるだけよ」

「あいつになにか話したのか？まさか、カミヤドリのこととか——」

「まさか。わたしじゃなにも教えられないから、教えられる人間を教えたのよ」

「なにを」

「次へのステップを」

「待て、聞きたくない」

「彼きつと——魔法を使いこなすわ」

くたくたになって帰宅した夜中、妻が弟子を『こちら側』に蹴落としたことを知る。俺は思わず頭を抱えた。シホウは今のままでじゆうぶん頑張っている。鍛錬を怠けたりしないし、学校の勉強にも手抜きは一切していないらしい。あれはゆっくりだが着実に、ゴールへ向かって歩いているのだ。それなのに、そんな頑張り屋に裏道を教えるなんて。——酷い侮辱だ。彼のプライドを踏み躪っている。しかしアルマは諫めるように言った。

「プライドを持っていいのは強者だけ。彼はそのことをよくわかっているようだったわ。天才のあなたには、努力じゃ辿り着けない場所があるってことがわからないのよ。彼が頑張っているのは何のため？頑張り屋さんだねって褒めてもらうため？違うでしょう？目的のためでしょう？ヒルマの一番になるためでしょう？わたしや彼みたいな人間は、ずるをしてでも勝利を掴みたいものなのよ。……週に三日も稽古をつけているくせに、あなたがいちばん彼を理解していない」

なんとなく家に居場所がない気がして、真昼間からぶらぶらと街を歩いているのが現在の俺であった。リストラされたパパの心境である。

「魔法——なあ」

それは俺には扱えない技術だ。俺も一つ、カミヤドリとして魔法じみたモノを持ってはいるが、それとは別の、人間が努力の末に手

にした力。俺のように才能をもって生まれた人間には使えない技術……なのだから。
できれば彼には、ぎりぎり一般人の領域にとどまってほしかったのだが。

歩いていると、白と赤の見覚えのある少女がこちらに向かってくるのに気付いた。

「あんた、昼間っからこんなところで何やってんの」

あかま
亜鎌の巫女だった。

「キミは相変わらず気配が無いな」

「あんたに言われたかないわよ」

「どうしてキミがこんな所にいるんだ」

「なんでそんなことあんたに言わなきゃいけないのよ。あんたあたしの恋人？」

「冗談じゃない」

「こっちだって御免よ」

ひゅるり、と風が吹いた。

「ところでキミ、街におりるときもその恰好なんだな」

「なに、おかしなところでもある？」

巫女は背やら髪やらを確認する。俺は「いや別に」と言った。言ったが思っていない。寂れた商店街をそれとわかる巫女さんが箒をもって歩いているのはやはりおかしい。変だ。

「ちょっと」

巫女が不機嫌そうな顔をして言う。

「思ったことは素直に言いなさいよ」

それならば、と俺はこたえた。

「いかがわしい店の呼び込みみたいだ」

素直に言ったのに箒で殴られた。

巫女と連れ立ち、なんだか廃墟マニアが喜びそうな名前の喫茶店

に入る。「金など無いぞ！金など無いぞ！」としきりに繰り返す巫女におごりを約束させられ、テーブルに着く。ずいぶん狭い店だった。おまけに不衛生な感じがある。巫女は別段気にする様子もなくこれでもかと注文した。鬼のような食いつぶりだった。鬼なんか見たことはないが。

俺が事情を話し終えると、巫女はバナナジュースの氷をストロ―でカラカラやりながらふうん、と言った。

「天才にはわからない、ねえ。それって実際、ただのひがみよね？」にべもなかった。遠慮も配慮もまるで。

「だって、わかるわけじゃないじゃないそんなの。頑張ったけどあたたちの隣には立てませんでした。だからずるします。――なによそれ。人生なめてるわ」

「人生なめてるかどうかは別として、キミくらいの年の『普通』の子はそういうふうを考えるものなのか？つまり、努力じゃどうしようもないことが出てきたとき、すぐに裏技に逃げるという意味だが」「そんなこと言われても、あたし、やろうと思ってできなかったことってないし。努力もしたことないし。あんただってそんな感じでしょう？」

「家庭菜園はよく失敗する」

「それでずるしたことは？」

「ずるの仕方がわからん」

「そりゃそうだわ」

小一時間だらだらと喋ったが、結局俺にも巫女にも普通の少年の気持ちはわからなかった。店を出て、神社に場所を移してからは、酒を飲みながら（巫女は日本酒なら何でも飲む）アルマがシホウに紹介した相手について話し合った。

「その男の子、お金持っていないんでしょう？このあたりでそこそこの面倒見が良くて安上がりな魔法屋って、誰がいたかしら？」

「天乃浄あたりは親切な人間が多いだろう。毎年高価な御歳暮を持つて挨拶に来るぞ」

「それ、ただあんたを怖がってるだけよ。あんたいっぺんあそこのご隠居ボコボコにしてるでしょ。天乃浄が靈感商法で荒稼ぎしてるのは一般人でも知ってるわよ」

「嘘だろ……。じゃあ、奈罪^{なつみ}は？あそこも年始は幹部が挨拶に来るんだが」

「奈罪の魔法は他人の血を使うわ」

「そんなところをアルマが紹介するとは思えないな。——鮫城^{さめぎ}はどううだ？」

「鮫城^{さめぎ}は吉嶋に潰されたじゃない」

「知らなかった。あいつ、教えてくれてもいいだろうに」

「県外でいいなら、その吉嶋はどう？あそこ《魔王》は色々と化け物じみてるらしいじゃない」

「確かにあそこの頭は話のわかる奴だが、今は会社が忙しい時期だ。

《谷底》の物をこつちで売る商売が軌道に乗りはじめたらしいから」

「あんた吉嶋の魔王と仲いいの？」

「あいつに逃げ方を教えたのは俺だ。奴が本気になって逃げたら見つけられる奴はいない。その点では、俺はあいつを高く評価してる」

「どんな信頼よ……。でもまあ、親しいんでしょ？だったら今度、あれ貰ってきてよ。あれ、《神の非》」

「なんだそれ」

「お酒よ！あそこの長女が違法に作ってるの。すっごく美味しいんだから！」

「買えよ、酒ぐらい」

「売ってないのよ。長女が趣味で作ってオトモダチに配ってるだけのお酒だから、いくらお金を積んだって買えないの。そもそも吉嶋の長女に会えるようなコネなんか無いわよ」

平気で嘘をつく女だった。

神の非とやらについては今度会った時にもらってくることを約束し（指切りまでさせられた）、シホウの行き先については結論が出ないままこの日は御開となった。

酒瓶やつまみの皿を片していると、ふと思い立ったように巫女が言った。

「そういえば、吉嶋の口利きで《谷底》からこっちに越してきた例のテロリスト。あいつ、何て名前だったかしら」

「初耳だな。テロリストっていうと、西のほうからか？」

「ううん。フェイベリオスの生まれらしいけど——あー、なんだったかしら。ここまで出てきてるんだけど」

巫女は作業の手をとめてウンウン唸りだした。

「そのテロリストがどうかしたのか？」

「うん。あいつなら、面倒見もいいみたいだし、なんだっけ？ シホウ君？——の魔法の先生も務まるんじゃないかと思って」

「他にそいつの情報は無いのか？ 名前以外に」

「知ってるのは二つ名と能力ぐらいよ」

「なんて言うんだ？」

あんたじゃ知らないと思うけど、と前置きして、巫女はその名と力を口にした。

「《瓦礫姫》——自分自身をラジコンみたいに操る能力者よ」

「……巡り合わせってのはあるもんだな」

俺は息を吐いて頭を掻いた。

それは、今日の昼に巫女が入った小汚い喫茶店の名前だった。

さいのう／しんやとじじいとまじょみならい



人気の無しを確認したわたしは、体を低くして山へと走った。制服を来た娘が真つ昼間から山の中に入っていくところなど誰かに見られてはたまらない。こんな田舎じゃ、噂はすぐに蜘蛛の巣を張る。そうなれば間もなくわたしは特定されるだろう。咲坂さんちのリホちゃんは学校をサボって山へ行っているらしい。狩りかしら？ 狩りでしょう。猪とか狩るのかしら？ 狩るでしょう。——それは避けたい。

山の中をしばらく往くと、目的の小屋が見えてくる。実情を知っている人も人が住んでいるとはとても思えない、家の物置よりも小さな小屋だ。わたしは体操着入れからバレーボールを取り出し、小屋の戸に向かって投げた。ガヨン、とベニヤのたわむあの音が鳴る。やがて戸が開き、中から仙人みたいな白髪をした、背の高い老人が現れた。彼は転がっているバレーボールを見て、それからわたしを見て、フムと言った。

「よぞら君じゃあないのか。——まあいい。入りなさい」

老人はバレーボールを拾うとすぐに小屋の中に戻って行った。戸は開いたままだ。わたしは大きく二度深呼吸してヨシ、と腹に力を入れた。そうしてわたしは小屋へと踏み込んだのだった。

靴を脱いで小屋に入る。小屋の中はまるでおもちゃ箱だった。一畳半ほどの部屋には無数の『古い宝』が並んでいた。額に入ったスパーカーのシール、キン肉マンの小さいフィギュア（キン消し？）、ドールハウス、箱に入ったソフトビニールの怪獣、なんだかよくわからない銀色の立方体、たぶんオルゴールであろう小さな木箱……どこで寝ているのか不思議になるほど部屋の容積を埋める大量の

『たからもの』たち。一つ一つは小さくても、その数は膨大だ。わたしが十歳の少年だったら、間違いなくここを秘密基地にしたことだろう。わたしはまるで異世界にでもやってきたかのような錯覚に陥った。

「自由に見てもらってかまわんよ」

老人はコト、と床にコップを置いた。コップは黄ばんでいて、どこから出したのか、透明な液体が半分ほどまで入っていた。よっくんなら躊躇なく飲むんだろうな、と思った。あの人はそういう人だ。老人は目を細め、いろんな方向からバレーボールを眺めている。わたしはポケットから写真を取り出して老人に差し出した。

「これ、証拠の写真です」

渡したのは、ちゃんと、体育館の天井に引っかかっていたボールだ。落とすのに苦労した。テニスボールをこれでもかと投げて。

老人は写真を受け取りまたフム、と頷くと、小屋のたからものに目をやって「自由に見てもらってかまわんよ」と繰り返した。自慢したくてもしょうがないらしい。

水を飲むよりはマシか。わたしは埃まみれの箱を手にとった。中には焦げ茶色の不細工な怪獣が入っていた。黄ばんだ箱にはかすれた印字があった。

——アマネ屋ソフビ『百体限定！復刻・大怪獣！』シリーズ／第一弾・大怪獣ギモギモ

知らない怪獣だが、こうして飾られているくらいだから有名なものかもしれない。別に興味は無かった。バルタン星人とか、ウルトラセブンとか、メジャーどころでさえその程度しかわたしは知らない箱を裏返すと、下部に『005』と印字された金色のシールが貼られているのが見えた。百体限定と銘打つほどの代物だ。リアルナンバーかなにかだろう。

「それはギモギモ族の族長だよ」

老人が言った。わたしは振り返る。老人の目はバレーボールを向いたままだった。

「名前をファイブという」

「はあ、……そうですか」

わたしは曖昧に頷く。そういう設定らしかった。

よく見ると、老人の右手には薬指が無かった。

「どうやら本物のようだ」

バレーボールから目を離し、老人がニマ、と笑った。わたしはいよいよ緊張した。

「よろしい、それじゃあお嬢さんの望みを叶えよう。——質問なら三つ。お金なら百万円だ。どちらか選びなさい」

わたしはカラカラになった口の中でいろんな方向に舌を動かした。息を吐いて、わたしは言った。望みは既に決まっていた。

「夏野よぞらの居場所と、そこへの行き方を教えて下さい。もう一つは——」

「占い師？」

「正しくはそうじゃないが、似たようなものだ。咲坂は未来予知を信じるか？」

「うーん、微妙かな。そういうことができる人は、たぶんどこかにいると思う。本物の占い師ってやつ。でも、そういう人は、お金のために他人の未来を見たりはしないと思う」

「それはなぜだ？」

「だって、効率悪いじゃん。リスクも大きいし。お金を稼ぐだけなら、ロト6を何回か当てて、それを元手に株でもやればいいんだから」

「リスクというのは？」

「人の未来を占ったりなんかしたら、当たっても外れても恨まれるよ」

「そうか……咲坂も、恨むか？」

「わたしみたいな奴はそもそも占いなんかに頼らないよ。信じる信じない以前に、興味が無いもん。未来なんて知りたくないから」

「咲坂」

「なに？」

「咲坂に、会ってほしい人がいる。その人は俺の友達だ。その人の居場所は俺とシホウさんしか知らない。咲坂は俺にできた三番目の友達だ。是非、彼に紹介させてほしい」

「友達かぁ。しかもお兄ちゃんより下……いいけどね。どんな人なの？ 同い年？」

「ロクノミヤ・ソウマ。歳は知らないが、そうとうな老人だ。——彼は現在の全てと未来の一部を知っている」

礼を言つて小屋を出たわたしは、その足で学校に向かった。教室に入ると隣の席のDが「大丈夫か」と声をかけてきた。わたしは「薬のんだら治った」と嘘をついて着席した。時刻は三時間目の準備時間だった。

「もしかして、夏野のどこ行ってきた？」

Dが言う。わたしは数学のノートをめくりながら「なんで」と聞き返した。

「おまえ、夏野と仲良かったじゃん。心配してるかと思って」

「過去形にしないで」

わたしはDを睨んだ。

「よっくんは親戚の家に行ってるだけでしょ。心配することなんて何もない」

Dは肩をすくめた。話はそれで終わった。

数学の授業は退屈だった。

中学に上がり、ひるまさんに勉強を教わるようになってからというものの、わたしの成績は茹で過ぎた稲庭うどんのようにぐんと伸び

た。コツを掴むというのは思っていた以上に重要だったようで、毎日二時間の勉強で学年一位をとるようになるまでそう時間はかからなかった。

「好きというのはわからないが、姉さんのような才能豊かな人間には憧れる」

あるとき、遠まわしに想い人の有無を聞いたわたしに、わたしの想い人はそう答えた。

【才能】——物事を巧みになしうる生まれつきの能力。才知の働き。
——わたしに無いもの。

それからのわたしは必死に自分を偽り、周りの人間を騙して回った。努力しているからではなく、もともと要領がいいから何でもできるんだ。そう思われるために。

一日の長を才と偽り実を成す。あなたの一番になるためなら、この世の全てを騙してみせる。あなたさえも騙してみせる。

わたしは毎朝、新聞が来るより早く起きて走り込みをした。マラソン大会では新記録で女子一位を獲った。家での勉強の時間を五時間に増やした。満点をとることが当たり前になった。日記は見た者に馬鹿だと思われるよう文章を乱した。盗み見した父に悪文を指摘された。わたしは怒る演技をしながら内心で満足した。実の父でさえ、今やわたしの本質を忘れていた。わたしは天才を演じ続けた。それはおそらく成功していた。身近にひるまさんという本物がいたことが大きかった。彼女の『らしさ』を真似て、彼女以上に本物の天才らしく振舞った。

三年に上がり、わたしは彼をデートに誘った。心臓が爆発しそうな思いで科学準備室に呼び出した。彼は真面目な顔で言った。

「デートはしたことがない。よくわからないから、ちゃんと相談して手筈を決めよう」

わたしは狂喜した。叫びだしたい心をぐっと抑えつけて微笑んで

みせた。けれども涙はぼろぼろこぼれた。「どうした、病氣か」と彼が見当違いな心配をした。その鈍感ささえも愛おしかった。

わたしたちは図書室でデートの段取りを決めた。

行き先は最近新しくできた水族館と、《みなとびあ》に決まった。みなとびあは新潟市の歴史博物館だ。名前から古臭くて味気ないイメージがあるが、新潟ですつと暮らそうと考えている彼にはうつつけの場所だ。日取りは十日後の土曜。その日は大規模な鉄道模型運転会が開かれるとホームページで告知されていた。

わたしはその日から綿密にプランを立てた。わたしにとっても彼にとっても、初めてのデートだ。絶対に失敗なんてしたくない。成功させて、わたしこそが運命の相手だと思われたかった。

約束の日――彼は来なかった。

そして彼はいなくなつた。

放課後、わたしは制服のまま、ロクノミヤ老人から三つ目の質問で教つた場所に向かった。

その喫茶店は駅裏の、寂れた商店街の一角にあつた。

「いらつしゃいませ」

カウンターの、黒いエプロンの外国人女性が言う。流暢な日本語だった。店内は狭苦しくて汚かつたが、不思議と落ち着く雰囲気があつた。客は一人もいなかった。

カウンターの上には高そうなお酒の箱がずらりと幾つも並んでいた。

わたしは真つ直ぐカウンターに向かい、女性に言った。

「あなたが店長さんですか？」

「店長は留守です。御用でしたら、戻り次第お伝えしますが」

嘘を付いている風ではなかつた。けれどわたしは彼女の嘘を知っていた。わたしは椅子に座つて言った。

「それじゃあ、店長さんにお伝えください」

「かしこまりました。どのように？」

わたしはロクノミヤ老人から渡されたメモの通りに、その台詞を口にした。

「鮫城^{さめぎ}ソウビの居場所を教えてください。わたしは、フェイベリオスを知っている——と」

女性の目付きが変わった。

彼女はニヒルな笑みを浮かべて、わたしの前にコップを置いた。

「まあ……それなら、約束を破ったことにはならないか」

彼女は背を向けて言った。

「キミで三人目だ」

コップの中身はカラだった。



少女が小屋を去って行く。俺は藪から顔を出した。

「なるほど、そういう仕組みだったか」

俺は溜息をついた。

先日、あれだけ聞いてもなにも答えなかったのは、手順を間違えていたからか。

しばらくすると老人が小屋から出てきた。亜鎌神社の神主、六乃宮蒼魔だ。彼は手にバレーボールとライター、それから茶色い瓶を持っていた。

神主は俺を見つけると、無感情な目で言った。

「おまえに話すことは無いぞ」

俺は肩をすくめた。

「バレーボールを戸にぶつければいいんだろう？俺も持ってくるさ」
神主は馬鹿め、と笑った。「ただのボールなど要らぬわ」

「どういうことだ」俺は首を傾げた。「バレーボールが欲しいんじゃないのか？」

「おまえは大人になりすぎた」

「大人からは受け取らないということか」

「まさか。私はただ、おまえが大人になってしまったという、それだけのことを言っている。なぜそんなふうに受け取った？ 思えばおまえは早熟だった。鈴風秋斗がそう望んでいると勘違いし、おまえは急いで大人になった」

俺は神主を睨んだ。神主は気にする様子もなく、着物の胸元からカッターナイフを取り出してバレーボールを裂き始めた。

「神主。俺は子どもたちを迎えに行きたいんだ。頼むから、方法を教えてくれ」

「そこに隠れて話を聞いていたのだろう？ 島に行けばいい。あのお嬢さんと同じように、《びょういんじま》に行つて《彼》に頼めばいい。息子の頼みなら聞いてくれるだろうよ」

「ふざけるな……《彼女》はもういない！ ああ偽物にそんな力はない！」

一瞬だった。気付けば老人の襟を掴みあげていた。

穴のひらいたバレーボールが地面に落ちた。その上に、カッターナイフがサクリと刺さった。風が吹き、ところどころに薄く積もった雪が粉を散らした。神主が不気味に笑った。

「無理なんだよカミヤドリ。おまえたちじゃあ、もうあそこには『戻れない』んだ。可能性は閉じている。私でさえこんなに、こんなに年をとってしまったんだ。——この『俺』でさえ！」

「……どういう意味だ」

俺は神主から手を放し、一步、距離をとった。

「あんた、何を知ってる……」

老人は答えず、ライターでバレーボールに火をつけた。白いバレーボールは、茶色くなって裏返り、最後には黒く小さい塊になった。そうなるまで、神主は何度も瓶から油をかけた。俺はその様子を黙

って眺めた。やがて神主は言った。

「アカンナ王国を知っているか？」

「なんだって？」

「モニアケス帝国は？ユキオト商連合は？青い髪の吸魂鬼に覚えはないか？学術都市バビはどうだ？郵便局は誰が創った？」

「なにが言いたい。それらが俺の子どもたちとどう関係があるんだ」
「……………去れ」

「なに？」

「おまえに言うことは無い。……言いたくないのではない。言っても無駄なのだ」

神主はそれだけ言うと、燃えカスを拾って小屋へと戻っていった。老人の痩せた背中には悲しみと怒りが見えた。俺はなんとも言えなかった。

「どういう意味だ……クソッ」

「もしもし巫女ですが」

「俺だ。シンヤだ」

「おかけになった電話番号は拒否られています。ピーという発信音の真似をして首を吊ったらどうでしょう？」

「どうもこうもない。ちよつと頼みたいことがあるんだ。いや、ひとまず訊ねたいことがある。聞いてくれ」

「上から99・58・90よ」

「75・60・78だろう、メシを食ってない時で。見ればわかる」

「あんたいま地雷踏んだから。次に来たらお茶に毒入れるから」

「毒なんか効くかよ。百でどうだ。今日中に持っていく」

「お金持ちのおじさまってだーいすきっ」

「『おまえ』、このあたりの魔法屋に詳しいだろう？」

「なによ。さつさと言いなさい。ラーメン伸びるでしょうが」

「天乃浄と奈罪なつみ以外に、どれくらいいる？」

「八家ね。『はぐれ』も含めたら十三。それがどうしたの？」

「連絡を取ってほしいんだ。『女の子が訪ねてきても、なにも教えず穩便に帰せ』と。必要な俺の名前を出してもかまわない」

「めんつっどくさ！何回あたま下げんのよ！あたしにもプライドつてもんがあるのよ？」

「そういえば吉嶋のやつ、《神の非》なんていくらでも持っていてくれて構わないと言ってたな。それにどうやら、他にもまだ旨い酒が山ほどあるみたいで、何て言ったかな、思い出しそうなんだが――」

「女の子の命が懸かっているんでしょう？あたしに任せておきなさい」「そうだ、《病の祈り》だ」

「よしきた！巫女は正義のために在り！」

「なるべく急いでくれ。天乃浄と奈罪と、それから《瓦礫姫》の所には俺が直接行く」

「いいけど、あんた、あんまり強く言うんじゃないわよ？『引退した《肅聖殺し》が俺の家で暴れていったぞ、どうしてくれる！』って、うちに文句が来るんだから。ったく、あかま亜鎌はあんたのおもりじゃないってのに」

「暴力を振るうつもりはない。殴っていいのは言ってもわからない奴だけだ」

「ならいいけど。あ、いちおう言っとくけど」

「なんだ」

「気をつけなさいよ」

相変わらず、喫茶・瓦礫姫には客がいなかった。

「いらっしやいませ」

カウンターの女がこちらをちらりと見て言う。すました顔をしているが、鼓動は笑えるほどのハイテンポだった。俺はカウンター席に着き、テーブルに紙袋を置いた。天乃浄と奈罪から貰った土産だ

った。

「キミが店長か？」と俺は言った。

「そうです」と女はこたえた。

俺はポケットからコインを取り出し、テーブルに置いた。

「初めまして瓦礫姫。俺はこういうものだ」

「ご丁寧に。わたしは《瓦礫姫》ビーリン・スケルダノアです」

瓦礫姫はコインを見ても動揺を抑え通した。立派なものだった。

俺はコインをしまつて言った。

「今日はキミに頼みがあつて来たんだ」

「こちらに戦闘の意志はありません」

「もちろんこちらにも無い。穏便に話を進めたいものだ。そら、土産だつてある」

俺は「これと、これと、あとこれと」と言つて紙袋から酒の箱を出しては次々とカウンターに並べていった。巫女の分を一箱だけ紙袋に残し、残りは全てカウンターに出してしまう。瓦礫姫はその間、じつと俺の手を見ていた。俺は切り出した。

「話というのは、魔法に関することなんだが」

「咲坂シホウのことでしたら、やめろと言われればすぐにでも稽古をとりやめる用意があります」

予想外の言葉に俺は苦笑した。

「なんでしたら、彼の首を差し出してもかまいません」

「それは困る。あれは俺の弟子だ」

「もちろんいまのは冗談です。シホウのことは彼の望むように鍛えてやるつもりです。わたしは冗談が好きです」

「結構」

瓦礫姫は冷たい緑茶を出した。俺はそれをひとくち飲んでから口を開いた。

「今日このあと、この店に女の子が訪ねて来ると思う」

瓦礫姫は頷いた。

「その子はおそらくキミに『魔法を教えてください』と頼むだろう。そ

れを断ってもらいたい」

「わかりました。その少女の特徴は？」

「身長156センチ。体重45キロ。スリーサイズは上から79・59・80。髪は黒で、肩より少し長いくらい。ときどき後ろで纏めていることがある。ぱつちりした目をしていて、右目の下には小さなほくろがある。鼻は低く、口は小さい。眉は少し太いくらいか？……ぱつと思いつく特徴はそれくらいだな」

「失礼ですが、愛人ですか？」

「は？」

「いえ、忘れてください」

全て了解しました、と彼女が頷くことでこの話は終わった。あとは巫女が上手くやってくれるだろう。俺は茶を飲み干した。

「おかわりは」

「貰おう」

それからただの雑談だった。

「ところで、俺のことは吉嶋にでも聞いたか？」

「魔王はあなたのことを高く評価しておられました」

「なんて言ってた？」

「出会ったら、ひたすら下手に出ると」

俺は笑った。

「それで、そのあとはどうしろって？」

「『隙を見て逃げる。無理なら忠誠を誓って身内になれ。それがいちばん長生きできる』と。できれば一杯食わせてやりたいが、おまえじゃ無理だろうな、と笑っておられました。まさか、こうして訪ねてこれられるとは思いませんでしたが。……それで、わたしはどうすればいいでしょう？」

俺は席を立ち、紙袋を持ってドアへ向かった。

「別に。俺と俺の身内に敵対しなければそれでいいさ。邪魔したな。……そうだ。迷惑をかけた詫びに――」

俺はドアを開け、店内を振り返って笑ってみせた。

「——おもてを掃除をしておこう」

店の外には黒スーツの大男が銃を持って立っていた。



『死因は頭部打撲か』

十日未明、新潟県××市の建設現場で男性の変死体が通行人により発見された。

県警は男性が殺害されたものと断定。司法解剖の結果、死因は頭部打撲による脳障害の疑いと発表された。県警によると、男性は20歳から30歳代前半で身長約210センチ。九日の内に殺害されたとみられ、頭や顔に複数にわたり、鈍器のようなもので殴られた跡が残っていたという。

男性の遺体はブルーシートの上にあおむけの状態で倒れており、黒のスーツの上下を着用していた。靴ははいていなかった。現場からは男性の財布が見つかっており、物色された痕跡はなかったという。

県警は××署に特別捜査班を設置し捜査。遺体の身元の確認を急いでいる。

向かいの席の老人が読む新聞に、物騒な文字列が見えた。現場は

家のすぐ近くのようにだが、近所にそこまで大きい人がいただろうか？夏野家のお父さんでさえ2メートルはないと思うけど。

『次は、ハクオリ。ハクオリ。お乗換えはございません。——お降りの際は、お足元に御注意ください。次はハクオリ——』

目的の駅に到着する。わたしは列車を降りた。

「そこなら知つとるよ。これから巡回に出るところだから、ついでに案内しよう」

駅を出てすぐの交番で、瓦礫姫さんから教わった住所を聞く。なんと親切なお巡りさんに目的地まで連れて行ってもらえることになった。

十分ほど歩くと目的の、《魔法屋》鮫城ソウビの隠れ住む家に到着した。そこは大きな武家屋敷だった。門は開かれ、その横の壁にかかる表札には『吉嶋』と彫られていた。

ヨシジマ？キチジマ？どっちだろう。

「ここだよ、キチジマさんち」

キチジマか。ひとり頷いていると、お巡りさんが躊躇なく門のチャイムを鳴らした。わたしは驚いた。このやろう。なんてことしてくれる。案内だけしてくればよかったんだ。まだ心の準備ができてない。わたしはお巡りさんを睨みつけてやろうかと思い、顔を上げた。だが彼の目を見てそんな気持ちはずぐに萎えてしまった。

つい先ほどまでにこやかに笑っていた彼は、日本昔ばなしに出てくる人を騙すキツネのような目でわたしを見ていたのだった。

ガラガラと家の戸が開き、玉砂利を鳴らして一人の男が現れた。わたしは逃げようとしたが、そのときにはお巡り野郎に肩を掴まれており、怖くて体が動かなかった。殺されるんだ、と思った。こんな大きくて古い屋敷に住んでいる奴がまともな人間のはずがない。わたしは殺されるか、或いは売られてしまうのだ。そう思った。

やがて現れた男が「どうしました」と言った。三十歳ぐらいの、

高そうな仕立てのスーツを着た優男だった。お巡りがわたしを突き出した。

「妙な子どもが嗅ぎまわっていました」

「これはこれは」優男はにこやかに笑って言った。「いつも気を利かせていただいて」

それから少し記憶が曖昧だ。あれよあれよという間にわたしは庭に連れ込まれ、ひらいていた門は、屋敷の中にいた二人の大男によつて閉ざされた。

閉じ込められたのだ。そう思つてわたしがガタガタ震えていると、優男が言った。

「まったく、あの馬鹿には毎度困つたもんだぜ。人目のある内から阿呆な真似しやがつて」

「換え時ですか？」と大男の一人が言った。「でしたら今日中に済ませますが」

「ああ」と優男が言った。「捨て時だな」

わたしの怯え具合はいよいよピークに達しようとしていた。もはやいろいろ漏らしそうだった。乙女として瀬戸際、いやさ土俵際だった。

優男がわたしに手を伸ばした。せめて一発、と思つて構えたが、しかし意外や意外、暴力はやってこなかった。彼の手は握手を求める形で空中に固定されていた。わたしは思わず何度もまばたきした。「いや、悪かつたなあ嬢ちゃん。怖かつたろ？あの馬鹿、小遣い稼ぎで誰でも暗殺者やら密偵やらにしたがるからよ。ロクノミヤ先生から連絡は貰つてるぜ。ソウビに会いに来てくれたんだって？」

わたしは足から崩れ落ちた。腰が抜けて立てなかった。

誰かが遠くでなにか言っているような気がしたが、頭がうまく情報を伝えてくれなかった。

そう。わたしは放心していたのだった。

「おいタンカだ、急げ！客間に運べ！」

「タンカどこにありましたっけ！」

「ああん？知らねえよ馬鹿野郎！タンカがねえならシートでも畳でも、ガキ一人運べるもんさっさと持って来い！客に何かあったら社長に殺されるぞ！」

「持って来ました！」

「なんでパイプ椅子なんだ馬鹿野郎！金玉蹴り飛ばすぞ！」

「すいません！すいません！あ、でもわたし金玉は——」

「いいからさっさとタンカ持って来い！」

目を覚ますと木目の天井の、あの不気味な模様が見えた。わたしは知らない部屋の、知らない布団に寝かされていた。部屋は広い個室だった。

体を起こすと、隣で正座をして腕を組んでいた、三十歳くらいのパンツスーツの女性がビクリと動いた。彼女は口をパクパクさせたあと凄い速さで立ち上がり、戸に走った。すぐに戸の外側から叫び声が聞こえた。

「起きました！お客様、起きられました！」

「馬鹿野郎、叫ぶんじゃねえ！お客がビビったらどうすんだ馬鹿野郎！馬鹿野郎が！」

「すいません！すいません！」

「次から気をつける馬鹿野郎！」

この家では「馬鹿野郎」が挨拶なのだろうか。そんなのはいやだな、と思った。

少しするとさっきの女性が、気を失う前に握手を求めてきたあの優男を連れて現れた。優男は「立てるかい？」と言った。わたしは頷いて立ち上がった。そうしてそのまま洋部屋へと案内された。

書斎、なんだろうか？本がたくさんある。高そうなガラス（水晶？）のテーブルを挟み、優男と向かい合って座る。わたしの隣になぜかスーツの女性が座り、てめえはこっちだ馬鹿野郎、と耳を引っ張られて優男の隣に移動させられた。

まず優男が頭を下げた。

「さっきのことを謝らせてくれ。不愉快な思いをさせてすまなかった。このとおりだ」

わたしは首と両手をぶんぶん振った。

「いえ、いえっ、大丈夫です！本当にっ。大丈夫ですから、頭を上げてください！」

「そういうわけにはいかねえ。客を怯えさせたなんてことが社長の耳に入ったら、俺たちはどんな目にあうか……本当にすまなかった、お嬢ちゃん」

「大丈夫ですから！わたし、誰にも言いませんから！本当、絶対に！」

そんなやりとりを何分も続けて、彼はようやく頭を上げた。

「ロクノミヤの先生の話じゃ、ソウビに話があるってことだったが、どんな用事なんだい？俺あ外したほうがいいか？」

優男（偽装）がスーツの女性を親指でさして言う。そうしてわたしは気が付いた。

この人が、鮫城ソウビさんなんだ。

わたしはいえ、と言って女性に向き直り、そしてテーブルに頭を振り下ろした。ガン、と音が鳴る。女性の足がビクツと震えるのがガラス越しに見えた。

「わたし、咲坂リホといいます！中学二年です！《瓦礫姫》さんのご紹介でこちらに参りました！」

「は、はい！」

鮫城さんまで大きな声で言う。

わたしは、わたしだけしか得をしない願いを口にした。

「どうかわたしを弟子にしてください！」

わたしに、《ココロマワリ》の魔法を教えてください！」

■ ■ ■ ■ ■

ある少女の日記。

10 / 19 (晴れ)

吉報。大吉報。

今日のお昼、ノックもせずに部屋に飛び込んできたツバメさんが、抗議するわたしに「いいから見ろ」と言って羊皮紙を押し付けました。

そこには、崩れた平仮名と片仮名でこう書かれていました。

『スズカゼ王国拳闘大会予選通過者一覧』

わたしの探し求めたその名前が、名簿のいちばん上にありました。

『一位通過 / ヨゾラ・ナツノ——所属：王立第二碩学院（優勝候補筆頭）』

どうやらわたしの弟探しは終わりを迎えそうです。

てがみ／よぞらとおつじょとけんとうたいかい

■■■■■

「魔物退治ですか」

「うむ。羨ましい限りじゃ」

「羨ましい？」

「妾も行きたいのに、ツキノネが危険だ危険だと意地悪を言いおる」
「なあお嬢、魔物の出る森にお姫様つれてく従者は優秀か？そこん
とこ、可愛らしいお顔にのった小さい頭でよく考えてくれよ。――
おまえもなんか言え、ヨゾラ」

「その魔物とやらの強さはどの程度でしょう？」

「どの程度と言われても、妾は戦わんしの。……強化魔法の使い手
が三人がかりで倒すのが決まりじゃったか？」

「目安はそんなもんだな。あそこの奴らは魔法が効かねえから、自
分の体を強化する以外に手段がねえんだ。ま、オレなら一人で仕留
めるがね」

「数は？」

「流石に百も二百も、ということはないであろうが、それでもたく
さんじゃな」

「ふむ。――その程度なら危険はありません。どうぞ観覧してくだ
さい」

「よいのか！？」

「おい、ヨゾラ！なに言い出す」

「いえ。むしろ俺の隣にいる方が安全なくらいです。街でなにかあ
つたら、森にいる俺では助けられない」

「だからオレが残るんだろが」

「ツキノネさんが敵わないような相手も、俺なら一秒で無力化でき

ます。安全ということだけを言うなら俺の隣以上に安全な場所はそうありません」

「……クソツタレが。言ってくれなせ」

「ふふふ。気持ちのいい奴じゃろう」

「嘘は嫌いです。謙遜も苦手だ」

「知つとるよ。誰より強く、嘘と裏切りを嫌う。おぬしはまさに騎士になるために生まれたような男じゃ。そうである、ツキノネ？」

「わかつてるよ、文句は言うなつてんだろ。ヨゾラの強さは知ってるからな。……シノビの連中が泣いてたぜ。どんなに巧く隠れてもヨゾラが笑って挨拶してくるつて」

「あれは隠れていたんですか？」

「うははは！言いおるわ！精進せいと伝えておけいっ」

学術都市ジソの北にある森では定期的に魔物狩りが行われる。今回、これに参加すると言い出したのは俺の雇い主・ロ力二王女だった。彼女は騎士である俺に、討伐隊の見ている前で魔物を蹂躪させることによって、この街での自分の発言力を高めようと画策しているのだ。

さて、ジソの街は『力』を何より美しいとする気風のある、一風変わった街である。同じ学術都市で姉妹都市のバビが『智』を宝とするのに対して、この街がひたすらに力を愛するのにはもちろん理由がある。その理由こそが、あす俺たちが魔物の討伐に向かう森である。

ジソの街の北には《ジシオ大森林》と呼ばれる大きな——そこそ樹海と呼んで差し支えないほど大きな森が隣国まで広がっている。そのジシオから二ヶ月に一度ほどの周期で、同じ種類の魔物が、およそ同じだけの数、ジソの街に向かって侵攻して来るのだそうである。

やって来るのは《ヨロイ》と呼ばれる鎧を着た人型の魔物で、そいつには魔法が一切効かないらしい。

魔法というものを未だに数えるほどしか見たことのない俺は、魔法が効かないから大変ですと言われても実はよくわからないのだが、戦いで魔法を使う人たちからすれば恐ろしい相手であろうとは想像に難くない。

ジソの街は、そんな魔法の効かないヨロイの脅威にさらされてきた。ジソの街の歴史は、絶え間ないヨロイとの闘争の歴史であった。人間は考える動物だ。街の人たちはヨロイへの対抗手段として『強化魔法』と呼ばれるものを突き詰めて研究するようになっていった。強化魔法は物や人間を強く硬くする魔法だという。彼らは考えた。魔法が効かないのであれば、魔法で強くなり、物理的手段で戦うほかないと。

こうしてジソの街は何度となくヨロイの侵攻を妨げた。昨今ではヨロイが集結する時期になると街の側から果敢に森へと攻め込むようになり、大森林を挟んだアカンナ王国からは『遠く森を越えた先には戦士の街がある』とさえ評されるまでになったのである。

そんな街で俺は既に二度、力を見せる真似をしていた。それも自主的にだ。

一度目は奴隷にされた知人を助けるために。二度目は拳闘大会の予選で。王女の野望と俺の姉探しのため、今後も可能な範囲で目立つ行動をとっていくつもりであるし、これまでの行動に後悔は無い。しかし、できれば不要な苦労は背負い込みたくなかった。

王女は積極的に俺を売り込み、俺は街の至る所で力をふるい、人助けの真似事をした。

結果、ジソの街に架空の英雄が生まれた。

英雄は名をヨゾラといった。彼は悪を許さぬ正義の味方なのだそうである。

そんな話を俺はいま王女から聞いているのだった。

「ぬふふふ。順調じゃのう。おぬしの名がどんどん広まっておるぞ。ぬふふふ！」

王女が俺の背中に小石を投げながら（後ろから投げても避けるのが面白いらしい）快哉を叫ぶ。俺は屋敷の庭でシノビの人たちと『その他一名』に稽古をつけていた。

「これで入学後、雇用主である妾が正式に王女と名乗れば……ぬふふ。笑いが止まらん！」

犬が有名になれば飼い主が儲かる。飼い主が儲ければ犬に高い餌が巡ってくる。俺と王女の関係は極めて良好で、なおかつ健全であった。——これで姉さんが俺を見つけてくれればいいんだけど。

俺は姉探しにおいて、その方向性を根本から変えていた。姉の情報収集するのは王女に任せ、俺のほうではひたすら有名になることだけを考えるようにしたのだ。これは俺を探しているであろう姉に、少しでも早く俺を見つけてもらうためだ。王女は『旅人組合』を使ってほうぼうに依頼を出した。その内容は、『旅先でヒルマ・ナツノという名の黒髪の娘を見つけたら連絡を寄越せ』というものである。単純だが、無闇矢鱈に探すよりもよほど効果的であるように思えた。

「それじゃあ、今日はここまでにしましょう」

そう言つて、俺は肩の力を抜いた。庭には十人のシノビ（王族や貴族を影から警護する者をこう言うらしい）と一人の戦士が倒れている。戦士だけが目をぎらつかせて「まだやれます」と言った。俺は首を横に振った。

「まだやれる人間はそんな顔をしない」

「兄貴、お願いします！」

戦士が立ち上がって頭を下げる。おいおい、とジュークが言った。振り返る。彼は王女の腕に抱かれて手をバタバタやっていた。

「おまえさん、稽古を始める前になんて言った？相棒の言うことは何でも聞くんじゃないかったのか？」

「ジュークの旦那、でも俺あ——」

「でもない。部外者のおまえさんをここに入れるにあたって、相棒にデメリット以外のものがあつたと思うか？それでも相棒は時

間を割いて稽古をつけてくれたんじゃないか。その恩をおまえさん、仇で返すのか？」

効果はてきめんであった。戦士は俯き「軽率でした」と呟いた。軽率とか、そういう問題じゃない。そう思ったが言わずにおいた。俺は目でジュークに「ありがとう」と合図をした。彼は背泳ぎみたいな動きで片手を上げた。

「終わったのか？」と王女が言う。「ならばヨゾラ、明日の段取りを決めてしまおう」

「了解です」

俺たちは倒れて動かない十人と立ったまま動かない一人を置いて屋敷に戻ったのであった。

突然やって来たそいつは、変容は死だ、とわけのわからないことを言った。

「人の心を作り変えるようなことをしちゃいけないだ。誰かの行動の影響で誰かが変わっちゃったら、それはもう殺人と変わらねえ…… 兄貴、俺は常々そんなふうに思ってるんです」

兄貴って、俺のことだろうか。俺は顔をしかめて頭を掻いた。

「難しくてわからない」

「俺はヨゾラの兄貴に殺されたんです」

「生きてるじゃないか」

「そうじゃない。昔の俺を殺されちゃったんだ。今の俺は、もうあんたと戦う前の俺じゃあない」

俺は今度こそ溜息をついた。

男は名前をビーといった。拳闘大会ジソ予選の準決勝で戦った相手だ。大会中、こいつ以外は一人残らず一撃で意識を刈り取った俺であったが、この男だけは蹴りを二発入れても意識を飛ばすことが出来なかった。いくら俺が手加減したといっても、二発目は二割程度の力で腹を蹴ったのだ。今だから言うが、当てた瞬間、殺してし

まったかと思つたものであつた。だが男は立ち上がった。異常なことだつた。勿論そのあとすぐに転倒してそれまでだつたが、それでも充分にいかれている。ビーの打たれ強さは常軌を逸していた。

そんな奴がある日、俺を訪ねて屋敷にやって来たのである。

シノビは何をしているのかと思つたが、しかしどうやら王女が手を回していたらしかつた。『ヨゾラを訪ねてくる者、これを拒むことを禁ず』。彼女はシノビたちに暗号でそう伝えてくれていたらしい。姉やその関係者が現れたときのためであつたのだろう。それが裏目に出たかたちであつた。

「それで、おまえは何の用があつて俺に会いに来たんだ」

「簡単なことです」

「さつさと言つてくれ」

ビーは神妙な顔で語りだした。

聞いてみればなんのことはない、要するに弟子にしてほしいという、それだけのことであつた。本当に簡単なことだつたのだ。当然俺は快く追い出した。ビーは俺の足にしがみついて泣いた。俺はビーを庭の外まで蹴飛ばした。ビーは嬉々として戻ってきた。

「兄貴、俺を兄貴の騎士団に入れてくれ！」

「俺は騎士団長ではないし、誰かの騎士団に属しているわけでもない。ただの騎士だ」

「なら弟子に！弟子にしてください！」

「ことわる」

ビーの主張は、大凡の人間の願いがそうであるように自己中心的なものでつた。ビーは大会当日、俺と当たるまで自分の力に自信を持っていた。自分が世界で一番だとまでは思わないが、街で一番になるくらいの強さは持っていると考えていたそうである。そんなときに俺と出会つた。街一番を目指した戦士は、手抜きをした俺（文字通り手を使わなかつた）にあつさりと敗れた。そうしてビーの価値観は変容した。――奴の言葉で言うならば、死んで生まれ変わったのだつた。

ビーは何度も駆け戻り、俺は何度も蹴り転がした。しまいには少し楽しくなってくるくらいまで転がしたが、それでもビーは諦めなかった。

「それだ！その力に俺あ憧れたんです！」

「憧れるのは自由だ、好きにしてくれ。だが弟子はとらない」

そこに王女が現れて言った。

「ならば従者にしてみてはどうじゃ？」

「えっ？」

「えっ？」

「妾を狙った暗殺者でもあるまい。荷物持ちにでもして、暇な時に稽古をつけてやればよからう」

「何のために」

「縁は円じゃ。何の関わりもないと思っておったところからふいに姉への手掛かりが出てくるやもしれんじやろ」

「それは建前でしょう？」

「うむ。本音はヨゾラの広告塔に丁度よいから、というところか。見るに、そやつはおぬしの『強さ』に心酔しておるようじゃ。であれば、おぬしが強くある限り裏切りはせんじやろ。そういう手駒は貴重じゃ。手付きにして、ヨゾラ・ナツノの英雄譚をこれでもかと喧伝させるがよからう。そやつは稽古をつけてもらい、ヨゾラの方は評判が上がる。ヨゾラの評判が上がれば妾の株も上がる。みんな愉快でウハウハじゃ」

俺は溜息をついた。これで12歳というのだから末恐ろしい。二年前の自分と比較して虚しくなった。

「ありがとうございます、お嬢さん！広告塔の任、身命を賭して務めさせていただきます！」

「うむ。謹んで励むように！」

「おいらのことは旦那と呼ぶんだぞ。ジュークの旦那だ、いいな？」
こうしてなんだかよくわからぬ内に、英雄ヨゾラに従者ができたのであった。

「ところでヨゾラ。あすの討伐にはビーも連れてゆくのか？」

「王女を抱きながら狩るつもりですから、あいつまでは守りきれません」

「ほう、抱きながらやってくれるかや」

「王女は魔物を間近で見たいんでしょう？」

「おぬしもわかってきたではないか」

「主人のニーズに応えるのも騎士の仕事だそうです」

「ツキノネか？」

「はい」

「ふむ。……じゃが、まだすこし足らんな。小指の先ほど」

「それは、どのあたりが？」

「二人の時は口力二でよい。そう申したである？」

王女が笑う。

俺も笑った。

「了解です、口力二」

「それでよい」

俺たちは順調に、仲よし主従になっていた。

おいらもいるんだがな、と胸ポケットでジュークが苦笑した。



火照った肌に風が気持ちいい。俺は目を閉じて大きく背伸びした。麗しき主から恵与にあずかったコートの着心地は実に悪かった。俺だから気にならないが、生地のコワゴワ感が皮膚に痛ましく、通気性も考慮されていないという、敏感肌の姉では一時間ともつまいという代物であった。形だけは恰好いいが機能性がまるで駄目な

のだ。貰った当初はなぜ王女がこんな安物をと不思議に思い、過去の罪を振り返ってみたほどである。しかしよくよく考えてみれば、高価でみてくれのよい衣装が機能面で安物に劣るのは元の世界も同じであった。俺はそう納得した。

事実をもっと重かった。

騎士採用から三日目の朝、俺に与えられた部屋にノックもせずやって来た王女殿下は言った。

「おぬしに服をやるう」

俺はもちろん喜んだ。

「いつまでもそのような目立つ恰好であるわけにもいくまい」

「助かります。替えが無いので困っていました」

「そうである。そこでほれ、作りのよいわっぱりがここにある。袖を通してみよ」

素直に言うと、ちょっと恰好いいなと思った。黒地に赤いラインが一本だけ入った、ゴツゴツしたコートだった。

俺はすぐにそれを羽織り、そして言った。

「かたいですね……動きづらい。それに通気性が悪い。吸汗性もよくないみたいだ」

「えっ」

「確かに丈夫だし、恰好いいけど、そんな要素は俺には不要です。これだったら、安い布の服が欲しかった」

「正直すぎるぜ相棒」頼もしきパートナー、ソフトビニール製怪獣人形《ギモギモ族》のジュークがポケットから声を潜めて言う。おいおい仮にも王女だぞと。「まあ、そんなところがおまえさんらしいけどよ」

「そう、かあ……」

王女はむう、と唸った。俺は少し慌てた。

「ああ、でも、我俣を言うつもりはありません。お金はいくらか持っているので、街で出来合いの服を買ってきます。この世界のセン

スはよくわからないけど、ちゃんとジュークに教わって恥ずかしくないものを選ぶようにします」

「任せな。同胞のモトハルがアルイの街で服屋をやってる。《ギモ通》で最近の流行りを聞いてやるよ」

ギモ通——ギモギモ通信は、ギモギモ族特有の技能で、遠くにいる同族と互いの記憶を共有することができる。彼らはこの世界の各地に散らばって暮らしており、これで連絡を取り合っているのだった。

王女はなおも唸った。

「どうしても駄目かの？ そんなに風の通しが悪いか？」

「悪いです。でも、重要なのはそこじゃなくて、生地 hardness です。護衛をするのに、デザイン重視の動きづらい服は邪魔でしかありません。俺は、いまこの瞬間に屋敷の使用人が束になって襲いかかってきても、三十秒以内に全員を無力化してあなたを守る自身があります——」

「とんでもない自信じゃな……」

「それでもお金を貰って仕事をする以上、半端な真似はしたくありません」

「しかし、そのコートは王宮で作られたこの世に二つしかないものであるぞ？ ボラボの牙より作られたその生地は、剣も魔法も簡単には通さぬというし」

「ボラボが何かは知りませんが、俺の体に剣が届く状況がそもそもありえません。そんな敵が相手なら動きにくい服はなおさら邪魔になるでしょう」

「むぐぐ。しかし……」

「王女様は、なんでそんなにその服を相棒に着せたがるんだ？ 戦闘での相棒の強さは筋金入りだぜ。相棒が要らねえっていうなら、それは必要の無いものなのさ」

王女はやや黙ったあと、「これは妾が父上より賜ったものなのだ」と言った。しかして事情は語られた。

国というものには公式なものから非公式なものまで、様々な決まりごとがある。それは彼女ロカニ・アキト・スズカゼが王女を務めるこのスズカゼ王国も例外ではなかった。ここで問題になる『決まり』は王族の護衛官に関するものであった。すなわち、その登用に関する決まりである。

王族を護衛する騎士、これを王宮護衛官という。その名の通り、王宮護衛官は王宮にいるものだ。彼らはその職務において、王宮から離れることがまずないと言ってよい。何故か。これは単純な話、彼らの警護対象である王族が王宮を離れないからである。

「王や王族は国の中心におわすものであり、査察や表敬などといって軽々しく王宮から出るものではない」

それがこの国の常識だった。だが前王が倒れ、今の王が実権を握って常識は破られた。

「馬鹿は要らぬ。世の中を見てこい」

王は世継ぎである二人、王子ノギオムと王女ロカニをそれぞれ王都から遠く離れたアカデミーへと送り出した。無論そうなれば身辺警護が必要である。身分を隠しての秘密裏な入学であったが、それで護衛が不要ということにはならない。しかしこの護衛選びが大いに揉めた。

王宮護衛官は王族の護衛であるが、文字通り王宮の護衛でもある。彼らは王宮を守るための戦いでこそ力を発揮する。そうなるように訓練を受け、勝ち上がったプロフェッショナルだからだ。彼らは極めて優秀だった。しかし遠く離れた街のアカデミーで学生生活を送る王子・王女を、それも秘密裏に警護するとなると話は変わってくる。そのような訓練を彼らは受けていないのだ。勿論、彼らだけでなく、誰もそのような訓練は受けていない。そこで二人の身辺警護には、ただただ強く忠孝に厚い者が王より直々に選抜された。事態は解決したかに思われた。寵臣たちもほっと胸を撫でおろした。

しかし王はやっぱり違った。

あるとき王は二人の継承候補を部屋に呼んだ。

「身分を隠して学生をするといつても、おまえたちは王になるやもしれぬ身だ。学生生活の中で真に心を通わすかけがえのない友を得るようなことがあったとき、それを友のままで終わらせるようなことがあつてはならん」

そう言つて王は二人に件のコートを一着ずつ与えた。

「もしもそんな者が現れた時には、絶対に逃すな。これを与えて生涯の忠臣とせよ。おまえたちが選び、そのコートを与えたものであれば、余はどんな者でも認めよう。各自に一着より与えぬ、ゆめゆめ軽々しい心で決めるでないぞ」

二人は揃つて頷いた。コートには赤の刺繍が入っていた。

——赤。

この国・スズカゼ王国では、赤い色は大きな意味を持つ。

建国より、この国の王家の人間は一人の例外もなくみな赤い髪と目をもつて生まれる。赤は王家の色とされ、衣服や家具、小物に至るまで一般の衆がこの色を使うことは固く禁じられていた。王家と王家に与えられた者だけが身に纏うことを許される色。それが赤なのだ。

その赤が入ったコートを王が手ずから自分たちに渡すという。あろうことか一人の人間に下賜せよという。これは大事おおいじだった。

しかして王女は俺を見つけた。彼女は騎士として俺を雇用し、様子を見た。二日目の夜、彼女は決断した。こいつを逃してはならないと。そして三日目の朝、そんなことなど知らぬ俺は見事にこの栄誉を突っぱねたのだった。

「まあでも、今日くらいはな……」

スズカゼ王国拳闘大会・ジソ予選。

いま俺はその決勝の舞台に『赤』の入ったコートを着て立っていた。公の場でこれを着るのははじめてのことである。場所は王立第二碩学院の闘技場。時刻は試合開始から十五秒。足元には意識のない対戦相手。観客席は静まり返っている。闘技場の真ん中には直径

3メートルほどのクレーターができています。俺は意識のない男に近づき、しゃがみ込んで彼の服から『名札』を剥がし取る。そうしてそれを審判に見せた。

「名札を獲りました。自分の勝ちですね？」

万雷の歓声が沸き起こった。

「優勝はヨゾラ・ナツノ！」

アカデミー護衛官、ヨゾラ・ナツノだーっ！」

予選大会を優勝した俺は、その場で賞金と本戦出場の権利を受け取ると、大会本部にお辞儀して貴賓席へとジャンプした。観衆が大いにどよめき、大会本部は賓客を害する気かと早とちりし真っ青になって叫び声を上げた。俺は気にせず、目当ての人物のところまで人目を引くようにゆったり歩き、そうして彼女の前で膝をついた。隣で俺の上司・ツキノネさんがニヤリと笑う。これは決まっていた流れであった。

俺は深く頭を下げて用意された台詞を口にした。

「この勝利を殿下に捧げます。我が愛しき主……御望みどおり、本戦も無傷で優勝して御覧に入れましょう」

貴賓席の他の客がいつせいに雰囲気の色を変えた。それらは畏れの色であったり、画策する色であったり、単純に驚きの色であったりした。王女はそれらを何ら気にせぬ様子で微笑み、俺に手を差し出した。

「よくやりました、わたくしの可愛い騎士。次も期待していますよ」
そうして彼女は俺に手を差し出す。俺はその手に口をあてた。
儀式はこれでおしまいだ。俺は立ち上がる。

彼女が王女だと周りに確信させること。さりとて彼女が王女である関係者が誰も名言しないこと。これが今回、王女が考えた作戦の肝であった。この作戦で、今後彼女と俺の力になるであろう大物を釣るのだ。

観衆のざわめきと視線の中、俺は王女を抱きかかえ（ここでキヤーという叫びがやたらと上がった）、闘技場を円形に囲む高い壁を飛び越えた。

トン、と地面に降りたとき、王女はくふふ、と笑っていた。俺はすぐに屋敷に向かって走りだした。

王女を抱いたまま、馬より速く駆けながら俺は言う。

「あれで上手くいくでしょうか」

いくさ、と彼女はこたえた。

「妾の作戦に抜かりはない。大丈夫じゃ。それよりも今は――」
「今は？」

さつさと帰ってのんびりしたい、と彼女は笑った。

俺も笑って、そしてスピードを上げるのだった。

翌日、屋敷に客が訪ねてきた。

「王女殿下……いや、イルカ・アクリ嬢はいらっしゃるかね」

自室で王女とボードゲームをしていた俺は「釣れた」と呟いた。

「なにか申したか、ヨゾラ」

「はい。コドギン侯爵が釣れました」

「ほう」

王女は唇を三日月にして邪悪に笑った。

「それは重畳。――まず一人目、じゃな」

王女と俺に、力強い味方ができた瞬間であつた。

■
■
■
■
■

「コドギン侯爵？」

「うむ。その領土において魔物の侵攻を五度も食い止めた一代の怪傑じゃ。彼の軍の練度と『異常性』、それに爵自身の指揮力は父上

も高く評価しておられた」

「要するに強い軍の優秀な指揮官をしている貴族さまでですね。その彼を、どうするんです？」

「釣る」

「釣る？」

「おうとも。餌はおぬしじゃ」

楽しげな様子の王女が居間で俺を待っていた。風呂を出たら話があると言われている。俺は許しを得てソファに座った。彼女は「これを見よ」と言って一枚のチラシを俺に差し出した。俺はそれを受け取らず、彼女の手をとってじっと見た。そっちじゃないわ！と頭を叩かれた。最近、だんだん打ち解けてきている俺たちだった。

「『拳闘大会予選。応募締切は当日まで』……こんなスケジュール管理で大丈夫ですか？」

「問題はそこじゃねえだろ相棒」とジュークが言った。彼はテーブルの上でエイトと腕相撲（もしくは奇抜な握手）をしていた。

「おぬしにはそれに参加し、優勝してもらいたい」

神妙な顔をして王女が言う。俺はいいですよ、と答えた。王女は一瞬きよんとしたあとケラケラと笑い出した。「なんて軽い奴だ」とツキノネさんが言った。

「俺みたいな人間は、ひとに使われなければ活躍できません。フットワークは軽く。余計なことは極力しない。それが俺のスタンスです。やれと言われたら大抵のことはするつもりです」

「まるで優秀な奴隷だな」ツキノネさんが笑った。「尤も、首輪の毒を微塵も怖がらない奴隷だが」

「使う人間が悪事を強要したらどうするつもりじゃ？」

答えは知っているだろうに王女がそんなことを聞いてくる。俺は茶を一口飲んでこたえた。

「その時は次を探だけです。——それに、そうならないように、ジュークが俺を導いてくれます」

ジュークがぬわあ！と叫んだ。テーブルの上で横になってジタバタしている。「修行が足りないね」とエイトが言った。腕相撲はエイトの勝利に終わったようだった。

今次の作戦の内容を一言で纏めると、『王女の非公式デビュー』であつた。

王女は自分の公式なお披露目をいつにするか悩んでいた。英雄ヨゾラの飼い主が辺境の貴族の娘イルカ・アクリであることは周知の事実であつたが、イルカ嬢の正体がロカニ・アキト・スズカゼ王女殿下だということは未だ明かされていない真実だ。赤い髪と瞳は王家にあらわれるしるであつたが、決して王家だけに生まれるものではなかつた。珍しさで言えば黒よりも劣る。そのことだけをもつて彼女を王女と判断する人間はいないであろう。いるとすれば、それはもともと何らかの情報を掴んでいる者だ。

彼女は自分という存在を街に知らしめるタイミングを見計らつていた。そんな時、アカデミーの学長から報せが届く。その内容は、『力の街』ジソの拳闘大会予選の様子をコドギン侯爵が観覧に来る。そしてその滞在先をアカデミーに定めた、というものであつた。イルカ・アクリの正体を知る学長は言った。この場合、侯爵に王女のことを話してよいものかと。彼は王女のことを知っているのかと。――そうして王女は閃いた。

コドギン侯爵は武闘派の人物であり、力強い個を何より愛する。王女はそのことを父王から聞いていた。そして、王女がジソのアカデミーに通うことを知る者の名簿の中にコドギン侯爵の名は無かつた。チャンスだった。

「王位継承について、有力な貴族が束ねて王子派を明言する中、コドギン侯は珍しい中立を宣言する人物じゃ。真実の意味で国を思つて生きてきた彼は、前例や性別で王を定める愚を好しとしなかつた」王女の言葉は少し感情的であつた。

王女は説明を続けた。

公式に「私は王女です」と名言するのはアカデミーに入ってから
のこととして、非公式のデビューはその前に済ませてしまおう、と
いうのが彼女の案であった。理由は勿論コードギン侯爵である。コード
ギン侯爵を王女派に引き入れるため、侯爵がこの街にやってくるこ
のタイミング、拳闘大会という大きな舞台で、『赤』の入ったコー
トを着た優勝者・英雄ヨゾラがイルカ・アクリを『殿下』と呼ぶの
だ。その際、周囲に確信を与えても、言質をとらせてはならない。
俺が口を滑らせてそう呼んでしまっただけで、王女本人が正体を明
かしたわけではない、という形を取らなくてはならない。これは父
王に最低限の筋を通すためと、アカデミー編入まで面倒を避けるた
めだ。王女がアカデミーにいるとなれば様々な人間が集まってくる。
それらへの『誰がそんなことを名言した』という牽制である。

侯爵は必ずおぬしを気に入る、と王女は言った。

気に入られるように動きます、と俺は答えた。

こうして今夜の作戦会議は終わった。

「ところで、さっき言っていた、侯爵軍の異常性というのはどうい
う意味です？」

「そのまんまの意味じゃよ」

王女は目を細めて言った。

「かの軍は、恐ろしいほどに一枚岩なのじゃ」

大会当日、俺は順調に予選を勝ち進んでいた。

俺は対戦相手の体に異常が残らない程度に目立つ、大袈裟な勝ち
方を狙っておこなった。全員一撃で仕留めるのは当然として、ある
者は腹への張り手で五メートルほど飛ばし、ある者へはしゃがみ待
ちをしてサマーソルトキックを決めた。準々決勝でスクリューパイ
ルドライバーもどきを試してみたときなどは観客総立ちの大盛り上
がりであった。わざと攻撃を外し、闘技場の土の地面にクレーター
を作るなどの芸も進んで披露した。

そうしてまったくもって危なげなく準決勝まで進んだ時――

――奇妙な男に会った。

「あんた、なかなか強いな」と男は言った。「でも残念。俺のほうが強い」

俺がいうのも可笑しな話だが、彼はまだ少年だった。体はそこそこ大きい、肌や筋肉の質が子どもだった。

俺は試合開始の合図と同時に彼の腹を下から蹴り上げて三メートルほど浮かせた。彼が地面に落ちる。俺は勝利条件であるプレートを取るために彼に歩み寄った。――なんと、彼は立ち上がった。

正直に言っと、驚いた。油断していたのだ。

男が立ち上がったのを見た俺は、咄嗟にもう一度、今度は少し強めに腹を蹴ってしまった。タン、と音がして、彼は横に十メートル以上も飛んだ。蹴った瞬間、「あっ」と思った。殺してしまった、と。しかし彼はまた立ち上がった。今度はさすがにフラフラしていたし、すぐまた転んでしまったが、それでも一度は立った。地面に頬をつけたまま立ち上がれずにいた彼は、歩み寄った俺にひとこと言った。

「妙に頭がすっきりしてやがる」

「どこか打ったか？」と俺は聞いた。「手加減はしたつもりだが」彼は笑った。

「あんた、名前は？」

「対戦名簿を見ていないのか」

「相手が俺の名を覚えるべきだと思ってた。弱者の義務だと思っ
てた」

「よぞらだ。姓は夏野。おまえは名乗らなくていい」

「ヨゾラ・ナツノ……覚えてたよ。ありがとう」

それだけ言っと彼は気を失った。

この瞬間、俺の中で予選大会は終わった。決勝の相手は弱かった。

お披露目の『儀式』を終え、屋敷に戻ると王女が「旅人組合に行くぞ」と言い出した。

「ツキノネはまだ会場じゃ。帰って来ぬ内に変装して出かけるぞ」

「旅人組合？」

「ああ。そういえば、おぬしにはまだ教えておらんかったな」

王女は旅人組合について説明してくれた。

旅人組合は、世界各地に支部を持つ大きな組織だそうであった。

支部で『旅人』として登録しておけば、不定期に荷物の配達や連絡、人探しなどの依頼を請け負うことを条件として、組合の支部のある地域への通行税が免除されるのだ。支部は殆ど全ての国にあるという。組合で発行される名入りの札は、依頼をこなして『旅人得点』を貯めていくほど身分証明としての信頼性が高くなる。依頼には一級、二級、三級、四級があり、大概は誰でも受けられるが、一級の依頼だけは得点を五千ほど貯めて一級旅人（凄い名前だ）と認められた者にしか受けられないとのことであった。荷物を遺失すると最悪の場合、刑罰もあるそうだ。国と密接に関わった組織なのである。

なんと王女はその旅人組合に、大金を払って人探しの依頼を出してくれるそうだった。

「おぬしの姉を見つけ、それとわかる手紙を持ち帰った者に金貨三十枚を与える、という内容で依頼を出そうと思っておる。姉に伝える内容は『ヨゾラはジソにいる。《カンジ》での手紙求む』でいいじゃろ？ 異世界の文字であれば、誤魔化す者が現れたとておぬしが見抜けよう。もちろん誰でも気兼ねなく受けられるように、ランクは四級にするつもりじゃ」

「そこまで考えていてくれたんですか」

「もうちと早くできればよかったんじゃがの。拳闘大会のことといい英雄ごつこのことといい、おぬし、忙しかったである？ 妾も父上に手紙を出したりと、まあ、色々あったのじゃ。すまんの、遅くなつて」

俺は感動した。今すぐ王女を高い高いしてあげてもいいくらいに胸が締め付けられた。その衝動を我慢して俺は言った。

「でも、今日はコドギン侯爵が訪ねてくるんじゃないやありませんか？」
それはない、と王女は言った。

「当日に会いにくるほど礼儀の無い人物ではないさ。それよりもほれ、おぬしもさっさと着替えてこい。——クレリ、ケレリ！目立たぬ服を出せ！」

王女が呼び、メイド兼魔法使いの双子が現れる。

俺はコートを脱いで自室へと走るのだった。



魔物退治を終えた翌日、居間でジュークの体を磨いていると、ツキノネさんを伴って王女が現れた。

「ヨゾラ。おぬしの姉、名をヒルマと申したな？」

「そうですが、それがどうかしましたか？」

俺はジュークをテーブルに置いて姿勢を正した。「よぞら、次は私も頼むよ」とエイトが言い、「おいらがまだ終わってねえ」とジュークが言った。

王女はニヤリと笑って俺に封書を差し出した。

「ついさっき、旅人組合より使者が来た」

「そうですか」

「バビの街からおぬし宛の荷物を持ってきたそうじゃ。——確かめるがよい。手紙が本物ならば報酬を渡してやらねばならん」

「おい相棒、それってまさか！」

俺は手紙を受け取り、急いで封を破った。

それより早く、王女が楽しげな声で言った。

「送り主の名はヒルマ・ナツノ。
バビのアカデミーで教師をしておるそうじゃ」

せつしょうく／よそらとおなじょとまものたいじ(前書き)

碩学院・せきがくいん

せつしょく／よぞらとおつじよとまものたいじ



月が見たいと女は言った。

サイゴに月が見たいのと。

ボクは女を背負って歩いた。

やがて木々が姿を消して、ここなら見えるとボクは言った。

キレイと言って女は笑った。

手首がダランと落ちて揺れた。

黒目が濁って光が消えた。

呼吸が止まって音がやんだ。

笑ったままで女は死んだ。

ボクの目から涙が落ちた。

泣きたくないのに涙が落ちた。

忘れなさいと巫女が言った。ボクはいやだと首を振った。

忘れなさいと巫女が言った。ボクはいやだと涙を流した。

金色の鍵が静かに揺れた。

誰も知らない金色の鍵。

ボクにだけ見える金色の鍵。

ボクは鍵にお願いをした。

どうかどうかとお願いをした。

——どうか、どうか、お願いです。他にはなににも要らないから——

そうしてボクは嘘を願った。

世界を騙す嘘を願った。

「おかあさんを——かえしてください」

月の綺麗な高速道路。

命の摂理を置き去りにして。

金色の鍵が光って消えた。

遠くで誰かの声が聞こえた。

『——その願い、鈴風秋斗が叶えてやろう』

——

「だから、それは絵である？」

「いいえ。写真です」

「写真という絵である？」

「写真という写真です」

王女のアカデミー入学から一週間、毎日尻尾を振って自分をアピールする取り巻き連中に早くも愛想を尽かした彼女のお気に入り場所は、尖塔に隠れた狭い屋根の上であった。誰からも気づかれず、誰も来ないのを良い事に若干の改造を施したこの場所は、日当たりもよく、実に快適な二人だけのサロンとなっていた。

そんな場所で、俺は元いた世界のことを王女に語り聞かせていた。「では、それを使えば誰でも簡単に絵が——写真、であつたか？その、絵のようなものが描けるのか？」

「はい。枠の中に被写体を入れて、ボタンを押す。必要な作業はそれだけです」

「原理がまるでわからん」

「俺にもわかりません。でも、俺のいた世界では大抵の物がそうでした。わからないけれど便利だから使う。わからないけれど、それがなくては生活が成り立たない。そんなものばかりでした」

「そのきやめりんというやつは」

「カメラです」

「かめらんというやつは」

「カメラです」

「ぬう……かめら！——というやつは、魂を抜かれたりはせぬのかや？人の本質をそのまま絵に閉じ込めるのであれば、何らかの副作用があつてしかるべきと思うが」

「それは大丈夫です。そもそも地球では魂というものの存在は実証されていません。写真に写るのも、本質ではなくただの静止画像です。わかりやすく言うと、王女が——」

「ロカニじゃ」

「失礼。ロカニがいま見ている景色をそのまま紙に貼り付けて、同じものを別の人間にも見えるようにする——そんな道具です」

「なんとまあ、不思議な道具があるものじゃなあ……。いつか妾も見てみたいものじゃ。その写真とやらで、自分の姿を」

「自分の顔が見たいなら、鏡があるじゃないですか」

「それはなにか違うじゃろ」

「そういうものですか」

「そういうものじゃ」

「ちなみに、上位互換のビデオカメラは撮影した『動き』を映像として再生します」

「見たい！見たいぞ、びりおきやめりん！」

「ビデオカメラです」

こうして俺たちは狭い楽園でぎりぎりまで時間を潰し、次の授業へと向かうのであった。

編入前、王女に雇われることが決まった段階で、俺はここ王立第二碩学院の学長に挨拶に行き、王女づきの騎士として、アカデミーで学生生活を送るロカニ王女の護衛官を務める旨を報告した。学生ではないが校舎の中に入る許可を寄越せ、というたわけた要求であ

る。学長は立場上、その場では認めなかったが、国王に確かめることを約束した。そのあとで、王と王女と学長の間で何やら書を通じたやり取りがあつて今に至る。その際、ツキノネさんが王都に奔つて俺のことをあれこれ話したらしい。結果、「敵に回られるよりは」ということで話がまとまり、晴れて俺は王女の騎士となつたのであつた。

王女がその正体を明らかにしたことはすぐさま王宮へと報告された。王にも宰相にも連絡がいき、急遽屋敷の使用人の増員が決定された。その数なんと二十人。うち十人が周辺警護で、残りは世話係兼接客係だと言う。これでも少ないというのだから驚きである。屋敷の空き部屋は瞬間にその数を減じていった。シノビの人たちが交代制で一部屋を使っていることを可哀想に思った。無論のこと、王女はこの件を快く思っていないかつた。彼女は毎夕、俺の部屋に来ては「息が詰まる」「いなくなればいいのに」「ゲジゲジ虫ふめ」「キノコに当たれ」と愚痴をこぼす。一度俺は「警護の人たちだけでも帰ってもらうように言いましょうか？」と提案した。十人だろうが百人だろうが俺には勝てないのだから、いるだけ無駄に思えたのである。しかし彼女は渋い顔をして首を横に振つた。

「無理じゃな。奴らにもプライドがある」

「プライド!？」

俺は驚いた。かつて三歳年上の友人が「弱者にプライドを持つ資格はない」と言っていた。俺には王都からやって来た人たちが強者であるとはどうしても思えなかつた。友人もたいがい弱かつたが、歩き方や筋肉の動きを見る限り、彼らはもつと弱いであらう。そのことを言うと、王女は俺の腕をべしべし叩いて呵呵大笑した。みながおぬしのようないいのにな、と言って笑い続けた。

王女はセカンドリ（高等部）の前期クラスに編入することになった。セカンドリには、本来であればプライマリ（初等部）の八年の課程を修了した者が進学する。プライマリの入学条件は6歳以上であるから、セカンドリ生は基本的に14歳以上ということになる。

王女は12歳なので特例という形であった。それというのも、本当ならば彼女はアカデミー入学に際して名前だけでなく年齢も偽るはずだったのである。王女であると明かしてしまった以上、歳を鯖読むことは不可能となった。そのための緊急措置であった。

俺は授業中、影のように王女の後ろに控えていた。そうして彼女に触れようとする全てから彼女を守った。大袈裟な気もするが、これはツキノネさんから命じられたことだった。何があるかわからないからと。王女の周りには学年学級の境を超えて多くの学生が集まった。王女はその一人一人に丁寧に言葉を返した。疲れた時には合図を出し、それを受け取った俺が『お時間』を伝え、『秘密の場所』へ逃げることに決めていた。そこで王女は毎度、胡座をかいた俺の膝に座ってぐったりするのであった。

いつものように、尖塔に隠れた屋根のでっぱりに、王女を後ろから抱くようにして座っていると、ふと彼女が俺の手を握ってきた。「どうしました？」と俺は言う。彼女は楽しそうに俺の手を揉み続けた。

子どものころな、と王女が言った。まだ子どもだ、という指摘はせずにおいた。

「妾は兄が欲しかったのじゃ」

王女は幼い日々の身の上を語った。

王女の周りには常に17人の侍女がいた。侍女であるからにはもちろん全て女である。17という数はスズカゼ王国において特別な意味を持っているそうで、他に彼女の部屋に入る召使いはなかった。王女の身の回りの世話を男の家来に任せるわけにはいかない。間違いが起こらなくとも耳に好ましくないからだ。人の口に戸は立てられない。王女が男に世話を許しているとなれば、その噂を真つ先に耳にするのは貴族であろう。王宮に頻繁に出入りするような大貴族ともなれば、その嫡は王女にとって婚約者候補にほかならない。彼らを無闇に刺激しないことは王家として当然の行動選択であった。

王女の周りには『男』という生き物が父王を除いて一人もいなかった。弟王子はいたが、彼は二つも年下である。十にもならない子どもにとって、二つ下の弟など、そんなものはもはや愛玩動物に近かった。そんな環境の中で精神的に不健全に育てられた彼女は、いつしか健全に異性へと興味を向けるようになり、一つの願いを抱くようになった。

すなわち——兄が欲しいと。

「おそらく、頼れる男が欲しかったのであろうな。他人の男は妾の近くまで来られぬ故、いつか自分に夫ができることなど信じられなideであった。——ならば兄が欲しいと。いま振り返ってみれば可笑しな話じゃ。けれどもそんなことを、当時の妾は毎晩毎晩、真剣に願っておったのじゃ」

どうしてそんな話を俺に、とは聞かなかった。ただ少しだけ誇らしく思い、空を見上げた。

「俺にも、妹が欲しいと思っていた時期があります」

王女が振り返り、ニヤリと笑った。俺もつられて笑った。

「でも、ロカ二ほど真っ直ぐな理由じゃなかった。俺はただ、俺だけを頼ってくれる、無力な人形が欲しかったんです」

その当時、姉にとっての俺がそうだったように。

「妾は無力でいることはできぬ」ぽん、と王女は俺の胸に頭をあずけた。「王になる身であるからの」

俺は「ええ」と言っただけで彼女の体に腕を回した。

「今は力のある人を守るのも楽しいと感じています」

風は穏やかに吹いていた。王女はそれ以降なにも話さず、俺もなにも言わなかった。やがて中庭でベルが鳴らされた。授業開始五分前の合図だ。

行きましようか、と俺が言い、王女は無言で頷いた。

俺は彼女を抱き上げて屋根から飛び降りた。

落下してゆく数瞬の狭間。楽しいなあ、と彼女は言った。

俺は笑みだけを返事にした。

ふいに懐かしい匂いがした。

王女の寝室で、ジューク、エイト、王女、俺、の四人でゴンギン（石と札を使った点取り遊び。偶数人でプレイする）をしているときであった。客の足音と心音、それに会話も聞こえた。お客さんだと俺は言った。ゲームを見物していたツキノネさんが顔を上げた。

「誰だ？」と彼女は言った。

「キスイさんです。クツキーを持ってる。……ビーもいますね」

「キスイ？——ああ、おまえが助けた娘か」

ツキノネさんがふむと頷く。おいおい、とジュークが言った。

「相棒に会いたいのはわかるが、いくらなんでも王女様の滞在先に訪ねてくるのはまずいだろう」

いやいやわからんよ、とエイトがバネの弱くなった黒ひげ危機一髪みたいな動きで肩をすくめた。

「これまで一度も来なかったんだ。ようやく大義名分を手に入れたのかもしれない」

しかしてビーの大声が屋敷に響いた。

「兄貴、ヨゾラの兄貴い！お客さんを連れてきました！女です！若い女です！」

盗賊みたいなことを言う奴だった。

俺は玄関に向かった。なぜか王女ほか部屋にいた全員がぞろぞろとついてきた。振り返ると、左右の手にジュークとエイトを持った王女が「ぬふふ。気にするな、気にするな」と言った。ツキノネさんも下品な感じに笑っていた。二人が俺とキスイさんの仲を勘違いしていることは明白であった。完全な誤解である。俺はもう精通しているが、彼女をそういう対象として見たことはないのだから。俺は一度このことをジュークに話したことがある。ジュークは神妙な声で「おまえさんがそうでも嬢ちゃんは……」とよくわからないことを呟き、「いや、やめておこう」と押し黙った。頼りになる相棒

はときどき意味不明だった。

恐れ多くて死にます、もうダメです、という顔をして庭で待っていたキスイさんは、やって来た俺を見て顔を輝かせた。彼女は布のかかったバスケットと、一辺15センチほどの小さな木箱を持っていた。王女が俺の背中をどんと押した。力が弱くて俺はびくともしなかった。

王女が一步前に出ると、キスイさんは箱とバスケットを横に置き、膝について頭を下げた。なぜかビーも離れた所で跪いていた。王女はキスイさんにこの屋敷の主人としてかけるべき言葉を一言一言かけ、ツキノネさんを伴って屋敷の中へと戻っていった。屋敷の中に無関係の平民を入れないことは常識である。ビーでも駄目なくらいだ。俺の横を通る際、彼女は俺のポケットにジュークを入れていった。こっそり見ながらエイトを通してギモギモ通信の実況放送を聞く気なのだろう。ビーはまだ跪いていた。

「お久しぶりです」と俺は言った。「ひと月以上になりますね」
キスイさんは顔を真赤にして、アノとかエイトとか言ったあと、深々と頭を下げた。

「その節は本当にありがとうございました。あれ以降、嫌がらせを受けることも無く、両親ともども幸せに暮らしています」

「それはよかった」

「それであの、これ、ヨゾラさんが好きだって言ってたクッキーなんですけど」

「いただきます。お茶を持ってきますので、一緒に庭で食べましょう。決まりで、屋敷の中に人を入れることはできないのです」

「ひいつ、そんな恐れ多いこと！」

彼女は大きな声を出したあと、ハツとした様子で庭の入口を振り返った。そこでは腰に剣をさした兵が二人、真っ直ぐ前だけを見て直立していた。彼女はふう、と息をついた。俺は本題を聞いた。

「今日は、あの時のお礼にいらしてくださいかったですか？」

「あつ、いえあの、そうじゃないんです。あたしったら何やってる

のかなあもう。——今日は、これをお届けにあがりました。ヨゾラさん宛のお荷物です」

キスイさんが木箱を差し出す。俺はバスケットを腕にかけてそれを受け取った。

俺は言った。「キスイさん、旅人でいらしたんですね」

彼女は慌てて否定した。

「まさか！あたしはただのお手伝いです。父の知り合いで二級の旅人をしている方に、ヨゾラさん宛の荷物があると聞いて、それなら是非あたしが、ってお願いしたんです」

彼女は少し俯いたままはにかんだ。

そのあと五分ほど話をしてキスイさんは帰っていった。茶を出すとか庭の椅子に座ればいいとか失礼にならないよういろいろ言ったが、彼女は断固としてこれらを固辞した。帰り際、彼女は俺に「お休みの日には家に寄ってくださいね」と二度も念を押した。次の休みは三日後の予定だった。俺が休むと屋敷は厳戒態勢になる。王女が憂鬱そうな顔をするからあまり休みをとりたくない俺であった。

屋敷に戻ろうとして、ふと気付く。小さな木箱……もしこれが王女を狙ったテロだったら？

俺は木箱に耳を当てた。音はしない。完全に密閉されているわけでもないし、そもこの世界にあるのかどうかは知らないが、爆弾ということはないだろう。可能性としては毒か。俺は木箱を開けた。毒には何度が当たっているが、致死毒でも対処を間違えなければ死なない自信があった。最悪、嘔吐するくらいは我慢しようと思った。果たして、箱の中身は緩衝材がわりの枯葉と、眠るように丸くなっている一体の人形であった。

「ジューク」

「なんだ、相棒」

俺はポケットからパートナーを引っ張り出し、木箱の中がよく見えるように近付けた。

「これ、何でしょう？」

「こいつは……」

それはいわゆる『着せ替え人形』という女兒を象った人形であった。姉が持っていたからわかる。外からでは肘や膝に可動部分が見えないが、中に針金が入っていて曲がるのである。俺は知っている。一度誤って損壊してしまい、それはもう酷い目に遭ったのだ。それから今に至るまで俺はロケットペンシルが怖い。

相棒、とジュークが言った。手のバタバタ具合がいつもより深刻だった。

「こ、こいつはあれだぜ……『リカちゃん人形』ってやつだ。タカラトミーの大ヒット商品さ。おいらなんかとは違う本物のスターだ！」

リカちゃん人形、と俺は呟いた。そして脳内で検索をかける。それはすぐにヒットした。

「聞いたことがあります。夜に電話をかけてきて、GPSのように現在位置を報告する謎の存在ですね。電話を切ってもまたすぐかかってきて、最後には『今あなたの後ろにいるの』と――」

「惜しい。そいつはメリーさんだ」

よく見ると、眠っている（と思う）リカちゃん人形は目が開いたままだった。両目とも左を向いている。俺は箱からそっと人形を取り出した。人形は白いワンピースを着せられていた。

人形をバスケットに入れて木箱をひっくり返す。中には枯葉しか入っていないかったが、箱の底に、どこかで見た筆跡でメッセージが書かれていた。

『彼女の服を探せ。世界の秘密はそこにある』

俺は迷わず人形のスカートをめくった。きゃー！と人形が叫んだ。絶叫だった。危うく落とすところであった。ジュークなど「ひいっ」と言っただけで二度ばんざいをした。目が動かないから気付かなかったが、いつの間にか彼女は起きていたようである。俺は慌てて謝った。

「すみませんでした！痴漢とか、そういうつもりではなかったのです！どうか警察だけは許してください！どうか警察だけは！」

「もう、馬鹿……。服を探せていうのは、そういう意味じゃないわよっ」

人形は俺を許してくれた。彼女は名前をリカと名乗った。

「香山リカっていうの。よろしくね」

「自分は夏野よぞらといいます」

「おいらはジュークって言います！アマネ屋復刻シリーズの大怪獣ギモギモです！シリアルナンバーは019です！大先輩に会えて光栄です！」

「ええ。よろしく、ジューク。素敵なお名前ね」

香山氏は気さくな人物であった。テンションが変なことになってしまったジュークの握手にも快く応じ、俺にも「リカでいいわ。敬語もよして」とフレンドリーに接してくれた。俺は笑って「わかった」と答えた。

服を探せというのは文字通りの意味であった。服の中を探るのではなく、彼女がこの世界で失くしてしまった服を探す手伝いをしろ、という意味だそう。ジュークが少しだけ落ち着いてきた頃、彼女は言った。

「なるほど、あなたがヨゾラ君かあ。友達から聞いてるよ」

「友達というのは、キミを俺宛に送った人物か？」

「うん。『俺は忙しいからヨゾラとやらを頼れ』って。……へえ、髪が黒いのね」

「珍しいか？」

「そうじゃなくてね」

リカは言った。

「灰色だったら、シンヤにそっくりなのになあ、と思って」

俺は絶句した。

遠い場所で、何か大きなものが動き出すような予感があった。
強い風が吹く。
庭の隅ではまだビーが跪いていた。



おい英雄、と男が言った。魔物討伐に向かう森の中でのことである。どうしました、と俺は応えた。

「おまえ、どのぐらい戦える？人間相手じゃ強いみたいたが、魔物を狩った経験はどの程度のもんだ？」

「魔物かどうかは知りませんが、大きい虎を一頭やりました」

「虎だあ？」男が嘲笑った。「あんなもん、でかいだけの猫じゃねえか」

男が俺に喧嘩を売っていることは明白だった。大きな戦闘の前に気が高ぶっているのだ。微笑ましいな、と俺は思った。幼稚園時代にライオン七頭に囲まれたときは俺もこんな感じだった。隣で王女とビーが苛立つ様子が手に取るようにわかったが、ここは我慢してもらうことにした。俺はそうですね、と言って王女と手を繋ぎ直した。彼女はかつて俺のものだった大きなコートを着て、フードまでかっぱりと被り、もはや誰だかわからなくなっていた。

「まったくもってそのとおりです。虎も猫も同じようなものだ」

「《ヨロイ》は人型の魔物だ。おまけに硬い甲冑を着てやがる。猫退治なんかとは勝手が違うぞ」

「まったくもってそのとおりです。——猫もヨロイも同じようなものだ」

王女がクスリと笑う。ビーはムスツとしたままだった。男は尚も俺に絡み続けた。

「どこかの誰かさんが三十人も戦力を減らしちゃったからな。今回

はきついかもしれんぜ、こりゃ」

この言葉には流石に王女が口を開こうとした。だが俺は彼女の肩に触れて制した。今にも殴りかかろうとしているビーには「やめろ」と言った。

「ビー、約束を忘れたか。おとなしくすると言うから連れてきたんだぞ」

ビーは障子紙を破いたことが発覚した犬のようにしゅんとして「すみません」と言った。これをまた男が「ガキを連れて魔物退治かよ」とからかった。俺が例のコートを着ていなかったのは彼にとって幸運以外のなにものでもないであろう。『赤』と知って侮辱していたなら、俺は王女の騎士として彼を裁かなければならなかったのだから。

「アカブの坊ちゃんはそのりゃあ悪さをしたかもしれねえが、なにも騎士たちまでやることはなかったんじゃねえのか？俺あ直接は見てねえが、ずいぶん『酷い』ことをしたらしいじゃねえか。噂になってるぜ」

「あんた」とビーが言った。「兄貴を知らねえのか？」

「知ってるさ」と男は言った。「お人好しな英雄さまだろ？拳闘大会の予選で優勝したっていう。街じゃ女や年寄りに人気らしいじゃねえか」

「拳闘大会も見てないんだな？」

「それがどうした」

ビーが言い返そうとするのを俺は「やめろ」と再び止めた。俺は溜息をつき「ひとつ伺いたいのですが」と男に言った。

「『力の街』ジソでは、あの程度のゴミを『戦力』と言うのですか？」

「ああ？」

王女がくすくす笑い、男が怪訝な顔をした。俺は立ち止まり、真っ直ぐ彼の目を見て続けた。

「魔物が怖いなら観覧に徹していただいて結構。豚三十匹でヨロイ

とやらを何匹減らせたものかは存じませんが、少なくとも自分が百人分の働きをしますのだからあなたは不要です」

男は何も言わず、呆れたような目を俺に向けた。俺は王女の手を引いて再び目的地へと歩みを進めた。

「それじゃあ、大会の時の異常な打たれ強さ——あれが強化魔法だったのか」

「はい。俺あガキの頃から強化だけは得意でして。親父が南の大門で衛兵をしてるんですが、強化魔法の腕だけで言うなら、この街一番は親父でしょうね。それで、二番が俺です」

「つまりキミのお父さんはキミより打たれ強いわけか。凄いな、強化魔法っていうのは」

「俺に言わせりゃ、魔法も使わず手加減した蹴りで俺を十メトウルもぶつ飛ばす兄貴の『凄さ』の方が信じられませんがね。……親父は若い頃、ヨロイの甲冑にヒビを入れたことがあるってのが自慢なんです」

「それは凄いのか？」

「凄いなんてもんじゃありませんよ。投石機から放ったかつてえ岩が当たっても、奴ら転がるだけで、鎧の方は凹みもしないんですから」

「そんなに硬い金属を身に纏って動けるものか？凹まないということとは、分厚いんだろ？かなり重いと思うが」

「そこは魔物ですからねえ。連中、鎧の中は空っぽなんですよ。真っ黒な鎧の中に火の玉が一個、ぽつんと浮かんでるだけ。その火の玉を割ったら甲冑が砂になっちゃってます」

「勿体無いな。それだけ硬い金属なら色々と使いどころもあるだろうに」

「火の玉を割る前に甲冑を砕くことができれば、その破片は砂にならない——っていうのが親父の主張です。家には黒くて硬い、ちっ

こい石があるんですけど、親父はそれをヨロイの欠片だつて言うんです。俺がヨロイにヒビを入れた時に落ちた破片がこれだ、って。本当かどうかは知りませんがね」

「火の玉を『割る』というのは？甲冑の隙間から水をかけてやったんじゃ駄目なのか？」

「駄目ですね。火の玉はヨロイの核みたいなものなんです。火の玉の真ん中にはちっちゃな宝石が入ってるんです。それを割らない限りヨロイは死にません」

「甲冑の隙間から剣を突っ込んでちまちま火の玉を狙うのか？」

「そうやって言われると間抜けに聞こえますけど、それしか倒し方がないんですよ」

「その宝石とやらも砂になってしまふのか？綺麗なら一個くらい欲しいものだが」

「宝石は残ります。というか、最近はその宝石のためにヨロイを狩ってるようなもんですよ。ヨロイの宝石は倒した奴のものですから、そいつを街に帰って売るんです。貴族さまたちの間じゃけっこうな人気らしくて、この街の特産にもなってるんですが、兄貴、ご存知ありませんか？」

「知らないな」

「兄貴なら一人で倒しちまいそуд。一個と言わず、二個も三個も手に入りますよ。明日が楽しみですな！」

虐殺だった。

1対79の戦争。

1は俺、相手は魔物が79体。
虐殺しているのは俺だった。

「うはははは！すごい！凄いぞヨゾラ！ヨロイどもが『ばらばら』じゃー」

「できるだけ細かく砕くことにしましょう」

「うむっ！甲冑の破片は多ければ多いほどいい。ジソの街の新しい名産になるやもしれんからの！」

「ビー、火の玉の始末は任せるぞ。適当に叩いて割っておけ。どうせ動けはしないんだ、一人でできるだろう？」

「うはははは！ヨロイどもめ、まるで粘土細工のようじゃ！うはははは！」

「なんだ……これ……」

「ビー、聞いているのか？」

「たしかに強いとは思っていたが……まさか、ここまで……」

「おい、ビー！」

「あ——はっ、はい！」

「聞いているなら返事くらいしてくれ。そのあたりでもがいている火の玉を割っておけ。どうやら火の玉は甲冑から離れられないらしい。一番大きい破片のそばをウロウロしているはずだ」

「了解です、兄貴っ！」

王女を抱いて森を駆け抜けながら、見つけたヨロイを破碎してゆく。腕を、脚を、胴を蹴ってバラバラに壊してゆく。ヨロイの甲冑は驚くほど硬かった。四割の力でようやく割れるほどだ。蹴り方を誤ればすぐに足を傷めるであろう。油断できない敵であった。

ヨロイはコミカルな魔物だった。甲冑は真つ黒でデザインもなかなか格好いいのだが、武器がただ太いだけの木の棒であったり、ときには枯れ木そのものであったりするのだ。ハイセンスな鎧が腐った木を抱えて突っ込んできたときなどは危うく噴き出すところであった。武器は選べと。鎧を着ているくらいなのだから剣くらい持てないのかと。稀に剣や槍といったまともな武器を持って襲いかかって来る個体もいたが、そのどれも武器の手入れがなっていないかった。おそらく拾ったか奪ったかしたものであるう。つまり『自分の武器』ではないのだ。姿だけでなく、その在り方まで『がらんどっ』

な魔物だった。

最後の一体の解体を終えた俺は、近くにあつた大きな切り株に王女と二人で腰掛けた。ヨロイは全部で84体いた。その内79体を俺が壊した。周囲に魔物がないことは音と匂いで知れていた。王女はコートの前を開けてパタパタと胸を扇^{あお}いだ。姉がいたらはしたないと叱られるのだろくな、と考えて一人で笑った。王女もむふふ、と笑った。

「楽しかったのう。こんなに笑ったのは初めてじゃ。笑いすぎて汗を掻いたわ。帰ったらぬるま湯に浸かりたい」

「ヨロイの破片はどうします。アカデミーに寄付しますか？」

「なんじゃ、おぬし要らんのか？あれだけの量の未知の金属じゃ。かなりの額になるぞ」

「お金は口カニから貰う分で足りていますよ。——それに、全部自分のものにしたのでは英雄らしくないでしょう？そんなのは駄目だ。格好よくない」

「おぬしもわかってきたではないか」

「我が主は生き様の不細工な男がいつとうお嫌いなのです」

「うははは！言いおるわ！」

王女と手を繋いで集合場所まで戻ると討伐隊の人たちが化け物でも見たような顔を一齐に俺に向けた。そこそこ大きな体軀をしたピ―が子犬のように駆け寄ってくる。俺は少しだけ気持ち悪いな、と思った。

「兄貴、お疲れ様です！」

「疲れてはいない。キミの方が面倒な仕事をして疲れているだろう。汗を掻いてるぞ」

「俺なんて、兄貴に比べたら全然動いてません！へっちゃらです！」
「運動量の話はしてない。が、まあ、いいか。疲れていないならあつちにある欠片を回収してきてくれないか。十分の一をキミにやる。売って駄賃にするといい」

「そ、そんなにいただけません！」

「キミは俺の従者だろう？ 給金も払っていないんだ。それくらいは受け取れ。どうしても要らないというなら壁の外の子どもたちに小屋でも建ててやれ。友達がいるんだろう？——残りは全てアカデミに寄付するから、そのように手配してくれ。俺たちは先に帰る」

「はい！ ありがとうございます、兄貴！」

さて帰ろう、と歩き出すと、一人の男が俺たちに近寄ってきた。戦闘前に喧嘩を売ってきたあの微笑ましい男だった。彼は道を塞ぐように俺の前に立つと、深く頭を下げて「すまなかった」と言った。

「俺あ……調子にのつてた。馬鹿な事をしちまって、本当にすまなかった」

気にしていません、とだけ答えて俺は彼の横を素通りした。

やがて森の外に出る頃、王女がニヤリと笑って俺の顔を見上げた。

「気にしていません、か。ぬふふふ」

「あれはなかった」と俺は言った。「もう少しマシな言いようがあっただろうに」

「屋敷に戻ったら会議じゃな」

「議題は何です？」

「無論、英雄ヨゾラの恰好いい決め台詞を考えるのじゃ」

手を繋ぎ、仲のいい兄妹のように俺たちは笑い合った。

吹く風は冷たく澄んでいる。

もうすぐ街に冬が来るそうであつた。



ある女教師の手紙

拝啓

冬の香りたちこめる季節、

お変わりなくお過ごしのことと思います。

さて、私は今ある街で教員をしております。

場所は貴方のお住まいより馬で一日離れた所ですが、走ればすぐでありましょう。

バビです。

是非一度遊びにいらしてくださいね。

まずは連絡まで。

敬具

なんちゃって。

ひるまでです。お姉ちゃんですよ。

旅人さんからお便り頂きました。

いいひとに拾われたんですね。お姉ちゃんは嬉しいです。

私は今、バビの街で先生をしています。

お家は、詳しいことは書けないのですが、ある人のお屋敷にお世話になっていきますので、心配しないでください。

実は、バビの街で、この世界の秘密について少しだけ知っている人とお知り合いになることができました。もしかしたら、意外に早く元の世界へ帰ることができるかもしれません。

いずれ私のほうから会いに行きますので、よぞらは無理をしてお姉ちゃんに会いに来たりなどせず、自分の生活を優先してください。お姉ちゃんは今、わりとお金持ちなので余裕があります。

私にお手紙を送るときは、王立第一碩学院のナツノ宛でお願いします。二級の旅人さんに着払いで依頼していただいてかまいません。何度も書きますが、お姉ちゃんはリッチです。そしてデヴィッドはリッチです。

書きたいことはまだまだ山ほどありますが、今回はここまでとし

ます。

体に気を付けて、詐欺にも気を付けてください。お姉ちゃんはよ
ぞらが心配です。

それではバイビー。

お姉ちゃんより

ある少年の日記

10 / 24

未来の俺には子どもがいるらしい。そんなことをあさこが言った。
あさこの予言が外れたことはない。

子どもがいることよりも、この世界を出ていくことが確定してい
るという事実が悲しい。俺の妻になる女について聞いても、あさこ
は何も教えてくれなかった。おそらく相手はあさこではないのだろ
う。

ここを出れば全てを忘れてしまう。俺はあさこを忘れてしまうの
だ。

そもそも生きた時代が違う。俺が元の世界に戻っても、そこにあ
さこはいない。まだ生まれてさえないのだ。生まれるまで待つ
にも、この世界での記憶を持ち帰ることはできない。

この世界で出会い、こんなにも愛し合っているのに、元の世界に
戻ればこの愛も消えてしまう。そうして今は知りもしない女を抱き、
子どもを産ませるのだ。

あさこが言うのだから、その未来は確定している。

俺はあさこを忘れ、顔も知らぬ女を愛し、抱くのだ。

気が狂いそうだ。

ゆらぎ1／ひるまとりんりとさつじんけん



夢さえ霞む白の森。白の月が白のあかりで白い樹々を照らす。

ほかに色はなく、世界はただ白で出来ていた。

地を隠す白の粉。降る雪の白が樹の葉の白に重なり白い音を鳴らす。

ほかに色はなく、世界はただ白の中にあつた。

——彼女に会おう、とわたしは思った。

愛した人と、顔も知らぬ女の娘に。



こつちですね、とわたしは言いました。そうしてわたしは人様のお庭を横断しました。もちろん挨拶は忘れません。こんにちとは言えば庭木いじりをしていらつしゃった家主のおじい様はやあ先生と返してくださいます。ちよつと通つていいですか。また物探しですか。そんな感じです。お気を付けなされよ。どうも。わたしはぺこりと頭を下げて目的地へと向かいました。てくてく歩きます。

池のある広場が見えてきた頃、助手君が体からおずおずした音を出しながら言いました。

「先生は、いつもああなのですか」

わたしは立ち止まり、振り返つて首を傾げました。「ああ、とは？」。わたしは聞き返します。せつかく人間に生まれたのですから、言葉は意味の伝わるように使つていただきたいものでした。

「さっきの家、結構なお屋敷でした。立地からいって、一級市民様では？」

「ええ、バロネットでいらつしゃるとか。尤も一代限りの名誉爵位で、領地なども無いそうですが」

「貴族さまじゃないですか……。いいのですか、あんな態度をとって」

「いいんじゃないありませんか？好きな時に来ていい、庭で焚き火をしたってかまわないと仰いましたし」

「世の中には社交辞令というものがあります」

「世の中には嘘や社交辞令を見破る女がいます」

助手君はぐむむと言いました。わたしはおほほと笑いました。

「だいたい、いつの間に親しくなられたのです。接点が無いでしょ」

「七日ほど前でしょうか。八日だったかなあ？あのお宅の前を通った時に、明らかに目の悪い男の子がいたので」

「はあ。いたのです？」

「治してさしあげたのです」

「え？」

「だから、治してさしあげたのですよ。ちゃんと見えるように。目が見えないと危ないでしょう？」

「いや。ちょっと……待ってください。治してさしあげたって。簡単に言いきりましたが、それは、先生以外にはできないことですかね？」

「そんなことはありませんよ。『ここ』にはまだ無いだけで、超音波治療は視力回復にそれなりの効果を認められています。安全基準と利権を無視して上手にやれば、短期間でも視力はそこそ回復するのですよ」

「とんでもない技術ですね。異世界人はみんなそんな真似ができるのですか？」

「協力者と機械をいじる知識があればできるのではないのでしょうか」

「一年もあれば可能でしょう。一人で十分以内、となると流石に難しいでしょうが」

「つまり、先生は十分で子どもの目を見えるようにしたと」

「正確には六分ですね。少しは見えていたようですから」

「……………」

「そうしたら次の日、ツバメさんのお屋敷に男の子とご両親、それからおじい様おば様が馬車一杯のお土産を持っていらっしやいます」

「……………」

「今後なにがあっても王子殿下の御為に尽くす所存で御座居ます、つて。いやはや、皆さん大泣きで参りましたよ」

「……………」

「それからですね、あの御一家と仲良くなつたのは。そうそう。さつきはいらっしやらなかったようですが、おば様が服飾のお仕事をされていらっしやるとかで、わたしが『肌が弱くて困っている』と言ったら、肌触りのいい服を何着も作ってくださいだったのでよ。いま着ているこれもそうです。わたしの世界ではこれを白衣といいます」

似合います？とくるくる回って見せます。小学生から変わらぬ姿を生かした可愛さアピールでありました。ツバメさんからは大好評を博したものです。十歳の少年が真っ赤な顔をして「に、似合う。とてもよい」などのたまった時には邪悪な感情が止めどなく溢れたものでした。しかし助手君はいつものように怖い顔でわたしの眉間あたりを見つめるだけでした。社交辞令を知っているくせに実践はできないというのです。断言しますが、彼は女の子にモテません。今後モテることはないでしょう。弟と同類の匂いがします。あれもかつて「俺は嘘が苦手だ」などとおぼざきになりました。意図せぬかたちで駄洒落を言って恥ずかしい思いをすればよい、或いは素足でミニカーを踏んで痛みに悶えればいい。そう思います。

「そのハクイという上掛けですが」助手君が渋い顔のまま言います。

「その光沢はレソガニですよ。」
「レソガニ？」わたしは聞き返しました。「ブランド名ですか？」
助手君は大きな溜息をつき、「知らないならいいです」と言いました。「行きましよう。次はどっちです？」
なにやら一抹の不安を感じながらも、わたしは目的地へとのし
し歩いてゆくのでした。

用事を終え、お屋敷に帰ったわたしは真つ先に厩舎へと向かいま
した。以下はそこでの会話です。

「ただいま、ヨシムネ君。はい、人参ですよ」

「おかえり人間。ぼくこれ好き。これ好きだよ」

「もう一本ありますよ」

「ぼく人間すきだよ。おいしいのくれるから。でも散歩はもつと好
きだよ。ぼく散歩にいきたい。ちゃんと草のとこ歩きたい」

「お散歩は明日いきましようね。明日はわたし、お休みですから。
街の外まで行きましよう」

「あした散歩つ。あした散歩にいくんだ。草のとこ歩く。ちよつと
走る。ぼくすぐ忘れるから人間、ちゃんとおぼえてね。あした散
歩」

「はい。明日になったら行きましようね」

お馬さんと美少女（調子にのりました）の心温まる会話シーンで
すが、実際には小つちやいのとでつかいのが向い合つて互いにバヒ
バヒ言っているだけでありました。切ない話です。

お屋敷に入ると忠犬のように玄関で待っていたツバメさんが大玉
花火のような笑みを浮かべられました。わたしはただいま帰りまし
た、と言い、彼はうむと素つ気無さを装って頷きました。出会った
ばかりの頃は「ひるまー、わーいわーい」と抱きついて来たもので
すが（表現には誇張があります）、学長先生ご乱心の一件以来すつ
かりそんな子どもらしさが引っ込んでしまわれました。あれはあれ

で、三歳くらいの頃のよぞらみたいで可愛かったのに。成長とは悲しいものです。幼児性愛のひとの気持ちが変わりかけていたのです。が。まったくもって残念でした。わたしの頭も残念でした。

手洗い洗顔うがいをしてツバメさん用の居間に入ると、そこではツバメさんとリロさんがそわそわした様子で待っていました。騎士のキブさんはいつもどおり執事の格好をして壁際で石像になっていました。わたしはさて、と言いました。掛けよ、とツバメさんがソファを勧めてくださいます。わたしははい、とだけ言って座りました。しかしてツバメさんは仰いました。

「して、どうであった」

ツバメさんは不安そうな表情でわたしを見ました。『音』も不安と、そして僅かばかりの期待を奏でています。リロさんからも緊張が伝わってきます。変わらないのはキブさんだけでした。

ええ、とわたしは言いました。そうしてわたしは調査の結果をツバメさんに——いいえ、ノギオム王子殿下に報告したのでした。

「噂は真実です。報告された他にも、既に二名が殺されていました」
ツバメさんはなにかを言おうとし、けれどもグツと堪えました。
わたしはただ告げました。

「この街に、魔物が入り込んでいます」



「魔物、ですか？」

わたしは首を傾げました。そういえばまだ見たことがないなあ、と思いました。いつかは見たいものです、魔物さん。できたらうんと大きいのがいいですね。

「そう、魔物だ。魔物。ほんと、笑わせてくれるよ」

躑躑さんが面倒そうに言いました。

「冗談もほどほどにしてほしいぜ。街の中に魔物なんかいたらすぐに見つかるってんだ。馬鹿貴族のガキが虐め方を間違えて殺しちまったんだよ。そうに違いない。それが見つかったもんだから、ビビって『魔物がやった』とかなんとか嘯いたのさ。『俺は見たんだ。疑うつもりか』とでも言つときゃ誰も突っ込んで聞きやしないからな」

「でも、調査隊が組まれるのでしょ？」

「問題はそこなんだよ。キミのせいだぜ？王子殿下が協力を申し出るなんて思いもしなかった。ちくしょう」

時刻はお昼休み。場所は第一アカデミーの、わたしの研究室。話し相手の、白髪長身の異世界学教諭は、今回彼が巻き込まれてしまった事件の概略を語ってくださったのでした。

始まりは三日前でした。

その日の夜、研究室でひとり筋トレをしていた躑躑さん（ここ、笑いどころではないそうです）のもとに学生が訪ねてきました。彼はセカンダリの前期生で、躑躑さんの『異世界学』を選択している人物でした。彼は躑躑さんに言いました。

「いや、参ったよ。真っ青な顔して『学校の敷地内に魔物が出ました、すぐ来てください』だからな。飲んでた茶を零しちまった」

躑躑さんは急いで現場に向かいました。呼びに来た学生と二人で、警備の兵隊さんも連れずに。彼は魔法を使えるうえに魔物退治も何度が経験しているので、調子にのっていました。本人は否定しますがそうに違いありません。調子にのっていたのです。

「違うつつってんのに」

「どうでもいいので先をお願いします」

「キミ、俺のこと嫌いだよ」

「先をお願いします」

「もしかして魔法が羨ましいのか？自分に才能がないから。そんなんだろう」

「どうぞ先を」

「そ——」

「先を」

「……………」

お調子者で約束破り常習の躑躑さんはその時も調子にのって忍者走り現場に駆けつけました。場所は校舎の外にある剣術練習場でした。そこには男の子の頭部が転がっていました。体はどこにもありませんでした。彼はプライマリの3年生でした。先月9歳の誕生日を迎えたばかりでした。

「俺が着いたとき、そこには死んだ生徒の頭しかなかった。俺を呼びに来た奴は寮で上級生に頼まれて俺の所に来たそう。現場にその上級生はいなかった。呼びに来た奴の話じゃ、そいつが発見者だということだった」

「呼びにいらした学生さんが嘘をついた、ということはないのではありませんか」

「俺もそこを真つ先に疑ったよ。だが結果は白だった。彼を俺の元に走らせた学生は確かに存在したんだ。そいつはシニアの学生で、俺も知ってる奴だった」

「では、犯人はその学生だと？」

「俺はそう睨んでる。ただ——」

躑躑さんは目を細めて言いました。

「ただ？」

「今回の件、不可解な点があるのも事実なんだ」

躑躑さんは卑猥な目をして語りました。

「おい待て。俺のどこが」

「いいから話してください」

「……………」

躑躑さんは夜が明けるのを待たずに男子寮へと向かい、第一発見者の学生を訪ねました。その頃には学長先生（新任のおじいちゃん先生です）が被害者の家に出向いていました。

この国の司法・警察機構は日本に比べてかなり幼いものです。地方において警察の代わりは貴族軍であり、その兵隊さんは平民の子どもが一人亡くなったくらいではそうそう動きません。王の直轄領であり、貴族や他国の王族まで通うアカデミーもあるバビにはそれなりの数の王様直属の兵隊さんが常駐していますが、それも、進んだ文化圏から飛ばされてきたわたしの目から見れば優秀なものとは言えません。強者が弱者を虐げるのがあたりまえの世界です。時代劇をこよなく愛する躑躑さんは悪の栄えを嫌ったのでした。

遺体の第一発見者は大貴族・アカブ伯爵家の長男でした。

躑躑さんが部屋を訪ねると、同室の生徒が顔を出しました。彼は無駄だと思いますが、と言ってドアを開けました。中には真っ青な顔をしたアカブ長男氏がいました。彼は震えながら窓の外を見ていました。足音に振り返り、躑躑さんを見るなり彼は言いました。「シモンの幽霊が来る。生きていたんだ。次は僕の番だ」と。

「シモンさんってどなたです？亡くなった男子生徒の名前はロブロ君だったと思いましたか？」

「五年前に、森で魔物に食われた生徒だそうだ。ロブロ少年を殺したのはそいつの幽霊なんだとよ」

「長男氏がそう言ったのですか？」

「『間違はなくシモンだった。奴は白い化け物を連れていた』だとさ。曰く、殺したのはシモン君とやらじゃなく、そいつと一緒にいた化け物らしい。化け物は俺と同じくらいの身長で筋肉ムキムキ。おまけに腕が四本あったそうだ。白い大きな布を頭からかぶっていたらしくて、それがずれた時に三本目と四本目の腕が見えたんだってよ」

「それはそれは。正気ですか？」

「人間、追い詰められるとパニックっておかしなことを言い出すからな。そういう意味で言うなら、まさしく正気じゃあなかったんだろ」

「首だけ残して行ったのには理由があるのでしょうか？なにか、宗

教的なモチーフだとか、そういうものが」

「さあね。というかキミ、犯人化け物説を信じるのか？」

「純粋な好奇心というやつですよ。殺したのが長男氏であれ化け物さんであれ、首だけぽつんと残して他を持ち去る理由が私には思い付かないもので」

キミは存外ウソツキだな、と躰裏さんは言いました。わたしはにこりと笑ってとぼけました。

さて、ここからが問題でありました。

街に魔物がいる、となればそれは大事おおい事です。なんとしてでも探し出し、退治しなければなりません。本来であれば「街に魔物が」などと言われても信じる人はまずありません。しかし今回は証言者が問題でした。大貴族の跡取りが、アカデミーの教員相手に証言したのです。第一アカデミーは王立の教育研究機関であり、その長は王の代理として領地を運営します。アカデミーの教職員は、すなわち王の直属の部下に極めて近い存在ということになります。そんな教職員の一人である躰裏さんに、王様より領地を拝領した大貴族の跡取りが証言したのです。こうなつては、十人中十人が嘘だと思つていても、無碍にできるものではありません。誰かが何らかの行動を起こさなくてはなりませんでした。しかして着任したばかりで雑務に忙殺される学長先生は、その矛先を躰裏さんに向けたのでした。

「キミが相談されたんでしょ？調査はキミがするように」

そう言われてしまえば躰裏さんには返す言葉がありませんでした。何せ彼は「アカデミーで起きた事件を放置することはできない」という理由を持ちだしてアカブ長男氏の部屋を訪ねたのですから。

その翌日、つまりきのう、躰裏さんは「話がある」と言つてわたしの研究室を訪れました。わたしは快く彼を迎え入れました。ようやく来たか、と思いました。わたしは『あること』を期待して彼をずっと待っていたのです。しかし予想は外れました。話は魔物調査がどうたらということでした。そういえばそんな話を学生たちがしていたなあ、とわたしは思いました。極めて興味がありませんでした。

た。躑躑さんは言いました。

「キミの耳を貸してほしいんだ」

「返してくださいね。こんなでもお気に入りなのです」

「アカブの馬鹿息子の発言、その真偽を確かめもらいたい。どうせ嘘だとは思うが、確証がほしい。キミは人の嘘を見抜くんだろう？」

「見抜くのではなく聞き分けるのです。いいですよ、それくらいでしたら。——ちっ」

「あれ、いま舌打ち……」

「してませんか？」

「いや、いま確かに」

「していませんか？」

こうしてわたしは彼に協力することになりました。わたしはどうせすぐ終わるのだわ、などと事態を乙女チックに樂觀視しておりました。そうはなりませんでした。今では後悔しています。叶うならきのこのわたしの足の小指を踏んづけてやりたいものです。そしてきのこの躑躑さんの背中に爆竹を入れて差し上げたいものです。

わたしと躑躑さんはアカブ長男氏の部屋を訪ねました。この時わたしは事情を深くは知らず、また興味ありませんでした。ただ長男氏の発言の真偽を躑躑さんに伝える簡単なお仕事と聞いていました。躑躑さんの音に嘘や企みのそれはありませんでしたから、別段心配も警戒もしていませんでした。

「帰ってください」

ノックをし、わたしが声をかけると、部屋の中からそんな言葉が返ってきました。

「あなたに話すことはありません。帰ってください」

アカブ長男氏はわたしを強く拒絶しました。ああそうか、とわたしは思いました。

簡単な話でした。《黒の魔女》は有名になりすぎていたのです。小柄な女教師が王子に向けられた暗殺者を皆殺しにし、主犯の学長を拷問した。そんな噂が今や街中に流れていました。その方法を聞

いてくる方々があまりにも多くいらつしやるので、わたしは説明が面倒になり「秘密の魔法です」などと言っていました。そのツケが回ってきたかたちでした。

「得体の知れない術を使う魔女を側に寄らせるわけにはいきません。僕はアカブ伯爵家の跡取りですから」

そう言われてしまえばこの街では誰も、王子殿下や学長でさえ言い返すことができないのでした。何故なら、わたしが口止めしているからです。対人用の奥の手である『頭痛』と『反射』はできれば隠しておきたい技能でした。

長男氏は「帰ってください」を繰り返しました。わたしは躑躑裏さんを見上げました。彼はドアに向かって声をかけました。

「俺一人なら入ってもいいのか？」

「……シチノミヤ先生はかまいません。話したいこともありますから」

躑躑裏さんは肩をすくめました。

「悪い。そういうことみたいで」

「いいえ。かましませんよ。——ちっ」

「……あのさ」

「なんでしょっ」

「俺、キミに何かしたか？」

「いいえなにも。するべきこともしていませんね」

「えっ？」

「では失礼します」

そうしてわたしはわざと足音を立てて研究室まで戻るのでした。

助手君は出掛けているようでした。研究室に入ると、わたしは椅子に深く腰掛けて目を閉じました。

躑躑裏さんがわたしの力を勘違いしていることは知っていました。彼はわたしを『嘘を見破る』ことと『動物と話す』ことができるだけの女だと思っています。頭痛や反射運動で人や動物に自殺を強制することができるとは知りません。そしてわたしが半径1キロ以内

の会話を全て聞き取れることもまた、彼は知らないのです。

わたしはフウ、と溜息をつきました。わたしは音の取捨選択を無意識的におこなうことができます。今は男子寮の一室で教員と学生が話しているのを聞くとはなしに聞いているところでした。

「先生を呼ぶように指示したのは、シモンの連れていた『アレ』が異世界のものだと思ったからです」

「僕は見ました。確かに見たんです。死んだはずのシモンが、あの白い化け物に命令して平民を殺すところを」

「僕じゃない。先生が僕を疑ってるのはわかってる。でも本当に僕じゃないんです」

「信じてください。あれはシモンの幽霊なんだ。助けてください。シモンは僕を恨んでる。僕があいつをおいて逃げたから」

「次に殺されるのは僕だ。次は僕の番なんだ」

「助けて。助けて。助けて。………死にたくない」

わたしは目を開けました。まいったなあ。事態は思っていたよりも少しばかり深刻でした。わたしは再び目を閉じ、そして誰にともなく呟くのでした。

「彼の音、これ、嘘なんてついていませんよ」

その日、お屋敷に帰ったわたしはツバメさんに『今日の出来事』をおはなししました。その日起きたことを互いに報告する。これはもはや日課になっていました。

そうして今日のお昼休み、躑躅さんがわたしの研究室に怒鳴りこんできました。

「大事になっちゃったぞ、どうしてくれる！ガキの嘘を本気にしてくれやがって！」

「ノックもせずに失礼な人ですね。人語はわかりやすく意味を込めて話してください」

「調査の件だ！……今朝、警備隊の連中が家まで訪ねてきた。『王

子殿下よりお言葉を賜り』とか言ってたぞ。あれ、キミが王子に言っただろ。連中、指揮権は俺にあるとかほざきやがって……どうしろってんだ！」

「なるほど。殿下は行動がお早くていらっしやいますね」

「あくまでしらを切るか」

「白髪も切って差し上げましょうか？ 男の人は短い方がいいですよ」

「まったく、冗談じゃないぜ」

蹶裏さんは言いました。

「魔物なんて、街のどこ探したっているわけねえつてのに」
しかしてわたしは首を傾げ、疑問を口にするのでした。

「魔物、ですか？」

■
□
■
■
■

犯罪人シモン・アテラキをわたしが殺すことで事件が解決した翌日。

その夕方、ヨシムネ君との散歩から戻ったわたしにツバメさんが駆け寄って来ました。

「ヒルマ、大変だ！ そなたに客が来ておるぞ！」

ツバメさんはとても慌てた様子でした。わたしはヨシムネ君からおり、お屋敷の庭に入りました。すぐに騎士さん（学長事件のあとに補充された騎士さん。名前は知りません。）がヨシムネ君を厩舎まで連れていってくれます。騎士さんにどうも、とお礼を言い、わたしはツバメさんに向き直りました。

「そんなに大変なお客様なのですか？」

お屋敷の中にどこかで聞いた音を発する女性がいるのがわかりました。はて、どこだったでしょうか？

ツバメさんはうむ、と言い、わたしの手を掴んでお屋敷へと引っ張ります。

「そなたの親戚を名乗っておる。めっぼう強くて、リロが人質になつておる」

「人質つて……」

「いや、危害は加えられておらん。大丈夫だ。ただ、リロの奴は触られただけで石のように動かなくなってしまったのだ」

「それは大丈夫と言つていいのでしょうか」

「ヒルマが来たらすぐ元に戻す、と申しておる。男はどっしりかまえているものだ。なにもできないならば尚更な。して、心当たりはあるか？」

「さあ、この世界にいる親戚というと、よぞらぐらいしか。でも、そんな音はしませんね。うーん。この心音、どこかで聞いた気がするのですが、どこだったか……」

「そうそう、名はアサコだそうだ。女だ」

「あさこさんですか。日本人のお名前ですね。……うーん、やっぱりわたしの親戚にそんな人は——」

——あれ？

なにか、頭の中に引かかるものがありました。

あさこという名前、どこかで……。

「ああ、そうだ」

思考を遮るようにツバメさんが言いました。

「そやつ、もしもそなたが信じない時にはこう言えと申しておつた」
そうしてツバメさんは、懐かしき友人の呼び名を音にしたのでした。

「わたしはアカマのミコです——と」

ゆらぎ2／ひるまとりんりとちいさないわかん



放課後のことです。場所は躑躑りんりさんの研究室。わたしと躑躑さんはロブロ少年殺人事件についての意見交換をしていました。躑躑さんが調査隊の指揮をとることになった原因の半分はわたしにある。そんな事実が罪悪感もどきをわたしの良心に集中砲火し、こうしてお手伝いなどしている現状を作り出しているものでありました。わたしはいい奴です。何度でも言います。わたしは実にいい奴であります。

「そういえばキミ、ツチクイって知ってるか？この国じゃ割と有名な魔物なんだが」

躑躑さんが言いました。硝子のない窓から差し込む日差しで彼の白い髪はキラキラ輝いています。わたしは笑顔で答えました。

「ちつ。——いいえ、知りませんね」

「ああ、やっぱり知らないか。ツチクイっていうのは——あれ？いま、舌打ちした？」

「していませんが」

「しただろ。いま、けっこう大きく。なんで嘘つく」

「していませんが」

「……………」

「していません」

「……うん、わかった」

「それで、ツチクイというのはどういった魔物さんでいらっしやるのでしょうか？」

「ここ最近ずっとそんな感じだが、もしかしてキミ、本気で俺のことを嫌っていたりしないよな？俺の喋り方、ウザいか？それとも馴

れ馴れしいか？もしそうなら接し方考えるけど」

「そんなことはありません」

「実際、この世界で日本人と接触したの、初めてだからさ、ちょっと舞い上がってるところは否定できないし」

「本当に気にしていません。そういう思考も理解できます」

「ほんとに？」

「ええ」

「ならいいけど」

「ところで、わたしは借りたお金を返さない者を人とは思うなと母から教わっているのですが、蹶裏さんはそのあたり、どのようにお考えでしょう？」

蹶裏さんはかつてチンピラのお兄さんに絡まれたときのシハウ君より速い動きで財布を出しました。ちなみにシハウ君というのはお友達のお兄さんです。弱っちくて愉快な人です。

「すまなかった。完全に俺が悪かった。すっかり忘れてた。俺はもう、本当に、どうしようもない駄目な奴で」

「そうですね。人に借金したことを忘れるなんて、蹶裏さんは本当にどうしようもない駄目な奴です。一度おくれたばりになられてみてはいかがでしょう？なにかが変わるかもしれませんよ」

「そんなにか。待ってくれよ、言い訳をさせてくれ」

「申し訳ありませんが、お客様の心は着信拒否されております。ピー」という発信音のあとに首を吊ってみるのはどうでしょう？」

「自殺をすすめるな」

「ピー」

「催促するな！しねえぞ自殺なんて！」

「まあまあ、いいじゃありませんか自殺ぐらい。この世には死にたくても死ねない人が山ほどいるのですよ？」

「キノコ残した時のお母さんみたいなこと言うのやめてくんない？俺の命は消費されるためにあるもんじゃねえからさ」

「いいじゃんかよう」

「キミ、打ち解けると途端に馴れ馴れしくなる奴だな」

「そんなわたしにラブですか」

「それはない」

「わたしもです。今後ともその調子で宜しく願います」

「ちったあ残念がれよ。こう見えても俺、元の世界じゃモテモテだったんだぜ。女なんか取っ換え引っ換えの男前ハーレム野郎だぜ？」

「そうそう。ご存知でしょうけれど、わたし、人の嘘を見抜くことができるのですよ。そのことを忘れて嘘自慢だなんて、まさか蹴裏さんはしませんよね？男前ハーレム野郎でいらっしゃる蹴裏さんはもちろん、ねえ」

「……………」

「うふふ」

「女となんか、手繋いだこともないです。……研究一筋で生きてきたから」

「そのようですね」

「師匠の奥さん以外とは、喋ったこともあんまりないです」

「そのようですね」

「……………」

「その内いいことがありますよ」

「この際もう性格は悪くていいから可愛い女に愛されたいです」

「必死すぎます」

「ぶっちゃけ可愛くなくてもいいです。というかもう、人類の女なら誰でもいいです」

「そのアピールは逆に印象悪いです」

「でもキミはなんか違うので嫌です」

「わたしも御免です」

「……………」

「……………」

無言で交わされるハイタッチ。蹴裏さん的にはミドルタッチです。お金の貸し借りが無くなり、仲良しになったわたしたちなのでした。

「それで、ツチクイさんとやらはどういった方なのでしょう？」

「ツチクイってのはさ、人間と蟻と蜘蛛を足して3で割ったみたいな魔物なんだ。名前の通り、群れで土の中に住んで、土だけ食って生きてるような奴らなんだけど」

「ふむふむ」

「そいつら、腕が四本あるんだ」

「ちよつとストップをお願いします。——躑躅さんはもしかなくても、ロボロ少年を殺害したのがそのツチクイという魔物だとお考えになつていらつしやるので？」

「この近くに巣があるという話は聞かないが、いないとも限らないだろうさ」

「……まあ、それはいいでしょう。ところでそのツチクイさんは、躑躅さんと同じくらいの身長をしていて、筋肉がムキムキでいらして、更には二本の足で歩くような魔物なのですか？」

「俺は実物を一度見たただが……まあ、腕はそんなに太くはなかったな。二足歩行はちゃんとできてた。身長は……」

「身長は？」

「……成体で、人間の子どもぐらい」

「駄目じゃありませんか」

「突然変異ででかい奴が生まれることが有り得ないとは言いきれないだろう」

「《魔》を食べた動物は強く硬くなる、という話でしたらセキ工先生から聞きました。でも、体が大きくなるまで食べ続けられるような個体は極めて稀で、大抵はその前に死んでしまつらしいですよ？」

「それは俺も知ってるさ。けど、アカブの馬鹿息子にツチクイのことを話したら、あいつ、言つたんだ。『たしかにツチクイを大きくしたような奴でした』って。そのときキミはいなかったが、俺には奴が嘘をついていたとは思えない。次は自分が殺されるかもしれないと怯えている奴が、犯人の特徴に嘘を混ぜるか？」

「そんな精神状態だからこそおかしなことを口走ることもあるでしょう。だいたい躰裏さん、最初はアカブ長男氏を疑っていたじゃありませんか」

「間違いはすぐに認めろって師匠からも言われてるんだよ。それに、あの馬鹿が嘘をついてないって教えてくれたのはキミだろ？」

「それはそうなのですけれど、嘘でなかったからといって、真実が言葉通りであるかと言われたらそれはまた別の問題なわけで。魔物にしるシモン氏のことにしる、わたしはアカブ長男氏の見間違いだと思っっているですよ。——うーん。絵に描けませんか、そのツチクイというの？『ツチクイを大きくしたような』外見というのがどういうものか、実物を知らないわたしにはちよっとイメージが掴めないのですよ」

「絵、下手なんだよ俺」

「なんと。お仲間さんじゃありませんか。いろいろ気が合いますね、わたしたち」

「なんだよ、キミもか。俺なんか高校時代、美術の成績2だったぜ」
「わたしは4ですね。他は全て5です」

「……………ちっ」

「絵は弟の専売特許なのですよ」

「そんなに上手いのか」

「あれの絵心は常軌を逸しています」

「下手なのか？」

「技術だけを言えば800万画素のデジタルカメラをゆうに超えるレベルです。恐ろしいのは感性です」

「わかった、あれだろ。へんなもん付け足すんだ。ははは。いるよなあ、そういう奴。上手い奴に限ってそうだ。俺の知り合いにもいたよ。ちゃんと描いたら綺麗な絵なのに、なんでか毎度毎度、随所にピーマンを散りばめるんだ」

「それはそれでなかなか面白いと思いますが、しかし弟は違います。あれは見たまま、そのままを絵に閉じ込めてしまうのです」

「閉じ込めるっていう表現はわかんねえけど、見たまま描くのは別にいいんじゃないか？ピーマンよりよっぽど常識的な感性してるよ。写实的ってことだろ？」

「写实的……確かに、無機物を描くことに限定すればそれに近いと言えるかもしれない。写实的な絵、というのは要するに、写真のような絵のことですよ。」

「絵には詳しくないけど、たぶん、ひとつの場所やものを細かく正確に描いたものをそういうんじゃないかな。」

「ものは、ひとつの場所に同じ状態で停止していることができません。とりわけ生き物はそのあたりが顕著です。」

「そりゃ、まったく動かないってのは無理だろう。生き物は呼吸もするしまばたきもするから。」

「そのとおりです。弟はそんな微細な『動き』や『揺れ』を含めた、一定時間におけるモデルの『位置』を一枚の紙に描画するのです。」

「……………うん？」

「弟の絵は、モデルが動けば動くほど、紙が黒くなっていくのです。モデルがまばたきをすれば、目が閉じた状態から開いた状態までの『動き』を一枚の紙の同じ場所に描画します。」

「それってつまり……モデルの時間を絵に閉じ込めてるってことか？」

「はい。動画を無理やり静止画にしているようなものです。よぞらの描いた絵のタイトルは全てモデルを観察した時間になっています。『五月十日。十五時から十六時』といった具合です。」

「怖えよキミの弟。……想像と違いすぎる。」

わたしたちはロツフォ先生の研究室に向かいました。躰裏さんが役に立たないためです。ロツフォ先生は農業学（酪農）の技能教官ですが、躰裏さん曰く、家畜以外の動物や魔物にもたいそう詳しいとのことでした。

「こんな感じかねえ？」

ロツフォ先生は羽根ペンでツチクイの絵を書いてくださいました。紙いっぱいに逞しい線で描くダイナミックな画風でした。

「大きさは、うーん、兵隊はナツノ君よりもまだ小さいくらいで…女王は人間の女性と大差ないくらいかな」

まるでわたしが人間の女性でないかのような言い様です。酷い話でした。

「兵隊や女王、というところ——やはり蟻や蜂のような習性をもった魔物なのでしょうか？」

「そうだが、厳密にいうとあれらは魔物ではないよ。ヒト種と同じように独自の言葉をもった動物だ。魔物というのは魔を食べて変異した動物を言うのだよ。ツチクイが魔物などと呼ばれるのは、単純にその外見が人間にとって『ぐるてすく』なものだからだ」

「グロテスク、ですか」

絵に描かれたツチクイは二足歩行・四本腕の蟻でした。頭は蟻、体も蟻、膨らんだお尻も蟻。羽をつけたら蜂と言えないこともないでしょう。それが立っているだけでした。

「人でないものが二本の足で歩く。これを受け入れられる人間はなかなか少ないのだよ」

ロツフォ先生はどこか寂しさを滲ませた声で言いました。

ツチクイ。二本の足で歩く巨大な虫……いくら頭から布を被っていても、こんな生き物、衛兵さんが門を通すでしょうか？夜であればまだしも、門が開かれているのは日のある内だけです。街壁をよじ登って侵入したと考えるのが妥当でしょうけれど、それもどうなのでしょう？王子暗殺未遂事件以降、バビの街の夜間警備はかなり嚴重なものとなっています。衛兵さんたちが人間サイズの魔物の侵入を許し、あまつさえ今も捕まえられずにいるなどとは、わたしにはどうしても考えられないのでした。

「やはり内通者、でしょうかね。だとすると目的は……」

「うん？なにか言ったか？」

「いいえ、独り言です」

その後もロツフオ先生はツチクイについて解明されていることを話してくださいました。熱心に聞いているのは犯人ツチクイ説を支持する躑躑さんと、わたしは上の空でした。わたしは頭の中で事件の内容を時系列に沿って整理してみました。

・夜、アカブ長男氏とロボロ少年は剣術練習場で会っていた。
・そこに『謎の男』と『白い化け物』が現れる。
・『謎の男』が何やら呟き、『白い化け物』がロボロ少年の首を飛ばす。

・長男氏、男子寮へ逃走。このとき『謎の男』も『白い化け物』も何故か彼を追わなかった。

・長男氏、ジュニア生に躑躑さんと呼ぶよう命じる。理由は『白い化け物』が異世界のものに思えたから。

・ジュニア生、躑躑さんの研究室へ。躑躑さんは彼を連れてすぐさま現場へ。

・躑躑さん現場到着。そこにあつたのはロボロ氏の首。

・アカブ長男氏は『謎の男』をシモン・アテラキ氏だと語っている。
・街の警備隊は誰一人として『白い化け物』を目撃していない。

追記1 アカブ長男氏は嘘をついていない。

追記2 シモン氏は五年前に森で魔物のご飯になっている。そのとき彼を置き去りにして逃げたのがアカブ長男氏。

追記3 事件の際、『謎の男』とアカブ長男氏は言葉を交わしていない。

どうにもピースが足りません。わたしはなんだか頭がもやもやするのです。一度手をつけたことは最後までやり抜かなくては気が済まない性分です。わたしはここにきて一つの決断をしました。すなわち、自分の手でこの事件を解決する決断を。

名探偵 ひるまちゃん誕生の瞬間でした。決め台詞は『悪はまと

めて自害しろ』でどうでしょう。『嘘をついたら自殺頭痛』もいいですね。

ロツフォ先生にお礼を言って彼の研究室を辞し、わたしたちはそれぞれの下宿先へと戻ることにしました。今日の捜査はここまです。今は雑談をしながら後者の玄関へと向かっているところでした。「そもそも蹴裏さんは、なぜツチクイに思い至ったのですか？」

わたしは言いました。

「なにか切っ掛けがあるのでしょ？」

「動物と話す奴がいるんだ。魔物を操る奴がいたっておかしくはないだろう？」

蹴裏さんはなんでもないことのように言います。しかし彼の『音』には明確に嘘がありました。わたしは目を細めて彼の顔を見つめました。

「勿論おかしくなんてありません。でも、それだけが理由ではないのでしょうか？」

「そりゃあ、だってキミの服装が——」

「白衣がどうかしたのですか？」

「——いや、なんでもない。やめておこう」

「？」

「なんでしょ？ 気になりますね……」。

「ところで、キミはこれからどうするつもりだ？ 事件を解決しようと思います、なんて言っただけ」

露骨な話題転換でした。わたしは追求をひとまず諦めます。

「とりあえず、明日の放課後はアテキさんのお宅を訪ねてみる予定です」

「あんたらの息子は生きてるかもしれないぜ、って？」

「まさか。ちよっとした確認ですよ。指揮官さまの方はどうなさるおつもりで？」

「その呼び名はやめてくれ。俺のほうは、調査隊連れて南の森をち

よこつと探してみるつもりだよ。ツチクイの巣でも見つかったら儲けもんかな」

「危険はないのですか？失礼を承知で言いますが、おそらく躰裏さん、そこそこ程度にしか強くないのでしょうか？弱虫臭がぶんぶんします」

躰裏さんはまあね、と言って苦笑しました。

「俺は時空魔法の研究職だから。でもさ、戦闘に使える魔法こそ三流だけど、逃げ足だけは超一流なんだぜ？」

躰裏さんはニヤリと笑います。わたしはにへら、と笑い返しました。

「それを誇れる躰裏さんはわかってる人です。逃げることに負けることは違います。どんな人生も最大の勝利は幸福です。死以外の幸福を望むなら、それを手に入れるための条件は生きていることです。逃亡の善性を理解しない凡愚をわたしは常々悲しく思っているのですよ」

「キミけっこう言うよな」

「間違っていますか？」

「なにも。まったくもってそのとおりだと思うね。俺に戦い方を教えてくれた人は《魔王》なんて呼ばれてたけど——」

……えっ？

「——その実、魔法はからつきしで、武器は逃げ足の速さと人脈だったぜ。それでもみんなが認めてたよ。誰もこの人には勝てない、本当の最強はこの人だ、ってさ」

「魔王……？」

「そう、魔王」

魔王って、もしかして——あのときの？

「だっさいあだ名だろ？でも実際、そう呼ばれるだけの人だったよ。俺の知る限り、鈴風秋斗に対等と認められた人間は師匠と魔王さんだけだ」

「躰裏さん」

「うん？」

わたしの心臓はバクバクと、今にも破裂しそうに高鳴っていました。

「その人は……もしかしてキチジマという名前の、紫色の髪をした男性ですか？」

おっ、と躰裏さんは驚いたように言いました。

「なんだよ、知ってるのか？キミの時代にもいたのか、あの人」

赤の塔で四時の鐘が鳴りました。ごおん、と重い音が響きます。

「……知っていますよ」

わたしは歯ぎしりして言いました。

そう、あの男のことは忘れもしません。

あの男は――

「――わたしとよぞらが協力しても勝てなかった、ただひとりの人類ですから」

ゆらぎ／りんりとおうじとからまわるおんな



夏野女史と別れた俺は校門を出て下宿先へと向かった。厄介にな
っている宿に着くまで、別れ際の彼女の顔が頭から離れなかった。
あの殺意を剥き出しにした顔が、どうしても。

『……知っていますよ』

あれはどういう意味だったのだろう。

彼女の弟、よぞらさんのことは聞いている。いや、聞くまでもな
く知っている。夏野よぞら。最後の殺人鬼。《肅聖殺し》の息子。
俺のいた世界、鈴風秋斗なきあの時代に、もっとも恐れられていた
カミヤドリの一人——《現象全否定》のヨゾラ。俺の、命の恩人だ。
サインは断られたが、ガキの頃に握手してもらったことがある。

『——わたしとよぞらが協力しても勝てなかった、ただひとりの人
類ですから』

彼は過去、一度だけ《紫天の魔王》きちしまみく吉嶋未紅と戦い、引き分けて
いる。あの魔王に負けなかったのだ。そうして彼は有名になった。
これは史実だ。しかし、それを彼女が——十七歳の夏野ひるまが知
っているのはおかしい。知っていてはいけないのだ。なぜなら《紫
天の魔王》と戦った時、夏野よぞらは既に十九歳だったのだから。
いや、それ以前にも彼らは会っていたのか？

そして戦っていたのか？

彼女の口ぶりだと、二対一で？

だが、夏野女史に武力と呼べる力はない。アカデミー前学長の事件にしたって、暗殺者を皆殺しにしたという話はどう考えても誇張だ。ノギオム王子は彼女に惚れているようだから、そばに置くに足る理由が必要だったに違いない。夏野女史の能力はおそらく『嘘の拒絶』。それを上手く使い、口八丁で丸め込んだところをシノビがザックリ、というのが語られなかった真相だろう。

しかし、そんな誤魔化しや心理的な揺さぶりなど魔王には効かない。そもそもにして魔王がこの上ない策士なのだから。魔王との戦いで夏野女史が役に立つことなどありえない。けれど、あの表情は……。

わからなかった。夏野女史はあれ以降、一言も喋らなかったから。歩く道、目抜き通り沿いの布屋の屋根でカラスに似た鳥が喧しく鳴いた。俺は空を見上げ、すぐに顔を下げて溜息をついた。わからないことはまだあった。もう一つの謎。そして最大の謎。俺の知る歴史——師匠から教わった全てのカミヤドリの家族や友人、所属していた組織に至るまで——俺が暗記している彼らの交友関係。その中に、存在しない人間のこと。

そう、夏野ひるま。

彼女だ。

そもそも俺は《現象全否定》に姉がいるなど聞いたこともなかった。

彼女はいつたい何者なんだ？

「おせーぞリンリ！」

南門を出たところでキンキン声に名を呼ばれる。俺は門番の衛兵に挨拶して声の主へと向かった。アカデミーの教員なんぞしていると、自分一人なら通行税が不要というのが実によかった。

俺はよう、と手を上げた。そいつはぼろを着たまだ十歳にもならない子どもだった。名前をオモドクという。俺はボウリングの助走みたいな走り方で接敵し、オモドクの坊主頭をアンダースローでパ

シンと叩いた。

「いてえな、ばかりンリ！」

「躑躅裏さん、もしくは躑躅裏先生だつたろうが馬鹿ガキ。おら、荷物もて」

「うわあつ。なに入ってたんだよこれ。重いよばかやろうつ」

オモドクは不平を言いながらも鞆を持ってよろよと歩き出す。筋トレをするときに顔にばかり力が入って鍛えるべき箇所は全然、という奴がいる。こいつがまさしくそれだった。口を富士山みたいに突き出した顔はなかなか愉快だ。

「だめだ、これ重いよリンリ」

「自業自得だうんこチビ。迎えなんざ要らねえっていつも言ってたろうが。毎日毎日門の前で出待ちしやがって。てめえは鍛えられたファンか。俺はいつから追っかけられるほどビッグなアイドルになったんだ。たしかに俺という男の恰好よさは認めるところであるけども！」

「またわけわかんないこという。なんだよあいどるって。それにその長い白髪わりとだっせえよ。——なあ、ほんとに重いんだけど！」

「男がちよつと重いくらいでピーピー言ってるじゃねえ」

「おいつ。おいてく気かよ、おいてば！リンリ！」

「くどいぞチビ」

「カッコいいリンリさん！」

「どれ貸してみなさい、重力を軽減してあげよう。しょうがない奴め」

「くそつたれ……」

オモドクとじゃれながら南の森へ向かう。門を出て、森に向かつて十分も歩けば目的の村は見えはじめる。そこは名前のない村だった。村というより群れ。街の周りに人が集まり、小屋を建てただけ。バビヤジソなどの大都市の周囲にはこうした集落がいくつもある。その中の一つが、バビの南の森手前にあるこの村だった。いかにも、

俺の寝場所である。

俺は村に入るとオモドクを伴って、集落で一番森に近い位置に建つ家へ向かう。そこに着くと俺は「おい」と中に声をかけた。それは大きなテントだ。モンゴルの遊牧民の住居から飾り気を剥ぎ取ったような薄茶色のテントである。他の建物はみな木造の小屋にところどころ布を張ったものだが、この家だけは大きなテント。しかも入り口の上にはなぜか『技術準備室』という舌を噛みそうな名が印字された『学校のプレート』が取り付けられている。

ちよつと待つと中から「どうぞ、どなたです？」と甘ったるい感じの男の声が返ってくる。俺は「俺だ」とだけ答えた。ややあつて戸は中から開けられた。顔を出したのは金髪のがりがり男、このテントの家主、ニヌヨブだった。

「おかえり、リンリ」ニヌヨブはカサカサの唇とこけた頬で笑った。「魔法つてやつも考えものだね。戸に触れちゃいけないなんて、そんなんじや空き巣もできやしない」

「戸の外側だよ。正確には『入り口』だ。出口として内側から触る分には問題ない」

俺は戸に触れないようにしてテントの中に入った。そしてコートを通し、オモドクの頭に掛ける。「わぶっ」とオモドクは言った。俺は大きく背伸びをした。

「それに、んゝゝゝ、空き巣は無理でも、万引きはできる。飢えても死にやしないさ。――ガキどもはどうした？」

「向こうでお勉強中。キミのくれた本が気に入ったみたいだ」

「拾い物だぜ？ そんないいもんとも思えんがね」

「どうだか。綺麗な状態の本を十冊も捨てるような奴は余程の金持ちか馬鹿か、はたまた金持ちの馬鹿か、どれかだろうね。今に借金でもしなきゃいいけど」

「物を大切にしない奴のことなんかしらねえよ」

すべてお見通しとでもいうようにニヌヨブが薄く笑う。俺はふんと鼻を鳴らした。その横を俺の鞆を抱えたオモドクが俺のコートを

ずるずる引き摺りながら横切っていく。

「おいチビ、仕切りは閉めるなよ」

「わかってるよ、ばかりンリ」

そうしてオモドクは奥の部屋へと消えた。その方向をニヌヨブは眩しそうに見つめる。やがて奴は言った。

「夕飯にしよう。座って待っていてくれ。みんなを呼んでくるよ」

俺はああ、とだけ答えてクリーム色の絨毯に腰をおろした。ニヌヨブの目には涙の粒が見えた。

俺の診立てでは、奴の余命はもう一年も無かった。

翌朝、俺はいつものように十人のガキどもに起こされた。そうして結婚してだの恋人にしてだのと騒ぐマセガキどもの足を持って振り回し、オスのガキには『電気アンマ』をくらわすなどして、朝食をとって下宿先を出た。玄関を出る時、ちゃんと帰ってこいよ、とオモドクが言った。不安を押し殺したような声だった。俺は坊主頭をパシンと叩いた。

「いってらっしゃいだ、馬鹿チビ」

「さっさと行け、ばかりンリ」

「あいよ。いってきます」

背後でオモドクが笑ったのがわかった。まるで鎖だ、と思った。動物愛護もほどほどにしろ、と頭の中で誰かが言う。そいつには酸の入った唾を吐きかけてやった。

街はどこか騒がしかった。

なんだろう、と思い適当な通行人に声を掛けようとしたとき、近くから大声で俺の名が呼ばれた。

「いたぞ、シチノミヤ教諭だ！」

叫んだのはシノビだった。その声に反応して次々と仲間のシノビが集まってくる。服装こそ平民風の装いだったが、間違はなくシノビだった。黒尽くめでなくとも動きがシノビなのだ。彼らは足音も立てずに素早く俺を囲む。連携のとれた速やかな動き。虚を突かれ

たといつてよかった。俺はくちをぽかんと開けたまま何もできずにいた。隠れて影から護衛することを職分とするシノビがなぜ朝っぱらから街の入口で俺を包囲しているのか、俺にはさっぱりわからなかった。

「ついてきてもらおう」

シノビの一人が言った。俺は黙って頷いた。拉致される理由は皆目不明だったが、ここで逆らっても救い主が現れないことは自明だった。ヒーローは女子供にしか興味がないのだ。俺は黙って彼らのあとをついて行った。どうやら行き先はアカデミーのようだ。嫌な予感がした。街の者たちが興味津々の様子で俺たちを見ていた。

「帰ってこない？夏野女史が？」

暗殺に怯える政治家のように大勢の人間に囲まれ、連れられてきた場所はアカデミー敷地内東部の屋敷群。その中でも二番目に大きな屋敷——即ちノギオム・アキト・スズカゼ王子殿下の別邸だった。現在、俺はその屋敷の応接間のソファに座らされているのだった。

正面にはノギオム王子。彼の背後には騎士と執事とメイドが一人ずつひかえている。俺の背後には五人のシノビ。部屋には他にも十人以上の使用人もどきがいる。逃げたら殺すと言わんばかりのポジシヨン取り。完全にアウエーである。

「正直に答えよ。おぬしはヒルマの行方を知っているな？」

俺の顔を真つ直ぐ見つめて王子が言う。彼の目には敵意と疑念の色があった。若いな、と思った。俺は儀礼表敬を捨ててこたえた。知りません、と。

「別に、私と彼女はそういう関係じゃあない。彼女は一人の自由な人間だ。どこかへ出掛けるのにいちいち私に報告なんざしませんよ」俺は陶器の茶碗から薄赤い汁を啜り、ふうと息をついて茶をまたテーブルに置いた。

「尤も、もしいま自分が彼女の居場所を知る身であったとしても、

今の殿下にはお教えせんでしようがね」

この態度に騎士が激怒した。

「貴様、なんという無礼！」

彼は執事やメイドや使用人もどきが止める間もなく俺に掴みかかった。茶碗がひっくり返り、テーブルが汚れた。彼は俺の胸ぐらを掴み上げ、無理やり立たせて叫んだ。

「正直に申せ！話さんと切り捨てるぞ！」

俺は抵抗せず、両手を上げて害意なき身をアピールして見せた。

そしてわざと大きめの声で騎士に言った。

「女を隠すなら、誰にも見つからぬ山奥がいいでしょう」

「なんだと？」

俺の襟を掴んだまま怪訝な瞳で騎士が問う。俺は笑った。

王子と、彼の後ろにひかえる壮年の執事が反応を見せた。メイドも微かに目を細める。俺の勘が告げていた。この場で一番ヤバイのは執事とメイドだと。それに王子は思ったほど馬鹿ではないと。俺は続けた。

「女というのは喧しい生き物だ。手足と口は縛るのがいいでしょう。そうして魔物避けの結界札を頭に貼るのです。周りには魔を食らった毒虫を撒き、血の滴る生肉も置きましょう。肉は、そう、羽なし鳥なんかがいいでしょう。騎士殿はご存知ですか？狼はあれの、若い女のように柔らかい肉にとことん目がないのですよ」

「よせ……やめろ……」

王子が言った。顔が真っ青だった。しかし騎士は俺の襟から手を放さない。王子の言葉が無礼者だけに向けられたものと思い違いをしているのだ。俺は更に続けた。

「結界札の効果は五時間。森からここまでは……ふむ、一時間はかかるでしょうな。どなたか時計をお持ちじゃありませんか？森を出てからどれだけの時間が経過したものか、いやはや、私にはわからないのですよ。なにせ、街に入って早々に拉致されてしまったものですからね。もしや、彼女の命はもう既に——」

「その手を離せ、ロニオール！今すぐにだ！」

王子がテーブルを叩いて叫んだ。

絶叫とさえ言えるほどの声だった。騎士が慌てて俺を解放する。俺は襟をただし、ふんと鼻を鳴らしてロニオールというらしき騎士の股間を蹴り上げた。彼は「ぐうつ」と愉快的な声を漏らし、体を小さく丸めて倒れ込む。俺は彼を見下ろし「忠誠心だけで食っていける仕事はさぞ気楽だろうな」と吐き捨てた。彼は俺を睨むだけになにも言い返さなかった。

俺はソファに座りなおし、王子に向き直った。王子の目にはうつすらと涙が膨らんでいた。「殿下」と俺は言った。

「もしも今、私が『茶を用意しろ』と言ったら、殿下はどうなさいます？」

「用意する」と王子はこたえた。「……我が、自分で用意する」「その理由は？」

「優先度。……おぬしの機嫌を損ねることで起こる問題を回避するためだ」

悔しそうな顔だった。悔しそうな声だった。俺は満足して頷いた。「謹んでお慶び申し上げます。殿下は今日ひとつ賢くなられた。惚れた女ひとり守れぬ雑魚助が嫉妬と恐怖で力の使い方を間違えると悲惨な目に遭うということを学ばれた。嫌いな相手にも真摯な態度で接するべきだと気付かれた。殿下はまだ王ではありません。学生が教師に頭を下げるなど、アカデミーでは日常茶飯事です」

ここまで言うのと流石に騎士だけでなく執事のほうも俺を睨んできたが、撤回はしなかった。メイドが微かに笑ったのを俺は確かに見た。しかして王子はテーブルに手をつき頭を下げた。

「我は冷静さを欠いていた。おぬしが攫ったのでないことは考えればわかることであった。……すまなかった。この通りだ。——どうかこの我に、ヒルマの居場所を教えてください」

俺はこたえた。

「いやあ。実のところ、夏野女史がどこにいるかなんて俺も知らないんですよ。はははは」

立ち上がった騎士が俺の顔をぶん殴った。

俺は飛んだ。

「ふむ。帰ってすぐに出掛けてそれきりと……いたたっ」

「動くな」

「すいません執事さん。——ええと、行き先は言わなかったんですか？ なにかを買いにいくだとか、誰かと会ったとか。あとは、なにか様子がおかしかったとか。何でもいいので、気になったことを教えて下さい」

「行き先に関することはなにも。遅くなるとだけ申しておった。帰りが遅くなることはときどきあるのだ。変わったところもなかったように思う。アカデミーから帰り、馬と何やら話し、庭にいた我に『ちょっと出掛けてきます。遅くなるのでこはんは要りません』と言い、そのまま……。おかしいといえば、屋敷にも入らず荷物も持ったまま出掛けたことくらいだ」

俺はむむ、と唸った。切れた唇を執事氏に治療してもらいながら王子と話しているところだった。

俺は頭の中で状況を整理した。

昨日、俺が夏野女史と別れたのが四時を少し過ぎた頃だった。王子曰く、彼女がこの屋敷に一旦帰ってきたのは午後六時だという。彼女と話している時に六時の鐘が鳴ったそうだ。研究棟からここまではのんびり歩いても十分あれば着く。いくら夏野女史が絶望的にチビで歩幅が狭いといっても、三十分もあれば着くだろう。つまり、彼女は寄り道をしたのだ。そこで用事が出来た。それは彼女にとって予期せぬ用事だったのだろう。そしてそれは時間の長く経かる用事だった。彼女は一度屋敷に戻り、王子にその旨を告げた。問題は

「ならば」と王子が言った。「ならば問題は、今ヒルマがここにいないことが、予定の内なのかそうでないのか、ということだな？」

「ええ」俺は苦笑した。「そのとおりです」

理解の早い十歳児だった。

問題は夏野女史という人間の異常性からくる事態の曖昧さ。これに尽きる。

これが事件なのかどうなのか、彼女にとってこの状況が異常なのかそうでないのか——これがわからないのである。彼女なら『一日二日帰らなくても心配はされないだろう』ぐらいのことは思っているのだ。

夏野女史は自分のことを常識人だと思っているふしがあるが、それは大きな間違いだ。彼女は根っからの化け物である。彼女は確かに常識というものを持ってはいるが、その実践発露は、彼女の性能からくるねじ曲がった主観が邪魔をしてうまくできていないのだ。

ついこの間のことだ。俺たちはアカデミーの食堂で昼食をとっていた。この国の一般的な主食はジャガという植物を茹でて潰したもので、ジャガはまんま元の世界のジャガイモだ。俺はこれに少々飽きていて、そのとき、たまには米が食べたいものだと思いを零したのである。これに対し、彼女が返した言葉は「米だと思えばいいのです」であった。このとき俺は、彼女が軽口のもりで言ったのだと思った。しかし続く言葉でそんな思いは銀河の彼方に吹き飛んだ。

「わたしはいま味覚と嗅覚と触覚に、このおジャガさんをハーゲンダッツのバナナにレモン果汁を少量かけたものだど認識させています。飽きたら冷やし中華にするつもりです。思い込みって便利いいですよね」

彼女はこれを本気で言っていたのだ。

ジャガイモがハーゲンダッツ？

飽きたら冷やし中華？

そんなのはおかしい、できるはずがない。言葉を尽くして俺がそう説明しても彼女は持論を曲げなかった。無理もない。現に彼女にはできていて、彼女は間違ったことを言っていないつもりなのだから。そう、間違っ**て**はいないのだ。理屈の上では正しい。理屈の上でだけ正しいことを理屈通りにできてしま**う**彼女が人間として間違っているだけなのだ。

「むう。躑躅さんもですか……皆さんそう仰るのですよ。脳味噌をちよろつと騙すだけですから、コツさえ掴めば簡単なのですから、思い込みの力は五感すべてに勝ります。スキー場で温かい思いが、砂漠で涼しい思いができるのです。パンしか買えなくてもステーキの味が楽しめるのです。これ、習得しておいて損はない技能だと思いますよ？」

損得の問題ではない。普通の人間は、ハードディスクの中身を書き換えるように脳味噌をいじくったりはできないのだ。そのことが彼女には理解できないのだ。コツを掴めていないだけ、ぐらいにしか思っていないのである。そんな彼女が今の状況をどう考えているのか。これは非常に複雑で難解な問題だった。彼女の「むう」がちよつと可愛かったことが些事に落ちるレベルの難問だ。

執事氏が俺の治療を終える。茶髪のメイドが俺の茶碗に茶を足す。彫刻のように王子の後ろに立ったままの騎士ロニオールがむう、と唸る（まるで可愛くない）。

俺は騎士ロニオールにあたらしく持つてこさせた茶碗に口をつけて、言った。

「率直に聞きますが、この件、殿下は事件性があるとお考えですか？」

王子は少し黙ってから、目を伏せて「いや」と言った。意外な返答だった。「それはなぜ」と俺は聞いた。彼はつらそうな顔でこたえた。

「心配はしておる。なにかがあ**つ**たら、と考えると胸が内から裂けそうに思える……。しかし我が思**われ**う『なにか』は危険なことではな

いのだ。事件性はおそらくないであろう。ヒルマをどうにかできる生き物がこの世にいるとは思えぬ。嘘を見破るヒルマが企みに嵌ると思えぬ。……事件性は、ないであろう」

王子の様子はまるで、自分の発する一つ一つの言葉に説き伏せられ、論破されているかのようだった。俺はひとつ疑問に思った。

「夏野女史をどうにかできる生き物がこの世にいない、というのはどういう意味です？」

「それはヒルマが――」

そこで王子はピタリと止まった。彼は俺を見て驚いたような顔をした。

「おぬし、知らんのか？」王子は言った。

「何をです？」俺は聞き返した。

王子はしばし絶句したあと、やがてニヤリと笑って「くふふ」と笑った。それはもう下品な、嫌らしい笑いで、王族がそんな顔しているのかと説教したくなったほどのものだった。しかして彼は言った。

「おお、すまぬ、シチノミヤ教諭。おぬしには教えられぬ。これは我とヒルマの秘密であつたわ。てつきりヒルマから聞いているものと思っておつたが――くふふ。どうやらヒルマの奴め、おぬしには知られたくないらしい。すまんあ。本当にすまんあ。教えてやりたいのはやまやまなのだが……いやあ、こればかりはなあっ！」ガキか。

いや、ガキだった。

どうやら夏野女史は『動物語』と『嘘の拒絶』以外にも俺の知らない力を隠し持っているようだった。前学長の事件に関する噂は、ならば真実ということなのだろうか？俺は無礼を承知でこれみよがしにため息をついた。

「まあ、なんだかよくわかりませんが、彼女は何らかの大きな力を持っていて、嘘も通じないから危険はない、ということですね？」

王子はスツと表情を引き締め、頷いた。こういうところは正に人

の上に立つ人間だ。彼は言った。

「事件性は無いものと思う。しかし危険は別だ。足を折って動けないなど事故の可能性は充分に考えられる。我は搜索隊を撤収させるつもりはない」

搜索隊……街が騒がしかったのはこれが理由か。

「しかし、これは我個人の感情からではなく、国のためにこそ成される行動であると思うがよい。ヒルマ・ナツノを死なせることはスズカゼ王国にとって計り知れない損失である。そのような事態は王族の直に名を連ねる者として許容できるものではない」

——なるほど。ただのマセガキってわけでもないらしい。十歳でこれが。それとも、これさえも夏野女史の影響か？

ともあれ、これで言い訳がたつ。ちょうど今日は働きたくなかったところだ。俺はソファから立ち上がり、王子に形だけの敬礼をした。

「それでしたらば、私も今日は講義を休まざるを得ませんな」

「無論だ。我はそれを命じるためにおぬしをここへ呼んだのだからな。そうであろう？」

俺は思わず嘖き出した。

夕方六時、俺は搜索の結果を王子に報告してアカデミーを出た。

結果から言つと、夏野女史は見つからなかった。手掛かりすら無しだ。

俺は街の中で彼女の行きそうな所を探した。馬を連れて行かなかったのだからそう遠くではないだろうと考えたためだ。きのう行くと言っていたシモン・アテラキの家も訪ねてみた。昼だったが、母親は家にいた。彼女は夜勤の衛兵たちの食事を作る仕事をしているそうで、日のある内は寝ているそうだ。シモン少年のことは話さず「黒髪の少女が訪ねてこなかったか」と聞いた。答えはノーだった。夏野女史ではないが、嘘をついているようには見えなかった。

門を出てからも、村に向かう道ですれ違う者全員に聞いた。その殆どが夏野女史を知っていたし、彼女が行方不明だということを知っていた。今更ながらに彼女の知名度の高さを確認する。捜索隊も、貴族軍や王軍の人間よりもボランティアの一般人の方が多くいる。夏野ひるまという人間はバビの街のトップアイドルなのだった。

村の近くに見慣れない少年がいた。服もズボンも汚れたらけのまだらな茶色で、意図したのではないだろうが自衛隊の迷彩服みたいになっている。随分とみすばらしい身なりの少年だった。だが頭が綺麗だった。髪がこの国の王家の人間の持つそれと同じ色をしているのだ。赤い髪は人気が高いため、この国の娼婦はこっそりと髪を赤に染めるのだ聞いたことがある。思い出してみれば、夜の街に立っていた女たちはみな一様に赤い髪をしていたような気がする。

近づいて見ると、彼はキノコ狩りをしているようだった。俺は試しに彼にも聞いてみた。

「ちよつといいか」

「はい？」

少年は顔を上げた。男娼で五年は食っていけそうな顔だった。俺は言った。

「もう誰かに聞かれたかもしれないが、黒髪の女の子を見なかったか？ 白衣——あー、レソガニの白い上掛けを前開きで着てる、利発そうな見た目をした子だ。上掛けはちよつと袖が長くて手が隠れてる」

「いえ」と彼は言った。「見てませんね」

ふと、俺は少年の服装に気付いた。

汚れてはいるが、よく見れば少年の服は上下ともにレソガニだった。

「このあたりはツチクイが出るのか？」

俺は言った。

「ツチクイ？」

少年は何言っただこいつ、という顔をしたあと、小さく笑った。
「おにいさん。ツチクイなんかいたら、僕はこんな場所でキノコなんてとってませんよ」

よほど俺の言葉が見当違いでおかしかったのか、彼は饒舌に続けた。

「もしかして、この服のことを言ってるんじゃないですか？金持ちそうには見えないのに、なんでレソガニの服なんか着てるんだって。そうでしょう？ははは。大丈夫ですよ。盗品じゃないですから」

俺は「すまん」と謝った。思えば俺の態度はかなり失礼だった。
「ちよつと、気になったただけなんだ」

いいですよ、と少年は笑った。

「これ、拾い物なんですよ。この汚れも僕がつけたものじゃなくて元々こうだったんです。たぶん、どこかの貴族さまがお捨てになったんでしょうね。まったく勿体無いことしますよ。天然のレソガニなんて滅多に出回るものじゃないっていうのに」

俺は、「ああ、そうだな」とこたえた。頭の中でなにかが激しく違和感を訴えていた。

少年はキノコの入ったかごを持って森に入っていく。

「なあ、キミ！」

俺はなぜか咄嗟に、彼に声をかけていた。

「はい？」と彼は言った。

「ヒルマ・ナツノって知ってるか？」

血のように赤い髪をした美しい少年はこたえた。

「さあ？知りませんが」

そのとき、おーい、と後ろから声をかけられた。

俺は振り返った。南門の方から、髭面の男が手を振りながらこちらに向かって走ってくるのが見えた。再び森のほうを見ると、赤髪の美少年はいつの間にか消えていた。

「あんた、その村の人間かい？」

髭男は俺のもとに来るなりそう言った。ハリー・ポッターの映画

のハグリッドとかいう大男をそのまま170センチぐらいまで縮めたような外見の男だった。

「もしそうなら、ひとつ、頼みがあるんだが」

「村の人間じゃないが、寢床を厄介になってる身だ」

「その寢床に、俺も一晩だけ泊めてくれるように頼んでもらえないか？ やつと目の前まで来たつてところで門が閉じちまったんだ。外で寝て、こいつを盗られたくねえんだよ」

男はそう言つて大きな鞆を叩いた。石だろうか？ じゃり、という音が鳴った。俺は溜息をついた。

「頼んでみてはやるが、断られても俺にあたるなよ」

「ああ、助かった！ ありがとう！」

「それから、ナイフや武器なんかを持っていたら、そいつは俺に預けてもらうぞ。ガキがいるんでな」

「ああ。かまわん、かまわん！ 宜しく頼むよ！」

そうして俺たちは村の最奥にあるテントに向かった。

そうだ、と俺は言った。ものは試しである。

「あんた、黒髪の女の子を見なかったか？」

「なんだ、彼女たちの知り合いかい？」

髭男は言った。

「知ってるのか！？」

「知ってるとも。今朝、ケルマの山で熊から助けてもらったんだ。会ったらお礼を言つておいてくれよ」

「ケルマの山！？ なんだつてそんな遠くまで。それに、彼女たちつてのはどういう意味だ。誰かと一緒にいたのか？」

「ああ。黒髪のお兄さんと一緒にいたよ。仲の良さそうな様子だった」

兄？——ああ、よぞらさんのことか。

あの身長では彼女の方が妹だと思われても無理はないだろう。俺は思わぬ情報に喜びを隠せなかった。しかしその喜びもすぐ消えることとなる。俺は聞いた。

「それで、ナツノ姉弟きょうだいがその後どこへ向かったか、あんた知ってるのか？」

「ナツノ？」髭男は顔を顰めた。「すまねえ。人違いみたいだ」

「なに？」

「黒髪っていうから、そんな珍しい奴はそう何人もいねえと思ったんだが……。俺を助けてくれた兄妹はそんな名前じゃなかった」

「ヒルマ・ナツノとヨゾラ・ナツノじゃないのか？プライマリの下級クラスみたいなチビ女と、俺ぐらいの背の男だろう。違うのか？」

ちがう、と彼は言った。

「そんな名前じゃないし、そんなにチビやノツポじゃなかった」

そうして彼は、彼を助けたという魔法使いたちの名前を告げたのだった。

「サキサカだよ。俺を助けてくれたのは、シホウ・サキサカとりホ・サキサカっていう兄妹だ」

報告を終えたシチノミヤ教諭が屋敷を出ていった。殿下は彼が帰るまでたったの一度も落胆の色を表に出さなかった。殿下が立派になつていくのは少しだけ寂しかった。

わたしは殿下をロニオールに任せて庭に出た。キブが無言で後ろからついて来た。なにも言わないけれど、わたしを心配してくれていることはわかっていた。

六時の鐘が鳴った。スカート揺らす程度の風が吹いた。辺りは薄暗くなっていた。

「ねえキブ」わたしは言った。

「大丈夫だ」とキブは答えた。

「まだなにも言っていないんだけど」

わたしは噛み付いた。キブはいつもの無表情で頷いた。

「黒の魔女は礼儀正しい。ここを去るにしても一言あるだろう」

わたしはキブの足を軽く蹴った。キブは避けなかった。わたしは小さく笑い、キブは笑わなかった。

「あんたはいつもそう。わたしの心を読んで先に言っちゃうんだ」

「おまえはなぜ私という時だけ子どものように振る舞うのだ。もしや私は嫌われているのか？」

わたしは本気の蹴りを放った。キブは素早く避けて、なにをする、と言った。無表情の中に小さな困惑が見えた。

「ときどきあんたを殺したくなるわ」

「私が何をしたというのだ」

「なにもしてないのよ。それがム力つくの」

「言葉のさす意味がまるでわからん。言いたいことがあるならばつきりわかりやすく言ってくれ。私は無学だ」

「ああ、もう！」

わたしはキブの襟を掴んだ。顔が死ぬほど熱い。きっと死ぬ。これをしたらきっと死ぬのだ。そんな気がした。

「リロ、どうした？」

「う、うるさい。いま名前よぶな。あと、頭的位置、あの、もうちょっと下げて」

「何をするつもりだ。まさか毒か。私とおまえは仲間ではないのか」

「ちがうわよ馬鹿！」

「ちがう、だと？我々は敵同士だというのか？」

「そういう意味じゃない！いいから頭さげてよ、ほら！わたしの気持ち、伝えるから！」

「むっ」

キブが頭的位置を下げる。かたそうな唇の位置も低くなる。わたしでもなんとか届く位置だ。わたしは覚悟を決めた。

「あの、キブ……一度しか言わないからよく聞いて」

「うむ」

キブが中腰で頷く。ちよつと間抜けな感じだが、この機を逃せば次はいつになるかわからない。わたしはキブの顔を両手ではさんで言った。

「わたしは、あんたのことが――」

「すいませえー……ん！手紙もって来ましたあー……！」

「ひょう！」

わたしは変な声を上げてキブから離れた。覚悟も決意も台無しだった。

強いな、とキブが中腰のまま言った。顔は声のした方を向いていた。

屋敷の庭の入り口に一人の男が立っていた。ここまで走ってきたのだろ。汗だくの彼は邪気のない笑みを浮かべ、元気よく言った。

「ヒルマの姐御いらっしゃいますか！ヨゾラの兄貴から手紙を預かってきた、ビーって者ですが！」

ゆらぎ4／ひるまとおばけとせかいのひみつ



「いやはや、素晴らしい出来だ。感動なんてものじゃない。まったく新しい概念だ。いったいどうしたらこんなアイデアが浮かぶんです？」

「それでは、契約のほうは」

「もちろん結ばせていただきます。わたしにはわかる。これは国中の、いや大陸中の人間を魅了しますよ。歴史が動く瞬間に立ち会えたことを嬉しく思います」

「ありがとうございます。ところで、名前のことなのですが、できれば――」

「心配御無用。承知していますとも。神に名前は不要ですからな」

「話のわかる人はこれだから好きです」

「我々で神話をつくりましょう」

「我々が神話になりましょう」

わたしたちは固い握手をしました。

蹣裏らんりさんと別れたわたしは街のとある場所である方とお会いしていました。わたしのちよつとした野望のためですので、詳しいことは割愛します。重要なのはその帰りに出会った『彼』のことです。

お屋敷に帰る道、わたしはふと誰かに見られている気持ちに襲われました。勿論これは科学的根拠のある感覚で、要するにわたしは近くで生き物がじつとこちらに視線を向けるときの音を聞き取ったのでした。そもそも街に着いた初日から問題行動の連続です。奇異の目で見られるのはいつものことでした。前学長先生御乱心事件を経て、退屈な時に街の人たちの偏頭痛や視力聴力・心臓疾患などを

治して回るようになってからは崇拜と信仰の目が随分と多くなりましたが、珍しがって見られていることには変りないのでした。しかし、『彼』は違いました。

失礼な言い方になりますが、それは青い髪のおばけでした。

彼には心臓の音がありませんでした。

わたしはこう見えて怪談など大好きな乙女であります。ツバメさんの耳元で播州皿屋敷や口裂け女のお話などして半泣きにさせ悦に入ることもしばしばの心清らかな乙女であります。おばけなどこのうえない大好物です。

青い髪のおばけはまっすぐわたしに向かってきました。わたしはわくわくして彼を待ちました。彼はわたしの前まで来るとぴたりと足を止めました。どこかで見たような顔をしたお化けでした。タイプではありませんが、人間とは思えないほど美しい肌をしていました。そしてそのことを裏付けるかのように、やはり近くで聞いても彼からは心臓の音がしないのでした。彼は懷から現代的な（日本国的な意味で現代的な）手帳を取り出し、そのページを一枚破りました。彼はそれを差し出してきました。勿論わたしは受け取りました。わたしはそれの際わざとおばけ氏の手に触れました。彼の手は今まで触れたどんな手よりも触り心地のよい手でした。わたしは破られたページに目を落としました。そこには次のように書かれていました。

『世界の秘密を知っている。七時に古道具屋で待つ』

ページの隅には『KOKUYO』の印字がありました。紙は古くなって黄ばんでいました。文字は鉛筆で書かれており、ひどくかすれています。明らかに、きのう今日に書かれたものではありませんでした。わたしの心臓が大きく鳴りました。よくわからないドキドキがありました。

どういう、とわたしは言いました。最後まで言い切る前に、彼はわたしの手になにかを握らせました。感触から紙だとわかりました。

そうして彼はわたしの髪にそつと触れました。その破廉恥な行為を拒む気が沸き起こらないことが不思議でした。彼は薄く笑いました。空っぽの微笑みでした。

わたしは突然に悲しい気持ちになりました。とても悲しい気持ちでした。なぜかと必死に考えるのに、わたしの頭の中にはその答えがありませんでした。見つからないのではなく存在しないのだと、わたしにはどうしてかわかるのでした。あの、とわたしは言いました。

「どこかで一度お会いしましたよね？……いえ、何度もお会いしているはずです。なぜでしょう、どうしてもあなたのことが思い出せないのです。でも、ずっと昔に、わたしたちは何度も何度もお話をしたような……」

おばけ氏は一瞬だけ泣きそうな顔をして、しかしすぐに首を横に振りました。そうしてなにも言わずに去って行きました。青い髪が夕陽を浴びて紫色に輝きました。彼はさいごまで一言も喋りませんでした。

わたしは手を開きました。そこには小さく折りたたまれたメモがありました。わたしはそれを丁寧にひらきました。コクヨの手帳とは違う紙でした。もつとずっと古い紙でした。それは小さな恋文でした。

『夏野ひるまを永遠に愛し続ける』

胸がじくじくと痛みました。

短い手紙には、メモと同じように、この世界の人間が知らないはずの『漢字』が使われていました。滲んで、かすれて、薄くなっていました。が丁寧な字でした。

考えるな、と誰かが言いました。それは心の深い所に棲む醜い生き物の声でした。わたしはおばけ氏の消えた方を見つめ続けました。わたしのどこか大事な部分で、なにか大事なものが、栄養が足

りないと騒いでいるような、そんな気持ちがありました。なにかを忘れている。誰かを忘れている。けれどそれを思い出すことは許されない。そんな気持ちでした。理由もわからず大声を上げて泣きたい気分でした。

お屋敷に戻ったわたしはいちばんに厩舎へと向かいました。庭の裏側のほうでツバメさんが剣術ごっこをしているのが音でわかりました。その様子を新任のシノビの皆さんが影から警護しています。その内一人がツバメさんの後ろにしゃがみ、「殿下、ナツノ教諭がお戻りになりました」と報告しました。ツバメさんは「う、うむ」と言いました。嬉しそうな声でした。わたしはうふふと笑いました。うへへだったかもしれません。些細な違いです。

厩舎の中に入るとヨシムネ君がバヒヒンと喜びの声を上げてくれました。頭の上でヒデタダ君が羽を広げ「腹が減ったぞ」のポーズをとってわたしを迎えてくれました。わたしは気持ちがじんわりと安らいでゆくを感じるのでした。

「ただいま帰りましたよ、ヨシムネ君、ヒデタダ君。はい、人参と干し豆さんですよ。うりうり」

「おかえり人間。ぼくこれ好き。これ好きだよ」

「毛の長い大きな生き物よ、我は虫が食べたい！柔らかい虫が食べたいぞ！」

「すみません。いま、これしかないですよ。干し豆さんもなかなかイケるですよ？」

「そうだ、水気のない豆もなかなかいけるのだ！我は水気のない豆を食すぞ！美味しい！」

「人間、ぼくもういつこほしいよ？ぼくもういつこ食べたいんだよ？」

「もう一本ありますよ。さあどうぞ」

「ちょっと出掛けてきます。遅くなるのでごはんは要りません」

厩舎を出たわたしはツバメさんに出掛ける旨を伝えました。ツバメさんは目に見えて暗い表情になりました。十歳の少年に愛され別れを惜しまれる美人女教師（勿論わたしです）。そんなシチュエーションにわたしの頭は元気いっぱい脳内麻薬を分泌しました。いろんなものがフルスロットルです。

「いつもどるのだ？シチノミヤ教諭と一緒になのか？我もついて行つては駄目か？我は、あれだぞ、あの……邪魔にはならぬぞ？」

ぞくぞくしました。

鼻腔的な位置から血液的な物質がとめどなく自由落下するところでした。こらえたわたしは英雄と讃えられてしかるべきでありましょう。わたしは鼻がピクピク動くのを我慢して首を横に振りました。「何ヶ月も留守にするわけではないのですから」

はつきりとはわかりませんが、かかっても一週間程度でしょう。それよりかかるようなら一言いつて帰ってくればいいのです。わたしはツバメさんの頭をなでなでして「それじゃあ行つてきますね」とお屋敷を後にするのでした。王子様の頭を撫でるなんて、わたしという女はどこまで無礼な奴なのでしょうか。それでもわたしはギリギリのラインを見極めたいと願うのでした。夏野ひるま、鋼の冒險心を持つ女であります。

アカデミーの敷地から出るとき、入れ違いに中へと戻る助手君と会いました。彼は、いつもそうですが、この時もむっつりした顔で睨むようにわたしを見ました。

「先生、どこかへ出かけられるのですか？」彼は言いました。

「ええ。そうなのです」わたしはこたえました。

助手君は握った手を口に当てて少し黙ってから、「わかりました」と言いました。なにがわかったのかは、わたしにはわかりません。出会った時からこういう不思議な所のある少年でした。わたしは「それでは」と挨拶して彼と別れました。十歩も歩かない内に後ろから「先生」と声がかかりました。

「あしたの講義は中止にするよう、計らっておきます」

わたしは振り返って首を傾げました。助手君は先ほどと変わらぬ睨むような目でわたしを見ていました。やっぱりなにか知っているんだ、とわたしは思いました。それはわたしが数多くの希望者の中から彼一人だけを助手に採用した理由でもありました。彼はわたしについてなにかを知っているのです。そのことにわたしが気づいていることも彼はおそらく知っています。けれども彼はその『なにか』を語りません。そしてわたしも彼にそのことを聞かないのでした。理由はよくわかりません。でも、わたしの中の誰かが「まだ早い」とわたしをとどめるのです。わたしは小さく溜息をつきました。家族以外では彼だけに見せる『ゆるみ』でした。わたしは言いました。「では、そのようにお願いします」

「了解しました。それでは、またいつか。可能であれば近いうちに」
助手君は、そんな不思議な言葉を残してアカデミーへと帰っていききました。

「まあ……彼については、考えても仕方ありませんね」
不思議の世界の不思議な人。

わたしのなにかを知っている人。
それでもなにも語らない人……。

気付けば、わたしは小さく笑っているのです。

目的地が見えてきた頃、聞きなれた羽ばたきの音が近づいてきました。音源は上空からわたしに接近し、肩に着地しました。ヒデタダ君でした。

「どうしたのですか、ヒデタダ君」とわたしは聞きました。

「我もゆくぞ、大きな生き物よ!」とヒデタダ君はこたえました。
我はまだ見ぬ世界をみるのだ、と彼は言いました。まるでわたしがこれから行く場所が『まだ見ぬ世界』だと知っているかのような言い様でした。動物の方とおはなししていると、こうした『未来の確信』めいたことを当然のように言われることがままあります。そ

のような発言は年老いた猫や鳥類の方がよくされます。これについては、わたしも未だに解明できていないのでした。

「それじゃあ、一緒に行きましょうか」

「ゆくぞ！どこへ行くかはわからんが、我もゆくのだ！」

わたしたちは連れ立って目的地へと向かうのでした。わたしはポケットからメモを取り出します。

『世界の秘密を知っている。七時に古道具屋で待つ』

この街には古道具屋がいくつもあります。けれどもわたしには理由のない確信がありました。きつとあそこだ、と。

《ふるどうぐノリンリ》の中は相変わらず空っぽでした。壁と屋根と戸があるだけ。かつてあった電気ケトルもアイフォンも、おそらくは躑躅さんが片付けたのでしよう、今はありません。その何もない空間の土の床に彼は立っていました。

青い髪のおばけです。

遅れてしまいましたか、とわたしは言いました。まだ七時の鐘は鳴っていません。

彼は黙って懷から手帳を取り出し、そこから一枚を破ってわたしに差し出しました。

『いま来たところ』

遠い昔に書かれたような文字でした。遠い昔に作られたような古い紙でした。

おばけの彼はページをもう一枚破りました。わたしはわざとそれが渡される前に口を開きました。

「わたしにどんなご用があるのですか？世界の秘密とは何のことでしょう？」

彼は黙ってわたしに紙を渡しました。そこには『もうすぐわかる』と書かれていました。わたしはくすりと笑いました。久々に対等の人に出会えたような気がしました。それが心音のないおばけだというのもまた愉快でした。わたしは紙をポケットにしまおうとして、けれどやめました。ちゃんと手に持っていないとフツと消えてしま

いそうな気がしたためです。紙切れとはいえ何かの手がかりになるかもしれません。

彼は再び手帳を破りました。今度は一気に二枚でした。そうして一枚をわたしの目の前に突き出し、見せました。

『この世界の裏側の一つを見せる。条件は次の約束を守ること』

わたしは頷きます。彼はもう一枚のページのペーじをわたしに見せました。『合図をしたら目を閉じること。再び合図があるまで決してまぶたを開けないこと』

「わかりました」

わたしは頷きます。彼はほんのすこしだけ笑い、わたしの頭を撫でました。それは老人が子どもという服を着込んでいるような、くたびれた笑顔でした。

彼は指を三本たてました。合図です。わたしは頷きました。相手が喋らないとこちらも喋ってはいけないような気になってしまいうから不思議です。指が二本になり、一本になり、そしてグーになりました。わたしはギュッと目を閉じました。

冷たい空気が頬に触れました。ドライアイスでしょうか？しかしドライアイスが気化するときのあの音は聞こえません。ヒデタダ君がわたしの肩を掴んだまま、バタバタと羽ばたきました。どうしたのでしょうか？聞こうとしましたが、思いとどまりました。声を出すのって、ありなのでしょうか？これについてはなにも指定がありませんでした。けれども、言いがかりをつけられてはたまりません。この世界の秘密とやらは是非とも知りたいので、おぼけの彼を刺激して怒らせるような真似は避けたいところでした。どうしたものでしょうか。悩んでいると、ヒデタダ君が「おもしろい！おもしろい！」と鳴きました。ああ、ヒデタダ君、もうちょっとわかりやすい状況報告を。

冷たい空気はいよいよわたしの全身を包みました。おぼけの彼は動いていません。手も足も動かさず立ったままです。それは音でわかります。彼はなにもしていないのです。しかし、そうであるなら

この冷たさ、寒さは何なのでしょう？わたしは考えました。答えは出ませんでした。

突然、世界から音が消えました。

まったくなにも聞こえなくなりました。

空間認識の大部分を聴覚に依存にしているわたしには、叫びたくなるほど恐ろしいことでした。『普通』の方でしたら、目隠しをされ裸で戦場の真ん中に立たされているよう様子を考えていただければ、おそらく今のわたしの心情がおわかりになるでしょう。武器と防具と空間認識力の殆どをいっぺんに引っぺがされたのです。なにも見えず、なにも聞こえず、感じるのは少しの寒さと肩にとまるヒデタダ君だけ。途方も無い恐怖でした。

やがて空気の冷たさが消え、耳が聞こえるようになりました。わたしは息をのみました。

ここは——どこでしょう？

正常な動作を開始したわたしの耳はすぐに周囲の音を拾い、状況を伝えてきました。わたしは音の反射でもものの位置を知ることができます。おおよその位置ではなく細かい配置や質感までわかります。そのわたしの耳が告げていました。壁が無いぞと。そればかりではありません。室内にいたはずのわたしのすぐ隣に巨大な建造物がありました。それは鉄筋コンクリートのビルでした。この世界には無いはずの建築素材・建築様式です。そこに植物が無数に巻きつき、絡みつき、生えています。わたしの鼓動は名手のマリンバのように高鳴りました。胸の中には嫌な予感と期待がびったり40ずつありました。残りの20はマリンバ名人です。

おぼけの彼がポン、とわたしの頭に触れました。ずっと握りしめていた手帳のカケラが汗で柔らかくなっているのがわかりました。彼はもう一度わたしの頭に触れました。合図なのでしょう？わたしは念のため五を数えてから目を開けました。

じゃり、と音がしました。わたしが後退りした音でした。

柔らかい風が吹きました。バランスを崩したヒデタダ君が羽ばた

き、わたしの肩から飛び上がりました。さっきまで夜だったのに、空は青空でした。その青空の下で草花が嬉しげに揺れています。わたしは後ろを振り返りました。《ふるどうぐノリンリ》はどこにもありませんでした。青い髪のおばけを見上げました。彼はなにも言わず、ただ寂しげに笑いました。わたしの手から手帳のページが落ち、風に運ばれていきました。

世界が滅亡していました。

滅び終えた世界を青い髪のおばけと手を繋いで歩きます。

青髪さんはなにも言わず、わたしも周囲をキョロキョロ見渡すばかりで口はポカンと開けっ放しです。そうしてよだれが垂れそうになつては慌てて口を閉じ、しかしまたすぐに開いてよだれがたまり……その繰り返しでした。

やさしい風が吹きました。暖かい風でした。どこからか黄色い花びらが飛んできてわたしの頬に張り付きました。自分でとろうとしましたが、それよりも早く青髪さんがひよいととり、そのまま口に入れて食べてしまいました。わたしの辞書の『幽霊』の項目に『主な食べものは花』という一文が追加された瞬間でした。

すごいですね、とわたしは言いました。花のことではありません。青髪さんもそれはわかっているらしく、わたしと繋がれていないほうの手で器用に手帳のページを破りました。そしてそれを見せてくださいます。

『真実の一端。その具象。概念としての滅亡。その世界』

わたしはええ、と頷き周囲を見渡しました。鴻大な草海原でした。すすきによく似たかたちの、けれども背の低い萌葱色の植物が、わ

たしたちの歩く道だけを残して地面全体をおおっています。彼女たちは風に揺れるたび光を反射し、マスゲームのように縦横無尽に金色の曲線を走らせます。そんな景色の中に、ビルが直立して、或いは斜めに傾いで無数に建っています。中には真ん中からポツキリと折れているものさえあります。その様は圧倒的な違和感でわたしの常識観を揺るがしました。

ビルは全て地球的な意味で現代建築です。それらが緑や赤や黄色で着飾っています。ペイントではありません。行き過ぎたゲーディングです。それらの色はすべて植物でした。その隙間からわずばかりの自己顕示で謙虚さをアピールするように、剥き出しのコンクリートや変色した鉄骨が見えています。ビルに自生する植物たちは地面を覆うすきもどきとは違う種でした。

空は青に支配され、ビルは薄緑と赤と黄色に分割統治され、地面は萌葱色によつて蹂躪されています。その真ん中を土色の一本道が細く長く曲がりくねってどこまでも通っています。

ここは文明が植物に敗北した世界でした。

少なくともわたしにはそう見えました。

冒険に出ていたヒダダ君が戻ってきました。彼はわたしの肩に軟着陸し、白衣を何度か掴みなおし、ポジションを落ち着けてから言いました。

「なにもいないぞ。大きいのも小さいのも、虫も、鳥も、なにもいないぞ」

わたしはヒダダ君の嘴の下を指で優しく搔きました。彼は蕩けた声を出したあとで、はつとして「もつとだ！もつとだ！」と言いました。干し豆を一つ与えると、彼はビルの一つへとまた慌ただしく飛んで行きました。わたしは青髪さんを見上げました。

「どこへ向かっているのですか？」

青髪さんは手帳を破りました。

『真実を売る店。夏野ひるまの目的が眠る場所』

わたしの、目的……。

「ここにも人間がいるのですか？」

青髪さんは繋いでいないほうの手でわたしを指さしました。わたしはE・Tの有名なシーンのように、そこに自分の人差し指を当てました。ほがらかな気持ちになりました。青髪さんは口元に笑みを浮かべました。わたしもにこりと笑いました。優しい風がわたしたちの間を通っていききました。世界は平和でした。

「——って、そうではありません。わたし以外のことを教えて下さい。わたし以外に、この世界に人間はいるのですか？人間どころか動物の音さえ、いえ気配さえ、ここからはまるで感じられないのですが」

青髪さんは首を横に振りました。

「いないのですか？」

青髪さんは首を横に振りました。

「どっちですか」

彼は再び手帳を破りました。

『人間はいない。人間だったものはある』

「その手帳はどうなっているのですか？それも魔法なのですか？」

質問に対する答えが予め書かれた手帳。それも何十年前に書かれたようなかすれた字で。この素敵アイテムはわたしの乙女心をビシバシ叩いて刺激しました。青髪さんは首を横に振りました。なぜかこの質問には答えるつもりがないようでした。

「それ、もう一個ありませんか？」

青髪さんは再度、首を横に振りました。

「ちよつとだけ見せてほしいなあ。きやるん」

可愛く頼んでも駄目でした。嘲笑されました。足を踏もうとしたら素早く避けられました。

手を繋いでしばらく行くと分かれ道に突き当たりました。道の一方は無限のすすきもどきの草原に、もう一方は廃墟の一つに続いています。青髪さんは廃墟の方へと足を進めました。当然、手を引かれるわたしもそちらへ向かいます。ふと、なぜ手など繋いでいるの

だろうか、という気持ちが沸き上がって来ました。あまりにも自然に手を差し出されたので、こちらも自然に「どうも」と掴んでしまいました。が、はて、わたしはこんなに軽い女だったでしょうか？奇妙な気分でした。

廃墟の入り口は横に長い、長方形の大きな穴でした。おそらく遠い昔には自動ドアのガラスがはまっていたのでしょう。わたしたちは手を繋いだまま廃墟へと入って行きました。

廃墟の中は不思議と塵や埃が積もっていませんでした。掃除が行き届いているのです。本当なら中は薄暗いはずですが、随所に配置された『光る花』の鉢植えがその黄緑色の光で蛍光灯の代役を立派に務めており、快適な明るさが保たれています。あれはなんですか、とわたしは聞きました。青髪さんは手帳を破りました。そこには『光る花』とだけ書かれていました。聞いたわたしが馬鹿でした。

建物の中はショッピングモールと言われて思い浮かぶそのような構造をしていました。地下もあるようでした。わたしたちは動かないエスカレーターで三階までのぼりました。そこには、かつては貸し店舗がたくさん入っていたであろう空っぽの部屋が道の左右にいくつもありました。青髪さんはその一つの前で足を止めました。そこだけはアンティークのドアがきちんと嵌められており、中が見えません。ドア横の壁には金釘で看板が打ち付けられていました。

《アトリエ／蒼の伽藍》

可愛らしいフォントでそう書かれています。

青髪さんはわたしの手を離しました。

「ここなのですか？」とわたしは聞きました。

彼は頷き、ドアを開けました。

そうしてわたしのよく知るひとの声で言ったのでした。

「ようこそ愛しい人。ここが世界の果てだ」

廢墟を出たわたしは再び青髪さんと手を繋ぎ、ヒデタダ君を呼びながら『出口』に向かって歩きました。今度はどちらからともなく自然と手を繋ぎました。『出口』が見えた辺りでヒデタダ君がやって来ました。彼はわたしの頭にとまり、食べ物を催促しました。わたしは干し豆を与えました。

目的の場所につくと、青髪さんはわたしの手をはなしました。この滅亡した世界で初めて目を開けたあの場所でした。出口は入り口というわけです。青髪さんは手帳を破り、ページをわたしに向けました。

『目を閉じ、前を向いたまま、ゆっくりと十七歩だけ進むこと。決して目を開けてはいけません。振り返ってもいけません』

わたしは頷きました。青髪さんはわたしの頬に触れようとして、しかし触れずに手を下ろしました。また来ますね、とわたしは言いました。方法はわかりません、けれど心からの言葉でした。わたしの頭の上でヒデタダ君が挨拶するように一度だけ羽ばたきました。

青髪さんはやはりなにも言わず、ただ寂しげに笑うだけでした。

わたしは彼に背を向け、目を閉じました。そうして指示されたとおり、ゆっくりと前に向かって進んでいきました。五歩進むと冷たい空気が頬に触れました。八歩で全身を冷たい空気が包みました。ヒデタダ君が「愉快だ！愉快だ！」と鳴きました。十一歩で耳が聞こえなくなりました。全ての音が死んだ世界で、わたしはそれでも進みました。十七歩進みました。音が息を吹き返しました。四方を壁で囲まれた場所、はじまりの場所です。そこには二体の生き物がいました。人間の男性の音でした。一方は知り合いで、もう一方は知らない人の音です。

わたしは目を開けました。二人の男性が口をあんぐりと開けてわたしを見つめていました。照れます。わたしはヒデタダ君を一度撫

で、言いました。

「奇遇ですね、躑躅さん。そちらの男性はどなたですか？」

「なるほど、ムラサキの野郎と一緒にだったのか」

それなら仕方ない、と躑躅さんは言いました。時刻は朝の五時、イロキクさん（躑躅さんと一緒にいらしたヒゲもじやの男性。お友達だそうです）と別れたわたしたちはツバメさんのお屋敷へと向かってずんたか歩いていきます。そうしながら、躑躅さんから青髪さんのことを聞かされているのです。彼は青髪さんとお知り合いなのでした。

「ムラサキは吸魂鬼だ^{きゆうこんき}」と彼は言いました。

青髪さんのお名前はムラサキさんというのだそうです。青い髪なのにムラサキ。彼は吸魂鬼と呼ばれる特殊な存在でした。吸魂鬼は命のない『システム』なのだそうです。

「吸魂鬼には寿命が無い。奴らは人間をやめて世界の一部になった監視機構なんだ」

「監視機構？誰を監視するのですか？監視してどうされるのですでしょう」

「特定の誰かを監視するわけじゃないさ。あいつらはただ、目に止まったものを見るだけのモノなんだ。ただそれだけのために存在してる」

「なんだかよくわかりませんね」

「実際、俺もわかってねえよ。師匠から聞いただけの知識で、実物はムラサキしか知らねえんだから。そのムラサキにしたって神出鬼没で、用のある時だけどこからともなく現れて、こっちが呼んだ時には出て来ねえ。この街に転勤するよう言ったのもあいつだぜ。《ふるどうぐノリンリ》だってあいつが用意した物件だ。まあ、あんな所じゃ寝られねえから宿は別にとってるが」

「躑躅さんは青髪さん——いえ、ムラサキさんとはいつお知り合い

「なられたので？」

「この世界に来る時に、俺が到着座標をミスっちゃったって話はしたよな。その座標に、なぜかあの野郎がいたんだよ。『待っていたぞ、七乃宮躑躑』ってさ」

「え。あのひと、喋るのですか？」

躑躑さんは眉根を寄せて「は？」と言いました。

「なに言ってるんだキミ。喋らないでどうやって意思疎通するんだ。筆談か？それとも手話か？」

「まあ、似たようなものです。不思議な手帳とジェスチャーで」

「不思議な手帳？よくわからんが、キミに対してはそうだったのか？」

はい、とわたしは答えました。躑躑さんは腕を組んでむむ、と唸りました。やがて彼は言いました。

「じゃあキミは、あいつの声を聞いてないのか？」

「ええ——」

『ようこそ愛しい人。ここが世界の果てだ』

「——聞いていません」

わたしは言いました。なにか大事なことを忘れている気がしました。けれどその気持ちは急速に薄くなっていきます。頭がぼんやりしました。足がもつれて尻餅をつきました。躑躑さんが慌ててわたしの腕を掴み、立ち上がらせました。わたしはつい今自分がなにを考えていたのか、すっかり忘れてしまいました。

「おいおい、どうしたってんだ」

躑躑さんがわたしを立たせて言いました。

「まさかこの二日間、寝てないなんて言わないだろうな？」

「二日？何を言ってるんです？」

「何を言ってるはこっちの台詞だ。二日も黙って姿を消していたのはキミだろうが。チビ王子が心配して大変だったんだぞ」

わたしは混乱しました。

「ちよつと。ちよつとタイムでお願いします。二日って、どういうことですか？」

「二日は二日だろ。ああいや、正確には二晩か？」

「二晩……いえ、わたしがあの世界にいたのは四時間程度のはずなのですが」

「だからキミは何を言って、——あの世界？」

躑躅さんは立ち止まりました。

「待て。おい。キミまさか、吸魂鬼きふぐいの家に行ったのか？」

「家というか、お店でしたね」

「そんなのはどうでもいい！ここでも地球でもない世界を見たんだな！」

躑躅さんはわたしの肩を掴んでがくがく揺らしました。この破廉恥白虫が。わたしは躑躅さんの足を力いっぱい踏みました。彼はまるで気付きませんでした。一方わたしは足を捻って傷めました。痛み。わたしは躑躅さんを睨みました。彼は「どうなんだ！どうなんだ！」と壊れたファービーのように繰り返すだけでした。

「ちつ。……見たというか、普通にお邪魔しましたよ。草と花と廃墟だけしかない世界のことでしょう？」

白毛ファービーさんはわたしの肩を放し、泣きそうな顔で「ちくしょう」と呟きました。そうしてその場にしゃがみ込んでしまいました。彼はもう一度「ちくしょう」と言いました。声が半泣きでした。朝の開店準備をしている肉スープ屋のお姉さんがこちらを見てうわあ、と言いました。それはわたしにこそ相応しい台詞でした。ちくしょうも間違いなくこちらの台詞です。仕方のない人でした。わたしはファービー氏の白い毛をナデナデして言いました。

「ほら、泣きやんで。事情をお姉さんに話してみなさい」

「泣いてねえよ。ばか」

ときどき子どもになる人でした。

やがて彼はしゃがみ込んだまま「キミが入ったのは《神域》だ」

と言いました。

神域？とわたしは聞き返しました。躰裏さんは顔を上げました。
「吸魂鬼や天使の住む《神域》は、地球で生まれた魔法屋なら誰もが一度は憧れる場所だ」

「憧れは美化されるものです。実際、そんなに凄い場所でもありませんでしたよ？」

「《神域》からなにかを持ち帰りでもすれば百年は遊んで暮らせる」
「えっ」

「歴史上、《神域》から生きて帰った人間は16人しかいない」
わたしは絶句しました。彼は大きな溜め息をついて続けました。
「キミが17人目だ。ちくしょう」

お屋敷に帰るとツバメさんに抱きつかれました。相手は十歳とはいえわたしとの身長差はそれほどありません。危うく転ぶところでした。リロさんもキブさんも騎士さんたちも侍従組の方々も、皆さんわたしを心から心配してくださったようでした。わたしは彼ら彼女らに何度も何度も頭を下げました。目に涙を浮かべさえました。心のこもらない謝罪は大得意であります。そしてわたしは演技派です。反省したふりをすることにに関して右に出るものはいないのであります。

一頻り事情を説明し終えたところで、わたしは「そんなことよりも」と、気になっていたところを聞きました。

「あちらの男性はどなたでしょう？」

「そんなことって」躰裏さんが言いました。「神域入りがそんなことって……」

「おお、そうであつたわ」

ツバメさんはわたしの手を握ったまま言いました。しばらくは、離すつもりはないようでした。

「あやつはビーという。ジソの街よりそなたに手紙を持って参った

のだ。ビーよ、此れへ」

「はっ」

ビー君はわたしとツバメさんの前に跪きました。なかなかいい体つきをしています。音を聞く限りでは歳は弟と同じくらいでしょうか。

「ビーと申します。我が主ヨゾラ・ナツノより姉君様宛の手紙を預かり、いやしくも殿下の御足元まで参じた身でございます」

あれの手下とは思えないほど礼儀正しい子でした。ビー君は頭を下げたまま恭しく手紙を差し出します。わたしはそれを受け取りました。ツバメさんが「表を上げてよいぞ」と仰り、ようやく彼は頭を上げました。わたしは言いました。

「遠路遙々ありがとうございます。まったく弟には困ったものです。旅人組合を使つていいと伝えておいたのですが」

「兄貴——いえ主は、旅人組合には頼めない手紙だから直接にお渡しするようにと」

「それは、どういう意味でしょう？」

「いえ……聞かされたのはそれだけでして……」

「ヒルマ、開けてみてはどうだ？魔法の類はかけられておらぬそうだ。そうである？」

ツバメさんが言い、キブさんが「はい」と頷きます。わたしは封を破りました。

手紙はところどころ字が抜けていました。

内容も追伸文以外はまるで意味不明でした。

——よぞら。

——あなたの身に、いったい何が起きているの？

ある少年の手紙

手紙は誰にも見せず、読み終わったら燃やしてほしい。

俺には姉さんに伝えたいことがある。しかし伝えることはできない。その方法がないのだ。

書きたいことは辞書一冊分より多くあるのに、それを書くことが俺にはできない。

代書も不可能だった。言葉にして伝えることもできなかった。

だから、書けることだけを書く。俺への手紙はビーに持たせてほしい。

・この世界には□□□がいる。

・この世界には□□の□□がいる。

・□□□の□□は□□□□だ。

・□□□を信用するな。

・俺と姉さん以外の□□□の関係者を絶対に信用するな。

・旅人組合も信用するな。奴らの頭は□□□と通じている。

・ギモギモ族は信用していい。どんな噂があっても彼らは仲間だ。

・赤、青、橙の霧に迷うことがあれば、管理者に「よぞらの姉だ」と告げる。彼らは敵ではない。

追啓

好きな人ができた。

どうか俺を心配しないでほしい。

どうか俺を信じてほしい。

いつでも姉さんを信じている。

ゆらぎ5／ひるまといぬとじけんかいけつ

「ようこそ愛しい人。ここが世界の果てだ」

視界が揺れたような気がしました。

わたしは立ち眩みの前兆を感じ、足を踏ん張りました。ふと、わたしの肩を支えるものがありました。わたしは後ろを振り向きしました。そこには青い髪のおばけがいました。わたしは彼に支えられているのでした。

—— なにかが——どこかが——おかしい……

「ありがとうございます」

わたしはお礼を言います。

「ちよつと、フラツときてしまつて」

青髪さんは微かに笑い、わたしの肩から手を離しました。そうして部屋の中央にある椅子にわたしを座らせました。彼はどこからか取り出した缶をコト、とテーブルの上に逆さまにして置きました。それはカゴメのトマトジュースでした。何かが決定的に間違っているのに、それが何であるのか、わたしにはわからないのでした。

アンティークのお洒落なテーブルを挟み、お洒落な椅子に、青髪さんと向い合つて座っています。わたしは先程からキョロキョロと可愛らしく（大変に可愛らしく）このお店《アトリエノ蒼の伽藍》の中を見回しています。不思議な空間でした。現代アート展の、展示が終わって用済みになった作品を一箇所に押し込んだ倉庫、と言えばわかりいただけるでしょうか。正直わたしには、これを口で説明して誰かに理解させる自信がありません。それほどに奇妙で不

思議なお店でした。意味不明なものが意味不明な配置でたくさん置かれています。日本語でアトリ工というからには、それらはおそらく芸術作品なのでしょう。

二十帖ほどのお部屋の中心にわたしたちの掛けているテーブルがあり、壁際には統一性の無い作品たちがずらりと展示されています。壊れたブラウン管テレビ、魔人が入っていきそうなランプ、首のない犬の置物、蓋のない電気ケトル、両目に鉛筆の刺さったカーネル・サンダース……他にもいろいろありますが、どれもいくつかの物を組み合わせたアートでした。統一感はありませんが、それでいて結束のようなものを感じるのは、それはそれで愉快なものでした。これらの作品が意味を持って配置されていることがわたしにはわかりました。理由は不明です。わたしにわかる共通点は現代アートである、という点のみに、根拠のない理解が頭の中で羽ばたいたのです。まったく毛色の違うものといえば、わたしのかけているテーブルと、そして足元に敷かれている虎の絨毯くらいです。それはとても大きな敷物で、こんな虎が実際にどこかに生息しているなら是非とも生きている内に会ってみたいものだ、とわたしに思わせるに十分な代物でありました。

トントン、と音がしました。それは青髪さんが指でテーブルを叩く音でした。わたしは正面に向き直りました。彼はわたしの注意をひいたことを認めると、右手をゆらりといちど動かしました。人差し指だけをたて、まるで合唱コンクールの練習を一人でする指揮者役の生徒のような動きでした。ズズズ、という聞いたことのない音がしました。このわたしが一度も聞いたことのない類の音です。観念的な表現になりますが、それは大きくて柔らかくてぬめぬめした布のようなものを上下左右から無理に引っ張って少しだけ破いたときに出そうな音でした。

突然、宙空からナイフが五本、現れました。

テーブルの上のなにも無い空中からです。それは持ち手まで金属の、少し大きなバターナイフのようなものでした。五つとも大きさ

は均等で、色もみな同じく濃い青です。そんなものが空中から上向きに、まるで次元の裂け目から這い出てくる一つ目の怪物のように、ズズズと音を立てて現れたのです。

「おおっ」

わたしは思わずそんな乙女らしからぬ声を上げ、拍手をしました。魔法とやらは同僚の先生がたに何度も見せていただいています。こんなに魔法らしい魔法は初めて見ます。心からの拍手でした。青髪さんは「よせよ」とでもいうようにサッと手を振りました。ほんの少しだけ照れたような顔でした。可愛いところもあるじゃありませんか。わたしの胸はラピュタの再放送の日のようにときめきました。

青髪さんが右手を振ると、五本のナイフたちは曲芸飛行のようにくるくる回りながら飛びました。やがてそれらはほどけ、混じり合い、形を変え、青い金属のコップになりました。ことん、と音を立て、コップはテーブルの上に着地しました。青髪さんはその縁を指ではじきました。キーン、と綺麗な、この世のものとは思えないほど綺麗な、涼やかな音が響きました。彼はそのコップをわたしの前に突き出します。そうして逆さまに置かれたカゴメのトマトジュースを指さしました。

「飲め、ということでしょうか？」

青髪さんは頷き、さっさと受け取れというようにコップを揺らしました。わたしはコップを受け取りました。それは嘘のように軽いコップでした。表面には龍の浮き彫りが施されており、触れると金属特有のあの冷たさがありました。わたしはさっそくトマトジュースに手を伸ばしました。開きませんでした。わたしは申し訳ない気持ちで青髪さんに缶を渡しました。青髪さんは一瞬だけ呆れた顔をしてプルタブを開けてくださいました。

期待して飲んだトマトジュースは、ただのトマトジュースでした。わたしはぬるいドロドロした液を「これはキンキンに冷えたペプシコーラなのだ」と思いながら飲みました。そうしながら、わたし

は青髪さんとお話をしました。話しているのは一方的にわたしで、青髪さんは頷いたりコクヨの手帳を破ったりするだけでした。それでも彼は楽しそうに笑い、わたしもまたなにやら素敵な気分であらへらしたものでした。話題はつまらないものばかりでした。好きな本の話をしました。青髪さんはグレッグ・イーガンファンでした。好きな映画の話をしました。青髪さんは『時計じかけのオレンジ』と『ブレードランナー』を愛してやまないそうでした。そのくせスタンリー・キューブリックは嫌いだそうでした。意外とわかりやすい人でした。好きな漫画家は？という質問に『漫画太郎。彼こそ全ての漫画家が目指すべき灯台』という答えが返ってきたときにはトマトジュースを噴き出してご迷惑をおかけしたものです。会話の中でわたしは、肝心のここに来た目的については聞きませんでした。聞きたくありませんでした。それをすればこの楽しい時間が終わってしまふことに気付いていたからです。わたしたちはただただ他愛も実もない言葉だけをお互いに贈り合いました。あたたかく冷めた時間でした。

「この建物は何なのですか？」

『黙秘。いずれわかる』

「このアトリエはあなたのお店なのですか？」

『黙秘。いずれわかる』

「ここに一人で暮らしているのですか？」

『黙秘。いずれわかる』

「わたしを愛しているというのは本当ですか？」

『秘密。いつか気付く』

「好きな食べ物は何ですか？」

『玉子焼き。甘くないものは認めない』

わたしは笑いました。青髪さんも笑いました。薄暗い店内に響くのはわたしの笑い声ばかりでした。青髪さんがちゃんと答えてくださるのは好きなものと嫌いなものに関する質問ばかりでした。彼の方からわたしになにかを聞いていくことはありませんでした。な

にも言わない人の正面でわたしだけが喋っている——それがなんとも新鮮でした。

ペプシ味のトマトジュースを飲み終えたわたしは、あらためて店内を眺めました。青髪さんはどんな魔法か、コップを再び空中でナイフに戻し、また何もない空間に帰してしまいました。コップがナイフになる際、赤い雫が三滴テーブルにこぼれました。青髪さんはそれを指ですくってペロリと舐めました。こちらはなにもしないというのに、まるで変態行為の片棒を担がされたような恥ずかしい気持ちになりました。わたしは青髪さんの青髪にチョップをしました。彼はいたずらっ子のように笑って舌を出しました。わたしはぬぐぐと唸りました。

静寂が流れた頃、わたしは椅子から立ち上がりました。壁際に展示された作品たちを見て回ろうと思ったのです。最初はテレビに向かいました。金色に輝く台座の上に、ブラウン管テレビが逆さまに置かれたものです。画面には野球ボールが飛んできて出来たような穴が空いており、台座の足元には破片が散らばっています。この部屋に窓はありません。わたしは訊ねました。

「これは何です？」

青髪さんはゆったりとした袖の内からマッチを取り出し、それを擦って、急須の形をした赤い香炉のようなものにポトリと落としました。赤はスズカゼ王家の色ですが、そんなこと、このおばけさんは気にしないのでしょうか。急須もどきの細い口から濃い鼠色の煙が立ち上がりました。煙はみるみるうちに形を変え、文字になりました。

『物語に干渉する権利を得た観測者。その符号』

とても読みやすいフォントでした。ふと見ればそれと同じ文字列の印字されたプレートがテレビの横に貼られていました。作品のタイトルなのでしょう。文字はわたしが読み終えてしばらくするとた

だの煙に戻りました。もうわたしは驚きませんでした。カチ、カチ、と逆さまの柱時計が針を鳴らします。わたしは少し考え、そして笑いました。

「なるほど、なるほど。テレビは物語と観客を同時に表しているのですね。それが割れていることで『第四の壁を破った』ことを表現している。散らばる破片は『内側から割られた』のミステリ的意味記号——つまり『わたしたちのいるこの世界こそが物語だ』という意味の作品なわけだ。どうです、違いますか？」

わたしは振り返り、犯人を指さす名探偵のポーズをとりました。青髪さんはついつと指を振りました。再び煙がわたしの前にゆらめき集まり、文字を形作ります。

『逆さまの理由は？』

わたしはふむ、とひとつ頷き、文字に背を向け偉そうな口調で言いました。

「見る意味の『観賞』と関わる意味の『干渉』をかけているのですね。テレビそのもののデザインも悪くありません。いやはや、なかなか面白いではありませんか、現代芸術。馬鹿にしたものではありませんね。合格点をあげましょう」

煙が再度わたしの正面で文字化もじかしました。

『テレビが逆さまに置かれている理由』

フォントが可愛いものに変わっていました。音符までついています。わたしは煙文字にえいつ、とパンチをしました。文字は霧散しました。わたしは青髪さんに向き直り、肩をすくめて言いました。

「ここはすこし乾燥していますね。なにか飲むものはありませんか？」

青髪さんは声を出さずに笑いました。字幕のように浮かぶ『負けず嫌い』の五文字をわたしは努めて無視しました。どこから取り出したのか、彼は再びテーブルの上にジューズを逆さまにして置きました。今度は野菜ジューズでした。それもまたカゴメでした。しか

し今度はストロー付きの紙パックでした。

ぬるい野菜ジュースをファンタグレープの味にしてちゅーちゅーやりながら、わたしはアトリエの中をコツコツ音を立てて歩いては一つ一つのアートについて質問して回りました。アートは全ての現在の地球の物で表現されていました。その全てに意味がありました。

骨を啜えたまま自分の尻尾を追いかける犬の絵は、ウロボロス——即ち『完全なもの』に近づくこととし、けれどもそれができない様子を記号化したものとして自己言及が未熟な様を表現しています。それがヘレンドのシュガーポットの上に絶妙なバランスで置かれていることで『虚偽の擁護で自分を見失った愚者』のタイトルを与えられていました。横に倒されたソファの上にコガネムシのブローチを足で押さえつける首のない陶器の犬が置かれたものは『情愛の暴力性』。真ん中からまっぶたつに割れたビデオデッキを頭に載せ、鉛筆で目を潰されたカーネル・サンダースは『社会秩序の共同幻想』。

全ての作品にタイトルのプレートがつけられています。青髪さんは一つ一つ煙文字でその意味を教えてくださいました。指を振り、煙を動かして説明する彼はどこか楽しそうでした。聞かずに理解できるものもあれば聞いても理解できないものもありました。並ぶ作品はどれをとつても閉塞的で、抑圧的で、そしてシンボリックな『意味の集合』でした。わたしは気付きました。このお店、『アトリエノ蒼の伽藍』の作品たちは全て、今日のために、わたしのためだけに作られたものなのだ。それもまた根拠のない理解でした。そのことを話すと、青髪さんは微笑み、指を振って煙を揺らしました。『いずれ全てが意味を失う日が来る』

——意味を、失う……。

わたしは黙って頷きました。

『そのときに今日の出会いが役に立つ』

出会いというのは、青髪さんとのそれではありません。作品たちとの出会いを言っているのです。わたしにはそれがわかりました。

柱時計の音が止まりました。

ああ……時間切れ、なのですな。

「また会えますか？」

私は言いました。

青髪さんは口を開いてなにかを言おうとし、それに気付いて苦笑し、背を向けて指を振りました。

『夏野ひるまが心から望んだ時には。必ず』

こうしてわたしたちは今日の目的を遂げました。お別れするときです。

煙のフォントが寂しげに見えたことは、気のせいなどではなかったと、わたしは思います。

――

「本当に行くのか？」

氣遣う顔でツバメさんが言いました。わたしはその頭をよしよしと撫でました。彼は口を尖らせてそっぽを向きました。

「なにも、そなたが調査せずともよいではないか。魔物など、そなたは無関係であろうに」

「責任の問題です。強者は弱者に対し一定の奉仕をする責があるのですよ。弟の受け売りですけれどね。あとはまあ、好奇心とプライドです。一度フォークをつけたものは食べるのが行儀のよい女というものなのです」

「それでは太つてしまうぞ」

「太ったわたしは嫌いですか？」

「そ！……それは、あれだが。しかし、一人で行くことはなからう！」

「一人ではありませんよ。躰裏りんりさんも一緒です」

ツバメさんの眉がピクリと動きました。体からは不安の音が聞こえます。彼は黙り込み、やがて背に控える忠臣さんがたを振り返りました。

「リロ、私も一緒に――」

「なりません、殿下」

「キブ、社会勉強を――」

「なりません、殿下」

「ロニオール、お主だけは我の味方である？」

「忠義の犬であればこそ、危険を見過ごすことはできません」

ツバメさんはがっくりと肩を落とされました。

ツバメさんいじりを終えたわたしは魔物事件の捜査を開始すべく、アテラキ氏のお宅へ向かいました。わたしの三步後ろをビー君がびったりついてきます。わたしが止まれば彼も止まり、わたしが振り返れば丁寧にお辞儀をします。弟の従者だか弟子だかであるらしい彼は今、ツバメさんに雇われてわたしの護衛をしているのです。他にもシノビの方が二名ほど、こそこそと約十三メートルの距離を保ってついてくるのですが、あれは尾行のつもりでしょうか。わたしを尾行しようと思うなら最低でも二百メートルは離れなくてはいいけません。そのようなことは実質不可能なですから、この場合はお友達感覚で「すいません、尾行させてください」が正解となります。それを抜きにしても、殺された前任の方々のほうが優秀というのはまったくもって笑えないお話でした。お仕事は真面目にしてほしいものです。

無計画な都市開発で迷路のように道の入り組むバビの街ですが、しかし住み分けという意味では、街の建物の並びには一応の規則性があります。もっともそれは単純なもので、何番地何丁目の何号などという細かい住所管理はまだされていません。およそ円に近い形に壁で囲われたバビの街は、その真ん中で交差する二本の大路によって東西南北に、およそ等分にわけられています。街は中心に近づ

くにつれて段々と高くなっています。街の中心に近いいちばん高い位置には爵位持ちの一級市民の方々の家やお店が建ち並んでいます。ここが一級区です。ここに住めるのは一級市民に限られています。それより僅かに低いのが二級区で、最下層が三級区となります。それぞれの地区にはそれぞれの階級以上の市民でなければ家を持つことを認められません。住所は居住区の階級と東西南北のどこであるかだけが管理されており、毎年の税金は、各階級・東西南北の長が家々を回って集めます。ツバメさん曰く、把握できていない建物も多いようで、こんな調子では郵便屋さんができるのはまだまだ先のことでしょう。

目的地であるアテラキ氏宅は三級区西下段の古い石造りのお家でした。

「あの、ヒルマ様」

到着し、戸を叩こうと手を上げたわたしに、ビー君がためらうようにして話しかけてきました。

「様は要りませんよ。そんなにかしこまらずに、呼びたいように呼んでくださって結構です。ひるまちゃんでもひるひるでも。ビー君は弟の身内なのですから」

「それじゃあ、姐御と」

ちよつと選択肢を間違えた感がありました。

ビー君は続けます。

「姐御は屋敷で殿下に、誰かと一緒に捜査をするとか言ってらしたと思うんですが」

「破廉恥さん——いえ躑躅裏さんですね。昨日の白髪のでっかいのです」

「なるほど。それで、あの人は今どこにいらっしゃるんで？」

「この時間でしたら、アカデミーで授業の準備をしているのではないでしょうか。或いは筋トレかナンパか筋トレか」

「えっ？」

ビー君はわかりやすい驚きの声を上げました。

「でも、一緒に捜査をするって——」

「あれは嘘です。今朝はツバメさん——王子殿下をからかいたい気分だったので、ついありもしないことを言ってしまったのです」

「……………」

「そんな『おいやべーよこいつ』みたいな顔をしないでください。照れます。わたしとツバメさんは仲良しさんなので、よくお互いをからかったりするのでよ」

「いえ、でも、俺には殿下が今にも泣きそうな顔をしてらしたように見えたんですが」

「それは気のせいです」

「気の……………わかりました。了解です」

賢い少年でした。わたしはビー君に可愛く（このうえなく可愛く）微笑みかけました。

「それでは、わたしはアテラキさんにお話を聞いてきますので、近くで時間を潰しててください。九時の鐘が鳴る頃には終わると思います」

そうしてわたしはアテラキ氏宅の戸を叩くのでした。

シモン少年のお母様は痩せた、佇まいの上品な女性でした。躑躅裏さんの言っていたとおり、夜勤のお仕事をしていらつしやるようで、わたしが訪ねた時は眠っていたそうでした（音でわかっていました）。

結論から言いますと、シモン・アテラキ氏は生きていました。

ロブロ少年を殺害したのはシモン氏でした。

勿論お母様はそのことを隠そうとしました。しかしわたしに欺きは通用しません。ほんの少しかまをかけると彼女はすぐに口を滑らせました。彼女はわたしを殺そうとし、そしてわたしに鎮圧されました。

わたしは彼女に幾つかの質問をし、幾つかの提案をしました。そうしてわたしは事件の真相の一面を知り、母親という生き物の

強さを見たのでした。

「自分で切り出しておいてなんですが、本当にいいのですね？生活は一変して、およそ文明的な生き方は不可能になりますよ。おそろく食べ物……」

「いいんです。息子と一緒にいられるならかまいません」

「殺されない保証はありませんよ」

「息子がそれを望むならかまいません」

「たとえ息子さんが望まなくても、あなたが女であるという理由で殺されるかもしれません」

「それでもかまいません。息子の選んだひとに殺されるなら本望です」

「わかりました。では、今後の行動は全てわたしの言うとおりにしてください」

「本当に、何から何までお世話になります。どうお礼をしていいかさきほどは早まった真似をして、すみませんでした」

「お気になさらず。わたしにも打算がありますので」

「あの……」

「はい」

「息子にはいつ会えるのでしょうか」

「明日か、明後日には」

「……宜しく願います。息子はいい子なんです。本当に、いい子なんです」

「ええ。きつとそうなのだろうと思います」

わたしはお母様の手を握りました。それはしわしわの、疲れた手でした。わたしは言いました。

「普通でないことは必ずしも悪ではありません。悪と呼ばれるおこないもまた、必ずしも悪ではありません。息子さんは少しだけ早すぎたのです。そしておそらくは、お母様も……わたしはそう思います」

お母様は俯き、肩を震わせて哭慟こくうしました。わたしにはその涙の

意味するところがよくわかりました。そこには罪悪感などありません。流れているのは人間社会の不理解に対する悲しみの涙でした。

話を終えたわたしはアテラキ氏のお宅をあとにしました。

お家の壁に背中を預けてじっと待っていたビー君がわたしの後ろを追いかけきます。

「お話は終わったんですか」

ビー君が言います。わたしは振り返って笑いました。

「あなたが聞いていたことは知っています。街とわたしと、どちらにつきましますか？」

ビー君は首を横に振りました。心臓の音に乱れはありませんでした。

「どっちにもつきません。俺はヨゾラの兄貴だけのものです。俺はただ、ヨゾラの兄貴に従うだけです。ここに来る前、兄貴は言っていました。姉さんには嘘をつくな、姉さんには逆らうな、たとえ国を敵に回しても姉さんとだけは争うな、って。それがおまえのためだ、って。だから今回は、兄貴の言葉にしたがって姐御を手伝います」

彼の言葉に嘘はありませんでした。すべて本心からの言葉でした。本心から、彼は、わたしのことなどどうでもいいと思っているのです。ただ弟の言葉だけを忠実に守っているのです。わたしは疑問に思いました。弟は確かに強いです。けれどもそれは生き物としての強さのことであって、人間としてはてんで子どもです。百年経っても子どものもままでしょう。それくらいに単純な生き物です。そんな弟に、目の前のこの少年を虜にするだけの魅力があるのでしょうか。わたしには、そんなふうには思えませんでした。成長した、ということなのでしょうか。わたしの見ていないところで。そんなことがあり得るでしょうか。あのよぞらが。複雑な気持ちです。

「ビー君」

「はい、なんででしょう姐御」

「あなたから見たよぞらは、どんな人間ですか？何でもいいので教

えてください」

ビー君は「どんな……」と呟き、考え込むように黙りました。やがて彼は言いました。

「ヨゾラの兄貴は、そりゃあまあ、めっぼう強いんですが……それだけじゃなく、俺みたいな学のない馬鹿にも優しく接してくれて、思慮深くて、それでいつでも物事を先の先まで見通している人です。兄貴がこうなるって言ったら本当にそうなっちまう。何が起きても絶対に失敗なんてしない、まるで未来が見えてるような人です。王女殿下も、そんな兄貴のことを……えーと、つまり」

「懸想していらつしやる、と？」

「そんな感じです」

わたしはいよいよ混乱しました。弟が王女様とどんな関係にあるかと、それはいいのです。いえ、良くないこともなくはないですが、今はよしとします。しますが、人物評が駄目です。強い、優しいはまあ、そのとおりなのでしょう。しかし他が嘘です。思慮深い？先の先まで見通す？絶対に失敗をしない？未来が見えているような人？——誰ですかそれは。うちのよぞらは心優しい単細胞生物です。

決して馬鹿ではありませんが、阿呆です。ちよつと口のうまい人間が現れたらすぐに騙されてしまうような弟です。——どういうことなのでしょう？わたしは頭をひねりました。まるでわかりません。その理由はビー君です。彼は嘘をついていないのです。本気でよぞらを『そういう人間』だと思っているのです。なんでしょう、この認識の枝分かれ感。わたしの知るよぞらとビー君の知るよぞらは本当に同一人物なのでしょうか？不安になってきました。

「うーん……」

「それでヒルマの姐御。俺は何をすればいいんですか」

ビー君が言います。牧羊犬みたいな少年でした。わたしはひとまず思考の卓から弟を蹴落としました。あれのことは後でじっくり考えてみることにします。手紙にも色々と書いて試みましょう。わたしは溜め息を飲み込みました。

わたしはビー君のそこそこ逞しい胸板を見上げ、「とりあえず」と言いました。

「アカデミーの、わたしの研究室に行きましょう。そこでわたしの助手をしている学生と、可能なら猥褻、いえ躡裏さんも交えて明日の細かな計画をまとめます。ところでビー君、あなた体は丈夫ですか？」

ビー君は待つてましたとばかりに爽やかな笑みを浮かべます。彼はどんと自分の胸を叩いて言いました。

「ヨゾラの兄貴に二割の力で蹴られましたが、まだ生きてます！」彼の音に嘘はありません。充分でした。どうやら既に駒は揃っているようです。「それでは」とわたしは言いました。そうしてのんびりと宣言したのでした。

「《魔物使い》シモン・アテラキとその母親を惨殺し、バビの街に偽りの平和を取り戻しましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3019v/>

ひるまのよぞら

2011年11月10日01時03分発行